



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究：移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに
Author(s)	朴，仁哲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第12056号
Issue Date	2015-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12056
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60478
Type	doctoral thesis
File Information	PIA0_RENZHE.pdf



朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究
——移民体験者たちへのインタビューを手掛かりに——

北海道大学大学院教育学研究科
博士学位申請論文

朴仁哲

2015 年 12 月

目次

凡例	v
序章 問題の所在	1
第1節：問題の提起および研究の動機	
第2節：準拠する分析の枠組みの検討	
第3節：論文の構成	
第1章 本研究の方法論的視座	6
第1節：基本概念の整理	
第2節：ライフヒストリー（生活史）法を用いる理由	
第3節：インタビューの調査概要および調査方法	
第4節：本研究の研究手法——実証的研究から対話的研究へ	
第2章 朝鮮人が「満州」へ移住した要因 ——植民地期（1910年～1945年）を中心として——	16
はじめに	
第1節：朝鮮人の「満州」への移住過程	
第2節：朝鮮人が「満州」へ移住したマクロ的要因	
第3節：朝鮮人が「満州」へ移住したミクロ的要因	
第4節：考察	
おわりに	
第3章 朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点 ——「五族協和」の破綻の要因に着目して——	47
はじめに	
第1節：問題の所在	
第2節：インタビューの調査概要	
第3節：考察	
おわりに	

第4章 移民体験者たちの戦争の記憶のかたち	67
はじめに	
第1節：なぜ戦争の記憶を論じるのか	
第2節：基本概念の整理	
第3節：インタビューの調査概要	
第4節：考察	
おわりに	
第5章 世代を超える対話 —— 一人称で探求する移民体験者たちの生	86
はじめに	
第1節：なぜ「世代」と「対話」に着目するのか	
第2節：移民体験者たちの語りの諸相	
第3節：考察	
おわりに	
終章 まとめと総合考察	129
第1節：本研究の到達点	
第2節：本研究の限界と課題	
謝辞	134
参考文献	135
付録 フィールドワークの実施状況一覧表	146

図・表・写真一覧目次

図 1-1	『黒龍江新聞』(2009 年 8 月 3 日).....	11
図 2-1	生活困難で賃金労働を行う小作農戸数 (1930 年)	22
図 2-2	入村誓約書.....	25
図 2-3	「安全農村」に関連する新聞記事.....	26
図 2-4	「満州」へ移住した朝鮮人の人口推移状況.....	28
図 3-1	「集団部落」の平面図	54
図 3-2	小学校の卒業証書	58
表 2-1	朝鮮人農業開拓民入植状況 (1939 年).....	19
表 2-2	朝鮮人が「満州」へ移住した理由	20
表 2-3	朝鮮半島の道別人口密度 (1935 年).....	21
表 2-4	朝鮮半島の各道における小作争議件数の地域別推移状況.....	22
表 2-5	割当見込戸数及各道割当標準表 (1939 年)	23
表 2-6	「安全農村」一覧表.....	24
表 2-7	日本に渡った朝鮮人数.....	26
表 2-8	年代別の朝鮮半島における日本人居留民の変化一覧.....	35
表 2-9	全羅北道における郡別小作争議件数の推移.....	43
表 3-1	「満州国」在住内地人・朝鮮人人口の推移 (1932~1943 年)	48
表 3-2	「満州国」における第 1 回臨時国勢調査の結果.....	49
表 3-3	民族別賃金差一覧表 (1934 年)	62
写真 1-1	吉林省にある養老院の様子.....	11
写真 2-1	「河東安全農村」現在の様子.....	24
写真 2-2	「綏化安全農村」現在の様子.....	24
写真 2-3	インタビューに応じる徐丙鐘さん.....	34
写真 2-4	インタビューに応じる李福順さんと李鐘瑞さん夫妻.....	37
写真 2-5	「安全農村」時代の水田を案内する権弼蘭さん.....	39
写真 2-6	インタビューに応じる林漢姫さんと林珠順さん姉妹.....	40
写真 3-1	「満州国」 皇宮跡地 (現「偽満皇宮博物院」)	48
写真 3-2	インタビューに応じる蒋汝柱さん.....	51
写真 3-3	「集団部落」の塀があった場所を示す全孟徳さん.....	53
写真 3-4	「集団部落」に残る住宅.....	54
写真 3-5	インタビューに応じる洪福南さん.....	55
写真 3-6	旧ユダヤ人学校.....	60
写真 3-7	学校紹介の案内板.....	60
写真 4-1	インタビューを受ける李鳳雲さん.....	71
写真 4-2	姜任順さんと三男.....	71
写真 4-3	師道学校の旧地を訪れる楊龍錫さん.....	75
写真 4-4	インタビューに応じる李太福さん.....	79
写真 4-5	インタビューに応じる金宗雲さん.....	83
写真 5-1	関連資料を読む LD さん.....	89
写真 5-2	『木浦の涙』の歌碑.....	97
写真 5-3	インターネットをみる PC さん.....	113
写真 5-4	インタビューに応じる Z R さん.....	114

凡例

1. 「満州」は中国東北地域の通称であったが、現在の中国では一般に「東北」あるいは「東北三省」という。本研究では「満州」と「満州国」という表記をそのまま使っているが、そこに正当性を与えようという意図はない。なお、「満州」の「州」は<さんずい>を付いた「洲」ではなく、<さんずい>を省いた字を使用した。
2. 本研究で用語として使う「移民一世」は、戦前、朝鮮半島で生まれてから「満州」に移住した人たちを指す。本研究では「移民体験者」と「移民一世」を同じ意味合いで使う。基本的に「移民二世」や「移民三世」と対置する場合は、「移民一世」という表現を使い、その他の文脈では「移民体験者」という表現を使う。
3. 資料の引用する際に引用途中の省略は（中略）と表記し、引用文中の筆者による注記は〔 〕で示した。
4. 引用文中、今日の視点では民族差別的な表現として不適切な文言があるが、歴史的史料であるために原文通りにした。
5. インタビューを行ったほとんどの移民体験者の方に論文発表時に実名を用いることに了承して頂いた。ただし、実名使用の承諾を得た方でも、筆者の判断により匿名にした事例もある。実名使用の承諾を得ていない方は、ご本人の意思を尊重して本文のなかでは匿名にした。
6. 本文のなかの写真使用の際、人物が映っている者については了承済みである。

序章 問題の所在

第1節：問題の提起および研究の動機

かつての「満州」地域であった中国の東北地域には、朝鮮半島から移住した移民体験者たちがまだ住んでいる。移民体験者たちは過去の歴史上の出来事として終わったわけではなく、過去の移民体験を引きずりながら今日もなお生き続けている。本論文は朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）に関する研究である。

周知のように東アジアにおいては、今さまざまな難しい問題を抱えている。歴史学者の三谷博は、「20 世紀前半の日本による朝鮮支配や中国侵略したことは、韓国で『歴史認識』、中国で『歴史問題』と呼ばれている。この問題はすでに半世紀以上前に生じたことであり、現在生きている人口の大半は直接の当事者でない。にもかかわらず、問題が生じた直後より、20 世紀末以降の方が声高に語られるようになり、それに伴って、子・孫の世代ではむしろ認識の乖離と相互憎悪が増大しつつある」と述べて懸念を示している¹。また、歴史学者の成田龍一は、「戦争を体験した当事者たちが、敗戦後 60 年を過ぎ、社会や人生の舞台から去り始め、戦争の記憶や戦争の語りが議論されるようになる一方、アジアの人びとからは『従軍慰安婦』とされた女性たちを始め、大日本帝国を過去のものとしさせないための厳しい告発がなされている」と述べている²。そして、政治学者の佐々木寛は東アジア問題の根っこの部分には日本の植民地主義と帝国支配の歴史があると言及し、次のように述べている³。

「東アジア」問題のもっとも基礎には、いうまでもなく根雪のような歴史問題が横たわっている。つまり、日本の植民地主義と帝国支配、そしてその歴史的処理と記憶のされ方に起因する問題が今でも残っている。これは、歴史の修正や操作、歴史の忘却によって決して解決しえない問題である。若い世代の意識のなかで歴史がいかに「風化」しようとも、また、グローバル化によって生活空間や消費空間がいかに共有されようとも、否むしろそうであるがゆえに、歴史は政治の世界に浮上しつづけるだろう。

東アジア問題に対して懸念を示しているのは学者だけではない。日中韓 3 国でフィールドワークを続け、精力的に執筆活動をしている文筆家の戸田郁子は自身の韓国と中国での生活体験に基づき、次のように述べている⁴。

韓国と中国に住みながら、日帝時代の記憶が薄れてゆく様子を凝視する私は、その時代の歴史が今度はイデオロギーとして若い世代に刻まれることを知っている。日本が顔を背けようとすればするほど、償われなかった恨みは募り募って、戦争を知らない世代へと引き継がれる。これまで日本人がうやむやにしてきたことは、これから何倍にも膨

¹ 三谷博「未来のための歴史対話」三谷博、金泰昌編『東アジア歴史対話—国境と世代を越えて』東京大学出版会、2007 年、p. 2。

² 成田龍一「『帝国責任』ということ」コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』第 4 号、2006 年、p. 3。

³ 佐々木寛「危機から〈共生〉へ—『東アジア』論の地平—」佐々木寛編『東アジア〈共生〉の条件』世織書房、2006 年、p. 8。

⁴ 戸田郁子『中国朝鮮族を生きる—旧満洲の記憶』岩波書店、2011 年、p. 42。

れ上がって日本人の喉元に突きつけられるに違いない。

今日の東アジアの状況を見て分かるように、残念ながら戸田が心配したことが実際に起きてしまった。日本が朝鮮を植民地化し、中国を侵略した過去の怨みは韓国や中国の戦争を知らない世代へと引き継がれ、戦前の歴史がイデオロギーになって日本に襲い掛かってきた⁵。

以上の議論を踏まえて見えてくるのは、東アジア問題の根幹は日本の植民地主義と帝国支配、その歴史的処理と記憶のされ方に起因する問題が今でも残っている。過去の出来事への認識が植民地や戦争を体験していない世代のなかで現在の問題として現われてきている。この東アジア問題に関して1つの問いが生まれてきた。植民地や戦争を体験した戦前世代がどのような体験をし、当事者たちがその個人史をどのようにとらえているのか。本研究では戦前世代の対象者を朝鮮人「満州」移民体験者（以下移民体験者）に絞った。移民体験者たちは植民地朝鮮時代、「満州国」時代を生き抜いてきた人々である。いわば、移民体験者たちの個人史には日本帝国主義による支配の痕跡が生々しく刻まれているのである。かつて日本が朝鮮半島を植民地化し、戦争を起こしたことにより、東アジア社会に大きな傷を残した。今でも東アジア社会はその歴史の傷の後遺症に悩まされているといえよう。その歴史の傷の後遺症の対処に対してさまざまな試みが行われている。文化人類学者の小田博志は、2009年に札幌で開催した国際シンポジウム「市民がつくる和解と平和」の事務局長を務めた経験を踏まえて次のように述べている⁶。

私は、当初「和解とは歴史の傷を癒すこと」だと表現していた。しかし、(中略)様々な人とのやり取りのなかで、「和解の前提は歴史の傷口を開くこと」だと考えるようになった。傷口を開いて突き刺さっているトゲを抜かなければ、癒す段階には進まない。トゲを抜かないまま傷口を縫い合わせてしまったら、他人から見て傷は隠されても、中ではかえって化膿がひどくなってしまう。それは見せかけの和解でしかない。歴史の傷口を開くとは、被害者の声（ナラティブ）を聴き、被害の実態を公の記録に留めて社会で共有していくことである。そして和解は「加害者」がその声に誠実に応えていくことで実現され得るのであろう。

日本帝国主義が残した暴力の痕跡を、小田が比喩的にいう「トゲ」に置き換えてもよからう。筆者は多くの移民体験者にインタビューを行い、移民体験者たちに移住の理由、定着時の問題点、戦争体験、そして移民体験をいかにとらえているのかを聞いた。移民体験者たちは突き刺さっているトゲが何であるのかを証言したのみならず、トゲが突き刺さった心情も語った。本研究では植民地と戦争という背景を持つ歴史を生き抜いた移民体験者たちのライフヒストリー（生活史）に着目し、過去の日本と中国、そして日本と朝鮮半島との複雑な関係を背景にした朝鮮人「満州」移民の問題を考察する。本研究では主に移民体験者たちが生きてきた個人史と社会史の連動関係を把握しようとし、課題を3つ設定する。第1、移民体験者たちの植民地体験に基づいて、移民体験者たちの移住の要因と定着時

⁵ 2005年に韓国と中国で起きた大規模な反日デモはその象徴的な出来事だったといえよう。

⁶ 小田博志「エスノグラフィーとナラティブ」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、2009年、

の問題点について検証する。第2、移民体験者たちの戦争体験に基づいて、戦争の記憶のかたちについて考察する。第3、戦前と戦後を生き抜いた移民体験者たちの生を包括的にとらえる。

第2節：準拠する分析枠組みの検討

本研究が準拠するのはライフヒストリー（生活史）研究、移民研究、植民地研究である。

2-1 ライフヒストリー（生活史）研究

ライフヒストリー研究は本研究の研究課題と直接関連する。朝鮮人「満州」移民のライフヒストリーないしオーラル・ヒストリーに関する先行研究はあるが、本研究が課題とする移民体験者たちの植民地経験生活世界に着目した研究は少ない。現段階では、金賛汀の『『満州』・そこに打ち捨てられし者——20数万人の朝鮮人開拓移民』（『世界』第498号、第499号、第501号、岩波書店、1987年）⁷、中国朝鮮族青年学会編の『聞き書き中国朝鮮族生活誌』（社会評論社、1998年）などがある。そのほかに、韓景旭の『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』（中国書店、2001年）がある。管見するかぎり、金賛汀は朝鮮人「満州」移民の体験者に対してインタビュー調査を行った最初の者である。戦後、日本（人）に向けて朝鮮人「満州」移民の存在を紹介したことの意義は大きい。ただし、金は数人の「集団移民」の事例のみを紹介したことにとどまり、朝鮮人「満州」移民の全体の様子を紹介したとは言い難い。中国朝鮮族青年学会編は64人の移民体験者の証言を紹介した労作であるが、この本は証言の紹介だけにとどまっており、分析はしていない。その意味でこの本は研究書ではなく資料集である。また、この本は移民体験者たちの1945年までのライフヒストリーのみを紹介しており、朝鮮人「満州」移民の全体像を描いていない。韓は戦前生まれの数人の朝鮮族古老の証言、および2人の朝鮮族古老のライフヒストリーを紹介しており、興味深い分析はしていない。この本は現代の朝鮮族の民族意識や宗教、年中行事などについての紹介であり、朝鮮人「満州」移民に関する研究書ではない。

2-2 移民研究

移民研究は学際的な研究領域である⁸。本研究の研究テーマに移民が入っているように、本研究は移民研究の一環に位置付けることができる。朝鮮人「満州」移民研究においては、移民史や移民政策、そして移民の教育の研究が蓄積されてきた。朝鮮人「満州」移民の移民史に関する研究は、玄圭煥の『韓国流移民史（上）』（語文閣、1967年）、および孫春日の『中国朝鮮族移民史』（中華書局、2009年）がある。そのほかに、洪鐘泌の『『満州』（中国東北地方）における朝鮮人農業移民の史的研究——1910～1930年を中心として——』（京

p. 49。

⁷ 金賛汀の『世界』で発表したルポは、『日の丸と赤い星—中国大陆の朝鮮族を訪ねて』（情報センター出版局、1998年）に収録された。

⁸ 学際的な研究領域である移民研究においては、歴史学、地理学、社会学、文化人類学、政治学、法学、文学、宗教学、言語学、心理学、教育学、博物館学、図書館学、エスニック研究、メディア研究などの人文・社会科学の他に、最近では看護学、健康福祉科学や音響学、映像技術といった医療・福祉、工学などの自然科学分野からのアプローチも珍しくなく、まさに人間の移動という局面から科学する総合的な領域になりつつある（森本豊富「移民を研究する—移民調査研究の今とこれから—」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年、p. 279）。

都大学農学研究科博士論文、1987年）、高崎宗司の『中国朝鮮族——歴史・生活・文化・民族教育』（明石書店、1996年）、鶴嶋雪嶺の『中国朝鮮族の研究』（関西大学出版部、1997年）などがある。

玄圭煥の『韓国流移民史（上・下）』は朝鮮人移民研究の嚆矢となっており、高く評価されている。玄は朝鮮人の「満州」への移住のみならず、朝鮮人の他の地域への移住についても紹介した。本研究と関連する『韓国流移民史（上）』の「満蒙編」においては、朝鮮人「満州」移民の移住方式、定着過程、教育などについて整理した。玄の著作は朝鮮人の移民研究の第1級資料であることには異議はないが、資料の紹介にとどまっており、分析はなされていない。孫は時期別における朝鮮人の「満州」への移住の特徴、移民政策、国籍問題などについて詳しく論じた。洪は1930年以前の朝鮮人「満州」農業移民の歴史に着目し、朝鮮人が「満州」へ移住した後の定着時の問題点を指摘した。高崎は朝鮮族の移民の歴史に簡単に触れた後、主に朝鮮族の文化、教育などについて検討した。鶴嶋は朝鮮人の「満州」への移住の起源説、「満州」における朝鮮人の土地状況や水田開発状況などについて論じた。

次に朝鮮人の「満州」移民の移民政策に関連する研究は、松村高夫の「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満州史研究会編『日本帝国主義下の満州』（御茶の水書房、1972年）、松本武祝の「朝鮮人の満洲『国策』農業移民——政策と実態——」（京都大学総合人間学部編『「満蒙開拓団」の総合的研究——母村と現地』1995～1997年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、1998年）、孫春日の『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』（延辺大学出版社、2003年）、金永哲の『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』（昭和堂、2012年）などがある。松村は「満州国」成立以降から1945年の敗戦までの時期に、「満州」への日本人、朝鮮人、そして中国人の移民政策がいかに展開されたのかを明らかにした。松本は日本政府の国策による朝鮮人「満州」農業移民の政策の展開を3期（第1期：交渉期、第2期：妥協期、第3期：本格開始-解体期）に分けて論じた。孫は「満洲国」時期の朝鮮人移民に関する政策の変遷および実施状況を包括的に論じた。金は朝鮮人「満州」移民の実態を4つの時期（「満州事変」期、移民統制政策成立期、変遷期、衰退期）に分けて日本政府の各植民地機関の「満洲国」期の移民導入や統制政策を通して考察した。

そして、朝鮮人「満州」移民の教育に関する研究は、まず、竹中憲一の『「満州」における教育の基礎的研究——朝鮮人教育』（柏書房、2000年）を挙げることができる。そのほかに、金美花の『中国東北農村社会と朝鮮人の教育——吉林省延吉県楊城村の事例を中心として』（御茶の水書房、2007年）、許寿童の『近代中国東北教育の研究——間島における朝鮮人中等教育と反日運動』（明石書店、2009年）などがある。竹中は「満州」における朝鮮人教育について、外務省外交文書などによって明らかにした。金の間島の楊城村に着目し、在満朝鮮人が子女の教育に対してどのように対処したかを明らかにした。許は間島の朝鮮人中等教育と反日運動について考察した。

2-3 植民地研究

本研究は直接の植民地研究ではない。ただし、本研究の研究対象者である移民体験者たちが生きてきた人生に植民地朝鮮と「満洲国」が絡んでくるので、そのかぎりでは本研究は植民地研究と接点があると考えられる。植民地研究に関しては国籍問題に関する研究が多く蓄積されてきた。国籍問題に関する研究は、水野直樹の「国籍をめぐる東アジア関係——植

民地期朝鮮人国籍問題の位相——」（古屋哲夫、山室信一編『近代日本における東アジア問題』吉川弘文館、2001年）、田中隆一の「『満洲国民』の創出と『在満朝鮮人』問題——『五族協和』と『内鮮一体』の相剋——」（東アジア近代史学会編『東アジア近代史——特集・『植民地』支配と地域的課題』第6号、2003年）、孫春日の「中国朝鮮族における国籍問題の歴史的経緯について」（桜井龍彦編『東北アジア朝鮮民族の多角的研究』ユニテ、2004年）などがある。水野は植民地期朝鮮人国籍問題に着目し、国籍に対する日本政府の対応と認識の検討を通じて日朝中の構造的関係の一側面を論じた。孫は主に「満州事変」前の在満朝鮮人の国籍問題について考察した。田中は教育・国籍・兵役に関する在満朝鮮人の政策に着目し、「満州国」のイデオロギーの「五族協和」および「内鮮一体」という日本の朝鮮統治のイデオロギーの相剋を指摘した。

先行研究を概観すると、これまでの研究は、移民史、移民政策、移民の教育などが主であり、ほとんどがマクロな視点である。それに対して個人の体験ないし経験に焦点を当てたミクロの次元の研究が少ない。本研究では先行研究をふまえたうえ、文献資料を参考するほか、ライフヒストリー法を用いてミクロな視点で移民体験者たちの体験ないし経験について考察する。

第3節：論文の構成

序章では、研究動機や研究背景、そして依拠する分析枠組みを検討する。第1章では、本研究が依拠するライフヒストリー（生活史）法について紹介し、本研究の研究方法論を提示する。第2章では、朝鮮人移民の「満州」への移住の要因について考察する。第3章では、朝鮮人移民の民族関係に着目して「満州国」の理念である「五族協和」の破綻の要因を探り、朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点を追及する。第4章では、移民体験者たちの戦争の記憶のかたちについて考察する。第5章では、移民体験者との対話を通して、移民体験者たちの植民地経験（植民地体験・戦争体験）の継承、および対話が結び付ける関係性について考察する。終章では、本研究の到達点を確認したうえ、本研究の限界と今後の課題を提示する。

第1章 本研究の方法論的視座

本研究では朝鮮人「満州」移民という「歴史的事象」を、ライフヒストリー（生活史）法を用いて考察する。本論に入る前に、まず、ライフヒストリー（生活史）法に関連する基本概念を整理する。

第1節：基本概念の整理

1-1 ライフヒストリー（生活史）とは

歴史社会学者の中野卓はライフヒストリーについて以下のように定義している⁹。

ライフヒストリー（生活史、個人史）は、本人が主体的にとらえた自己の人生の歴史を、調査者の協力のもとに、本人が口述あるいは記述した作品である。民族誌的な研究の場合と同様に、自他の伝記作成の場合も含めて、人生の現実を再構成することによって解明しようとするライフヒストリーなるものは、私小説や歴史文学のような創作、つまり現実の人生や歴史に虚構を加え芸術的に再構成されたフィクションからは厳密に区別される。（中略）個人史の場合、本人が自己の現実の人生を想起し述べているライフストーリーに、本人の内面からみた現実の主体的把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し、位置づけ、注記を添え、ライフヒストリーに仕上げる。

中野はライフヒストリーがフィクションではないことを強調している。それについて筆者も共感できる。語り手は自身の生活体験に基づいて過去を語るわけであって、フィクションを語るわけではない。社会学者の桜井厚はライフヒストリーについて以下のように定義している¹⁰。

ライフヒストリーはライフストーリーをふくむ上位概念であって、個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したものである。一般的にライフヒストリー研究では、ライフヒストリーやライフストーリー、オーラルヒストリーのほかに、個人的記録（パーソナル・ドキュメント）、人間記録（ヒューマン・ドキュメント）、生活記録（ライフ・ドキュメント）などの用語がよく登場する。後者の3つはいずれもほとんど同じ意味で使われ、日記や手紙などの文字資料を中心にライフヒストリー資料を包括的に意味する用語である。ライフヒストリーは、ライフストーリーだけではなく他者の話やこうしたライフヒストリー資料、専門的知見のはいった文献資料を加えて構成された記録（アカウント）である。（中略）ライフヒストリー全体がライフストーリーから構成される場合もある。ライフヒストリーは、対象となる個人の主観的現実を社会的、文化的、歴史的脈絡のなかに位置づけることを主眼としている。

桜井（2002）は中野（1995）と同じく、ライフヒストリーとライフストーリーの違いに

⁹ 中野卓「歴史的現実の再構成—個人史と社会史—」中野卓、桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年、pp. 191-192。

について言及している。ライフヒストリーはライフストーリーを含む上位概念であり、ライフヒストリー全体がライフストーリーから構成される場合もある。ライフヒストリーは対象となる個人の主観的現実注目している。

1-2 ライフヒストリー法に関する共通理解

現在、ライフヒストリー法については大体の共通理解ができている。社会学者の谷富夫によれば、ライフヒストリー法の共通理解は10項目にまとめることができるという¹¹。

- (1) ライフヒストリー法は、個人の生活構造（生活世界と言ってもいい）に焦点をあてる。そして、人生の一時期、あるいは一生、さらに世代を超えた生きざまをも対象とし、そこで展開される生活構造の変遷や、世代間の文化の継承・断絶などを長いタイム・スパンで研究する。
- (2) ライフヒストリー法は、異文化を対象とし、それを行為者の動機に遡って内面から理解しようとするときに有効である。
- (3) ライフヒストリー法は、個人と組織・制度・システムを一挙に視野に入れて個人史と社会史、主観的世界と客観的世界、これらの連動関係を把握しようとする。
- (4) ライフヒストリー法は、事象の個別性、固有性を重視すると同時に、個別を通じて普遍に至る道を志向する。個別記述の蓄積を通して類型構成へ至ることができる。
- (5) 経験科学は事実に依拠して仮説の索出と検証を行うが、その「事実」には実証主義的な事実と解釈学的な事実がある。経験科学の一方法としてのライフヒストリー法は、これら両方の事実をとらえることができる。また、ライフヒストリー法はとくに仮説索出のプロセスにおいて強みを発揮する。
- (6) ライフヒストリーなどの質的データと質問紙調査などの量的データとの相互補完関係によって、より豊かな研究成果を生み出すことができる。
- (7) ライフヒストリー調査の成否は、調査対象者とのラポール（信頼関係）にかかる部分が大きい。
- (8) ライフヒストリー調査では、調査者と調査対象者との長時間にわたる双方向のコミュニケーションが行われるので、調査対象者が自らの語りで自らを癒したり（カタルシス）、自らの生の意味づけを再確認する（自己反省）ことができる。同時に調査者自身の自省の機会ともなりえる。
- (9) ライフヒストリー調査では、マイノリティ・グループの声を掬い上げられる。
- (10) ライフヒストリー調査によって得られた結果の公表にあたっては、プライバシーが侵害されることのないよう、調査対象者を匿名・仮名で表すなど、倫理的観点からの慎重さが要求される。

本研究のねらいは朝鮮人「満洲」移民というマイノリティ・グループの声を掬い上げることであり、等身大の移民体験者像を描くことである。そのため、移民体験者が生きてきたライフヒストリーに注目する必要があると考える。桜井厚はブルナーが提起した「三つの生（ライフ）」の概念を言及している¹²。この「三つの生（ライフ）」の概念を借用すれば、

¹⁰ 桜井厚『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年、pp. 58-59。

¹¹ 谷富夫編『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、2008年、pp. iv-v。

¹² 私たちの生には、それぞれが互に対応しているのだが異なる三つの生がある。生活としての生 life as lived、経験としての生 life as experienced、そして語りとしての生 life as told の三つである（桜

移民体験者たちには、「生活としての生」と「経験としての生」があっても、長い間「語りとしての生」はなかった¹³。朝鮮人「満州」移民という「歴史的事実」について極くわずかの研究者を除けば、日中韓を問わず戦後世代はほとんど知らないといってよい。いわば、世代間の文化の断絶が生じている。

1-3 ライフヒストリー研究の3つの立場

ライフヒストリー研究には、「実証主義アプローチ」、「解釈的客観主義アプローチ」、「対話的構築主義アプローチ」という3つの立場がある¹⁴。以下では主に桜井（2002）にしたがい、この3つのアプローチについて概観する。

1-3-1 実証主義アプローチ

このアプローチはライフヒストリーが科学的でなければならないとする規範をバックグラウンドにしている（p. 15）。推論の立て方は演繹的であって、これが実証主義の方法論的核心をなす。理論的な関心のもとに情報収集が行われ、実際の現象に照らして仮説が検証される。（中略）ライフヒストリーの妥当性を高めるために、調査研究者が行ってきた基本的なことは、「対象事例の社会的に位置づけるための〈協固め〉」¹⁵であった。他者からの聞き取りや記録文書などの資料を補うことによって、ライフヒストリー作品の妥当性を高めるようとしてきた。この工夫こそライフヒストリーの実証主義アプローチそのものである（p. 19）。実証主義アプローチではあらかじめ既存の理論から引き出された仮説を設定し、それに基づいていくつかのカテゴリーに分類して質問紙を作成する。ライフヒストリー法なら、量的調査法の構造化された質問紙とは異なり、いくつかの基本的な質問を誰に対しても共通に設定しておき、自由の回答してもらいつつ、全体として質問の流れを調査者が統制できるようにしておくのが一般的である（pp. 21-22）。

1-3-2 解釈的客観主義アプローチ

解釈的客観主義アプローチは帰納論的な推論を基本としながら、語りを解釈し、ライフストーリー・インタビューを重ねることによって社会的現実をあきらかにしようとするものである。語り手の語りからその社会的基盤と意味内容をさぐって、語られたこと（what）にもとづいて意味構造を解説し、規範的、制度的現実を記述することを目的としている。このアプローチでは、制度的、規範的現実があらかじめ存在することがライフストーリー成立の前提とされている。（中略）語り手の選択の手法に「雪だるま式サンプリング」とよばれるものがある。これは通常、機縁法とも呼ばれる手法で、最初の語り手によって次の語り手を紹介してもらったり、語り手の語りのなかに出てきた登場人物や語り手から得た情報をもとに、インタビューに応じてくれそうな対象者や関係がありそうな対象者に連絡・接触を試みる手法である。いわば人間関係のネットワークを利用したサンプリング手

井、2002：p. 31）。

¹³ 中国では「文化大革命」など幾度も繰り返されてきた政治闘争や批判大会のなかで、個人的な情報を公開することに警戒感があり、聞き取りを行うのは難しいと考えられたが、中国社会も今や国際化社会になり、自由に記憶を語り合う環境が徐々に整えられ、移民体験者たちの抑圧された記憶が解放された。

¹⁴ 桜井前掲書：pp. 15-31。

¹⁵ 水野節夫「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修、宮島喬編『社会学の歴史的展開』サイエンス社、1986年、p. 162。

法である。そして収集された語りをもとに社会的現実に関する一般化を「帰納的」に行うのである (p. 25)。対象者の選択は、対象となる事例が理論的に＜飽和 saturation＞したとき、すなわち、それ以上の新しい事例を追加しても新たな属性や関連性が出現しないことによって完了する。このアプローチは、一人ひとりのライフストーリーをとりあげれば不十分なものだけれど、行為者の見方が客観的現実の一局面を表象していることを前提している。だからインタビューを重ねて多数のライフストーリーを集めて帰納的推論を重ねていけば、同一のパターンが現れる、すなわち＜飽和＞状態に達すると考えるわけである。つまり、特定の社会的現実を、多数の語り手のライフストーリーをとおして確定することができる、と仮定している点が重要である (p. 26)。

1-3-3 対話的構築主義アプローチ

ライフストーリーの語りが、かならずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場に持ち出されたものではなく、語り手とインタビュアーの相互行為を通して構築されるものである、とする見方である (p. 28)。語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、調査現場で語り手とインタビュアー双方の関心から構築された対話の混合体にほかならない。とりわけ、語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べる以上に＜いま-ここ＞を語り手とインタビュアー双方の「主体」が生きることである、という視点は、対話的構築主義アプローチにおいては基本的なことである。インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場なのである (pp. 30-31)。

本研究ではこの 3 つのアプローチを組み合わせた混合研究法を用いる。本研究では「実証主義アプローチ」と「解釈的客観主義アプローチ」を「実証的アプローチ」と呼び、「対話的構築主義アプローチ」を「対話的アプローチ」と呼ぶ。

第2節：ライフストーリー（生活史）法を用いる理由

本研究は中野卓の一連の研究に負う所が大きい¹⁶。中野が描いた激動の時代を体験した当事者たちの日常的異文化体験は、それぞれの個人が経験した多元的現実であり、それらを含む個人史の歴史的現実、中野が語り手のライフストーリーとして編纂し、語り手にとってのパーソナルな多元的現実を社会史や日本近代史という歴史のなかへ位置付けている。本研究では移民体験者たちのライフストーリーに着目し、移民体験者たちが生きてきた多元的な世界を描いてみたい。移民体験者たちの一人一人が生きてきた人生の背後にある社会状況を最大限に反映するため、ライフストーリー法が有効であると考え。本研究でライフストーリー法を用いる理由は主に以下の2つある。

1、朝鮮人「満州」移民研究は始まったばかりの研究なので先行研究が少ない。

生活史の技法は知識の蓄積が殆どない研究領域において、そこに含まれる論点や問題点がどんな種類のものであるかを感知する道具となりうる。特に問題の概念化がうまくいかない領域において有効性が高い¹⁷。本研究の狙いは朝鮮人「満州」移民という「歴史的事象」

¹⁶ 中野卓はライフストーリー法を用いて、『口述の生活史—或る女の愛と呪い日本近代』（御茶の水書房、1977年）では松代の生涯を描き、『日系女性立川サエの生活史』（御茶の水書房、1983年）ではハワイに渡ったサエの生涯を描いた。

¹⁷ プラマー、ケン著／原田勝弘、下田平裕身、川合隆男訳『生活記録(ライフドキュメント)の社会学—方法

に対して、当事者たちがいかに記憶しているのかを考察することである。管見するかぎり、朝鮮人の「満州」移民研究に関して、筆者と問題意識を共有している研究はまだ見当たらない。新しい研究課題はそれにふさわしい研究方法が必要であると考ええる。

2、本研究では朝鮮人「満州」移民の主観的現実注目しており、量的調査のアンケート調査より、質的調査のライフヒストリー（生活史）法が有効である。

ライフヒストリーの全体的様相は、個人を歴史的な時間のなかで変化し進化していく社会関係の複雑な網の目のなかにある独自の実在であることを強調する点で、ほかの質的調査法とは大きく異なっている（桜井、2002：p. 57）。移民体験者たちはほとんど文盲であり自伝を残していないため、インタビューを通して移民体験者たちの主観的現実を聞き取るしかない。移民体験者たちが生きてきた生活世界を理解するためには、過去の体験を当事者たち自身に語ってもらうことによって移民体験者たちが持つ「複合的な要素」¹⁸を示すことができる。ライフヒストリー法を用いることによって、移民体験者たちの人生の深みや細部にまで至ることができる。

第3節：インタビューの調査概要および調査方法

筆者は中国で複数回のフィールドワークを行い、移民体験者合計 94 人にインタビューすることができた。以下では本研究の調査地域、調査対象の状況などを紹介する。

3-1 調査対象

基本的に調査対象は朝鮮半島で生まれ、「満州」へ移住した移民一世である。また、戦前生まれの移民二世複数名にもインタビューを行った。そして、特殊な事例もあった。例えば、元義勇軍兵士と元朝鮮人「従軍慰安婦」の方にもインタビューを行った¹⁹。本研究では主に移民一世を取り上げ、移民二世と特殊な事例については別の機会で紹介する。

3-2 調査地域

調査地域は主にかつての「満州」地域であった中国の東北三省の黒竜江省、吉林省、遼寧省である。ただし、朝鮮人「満州」移民を送り出した朝鮮半島の状況を把握するため、韓国にも行ってフィールドワークを行った。

3-3 事例収集の方法

事例を収集する際には筆者が朝鮮族である立場を活かし、さまざまなネットワークを使って事例を収集した。事例を収集するには大体以下の 5 つの方法を使った。

- (1) かつて朝鮮人移民が入った地域を訪ねて村の役場を通して事例を探した。
- (2) 老人協会²⁰を訪ねて事例を紹介してもらった。

としての生活史研究案内』光生館、1991 年、p. 108。

¹⁸ 又吉祥一郎「南洋移民の語りにみる『移民像』—サイパンに渡った沖縄 2 世のライフヒストリーから『移民研究』第 5 号、2009 年、p. 89。

¹⁹ 韓国でフィールドワークを行う際、韓国人の戦前世代 2 人にインタビューすることができた。また、中国人（漢族）の戦前世代 3 人にもインタビュー調査を行った。そして、元日本兵を含む戦前世代の日本人 5 人にもインタビュー調査を行った。

²⁰ 中国のほとんどの朝鮮族の集住地域には、朝鮮族の老人協会があり、強いネットワークを持っている。筆者は朝鮮族の老人協会を通して多くの事例を紹介してもらった。

- (3) 養老院²¹を訪ねて事例を探した。
- (4) いい事例がある場合は紹介を受けることもあった。
- (5) エスニック新聞²²で関連する情報を見つけて事例探しに行った。

図 1-1 『黒龍江新聞』²³



写真 1-1 吉林省にある養老院の様子。
筆者撮影。

3-4 調査時期

調査時期は2006年から2010年にかけて行い、2011年から2013年まで7回の追跡調査を行った²⁴。具体的なスケジュールは以下のとおりである。

- 1回目：2006年8月31日～2006年9月12日
- 2回目：2007年3月7日～2007年3月25日
- 3回目：2007年9月12日～2007年9月26日
- 4回目：2008年3月5日～2008年3月22日
- 5回目：2008年8月9日～2008年9月10日
- 6回目：2009年9月5日～2009年9月26日
- 7回目：2010年3月3日～2010年3月27日
- 8回目：2010年6月19日～2010年6月26日
- 9回目：2010年8月18日～2010年8月25日

²¹ 中国の朝鮮族の出稼ぎが多くなり、かつて長男が親の面倒をみるような構図が崩れている。近年、各地域に朝鮮族のお年寄りだけが入る養老院が増えている。

²² 中国東北地域には朝鮮語で書かれた複数のエスニック新聞がある。例えば、黒龍江省には『黒龍江新聞』、吉林省には『延辺新聞』、遼寧省には『朝鮮文報』がある。

²³ 2009年8月3日、『黒龍江新聞』で黒龍江省牡丹江市の東勝村の村誌発刊の記事が記載された。この情報を元に筆者は2009年9月10日に東勝村を訪ね、村の役場の紹介を受けて移民体験者1人にインタビューすることができた。

²⁴ 2011年から2013年までの2年間、筆者は中国で長期滞在する機会があった。その期間中に7回の追跡調査を行った。付録の「フィールドワークの実施状況一覧表」を参照されたい。

3-5 インタビューの手続き

- (1) インタビューの使用言語は朝鮮語である²⁵。調査対象者の了承を得て I C レコーダーでインタビューした内容を録音した。また、録画することも試みた。
- (2) 聞き取り調査をする前に調査対象者の選定には、時代背景を客観的に反映させるため、①調査対象者の朝鮮半島での出身地域、②中国社会での階層、③職業、④学歴などに配慮した。

第4節：本研究の研究手法——実証的研究から対話的研究へ

本研究では方法論の転換があり、実証的研究から対話的研究へ少しずつシフトしていった。結論を先取りしていえば、第2章から第4章までは実証的研究にあたり、第5章は対話的研究にあたる。

4-1 インタビューで心がけていること

社会学者の好井裕明は『聞き取る』という営みは、単に相手から必要とする情報を効率よく収集する、という発想では、とてもできない。相手から情報を得るためだけの源であるかのようにみていると、それが相手に伝わった瞬間、恐らく聞き取りは硬直し、相手とのくいま-ここ>での出会いは失われていくだろう」と述べている²⁶。筆者は好井のアドバイスを銘記し、ホルスタインら²⁷に習い、アクティヴなインタビュアーを目指して、語り手と濃密な時間を共有できるように心がけた。聞き取り調査を行う際には事前準備として、対象者の人生体験を「朝鮮社会での生活」、「満州国』時代での生活」、「中国社会での生活」の3つの段階に区切ってこれらに関してある程度の質問事項は決めておくが、質問項目に拘らずに語り手の語りに柔軟に応じて聞き取りを進めて行くという方法をとった。オーラル・ヒストリー研究の第一人者のポール・トンプソンは次のように述べている²⁸。

オーラル・ヒストリーは、人々の周りで構成される歴史である。オーラル・ヒストリーは人生を歴史それ自体に組み込んでいくことであり、歴史の範囲を広げていくものである。オーラル・ヒストリーは英雄を指導者から見出すのではなく、社会の大多数を構成する無名の人々の中に見出すのである。オーラル・ヒストリーは教師と学生が研究仲間となることを励ますものである。オーラル・ヒストリーは歴史をコミュニティの中に持ち込み、コミュニティの中から歴史を描き出す。オーラル・ヒストリーは特権をあまりもたない人々、特に年老いた人々が尊厳と自信をもつのを助ける。

本研究で取り上げる移民体験者たちは、特権をもたない人々で、英雄でも有名人でもなく、今まで歴史の彼方に忘れ去られた人々である。その意味では朝鮮人「満州」移民研究に対して、オーラル・ヒストリーは有効であると考ええる。社会学者の有末賢によれば、「従

²⁵ 基本的に移民体験者たちは朝鮮語でインタビューに応じてくれたが、所々中国語や日本語でインタビューに応じる場合もあった。それを受けて聞き手も適宜に中国語と日本語を用いる場合もあった。

²⁶ 好井裕明『「あたりまえ」を疑う社会学』光文社新書、2006年、p. 119。

²⁷ ホルスタイン、ジェイムズ&グブリアム、ジェイバー著／山田富秋他訳『アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査』せりか書房、2004年。

²⁸ トンプソン、ポール著／酒井順子訳『記憶から歴史へ』青木書店、2002年、p. 49。

来、オーラル・ヒストリー研究は、歴史学の一分野として誕生し、発展し、展開してきた」という²⁹。しかし現在、社会学においてもオーラル・ヒストリーを取り入れるようになり、ライフヒストリーとオーラル・ヒストリーを統合する傾向が出てきた³⁰。有末は社会学の立場でオーラル・ヒストリーを採取する場合は、大体以下の3つの方法があるという³¹。

第1には歴史叙述の中における口述証拠 (oral evidence) を必要としている、という場合が考えられる。文献的、文書史料が存在しない場合、もしくは欠けている部分を補う口述資料が必要とされる場合などがある。この場合には、インフォーマント (情報提供者) は、ある程度、客観的な判断が下せる立場や公人 (役職者や知識人など) が望ましいとされている。それに対して、第2に歴史的叙述であっても、当事者の「主観的な声」が必要とされている場合である。戦争体験や被爆体験、事件の当事者、被害者など公的であれ私的であれ、経験した者でなければ述べられないある種の主観的感情を伴った口述資料を得たい場合である。さらに、「口述の生活史」 (oral life-history) と呼ばれている話者のライフヒストリーを口述＝聞き書きという方法で調査するという第3の場合も存在している。

本研究では第2と第3の方法をメインとし、第1の方法も援用した。本研究では文献資料のほかに、「生活史調査」の中核をなしているインタビュー調査、すなわちオーラル・ヒストリー調査の「口述生活史資料」³²も用いた。インタビューは朝鮮語をメイン言語としながら適宜に中国語と日本語を用いた。移民体験者たちは自身の具体的な移民体験に基づいた経験を語った。それに対して筆者もただ黙って「神の目」³³の聞き手になったわけではない。アクティブなインタビュアーになるように多様な研究方法の援用を試みた。いわば、移民体験者たちが生きてきた世界を知るために有効だと思われる方法を活かし、「恥知らずの折衷主義」³⁴といわれる態度をとった。

²⁹ 有末賢「ライフヒストリーにおけるオーラル・ヒストリー」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号、2006年、p. 50。

³⁰ 江頭節子「社会学とオーラル・ヒストリー—ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に—」『大原社会問題研究所雑誌』(第585号、2007年、pp. 11-32)を参照されたい。

³¹ 有末前掲論文：p. 50。

³² 中野前掲書：p. 192。

³³ 桜井厚は「方法論的に、ライフストーリーをライフヒストリーから分割点は、後者が対象者の現実のみを描いて調査者を見えない『神の目』の位置におくのに対し、調査者の存在を語り手と同じ位置におくということである (桜井、2002：p. 61)」と述べている。

³⁴ 「恥知らずの折衷主義」とは、シカゴ大学のジェラルド・サトルズの提唱した方法論である。日本では佐藤郁哉によって紹介されて広がっている。「それは、1つの調査方法に固執せずに対象を明らかにするために便利で有効な方法を併せて用いようとするスタンスをさしている (蘭信三「満州移民研究における社会学的方法の可能性」札幌学院大学社会情報学部編『社会情報』Vol. 9, No. 2, 2000年、p. 98)。佐藤郁哉によれば、恥知らずの折衷主義は「決して方法面での折衷主義や無節操さをおとしめて言っているではありません。むしろフィールドワークの全体論的な方向、つまり、生身の人間の行動、あるいは文化や社会の複雑な成り立ちに必然的に含まれる矛盾や非一貫性を、とりあえず、まずそのまま丸ごととらえようとするフィールドワーカーの基本的な姿勢を指す言葉として、肯定的な意味で使っているのです」(佐藤郁哉『フィールドワーカー書を持って街に出よう』新曜社、1992年、p. 66)。

4-2 方法論を転換し、聞き手が一人称としてインタビューに登場するきっかけ

1-3 でライフヒストリー研究の3つの立場を概観した。本研究を振り返れば、研究を始めたばかりの時は実証主義アプローチを用いて移民体験者たちに過去に何があったかを聞き取った。テープ起こしをして分かったのは、最初の頃は単調な一問一答式のようなインタビューが多かった。つまり、語り手の回答を忠実に聞き取ることに傾き、聞き手の視点の導入を抑制していた。しかし、フィールドワークの回数を重ねることにつれて、聞き手を務める自分も実際にはたくさん話していることに気づいた。研究を進めるうちに解釈的客観主義アプローチも用いるようになった。なぜなら多くの事例と出会い、聞き取り作業を進めて行くと、朝鮮人が「満州」へ移住した要因の共通のパターンが現れ、＜飽和＞の状態に達したからである。さらに研究を進めて行くと、ライフヒストリー法の最新のアプローチである対話構築主義アプローチも用いるようになった。なぜなら研究を進めるうちに、自分の存在にも意識するようになった。インタビューには語り手と聞き手との社会関係が反映する。桜井は語り手と聞き手の関係性について次のように述べている³⁵。

語り手がどのようなものとして自己を定義するか、自己の動機をどのように規定するかは、物語を語ることによって行われ、その営みは、インタビュアーの質問/応答、すなわち承認や批判を離れて考えることはできないからである。語り手の自己提示は、調査者にそのまま受け入れられるとはかぎらず、調査者の先入観や否認をともなって修正されつつ構築されていくダイナミックな過程である。その意味では、自己の表出は、たんなる自己の内部のものを外部にさらけ出す表現行為ではなく、相互行為によって構築され創り出されるものであって、自己は固定的で安定的なものではない。インタビューは、そうした相互行為によって語りが生みだされる過程であって、それによってリアリティが構築され、同時に自己も構築されるのである。

桜井が指摘したように、インタビューのなかの自己は固定的で安定的なものではなく、語り手と聞き手の相互行為によって自己も構築される。また、インタビューのなかで聞き手は批判を受けることもありうる。研究をスタートしたばかりの頃はこの語り手と聞き手の社会的な関係には無頓着で、調査する自分は客観的な存在だと思い込んでいた。しかし、2008年の2つの出来事を経た後、私は自分の存在を意識するようになった。1つは2008年2月の韓国でのフィールドワーク調査、もう1つは2008年3月の中国でのフィールドワーク調査である。第4章で紹介する2007年に元朝鮮人「従軍慰安婦」の李鳳雲さんに会って以来、インタビュー調査の難しさを実感する一方、「慰安婦」問題に関心を持つようになった。李鳳雲さんにはほとんどインタビューができなかったため、可能であれば他のインフォーマントに話を聞いてみたかった。当時の東寧県文物管理所の宋吉慶所長には、東寧県に住んでいたもう1人の元朝鮮人「従軍慰安婦」の方が韓国にある「ナナムの家」で暮らしていると聞いた。その後、私は「ナナムの家」にメールで連絡してみた。担当者から返答をもらい、2008年2月に「ピースロード」³⁶を行うので、参加してほしいとの誘いもあった。私は計画を立ててこのワークショップに参加した。このワークショップには日韓双方

³⁵ 桜井前掲書：p. 214。

³⁶ 「ピースロード」はナナムの家で年2回開催されている若者向けの平和教育ワークショップである。

を合わせて約 40 人が参加した。参加者のなかには高校生や大学生、そして大学院生がいた。期間中に参加者が一緒になって生活を共にし、歴史探索をしたり、ハルモニたちの証言を聞いたり、グループに分けて夜遅くまで討論したりした。参加者のなかには K 君という韓国人青年がいた。当時、彼は兵役を終えたばかりの大学 3 年生だった。私は K 君とグループでの討論以外に夜遅くまでさまざまな話題について話した。彼によれば、「ピースロード」に参加したのは将来大学院に進み、国際政治学を専攻するための予備知識を蓄えるためだ。ベトナム戦争時代、韓国がベトナムに派兵してベトナムの女性に性暴力を加えたと聞いた。もし、その時代に生きていたら、自分もきっと戦場に行かせて同じようなことをやっただろう。「慰安婦」問題を日本対韓国だけの文脈ではなく、戦争と性暴力という広い文脈で考える必要がある。戦争を起してはいけないことを一人一人が自分に問いかけなければならないといった。K 君は内省的に語る場面が多かった。「ピースロード」に参加し、特に K 君に出会って以来、私は自分に問いかけるようになった。

2 月の韓国でのフィールドワークを終えた後、3 月に中国に行ってきた。2008 年 3 月 14 日と 15 日の 2 日間に渡った延辺でフィールドワークを行った。その際にあるインフォーマントの紹介を受けて、延吉市に在住する戦前世代の G さんを訪ねた。G さんに会った後、自己紹介をして訪問の目的を伝えた。すると G さんの顔色が急に変わった。「君は北海道大学で勉強しているのか。北海道大学はかつて帝国大学だった。植民地主義者を育てた大学で学ぶ者が朝鮮人の移民研究はできるのか。私は君のインタビューに応じることはできない」ときっぱりインタビューを断った。G さんにインタビューを断られて以来、私は自分の立場を意識するようになった。その時、私は朝鮮族コミュニティのインサイダーだけではなく、アウトサイダーでもあることを痛感した。

この 2008 年の 2 つの出来事以来、私はインタビューを行う際、自分のことを隠さずに活かし、インタビューの際には自分が一人称としてインタビューに登場するようにした。2008 年以降、私は緊張感を持ってインタビュー調査に臨んでおり、インサイダーとアウトサイダーの狭間で生きていくしかないと覚悟をしている。筆者は朝鮮族であるうえ、日本に滞在しているという立場を活かした。サイドの理論を引くまでもなく私は移民体験者たちと同じく朝鮮族であるため、朝鮮族という小さいコミュニティに限っていえば、筆者はインサイダーである。しかし、私は移民三世で日本に滞在しているために移民一世たちからみれば、筆者はアウトサイダーである。桜井はインタビュー調査のなかで、私自身を聞くことの必要性を提起し、「ライフストーリー・インタビューでは、私たちは他者の語りを聞く。しかし、そのとき私たちは同時に私たち自身の質問／応答を聞く。インタビューを遂行したり、解釈したりするうえでは、語り手だけではなくインタビュアーの私たち自身にも注意をはらいながら聞き、解釈することが必要だ（桜井、2002 : p. 277）」と述べている。私は自分の特殊の立場を活かしてアクティブなインアビュアーを目指し、インタビューのなかで一人称として登場するプロセスを本研究で提示した。筆者は研究の客観性を高めるため、研究プロセスを詳細に提示することは必要不可欠であると考え。対話的研究のところでは語り手の移民体験者たちだけではなく、調査者の筆者も登場人物として舞台の中央にいたり、語り手と聞き手の出会いや対話が前面に出たりして、リフレクシブ・エスノグラフィを重視した³⁷。

³⁷ リフレクシブ・エスノグラフィとは、実証主義的パースペクティブのもとで「事実」や「真実」をあき

第2章 朝鮮人が「満州」へ移住した要因 ——植民地期（1910年～1945年）を中心として——

はじめに

本章ではマクロな視点では文献資料に基づき、ミクロな視点では移民体験者たちの証言に基づき、移民体験者たちが「満州」へ移住した要因について考察する。本章では主に朝鮮半島が日本の植民地となった植民地期（1910～1945年）を中心として考察する。本章は4節構成となっている。第1節では、朝鮮人移民の移住過程を概観する。第2節では、文献資料に基づいてマクロな視点で朝鮮人が「満州」へ移住した要因を探る。第3節では、移民体験者たちの証言に基づいてミクロな視点で朝鮮人が「満州」へ移住した要因を探る。第4節では、第2節と第3節の議論を踏まえて朝鮮人が「満州」へ移住した要因を総合的に考察する。本章の目的は朝鮮人が「満州」へ移住した要因について考察することにより、移民体験者たちが生きていた戦前のマクロな時代背景を浮き彫りにすることである³⁸。

第1節：朝鮮人の「満州」への移住過程

依田憲家によれば、「満州に対する朝鮮人移民は、朝鮮封建社会の解体過程において発生し、後に日本帝国主義の朝鮮植民地化によって激増した」という³⁹。「満州」への朝鮮人の移住は、長い年月の歴史を有している。朝鮮人が「満州」へ移住しはじめたのは、明の時代の末期から清の時代の初めにかけてである。朝鮮人が大量に「満州」へ移住したのは、19世紀後半になってからであると一般にいられている⁴⁰。

エドワード・テハン・チャンは朝鮮人の「満州」への移住を5段階に分けた⁴¹。すなわち、

らかにするのは違い、積極的に自己のフィールド経験を解釈したうえで、この解釈がどのように生じたかをいろいろな角度から検討することで成立する（桜井、2002：pp. 278-279）。

³⁸ 朝鮮人が「満州」へ移住した要因について言及した研究は、曹善玉の「試論近代朝鮮人移民中国東北的原因—兼与華人移民東南亜之比較」『南洋問題研究』（第143期、2010年）、徐明勲「朝鮮人集団移民の性質と事情について」京都大学総合人間学部編『「満蒙開拓団」の総合的研究—母村と現地』（1998年）、水野直樹「朝鮮人の国外移住と日本帝国」『岩波講座 世界歴史 19 移動と移民—地域を結ぶダイナミズム』（岩波書店、1999年）などがある。曹は朝鮮人の「満州」移民の要因にはプッシュ要因とプル要因があると述べている（p. 63）。プッシュ要因としては、朝鮮半島における自然災害、政治的迫害、経済的な不安定、日本帝国主義の統治への反発による抗日運動を挙げている（p. 63）。プル要因としては、「満州」に広大な土地があり、朝鮮人農民が中国人農民より稲作農業に長けていることを挙げている（p. 65）。曹が移住の要因をプッシュ要因とプル要因に分けたことは分かりやすいが、各要因については簡単な説明にとどまり、具体的な事例を用いて論じていない。徐は主に朝鮮人の「集団移民」の性質を概観し、朝鮮人の「満州」への移住の要因には、政治的要因、経済的要因、軍事的要因があると述べている（p. 122）。しかし、徐はその要因を提示しただけで具体的な説明はしていない。水野は朝鮮人の国外移住と日本帝国主義との関連性に着目して朝鮮人の国外移住の要因について概観し、「満州」への移住の要因としては、生活困難と政治的要因があると言及した（p. 265）。しかし、水野は具体的な移住の要因について説明はしていない。

³⁹ 依田憲家「満州における朝鮮人移民」満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書舎、1976年、p. 602。

⁴⁰ 「満州」への朝鮮人の移住が始まった時期についてはさまざまな説があるが、本研究の課題ではないので立ち入らない。朝鮮人の「満州」への移住の時期をめぐる、これまで土着民族説、元末明初説、明末清初説、19世紀中頃説などが主張されてきた。朝鮮人の「満州」への移住の起源説に関しては、鶴嶋雪嶺『中国朝鮮族の研究』（関西大学出版部、1997年）が詳しい。

⁴¹ チャン、エドワード・テハン「中国東北部（満州）への朝鮮人移住 1869～1945—日本の植民地支配への抵抗—」高全恵星監修、柏崎千佳子訳『ディアスポラとしてのコリアン—北米・東アジア・中央アジア』新幹社、2007年、p. 323。

第1段階は1910年以前で、経済的な要因が大きいものである。第2段階は1910年から1920年までで、朝鮮人は日本の侵略を逃れるために「満州」に渡った。第3段階は1920年から1930年までで、この時期は日本での就労に誘因がはたらき、「満州」の朝鮮人人口の伸び率は3%に満たなかった。第4段階は1930年から1940年までで、「満州」の朝鮮人人口が急増している。第5段階は1940年から1950年までで、国境を越えて中国に渡る朝鮮人はほとんどいなくなった（チャン、2007：p. 323）。

本研究ではチャンの研究も参考し、朝鮮人の「満州」への移住過程を歴史的出来事に基づいて便宜上3つの段階に区分した。すなわち、1860年～1910年、1910年～1931年、1931年～1945年に区分した。

第1段階（1860年～1910年）

19世紀後半まで清朝は「満州」に対して封禁政策をとり、豆満江（中国では「図們江」と呼ぶ）と鴨緑江の北岸に居住し耕作することを禁じていた。しかし、1860年から1870年の間に北部朝鮮地域で長期にわたる自然災害が発生したため、多数の避難民が清朝の封禁政策に反して鴨緑江や豆満江を渡り、あるいはシベリアを経由し「満州」へ移住した。1910年までの朝鮮人の「満州」への移住は、おおまかにわけて次の3つの経路を辿っている。①鴨緑江経路、②豆満江経路、③ロシア領の沿海州地区を経由したハルビン経路である⁴²。この時期の朝鮮人移民は、地政学的な理由により圧倒的に「満州」と朝鮮半島が国境を接している咸鏡道と平安道から移住する人々が多かった⁴³。特に咸鏡北道出身者が多く、間島在住の朝鮮人の約8割は咸鏡北道出身者であった⁴⁴。

第2段階（1910年～1931年）

水野によれば、『併合』前に朝鮮内で展開された義兵部隊（抗日ゲリラ）の一部が満洲やロシア領に逃れ、そこを拠点として抵抗を続けた（水野、1999：p. 265）」という。日本が大韓帝国⁴⁵を併合した1910年前後から「満州」に移住する朝鮮人は急増した。特に「三一運動」⁴⁶を機に日本帝国主義の植民地統治に反抗して多くの朝鮮人が「満州」に逃れた。また、「韓国併合」の前後には、政治的な理由で「満州」に渡る人も多かった。

以上の政治的な理由のほかに第2段階の朝鮮人の「満州」への移住の主な原因は、朝鮮における「土地調査事業」⁴⁷と「産米増殖計画」⁴⁸に始まる一連の植民地政策によるものであ

⁴² 李相哲『『民族と秩序』に関する研究序説』龍谷大学国際社会文化研究所編『国際社会文化研究所紀要』第3号、2000年、p. 281。

⁴³ 現在、中国延辺朝鮮族自治州に居住する朝鮮族は咸鏡道と平安道にルーツを持つ人が多い。その理由はこの第1段階の移住の歴史的な背景にあると考えられる。

⁴⁴ 金美花「満洲における朝鮮人の社会と教育」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』（不二出版、2008年、p. 345）を参照されたい。

⁴⁵ 1897年から1910年まで、李氏朝鮮が使用していた国号である。

⁴⁶ 1910年に大韓帝国は日本に併合され、朝鮮の民衆は日本による併合に不満で、統治に対する支持は得られていなかった。そうしたなか、死去した前国王（高宗）の葬儀が行われる2日前の1919年3月1日、京城で「独立万歳」を叫ぶ大規模なデモが行われた。この運動はすぐ朝鮮半島の全域に広がった。この運動の初めの頃は平和的に行われていたが、朝鮮総督府が武力で弾圧したため、運動は次第に暴動化していき、多くの死傷者を出した。

⁴⁷ 「土地調査事業」は朝鮮の植民地化初期に行われた土地の所有権、価格、地形、地貌などの調査・測量事業である。朝鮮総督府は日韓併合（1910年）前後からの土地調査事業をうけつぎ、1912年に高等土地調査委員会官制・土地調査令を公布して本格的に調査事業を行った。1918年11月に全事業が完了した。こ

る。これらの植民地政策は朝鮮人農民の土地喪失や貧困化を招いた。また、日本が朝鮮を植民地化した後、日本人の移住者が増えた。この時期に日本政府は朝鮮で「換位移民」政策をとった⁴⁹。日本人が朝鮮に入り⁵⁰、朝鮮人が「満州」へ移住した。日本人が増えた理由について井上勝生は、『土地調査事業』という名目で行われた日本人地主による土地の略奪が横行し、日本の大地主の全羅北道群山などへの進出が急激に進行していた」と述べている⁵¹。日本の植民地統治の下、1920年代朝鮮半島の平民百姓は行き場をなくし、故郷を離れざるをえなくなり、中国東北地域に大量に流れ込んだ(孫、2003: p. 67)。また、この時期は鉄道インフラの整備により、朝鮮人が「満州」に渡りやすくなったことも大きな要因であると考えられる。第1段階で主に国境を接する北部朝鮮地域の人々が徒歩で「満州」に渡ったことに対して、第2段階からは南部朝鮮地域の人々は汽車に乗って「満州」に渡りやすくなった。李勲求によれば、1930年8月時点で東支鉄道東部支線を通して移動した朝鮮人移住者数はすでに6,000人を超えていた⁵²。

第3段階 (1931年～1945年)

この時期は国策農業移民が実施された。本研究では主にこの第3段階の移民を考察の対象としている。松本 (1998)⁵³、孫 (2003)、田中 (2008)⁵⁴にしたがい、この時期の朝鮮人農業移民政策の展開状況について概観する。

第1期 (1932年～1936年)

この時期は「満州国」成立を契機として、朝鮮総督府内部において「満州」への朝鮮人国策農業移民が政策として具体化し始めた時期である。朝鮮総督府は1931年に「鮮人移民会社設立計画案」、1932年に「満鮮農事会社設立計画」、1933年に「朝鮮人移民政策大綱」を作成した。そして、朝鮮総督府は資金を援助して「北満」と「南満」⁵⁵に5ヵ所の「安全農村」を建設した。この時期は朝鮮総督府と関東軍との交渉の過程でそれぞれの利害が表面化した時期でもあり、朝鮮人移民をめぐる朝鮮総督府と関東軍の間には見解上の対

の事業の結果、総督府財政の基礎が確立し国有地が創出される一方、事実上の農民的土地所有を否定されたり、土地を収奪された農民が小作人に転落して地主的土地所有が再編・強化され、また土地商品化が進められるなかで国有地払下げの恩恵も受けるなど日本人地主の進出が容易となった(伊藤亜人他監修『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社、2000年、p. 325)。

⁴⁸ 「産米増殖計画」は、1918年の米騒動に示された日本の食糧問題の解決のために朝鮮の米穀生産力引上げを図って、朝鮮総督府が1920年から始めた土地・農業改良事業である。1930年の昭和恐慌以降、この事業は停滞し、1934年には事業は中止された。その結果、産米増収は果たされたが対日移出用の米穀モノカルチャー化が進み、大地主の土地集積が強まった。「産米増殖計画」については、河合和男『朝鮮における産米増殖計画』(未来社、1986年)が詳しいので参照されたい。

⁴⁹ 孫春日『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』延辺大学出版社、2003年、p. 32。

⁵⁰ 1931年末に約51万人であった在朝日本人は、1942年末に約75万人に達した(高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』岩波新書、2002年、p. 159)。

⁵¹ 井上勝生「札幌農学校と植民学」『北大百二十五年史』(論文・資料編)、2003年、p. 146。

⁵² 李勲求著、拓務大臣官房文書課訳編『満洲と朝鮮人』拓務大臣官房文書課、1933年、p. 118。

⁵³ 松本武祝「朝鮮人の満洲『国策』農業移民—政策と実態—」京都大学総合人間学部編(研究代表者: 池田浩志)『「満蒙開拓団」の総合的研究—母村と現地』(1995～1997年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書)、1998年、pp. 105-119。

⁵⁴ 田中隆一「朝鮮人の満洲移住」『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年、pp. 177-189。

⁵⁵ 「北満」は現在の黒龍江省地域とほぼ一致し、「南満」は現在の遼寧省地域とほぼ一致する。

立があった。関東軍に影響力を持っていた「加藤完治グループ」⁵⁶は、日本人移民を優先的に受け入れるべきだと主張していた。朝鮮人の「満州」への移住に関しては自由放任政策がとられていた。

第2期（1936年～1941年）

第2期の初期も自由放任政策がとられ、「満州」の縁故を頼っての移民、あるいは当時の「満州国」の官憲が「漫然渡満」と称した移住が続いていた。このような無秩序な状況は関東軍にとっても、朝鮮総督府にとっても望ましくはなかった。同時に朝鮮半島内の小作争議の激化により、朝鮮人の「満州」への国策移民政策が本格的に推進されるようになった。1936年に日本政府は日本人「満州」移民「二十年百万戸送出計画」と相まって、朝鮮人移民の計画を実行するために1936年に9月9日に京城に「鮮満拓殖株式会社」を成立し、1936年9月14日には「満州国」に「満鮮拓殖株式会社」が成立した⁵⁷。また、1936年に「満州国」政府と朝鮮総督府の間で「在満朝鮮人指導要綱」を制定した。

この時期から朝鮮人移民は「集団移民」⁵⁸、「集合移民」⁵⁹、「分散移民」⁶⁰という3つの移住形態で「満州」へ移住した。また、この時期の朝鮮人移民は、南部朝鮮地域出身で稲作を営む者が多かった。ここに1939年に「満州」へ移住した朝鮮人農業移民のデータが残っているので見てみよう。

表 2-1 朝鮮人農業開拓民入植状況（1939 年）

種別	集団移民	集合移民	分散移民
戸数	3,900	915	7,231
人口	20,085	4,853	27,056
入植地	安図、汪清、樺甸、懷徳、柳河、寧安、穆稜、盤山、興京	懷徳、興京、通遼、牡丹江、穆稜、新安鎮、寧安、盤山、三岔口等	安東、図們、開山屯

出所：『満洲開拓年鑑』（康德 7 年版、p. 53）に基づき筆者作成。

⁵⁶ 加藤完治は満蒙開拓青少年義勇軍の設立にかかわり、日本人の満蒙開拓移民を推進した。

⁵⁷ 「鮮満拓殖株式会社」と「満鮮拓殖株式会社」は表裏一体の関係である。「鮮満拓殖株式会社」は「満鮮拓殖株式会社」に投資し、「満鮮拓殖株式会社」は「鮮満拓殖株式会社」に代わって、「満州」で朝鮮人開拓民に関連する業務を執行、管理した（孫、2003：p. 189）。

⁵⁸ 「集団開拓民」ともいう。「集団移民」は、「満鮮株式会社」が直接管理する朝鮮人移民である。移住時の旅費、土地代、家屋建設費、営農資金などに要した経費は満鮮株式会社が負担する。これらの費用は全部債務となり、年賦返還しなければならない（『満洲開拓年鑑』康德 7 年版、p. 208；満鉄調査部『満洲農業移民概説』1939 年、pp. 103-104）。

⁵⁹ 「集合開拓民」ともいう。「集合移民」は 1939 年に創設した新しい移住形式である。「集団移民」よりは規模が小さい。「満鮮株式会社」が入植地を選定する以外、その他は「満州国」が地方の金融会に委託する。「満州国」の指定要求に応じて朝鮮総督府が朝鮮半島の各道に具体的募集戸数を通知する。移住時の旅費などの費用は自己負担とする（『満洲開拓年鑑』康德 7 年版、p. 209；満鉄調査部『満洲農業移民概説』1939 年、pp. 105-106）。

⁶⁰ 「分散開拓民」ともいう。「分散移民」は 1939 年に新たに認められたもので、その以前は「自由移民」と呼ばれた。この移住形式の移民が「満州」に入るために移住証明証を持参する必要があり、移住証明証を配布する対象者は「満州」に縁故者や親族がいる者に限る。移住時の旅費などの費用は自己負担とする（『満洲開拓年鑑』康德 7 年版、pp. 209-210；満鉄調査部『満洲農業移民概説』1939 年、pp. 106-107）。

表2-1を見て分かるように、朝鮮人「満州」移民の移住地域は「満州」の広範囲に分布していた。また、移住形態はさまざまだった。3つの移住形態のなかでは、「分散移民」の割合がいちばん高かった。しかし、「分散移民」の割合がいちばん高かったにも関わらず、今までの研究では「分散移民」についての記述は少なかった。

第3期（1941年～1945年）

1941年に「満鮮拓殖株式会社」は「満州拓殖公社」に統合され、日本人移民と朝鮮人移民の行政事務は一元化された。日本人移民「第二期五ヵ年計画」にともない、朝鮮人移民に対しても同様な移民計画が策定された。具体的な計画としては、1942年から1946年にかけて毎年1万戸を入植させることを目標とした。

第2節：朝鮮人が「満州」へ移住したマクロ的要因

この節では文献資料に基づいてマクロな視点で朝鮮人が「満州」へ移住した要因を探る。本研究の研究課題に沿い、本節では主に第3段階の移住の要因を検討する。朝鮮総督府は朝鮮半島内の過剰人口を「満州」に送り出し、内部矛盾を減らすのを目論んだ。当時、実質的に「満州国」を支配していた関東軍は「満州国」の治安維持を優先し、日本人移民の受け入れを歓迎する一方、朝鮮人移民の受け入れには消極的だった。しかし、戦争が進むにつれて日本人移民だけでは、日本政府が掲げた移民計画は達成できず、日本人移民の代替手段として朝鮮人移民に頼らざるを得なくなった。

朝鮮総督府は日本政府および実質的に「満州国」を支配した関東軍との交渉の末、国策として朝鮮人農民を「満州」に送り込むことになった。ここに朝鮮人が「満州」へ移住した理由の関連データが一つある。

表 2-2 朝鮮人が「満州」へ移住した理由

原因および理由	絶対数	相対数%
本国で経済的困難	30	14.9
金銭難	33	16.4
生活難	72	35.8
衣食難	2	1.0
事業失敗	24	12.0
旅行の結果	2	1.0
政治的理由	7	3.4
満洲農業の有利性	18	9.0
出稼ぎ	11	5.5
事業成功	1	0.5
親戚の勧誘	1	0.5
合計	201	100

出所：李勲求著、拓務大臣官房文書課訳編『満洲と朝鮮人』（1933年、p. 105）より転載。

表 2-2 から分かるように、「生活難」の比率が最も高く、これに「本国で経済的困難」と「金銭難」を加えると、約 3 分の 2 を占めている。満鉄調査部は朝鮮人が「満州」へ移住した理由に関して、「鮮人の生活上経済的激変による農民層の生活困難のこと」⁶¹であると認めている。朝鮮人が「満州」へ移住した主な理由は生活の困窮であった。

移民の国外への移動を考察する際には、移民の出身地域の状況を考える必要がある。以下では 1930 年代当時の朝鮮半島の道別人口密度の状況、および朝鮮半島各道における賃金労働を行う小作農戸数の状況を見てみよう。

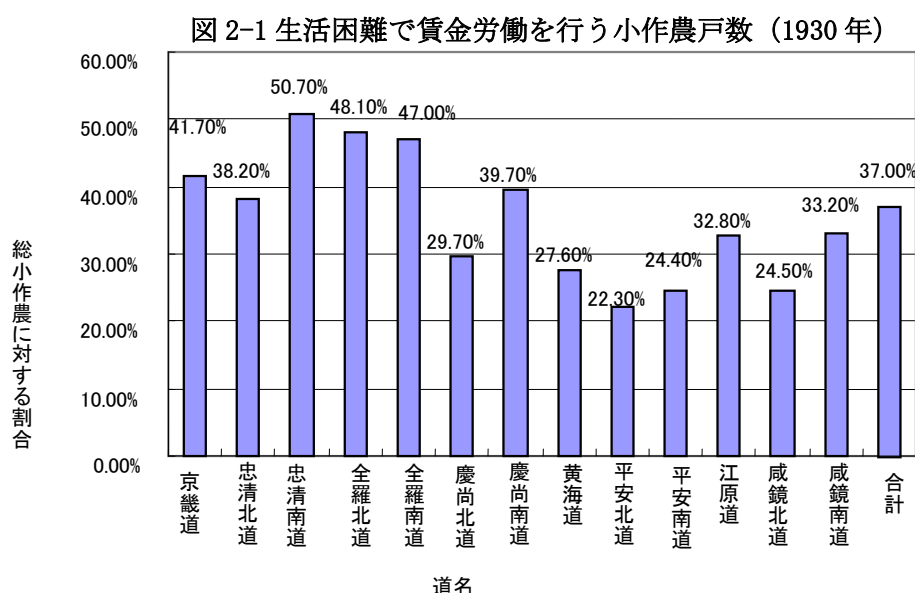
表 2-3 朝鮮半島の道別人口密度（1935 年）

道名	面積(方軒)	人口	密度(1 方軒に付)
朝鮮全道	220, 769. 04	22, 899, 038	104
京畿道	12, 814. 34	2, 451, 691	191
忠清北道	7, 418. 38	959, 490	129
忠清南道	8, 106. 48	1, 526, 825	188
全羅北道	8, 553. 27	1, 607, 236	188
全羅南道	13, 887. 37	2, 508, 346	181
慶尚北道	18, 988. 82	2, 563, 251	135
慶尚南道	12, 304. 58	2, 248, 228	183
黄海道	16, 737. 66	1, 674, 214	100
平安北道	28, 444. 50	1, 710, 352	60
平安南道	14, 925. 28	1, 469, 631	98
江原道	26, 263. 12	1, 605, 274	61
咸鏡北道	20, 346. 77	852, 824	42
咸鏡南道	31, 978. 47	1, 721, 676	54

出所：朝鮮総督府編『昭和十年朝鮮国勢調査報告』（全鮮編、1939 年、p. 18）に基づき筆者作成。

表 2-3 から読み取れるのは、1930 年代において朝鮮半島の人口密度は北部朝鮮地域より南部朝鮮地域が高い。北部朝鮮地域には 1 平方キロメートルあたりの人口密度が黄海道以外は 100 を下回っている。それと対照的に京畿道をはじめとする南部朝鮮地域では、1 平方キロメートルあたりの人口密度が 100 を超えており、朝鮮全道の平均値を大きく超えていた。

⁶¹ 満鉄調査部『満洲農業移民概説』（産業調査資料第 52 編）、南満洲鉄道株式会社、1939 年、p. 63。



出所：朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配（上）』（青木書店、1973 年、p. 275）に基づき筆者作成。

図 2-1 から読み取れるのは忠清北道をはじめとする南部朝鮮地域の貧困な小作農戸数の割合が、黄海道をはじめとする北部朝鮮地域より高いことである。南部朝鮮地域のなかでは忠清南道が一番高く、平均より 10%以上高い。以下では 1935 年から 1939 年までの朝鮮半島の各道における小作争議件数の地域別推移状況を見てみよう。

表 2-4 朝鮮半島の各道における小作争議件数の地域別推移状況（単位：件）

道名	1935 年	1936 年	1937 年	1938 年	1939 年	計
京 畿 道	1, 873	1, 299	1, 366	1, 223	700	6, 461
忠 清 北 道	1, 284	5, 561	3, 871	2, 015	1, 044	13, 775
忠 清 南 道	2, 430	2, 575	2, 450	1, 833	1, 227	10, 515
全 羅 北 道	5, 500	3, 941	4, 336	1, 822	1, 215	16, 814
全 羅 南 道	5, 565	3, 771	3, 654	4, 373	3, 608	20, 931
慶 尚 北 道	2, 514	3, 365	3, 984	2, 483	2, 089	14, 435
慶 尚 南 道	3, 119	3, 685	4, 095	3, 418	1, 956	16, 273
黄 海 道	1, 241	974	1, 378	1, 192	783	5, 568
平 安 北 道	96	383	1, 575	1, 003	626	3, 683
平 安 南 道	1, 215	1, 350	1, 527	1, 323	1, 486	6, 901
江 原 道	734	2, 677	3, 144	1, 559	1, 102	9, 216
咸 鏡 北 道	—	38	1	2	—	41
咸 鏡 南 道	263	366	418	350	616	2, 033
計	25, 834	29, 975	31, 799	22, 595	16, 452	126, 655

出所：朝鮮総督府農林局編『朝鮮農地年報』（第 1 輯、1940 年、pp. 9-20）に基づき筆者作成⁶²。

⁶² 浅田喬二「大正末期―昭和 10 年代初期・朝鮮における抗日農民運動の地域的特徴（1920-1939 年）」『朝鮮史研究会論文集』（第 8 集、1971 年、pp. 70-71）も参考した。

表 2-4 を見て分かるように、小作争議の件数は京畿道をはじめとする南部朝鮮地域が、黄海道をはじめとする北部朝鮮地域より多かった。また、表 2-4 を表 2-3 と図 2-1 と合わせてみると、小作争議の件数は人口密度、および生活困難で賃金労働を行う小作農戸数の状況と関係していることが分かる。人口密度の高い地域および生活困難で賃金労働を行う小作農戸数が多い地域において、小作争議が多発している傾向がある。

図2-1で朝鮮各道における生活困難のため、賃金労働を行う小作農戸数の状況を見てきた。朝鮮各道の小作農戸数のうち、賃金労働を行うのが平均37%に達しており、特に南部朝鮮地域は北部朝鮮地域より割合が高かった。『東亜日報』（1931年8月5日）に記載されている朝鮮4道の農民の状況からも当時の朝鮮半島の厳しい状況を確認できる。例えば、全羅北道の農家数が219,710戸でそのうち貧農数が136,758戸を占め、貧困率が62%にも達しておりもっとも高く、2番目が忠清北道の57%、3番目が京畿道の51%、4番目が慶尚南道の46%である。朴慶植によれば、小作農は生活が困難なため、土木・工場・鉱山への出稼ぎ労働を行っているが、資本主義的発展が抑えられていたためにそれさえも阻害されたという⁶³。また当時、朝鮮では土地を失い、職を失う朝鮮人が溢れていた⁶⁴。このような状況のなかで、朝鮮半島の朝鮮人には「満州」をはじめとする国外への移住の圧力がますます増大していた。1939年に朝鮮総督府は朝鮮各道に対して「集団移民」を組織するように通知を出した。

表 2-5 割当見込戸数及各道割当標準表（1939 年）

道名	割当率（％）	割当見込戸数（戸）
忠清北道	15	450
忠清南道	10	300
全羅北道	20	600
全羅南道	15	450
慶尚北道	25	300
慶尚南道	10	750
江原道	5	150
計	—	3,000

出所：満鉄調査部『満洲農業移民概説（産業調査資料第 52 編）』（南満洲鉄道株式会社、1939 年、pp. 104-105）より転載。

ここで注目すべきことは、朝鮮総督府が出した「集団移民」を組織する地域がすべて南部朝鮮地域に限定されていたことである。南部朝鮮地域は小作争議が多発する地域でもあった。朝鮮総督府のねらいは、朝鮮において年々増加していた日本人地主に対する朝鮮人農民の小作争議を、「満州」への朝鮮人の移住によって民族的矛盾と絡み合った階級的矛盾を緩和させようとするところにあった。

南部朝鮮地域の朝鮮人が国策として「満州」に送り込まれた歴史的事実を確認するため

⁶³ 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配（上）』青木書店、1973 年、pp. 273-275。

⁶⁴ 朝鮮半島における朝鮮人の失業者は1932年から1940年まで、それぞれ393,615人、329,856人、310,043人、253,322人、241,392人、162,543人、131,230人、123,745人、76,174人だった（許粹烈「日帝下朝鮮の失業率と失業者数推計」経済史学会編『経済史学』第17号、1993年、p. 27）。

に次の資料を見てみよう。1938 年の「満洲開拓民選出ニ関スル件」⁶⁵において、「満洲建国ノ理想顕現ニ協力セシメツ々アルガ一面耕地狭少ノ為多数零細農ヲ包擁スル本道〔慶尚北道-筆者注〕トシ開拓民事業ハ土地政策上極メテ重要（中略）過剰戸数ヲ転出セシムルヨウ積極的ニ措置スル」が書かれている。この資料を読めば、当時の朝鮮半島、特に慶尚北道をはじめとする南部朝鮮地域は人口が多く耕地が少ないので、過剰人口を「満州」に転出させようとする意図が読み取れる。筆者のインタビュー調査対象者のなかには、南部朝鮮地域の出身者が多く、特に「安全農村」に移住した朝鮮人移民は慶尚道出身者が多かった。議論を展開するために、以下では「安全農村」について見てみよう。



写真 2-1 「河東安全農村」現在の様子。
筆者撮影。



写真 2-2 「綏化安全農村」現在の様子。
筆者撮影。

1931 年 9 月 18 日以降、朝鮮総督府は関東軍が引き起こした「満州事変」によってそれまで生活していた所を離れざるをえなくなった在満朝鮮人を管理するために、東亜勸業に補助金を与えて中国東北地域の 5 ヲ所に「安全農村」を建設させた。「安全農村」には 1932 年に建設された「鉄嶺安全農村」をはじめ、「河東安全農村」、「営口安全農村」、「綏化安全農村」、「三源浦安全農村」がある。

表 2-6 「安全農村」一覧表

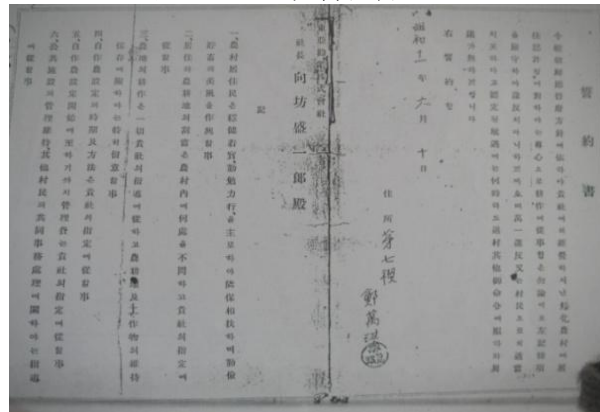
村名	設立年代	所在地
鉄嶺農村	1932 年	奉天省鉄嶺県鉄嶺附近
営口農村	1933 年	奉天省営口県営口附近
河東農村	1933 年	浜江省珠河县烏吉密河站附近
綏化農村	1934 年	浜江省綏化県綏化附近
三源浦農村	1935 年	奉天省柳河县三源浦附近

出所：満鉄調査部『満洲農業移民概説（産業調査資料第 52 編）』
（南満洲鉄道株式会社、1939 年、pp. 77-78）より転載。

朝鮮半島から多くの朝鮮人が「安全農村」へ移住した。確かに「安全農村」を建設した後、「満州事変」後に中国の敗残兵に襲撃された一部の在満朝鮮人を收容した。しかし、「安全農村」に入るためには、入村誓約書が必要で誰でも入れるわけではなかった。

⁶⁵ 樋口雄一『戦時下朝鮮人労務動員基礎資料集』（第 2 巻）、緑蔭書房、2000 年、pp. 71-73。

図 2-2 入村誓約書⁶⁶



出所：鄭吉泳⁶⁷『興和五十年』私家版、1997年。

誓約書は「綏化安全農村」の第7禰に入村した鄭万琪という者が、1936年6月10日の日付で東亜勸業株式会社の社長である向坊盛一郎宛てに書かれてある。誓約書の内容は以下の通りである⁶⁸。

今般朝朝鮮總督府の方針に依って貴社が経営する綏化農村に居住認許されたことに對して、専念して耕作に従事することは無論のこと、左記の条項を厳守する。万が一違反または村民として適当でないと認定された場合、いつでも退村やその他の命令に服し、異議申し立てしない。

誓約書の条項には以下の6項目が記されている。

1. 農村居住民は穩健着実勤勉力行を主とし隣保相扶して勤儉貯蓄の美風を作興すること
2. 居住と農耕地の割り当ては農村内の何処であっても問わないで貴社の指定に従うこと
3. 農地の耕作は一切貴社の指導に従い、農耕地及工作物の維持保存に関して特に留意すること
4. 自作農設定の時期及方法は貴社の指定に従うこと
5. 自作農設定開始に至るまで管理費は貴社の指定に従うこと
6. 公共施設の管理維持、その他村民の共同事務処理に関して指導に従うこと

この誓約書の内容を見て分かるように、「安全農村」で朝鮮人を収容するためにはさまざまな制限があった。また、筆者のインタビュー調査に基づけば、「安全農村」に移住した朝鮮人移民は南部朝鮮地域の慶尚道出身者が多かった。当時、朝鮮半島から「安全農村」に朝鮮人移民を送り込んだ歴史的事実を裏付けるために、もう1つの資料を見てみよう。この資料は『京城日報』が1935年7月2日から7月30日にわたり、「南満の同胞安全農村を訪ねて」と題して連載した記事の1935年7月30日の分である。

⁶⁶ この入村誓約書は「綏化安全農村」に入村した際に使われたものである。

⁶⁷ 2008年8月14日、吉泳さんと面談した際に入村誓約書の転載に了承を得た。

⁶⁸ 誓約書と条項は朝鮮語で書かれており、日本語への翻訳は筆者が行った。

図 2-3 「安全農村」に関連する新聞記事。



出所：神戸大学附属図書館所蔵資料。

記事のタイトルは「王道楽土を謳歌す 移民大行進 満洲移民史上に一大画期」となっており、そのなかの記事には「昨年に比し本年は営口と一般農村を加へ八百二十八戸四千百二十名の増加を示し、年々増加の趨勢を辿っている。(中略) 東亜勸業会社重役の談によると鮮農移民としては未だその実を挙げ得ているとはいいい得ないが試験的にこの安全農村の完成を一つの契機として将来多数の内鮮人の満洲移民が実現せらるることともなればこの事業の創設こそは満洲移民史上に一つの大きなエポックを画したものと云わねばならない」と書いてある。並木孝三は「安全農村」を「内地に於ける鮮人労働者問題の行き詰まりと関連して考えると一層切実になってくる、今安全農村に関し記述する前提として、内地に於ける鮮人労働者問題が如何に行き詰まりの状態にあるか」について考える必要があると主張する⁶⁹。戦前、日本に渡る朝鮮人が増え続けていた。

表 2-7 日本に渡った朝鮮人数

年度	人数
1924 年	120, 236
1925 年	133, 710
1926 年	148, 503
1927 年	175, 911
1928 年	243, 312
1929 年	280, 833
1930 年	304, 834
1931 年	318, 212
1932 年	390, 543
1933 年	456, 217

出所：並木孝三「安全農村に関する調査」南満洲鉄道株式会社総務部労働課編『労務時報』(63、1935 年、p. 77) に基づき筆者作成。

⁶⁹ 並木孝三「安全農村に関する調査」南満洲鉄道株式会社総務部労働課編『労務時報』63、1935 年、p. 76。

並木は「然しこれ等鮮人の大部分が大都市に集中し労働者就中日傭労働者として、失業と飢餓線上を彷徨せる状態にある（並木、1935：p. 76）」と述べている。つまり、朝鮮における人口過剰による朝鮮人の日本への移動により、失業や貧困といった社会問題が生じた。1934年10月30日に日本政府は日本に渡航する朝鮮人に関する総合対策として、「朝鮮人移住対策の件」を閣議で決定した⁷⁰。この朝鮮人移住対策要目は以下のとおりである。

1. 朝鮮内において朝鮮人を安住せしむる措置を講ずること
2. 朝鮮人を満州および北鮮に移住せしむる措置を講ずること
3. 朝鮮人の内地渡航を一層減少すること
4. 内地における朝鮮人の指導向上およびその内地融和をはかること

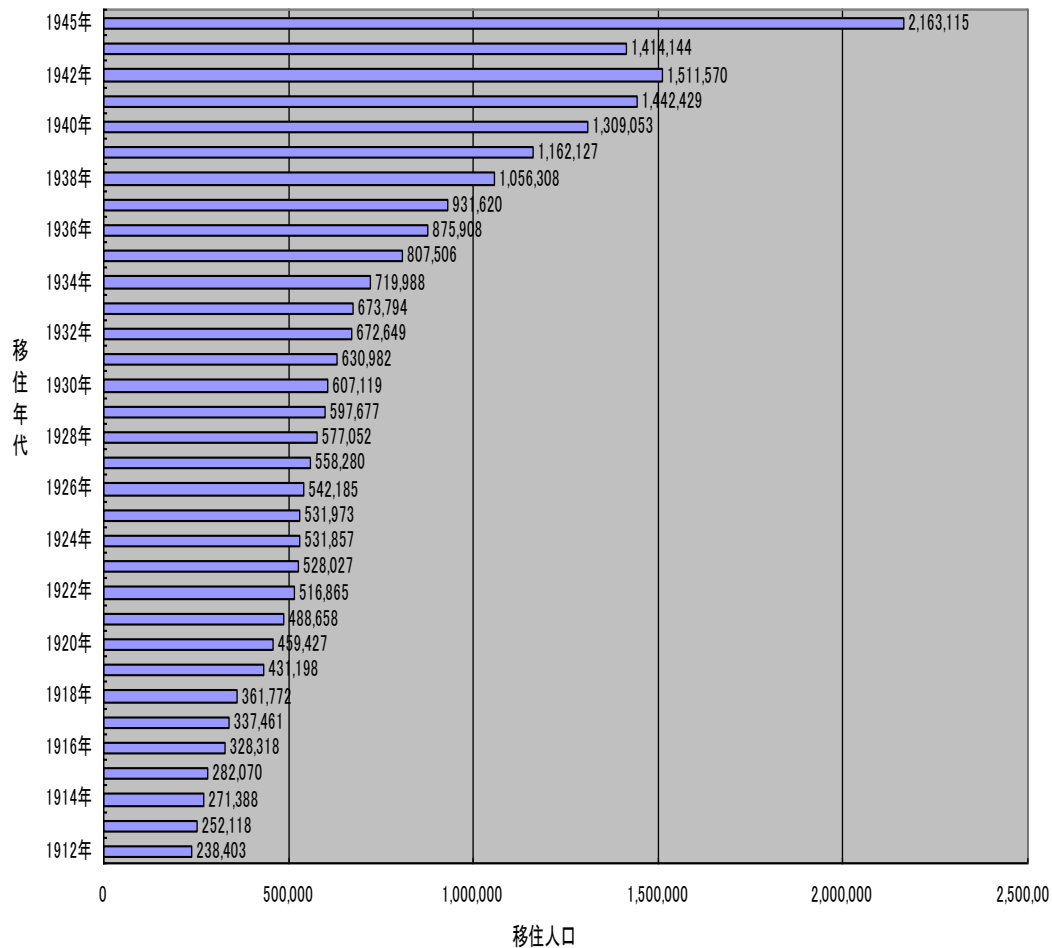
この朝鮮人移住対策要目の第3項は、「朝鮮人の内地渡航を一層減少すること」である。当時、日本国内において失業問題が深刻化したことに伴い、日本への朝鮮人渡航制限が強化されたことも、対満朝鮮人強制移住を促進する圧力となったと考えられる。伊藤一彦は「並木の主張は、満洲・朝鮮・日本を有機的に結びつけ、そのなかで安全農村というものをとらえかえしていく点に特徴があり、それはのちの『日満一体化』『鮮満一如』といった戦時イデオロギーのさきがけをなすものである」と述べている⁷¹。伊藤の分析は正鵠を射ているといえよう。戦前、植民地統治機関が作成した資料では、「安全農村」を建設したのは「満州事変」が起きたことにより、在満朝鮮人難民を保護するためだと強調する論調がほとんどである。しかし、「安全農村」の建設は植民地朝鮮の過剰人口が日本国内に流れないようにし、人口移動の方向を日本国内より「満州」へ転向する意図があったことを見逃してはいけない。

在満朝鮮人は絶えず移動を繰り返しており、また多くの在満朝鮮人が僻地の農村に暮らしており、当時の人口状況を正確に把握することは難しい。1944年のデータは現段階でなお不明である。在満朝鮮人の人口状況を把握することが難しいのは、各調査機関によるデータの出し方にも起因すると考えられる。在満朝鮮人に対する統計が多種多様あり、例えば、朝鮮総督府、関東軍、拓務省、『満州国』、満鉄、東洋拓殖会社、東亜勸業会社、朝鮮人民会などの機関はそれぞれの統計があるが、統計はそれぞれ違っており、千差万別であった（孫、2003：p. 61）。このような難しい状況のなかで韓国研究者の高崎宗司は、さまざまなデータを照らし合わせて在満朝鮮人の人口状況をまとめた。

⁷⁰ 朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行強制労働の記録』現代史出版会、1974年、p. 30。

⁷¹ 伊藤一彦「異民族支配の模索—在満朝鮮人調査」松村高夫、柳沢遊、江田憲治編『満鉄の調査と研究』

図 2-4 「満州」へ移住した朝鮮人の人口推移状況



出所：高崎宗司『中国朝鮮族』（明石書店、1996年、p. 16）に基づき筆者作成。

図2-4が示すように、1944年を除いて「満州」への朝鮮人移民数は年々増加しており、1945年時点での在満朝鮮人の人口は200万人を超えていた。ここで留意すべきことは、1932年の「満州国」が成立した後の人口増加数は、それ以前より多いことが読み取れる。その原因には、まず国策移民政策をとったことが考えられる。次に「北満」地域で鉄道建設が進められたことにより、鉄道に乗って「北満」に移住した朝鮮人が急増したことも考えられる⁷²。

最後に朝鮮人「満州」移民のマクロ的要因を探る場合、日本人の代行者とした要因を考える必要がある。日本人の代行者として朝鮮人を「満州」に移住させたといわれている。矢内原忠雄は「朝鮮人の生活程度は日本人より低く、従って財政的補助を要すること少くして満洲へ移住し得る。故に恐らく朝鮮人の為めにとくに大規模なる集团的移住地を設くるなどの必要なく、土地所有若くは利用の権利を確実ならしめたる上自由移民を原則として入満を認むる時は、或は独立の農業経営者として、或は日本人の集団移民地に対する労働力の補給者として役立つであらう」と述べている⁷³。また、松村高夫は「満州事変以前の対満日本人移民の失敗した要因のうち、満州事変以降は、商租権設定に対する中国官民の

青木書店、2008年、pp. 298-299。

⁷² 1933年9月に敦図線、1933年12月海克線、1934年9月に拉濱線が開通した（孫、2003：p. 61）。

否認・抵抗運動という失敗の政治的要因は一応『解決』されるとしても、失敗の経済的要因は依然として存続しつづけるので、日本人移民の成功の可能性が小さく、そのかぎりでは日本人の代行者として、相対的に低い『労働力価値』を有する朝鮮人を移民することが、満州における『権益』を確保するために従来以上に必要となった」と述べている⁷⁴。矢内原（1934）と松村（1972）の議論を要約すれば、朝鮮人を移住させるのは日本人より財政的に補助が少なく、かつ大規模なる集団的移住地を設ける必要もないため、朝鮮総督府にとっては都合が良かったということである。

以上で文献資料に基づいたマクロな視点で朝鮮人「満州」移民の要因を見てきた。以下では筆者が中国東北地域に赴いてインタビューを行った事例を紹介し、ミクロな視点で朝鮮人「満州」移民の要因を見てみよう。

第3節：朝鮮人が「満州」へ移住したミクロ的要因

この節では朝鮮人の「満州」へ移住したミクロ的要因について考察する。文献資料によるマクロな視点で、朝鮮人が「満州」へ移住した要因について言及した研究はあるが、移民を体験した当事者たちの証言に焦点を当ててミクロな視点で論じた研究は見当たらない。この節では移民体験者たちの証言に焦点を当てて考察する。

移民体験者たちに移住の理由を聞くと、「生活が貧しいからきた」、「日本の植民地統治が厳しいからきた」というような回答が多かった。さらに詳しく話を聞くと、移民体験者たちはさまざまな移住の理由を語ってくれた。この節では30人の事例のライフヒストリーに基づき、朝鮮人が「満州」へ移住した要因を考察する。これらの事例を選ぶ際には、事例の出身地域、移住形態、職業などを考慮した。

事例	氏名	性別	出身地	生年	移住年代
事例1	朴珠浩さん	男性	慶尚北道醴泉郡	1916年	1919年
事例2	蒋汶柱さん	男性	慶尚北道英陽郡	1914年	1933年
事例3	姜哲さん	男性	慶尚北道安東郡	1927年	1935年
事例4	金柳漢さん	女性	慶尚南道蔚山郡	1924年	1936年
事例5	洪福南さん	女性	慶尚北道永川郡	1925年	1936年
事例6	権弼蘭さん	女性	慶尚北道慶州郡	1925年	1936年
事例7	J Xさん	男性	全羅北道金堤郡	1934年	1936年
事例8	田辛秀さん	男性	慶尚南道宜寧郡	1928年	1936年
事例9	劉寿岩さん	男性	慶尚北道安東郡	1917年	1938年
事例10	金鐘洙さん	男性	慶尚北道義城郡	1911年	1939年
事例11	楊龍錫さん	男性	平安北道楚山郡	1926年	1939年
事例12	金有順さん	女性	忠清南道公州郡	1928年	1939年
事例13	全孟徳さん	男性	慶尚南道泗川郡	1928年	1939年
事例14	具鳳順さん	女性	慶尚北道慶山郡	1926年	1940年

⁷³ 矢内原忠雄『満洲問題』岩波書店、1934年、p. 120。

⁷⁴ 松村高夫「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満州史研究会編『日本帝国主義下の満州』御茶の水書房、1972年、p. 228。

事例15	X Kさん	男性	慶尚北道永川郡	1928年	1939年
事例16	Y Sさん	女性	慶尚北道迎日郡	1935年	1940年
事例17	李鐘瑞さん	男性	忠清北道陰城郡	1919年	1941年
事例18	朴圭善さん	男性	全羅南道谷城郡	1921年	1941年
事例19	林珠順さん	女性	慶尚北道聞慶郡	1922年	1941年
事例20	李東烈さん	男性	慶尚北道永川郡	1928年	1941年
事例21	李福順さん	女性	忠清北道陰城郡	1929年	1941年
事例22	徐丙鐘さん	男性	全羅南道木浦府	1919年	1942年
事例23	洪吉俊さん	女性	咸鏡北道清津府	1924年	1942年
事例24	G Xさん	女性	慶尚北道永川郡	1934年	1942年
事例25	林漢姫さん	女性	慶尚北道聞慶郡	1932年	1943年
事例26	R Cさん	女性	全羅北道益山郡	1934年	1943年
事例27	H Tさん	男性	江原道春川郡	1938年	1943年
事例28	Y Nさん	女性	全羅北道益山郡	1929年	1944年
事例29	朴在和さん	女性	慶尚北道慶州郡	1931年	1944年
事例30	鄭龍善さん	女性	慶尚南道蔚山郡	1926年	1945年

朝鮮人が「満州」へ移住した要因はさまざまである。筆者はインタビュー調査を通して、移住の複雑な要因を確認することができた。以下ではインタビュー調査データに基づき、移住の要因を検討する。日本の朝鮮植民地統治は通常 3 期に分けられる。第 1 期は 1910 年の「韓国併合」から 1919 年の「三・一運動」までのいわゆる「武断統治期」である。第 2 期は 1931 年までのいわゆる「文化統治期」である。第 3 期は 1945 年までのいわゆる「大陸兵站基地化期」である⁷⁵。日本の朝鮮の植民地統治に関する研究はすでに多く行われてきた⁷⁶。

3-1 政治的な理由で避難するため

3-1 では、日本の植民地統治に抵抗して政治運動に参加したり、日本の統治者側と闘争したりしたため、朝鮮半島に居られなくなった事例を紹介する。

まず、朴珠浩さんの事例を紹介する。朴珠浩さんは 1916 年に慶尚北道醴泉郡に生まれた。「満州」に移住した理由について朴珠浩さんは次のように証言した。

1910 年頃、父親は日本人との戦いで負けてウラジオストックに逃れた後、「満州」に渡った。1912 年頃に名前を変えて朝鮮に戻った。その後、朝鮮と「満州」の間を行ったりきたりして、1919 年に家族全員を連れて「満州」の間島に渡った。

⁷⁵ 森山茂徳「植民地統治と朝鮮人の対応」日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書 第 3 分科篇 上巻』（2005 年、p. 3）を参考にした。

⁷⁶ 例えば、文定昌『軍国日本朝鮮強占三十六年史（上・中・下）』（柏文堂、1965-1967 年）、山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』（岩波書店、1971 年）、朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配』（青木書店、1973 年）などの研究がある。

一家は朴珠浩さんが11歳の時に間島から北安の海北鎮に移り住み、海北鎮の小学校に通った。当時、学校から日本留学への募集があり、同じ学校出身の3人が選ばれて14歳の時に日本に行った。「一緒に行った一人の名前は金愛景で、もう一人は池という苗字しか覚えていない。留学ということで行ったが、ほとんど仕事ばかりした。」日本では郵便局で約1年間働いた後、京都にある生田鉄工所で約3年間働いた。その後、大阪にある大今鉄工所で約3年間働いた。両親からの呼び戻しがあったため、1941年に「満州」に帰ったという。

次にY Sさんの事例を紹介する。Y Sさんは1935年に慶尚北道迎日郡に生まれ、1940年に家族とともに「満州」に渡った。移民の理由をY Sさんは次のように証言した。

叔父〔父親の弟〕が朝鮮で日本人の警察官と口論になり、その警察官を殴ったため、「満州」に逃げてきたと聞いた。父親は連帯責任を負うのを恐れて先に「満州」に渡った。その後、家族を呼び寄せたと聞いた。

Y Sさん一家が初めて移住したのは、北安鉄力の一大房だった。暮らしていた村の近くに日本軍が駐屯し、日本人の開拓団が入っていた。日本人は村に暮らしていた中国人農民を追い出して代わりに朝鮮人移民を入れさせたという。

3-2 日本の植民地統治が厳しく、生活が困難のため

戦前、朝鮮半島の日常生活の隅々まで日本の植民地統治が執行された。植民地統治が厳しく生活が困難のために、「満州」に渡る朝鮮人移民が少なくなかった。以下では3人の事例を紹介する。

蒋汶柱さんは1914年に慶尚北道英陽郡に生まれ、1933年に家族とともに「満州」に渡った。朝鮮での生活や移民の理由について蒋汶柱さんは次のように証言した。

当時、故郷では定期的に市場が開かれていた。市場でお年寄りたちの髪を後ろから切ったり、〔白〕服⁷⁷にインクをかけたりする場面をよく見かけた。服は洗った方がいいが、髪を切られたことで、お年寄りたちは大声を上げて号泣した。(中略)朝鮮人はみんなご飯を食べにきた。農作業しても収穫の70%を地主に供出し、残りは30%しかなかった。農作業しても生計は成り立たなかった。田植えをした時、1ヵ所でもずれたら全部やり直しをさせられて管理が厳しかった。私の家族が中国にきたのは、その厳しい統治を逃れる理由もあり、腹いっぱいご飯を食べるためだった。

蒋汶柱さんの生活体験に基づいた証言はリアリティがあった。日本の植民地統治が厳しかったことは、田植えや髪を切られたエピソードを通して読み取れる。植民地統治が厳しかった証言は金鐘洙さんからも聞いた。金鐘洙さんは1911年に生まれ、1939年に妻と当

⁷⁷ 総督府は朝鮮の伝統的な白衣を経済的でない、あるいは民族的な立場を強調し、日本人として相応しくなく、日本の衣服慣習に従うべきであるなどという理由で白衣を無くそうとした(樋口雄一『戦時下朝鮮の農民生活誌 1939~1945』社会評論社、1998年、p. 59)。白服を弾圧する理論は、頻繁に洗濯しなければならないし、労働服としても適していないという経済的な効率に基づいていたが、長い習慣的生活方式を変え、「国民」作りの一環として推進されたものとみる(金洛年『『植民地近代化』再論』今西一編『世界システムと東アジア—小経営・国内植民地・「植民地近代」』日本経済評論社、2008年、p. 227)。

時4歳の長男と3歳の長女を連れて「満州」に渡った。

当時、貧しくて食べ物がなくて干芋と干した白菜しか食べられなかった。そのうえマッチすら、米を供出しなければもらえなかった。(中略) 私は7歳の時に書堂⁷⁸に1年ぐらい通ったが、断髪を強要されたのでやめた。17歳の時から日本人地主の小作農をし、綿花の栽培と蚕の飼育をしていた。収穫した綿花を使って自分で布を織るのは禁止され、生産したものをすべて供出しなければならなかった。

当時の状況は「内鮮一体」で、日本人が朝鮮半島に入り、朝鮮半島の朝鮮人を「満州国」に移住させた。当時、日本人と朝鮮人にはランクが付けられていた。日本人は一等国民で、朝鮮人は二等国民だった。(中略) 当時、若い未婚の女性は仕事を紹介されると騙されて連れて行かれたり、憲兵に連れ出されて「慰安婦」にされたりしていた。男性は軍隊に入れさせられたりしていた。軍隊に入れられたら、脱け出すことはできない。その頃、樺太開発の労働力の募集で樺太に行く人もいたが、私は叔父を頼りにきた。私は移民ではない。開拓団に参加したら自由がないと聞いたので自分たちできた。

金鐘洙さんの証言から読み取れるのは、生活の貧困および徴兵を避けるという複合的な要因で「満州」に渡ったことである。また、興味深いことに金鐘洙さんは、「満州」へ移動した自身のことを移民だと思っていなかった。「満州」には一時避難しただけで、いつかは朝鮮に帰ると考えていたようだ。金鐘洙さんによれば、朝鮮から「満州」には汽車に乗ってきた。金泉駅から汽車に乗る予定だったが、切符を間違えて購入したために京城から南陽を経由して「満州」に渡った。京城で一晩泊ったためにお金を使い切った。朝鮮から「満州」に渡る途中で忘れられない出来事があったという。

当時、中国の東北は「満州」と呼ばれた。「満州」に渡るためには健康診断証が必要だったが、知らずに出発した。途中で南陽駅に降りて現地の日本人が経営する病院で健康診断証を作ることにした。お金がなかったために、その病院で働いている朝鮮人にお願いして健康診断証を発行してもらった。お金を払えなかったのも、日本人の院長にバカヤロウと怒鳴られた。病院から汽車に戻る際に切符を落としてしまった。落とした切符を探して、〔その切符を〕石鹸で洗ってから汽車に乗った。(中略) 朝鮮から持ってきた弁当を食べ切った後、お腹が空いたら汽車のなかの洗面所の水を飲んでしのいだ。当時、3歳だった娘はまだ母乳を飲んでいて、妻は連日何も食べなかったのも、母乳が出なかった。玉泉駅に着くまで、娘はずっと泣いていた。

インタビューを行った時点で、すでに90歳を超えていた金鐘洙さんの耳は少し遠かった。そのため、筆者の質問は大声で行わなくてはならなかった。1つ質問を投げかける度に金鐘洙さんが延々と語る場面が多かった。金鐘洙さんへのインタビューは2度行ったが、2も健康診断証を作るために途中下車したエピソードが語られた。移民体験は強烈で忘れられないものになっていたようだ。移民体験とともに貧しくて空腹に苦しんだことを忘れられ

⁷⁸ 朝鮮で初学者のための入門的な教育を行う私塾である。

ない移民体験者がいた。12 歳まで朝鮮半島で生活していた朴在和さんは、当時の生活の様子を次のように証言した。

米を「日本の奴ら」が全部持っていった。配給で食糧を少しもらったが、白いご飯を食べることはほとんどできなかった。白いご飯を食べるのは祭祀の時ぐらいだった。仕方がないので山に行って草を取って食糧をちょっと入れて粥を作った。ほとんど毎日粥だった。粥は水のように顔が映るほどだった。学校に弁当を持っていくことも出来なかった。お腹が空いて夜はなかなか眠れなかった。

毎日、水のような粥を食べなければならなかったという証言は、植民地朝鮮での生活状況を如実に伝えている。また、朴在和さんは「処女供出」⁷⁹について証言した。

当時、朝鮮では「処女供出」という女の子を供出する制度があった。強制的だったので親たちは娘が 10 数歳になったら結婚させた。周りには幼くして結婚した女の子が多かった。

朝鮮では「処女供出」を避けるため、幼いうちに結婚する朝鮮人女性が多かったという事実は他の移民体験者も証言した。インタビューのなかで朴在和さんは移民の理由を、「兄の徴兵を避けるために開拓団に参加した」とつぶやいた。

一番上の兄は徴兵を避けるために「満州」に渡った。その後、一旦朝鮮に戻ってきて、「満州」では朝鮮より生活がしやすいといったので、両親は「満州」に行けば白いご飯が食べられると思って「満州」に移住しようと考えた。しかし、家族で汽車に乗るお金がなかったので結局、開拓団に応募した。私たちが家族 11 人で移住したのは 1944 年の農暦 4 月だった。

朴在和さんの証言から、朴在和さん一家の「満州」への移住に関する複数の要因が読み取れる。生活困難のため、また「処女供出」や徴兵を避けるという潜在的な要因もあったと考えられる。

3-3 「強制連行」と「処女供出」から逃れるため

「強制連行」は 1937 年に日中全面戦争に突入して以降、労働力や軍要員の不足を補うため、日本は国策として朝鮮人、中国人を日本内地、樺太、南方の各地に投入したが、駆り集め方が強制的であったためこう呼ばれた（伊藤他監修、2000：p. 72）⁸⁰。筆者のインタビュー調査に基づけば、「強制連行」から逃れるために「満州」に逃れる朝鮮人もいた。そし

⁷⁹ 当時の新聞には、「徴用」の同意語として「供出」という用語が用いられており、一般民衆は未婚女性の動員を「処女供出」と表現していた。朝鮮語で「処女」は未婚女性を指す総称であり、「供出」は官憲による強制的な動員を意味する言葉である（尹明淑『日本の軍隊慰安所制度と朝鮮人軍隊慰安婦』明石書店、2003 年、p. 297）。

⁸⁰ 中国人強制連行については、杉原達『中国人強制連行』（岩波新書、2002 年）が詳しい。『朝鮮人強制連行』については、外村大『朝鮮人強制連行』（岩波新書、2012 年）が詳しい。

て、3-2で朴和さんの証言があったように、植民地朝鮮では「処女供出」という名目での若い女性の連行があった。少なくない朝鮮人女性が「処女供出」を避けるため、個人あるいは家族で「満州」へ移住したことも考えられる。しかし管見するかぎり、この事実に関する文献資料および先行研究は見当たらない。その事実を確認するため、植民地と戦争を体験した当事者たちの証言を聞き取るしかない。1919年に全羅南道木浦府に生まれた徐丙鐘さんは、1942年に「強制連行」から逃れるために「満州」に渡った。

私は「強制連行」から逃れるために逃げてきた。周りには強制的に連れて行かれた人がいた。危ない状況だったので家族に伝えることもできなかった。私が最初に入ったのは、阿城の双峰だった。双峰には朝鮮から徴兵や「強制連行」から逃れるために、または出稼ぎのためにきた朝鮮人がいた。



写真 2-3 インタビューに応じる徐丙鐘さん。
筆者撮影。

徐丙鐘さんは家族にも伝えることができないで、逃げるように「満州」に渡ったことは当時の植民地統治の厳しさを物語っている。当時、朝鮮半島で強制的に連れ出されていったのは、成人の男性だけではなく未成年の少女も対象だった。14歳の時に「満州」に渡った具鳳順さんは渡満の理由を次のようにやや感情的に語った。

朝鮮での生活があまりにも苦しかったので、母親は先に私と兄を送り出した。生活困難な理由もあったが、朝鮮で「処女供出」の徴集があったので、それを避けるために婚姻の紹介を受けてきた。

具鳳順さんへのインタビューはハルビン市内の成高子養老院で行った。当日、他の数人の事例を含めて座談会式のインタビューを行った後、分かれる際に具鳳順さんは筆者に向けて、「日本に行ったら、チョソンサラム⁸¹がどれぐらい苦労したのかを日本人に伝えてください」と言い残して自分の部屋に戻った。また、筆者はハルビン市内の顧郷養老院で「処女供出」の徴集から逃れるために、1944年11月に15歳の時に結婚した後、すぐ夫と一緒に「満州」に渡ったYNさんに話を伺うことができた。

⁸¹ 朝鮮語でチョソン(조선)は朝鮮、サラム(사람)は人を意味する。チョソンサラム(조선사람)とは朝鮮語で朝鮮人という意味の言葉である。チョソンサラムについては第5章で詳しく分析する。

中国にきたのは生活が困難だった理由もあるが、「処女供出」の徴集が厳しかったこともある。若い女の子は無理やりに連れて行かれた。「日本の奴ら」は本当に残酷だった。その徴集を避けるために、父親は私を家からほとんど出さないようにした。水が無くなって外に水汲みに行く時は汚いタオルで頭を包んだり、顔に墨を塗ったりして出かけるようにした。

「満州」に渡った時は真冬だった。ゴム靴を履いてきたので、足が凍ってしまった。そのことが後遺症になり、いまでも毎日足が痛くて堪らない。自分は時代を間違えて生まれたため、苦労をばかりしたという。インタビューを受けながら過去のことを思い出して悲しくなったようで、悲しみの叫び声であるアイゴーと嘆き、タバコを吸い始めた。

3-4 日本人や日本の植民地企業が朝鮮半島に進出したため

高崎（2002）によれば、朝鮮半島に日本人の居留民が増えてきたのは1876年釜山開港に始まる。甲申政変から日清戦争までの時代（1884年～1894年）は日本で朝鮮への植民熱が高まり、日清戦争から朝鮮保護化までの時代（1894年～1905年）は戦争への協力と移民の奨励が行われた（高崎、2002：pp. 26-93）。次の表2-8を見ても分かるように、年代毎に朝鮮半島における日本人居留民の人数が増えていた。

表2-8 年代別の朝鮮半島における日本人居留民の変化一覧

年代(年)	1894	1905	1910	1919	1931	1942
人数(人)	9,354	42,460	171,543	346,619	510,000	750,000

出所：高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波新書、2002年）に基づき筆者作成。

ここで日本の植民地企業が朝鮮半島に進出したため、やむ得ず「満州」に移住した2人の事例を紹介する。まず、楊龍錫さんの事例を紹介する。楊龍錫さんは1926年に平安北道楚山郡に生まれ、1939年に家族とともに「集団移民」として「満州」へ移住した。楊龍錫さんに移民の理由について聞いた。

1938年から日本政府は故郷の楚山郡の辺りで水豊ダム⁸²の建設を始めた。ダムができたら村全体が水没してしまうので、どこかに移住しなければならなかった。しかし、私の家は小作農だったので、自力で朝鮮の他の地域に移ることはできなかった。その時、「鮮満拓殖株式会社」が楚山郡で移民を募集していた。朝鮮で住んでいた村は約40戸だったが、お金持ちと地主以外はほとんど移民団に参加した。裕福な家は朝鮮の他の地域へ移住した。

次にもう1人の日本の植民地企業が故郷に入ったために、「満州」に移住した事例を紹介する。洪吉俊さんは1924年に咸鏡北道清津府に生まれ、1942年に「満州」に渡った。移民の理由について洪吉俊さんは次のように証言した。

⁸² 水豊ダムは中国と朝鮮との国境を流れる鴨緑江の上流、平安北道北部に建設されたダムである。日本の植民地時代の末期に約8年間をかけて1944年に完工した。

日鉄（日本製鉄清津製鉄所）が故郷に工場を建てて土地が没収された。農作業ができなくなったため、故郷を離れなければならなかった。

楊龍錫さんがいう「移住しなければならなかった」および洪吉俊さんがいう「故郷を離れなければならなかった」という証言は、植民地統治の外圧により、朝鮮人の「満州」への移住が必然的だったことを裏付けた。

3-5 「満州国」の治安と国防のため

「満州国」が成立した後、朝鮮人移民は「満州国」の治安上の貢献を期待された。また、日中戦争が勃発した後、総力戦時期に入ってから朝鮮人移民は「満州国」の国防の役割も当てられた。以下では「集団移民」として朝鮮半島から「満州」に移住し、「満州国」の治安と国防を意図された事例を紹介する。

J Xさんは1934年に全羅北道金堤郡に生まれた。1936年に両親とともに「集団移民」として「満州」の間島省安図県の「集団部落」に移住した。J Xさんは民族学校の教員を務めたことがあり、該博な歴史知識を持っている。また、家族の「満州」移民の歴史を調べるために韓国も訪問した。J Xさんによれば、「故郷の金堤郡は反日運動が多く起きる地域だった。ほとんどの人が移住させられたと両親に聞いた」という。

私たちが入った「集団部落」は白頭山の近くにあった。当時、白頭山付近で金日成が率いる「抗日連軍」が抗日運動をしていた。私たちが朝鮮から移住させられたのは、このような共産主義運動を遮断するためでもあった。

J Xさんによれば、自分たちが移住した「集団部落」の周辺には、金日成を捕まえたら賞金をくれると書かれた公示が貼られていた⁸³。「集団部落」には「抗日連軍」の兵士がやってくる時もあったという。数え年20歳の1941年3月に忠清北道陰城郡から「集団移民」としてソ満国境の黒河の龍鎮に移住した李鐘瑞さんは、「満州」への移住の理由を次のように語った。また当日、李鐘瑞さんのインタビューの場に立ち会った奥さんの李福順さんにも「満州」への移住の理由を伺った。

故郷で移民の募集があった。最初の頃、宣伝隊として男性だけが選ばれ、全員が忠清北道の出身者だった。家族は後できた。私たちがきたばかりの時、土で塹を作った。日本人は土地をくれたが、開墾した土地だけでは生活ができなかった。（李鐘瑞さん）

一番上の兄は徴兵を避けるために先に〔1941年3月〕開拓団に参加した。残りの家族は後にきた。私たちが移住したばかりの時、龍鎮に水田はなかった。ジャガイモしか食べるものはなかった。多くの朝鮮人移民は開拓団から逃げた。（李福順さん）

⁸³ 1939年4月14日、満洲国治安部が定めた抗日連軍高中級幹部の「捕殺」賞金規定では、楊靖宇、趙尚志、李延祿、魏拯民、周保中ら重要幹部に並んで金日成に1万円の賞金が懸けられた（水野直樹「満洲



写真 2-4 李福順さん（左）と李鐘瑞さん夫妻。
筆者撮影。

李鐘瑞さんと李福順さんは移住地の龍鎮で結婚した。1945 年 2 月に李鐘瑞さん夫妻は開拓団から脱出して綏化に行き、綏化で終戦を迎えた。「今の生活は違う。私は 16 歳まで麻袋のスカートを履いていた。着るものも履くものもすべて麻袋だった」と李福順さんは少し恥ずかしそうにいった。李鐘瑞さん夫妻と同じくソ満国境に移住した朴圭善さんの移住理由を聞いてみた。朴圭善さんは 1921 年に全羅南道谷城郡に生まれ、1941 年に家族とともに「集団移民」として「満州」へ移住した。

日本人が私たちを連れてきた。当時、故郷では移民を募集していた。家族全員で移住するように命じられた。父親が早く亡くなり、母親と弟の 3 人で暮らしていた。母親は足が悪かった。弟はまだ小さかったので、私だけを行かせるようにお願いした。しかし、一人だけで行くのは認めてくれなかった。仕方がなく家族全員が開拓団に参加した。同じ村から 7 家族が選ばれた。選ばれたのはみんな貧しくて立場の弱い人たちだった。村の役人の家族や親族は誰も選ばれなかった。

朴圭善さん一家が移住したのはソ満国境嫩江の柏根里の「集団部落」だった。「満州」に移民すれば徴兵が免除されるといわれ、「移民することは徴兵されることと同じだった」という。朝鮮人は著しい移動を繰り返し、朝鮮から「満州」に渡った後でも移動する場合があった。以下では少し特殊な 2 つの事例を紹介する。2 人は朝鮮半島から「集団移民」として「満州」へ移住した後、「満州国」内で再び移動を経験した。全孟徳さんは 1928 年に生まれ、1939 年に家族とともに「集団移民」として「満州」へ移住した。

祖父、両親、叔父家族も一緒にきた。私たちが最初に入ったのは明月溝の大甸子だった。当時、大甸子の周辺には金日成が率いる「抗日連軍」がいた。「抗日連軍」と日本軍はずっと戦っていた。「抗日連軍」の兵士がたまに「集団部落」に食糧をもらいにきた。叔父が「抗日連軍」に参加した。（中略）日本人は朝鮮人移民と「抗日連軍」との接触を防ぐために、農作業をして収穫しないうちに私たちを亜布力に移住させた。

ハルビン市で同じような移住の形式で「満州」に渡った金有順さんに出会った。金有順

抗日闘争の転換と金日成『思想』No. 912、岩波書店、2000 年、pp. 159-160)。

さんは1928年に生まれ、1939年に家族とともに「集団移民」として「満州」に渡った。

当時、私の家族は山奥の村で住んでいた。「日本の奴ら」が朝鮮に入った後、貧しくて土地がない人を「満州」に移住させてくれると宣伝していた。移民したら土地もくれるし、食糧もくれる、牛もくれると宣伝していた。兄たちはすでに結婚して別居していた。父親は兄たちにも連絡して「兄家族も含めて全員で」移民することを決めた。

私たちは明月溝の大甸子に入った。当時、大甸子では共産党の部隊と「日本の奴ら」の部隊がずっと戦っていた。私たちが移住した後、共産党の部隊の兵士は頻繁に私たちの所にやってきた。開拓団員に入隊を募ったり、開拓団家庭に食べ物をもらいにきたりしていた。私の一番上の兄は共産党の部隊に参加した。(中略) 開拓団を管理する日本人は共産党の部隊が私たちの所にきたことを知り、このままではいけないと思ったようだ。1941年の秋に私たちは垂布力に移住させられた。

3-6 戦争に備えて日本軍（関東軍）に食糧を供給するため

陳祥によれば、「日中全面戦争後の農産物統制政策は、従来の『企画経済下の統制』・『農民治安・農業改良』という増産政策から、現地増産と農産物統制を重視する政策へ変化した。日本帝国主義の戦争に適応するために、満洲農産物に対する統制が強化された」という⁸⁴。戦時中、多くの朝鮮人が「満州」へ移住したのは、戦争に備えて日本軍に食糧を供給するという要因もあると考えられる。以下では「安全農村」に移住した5人の事例を紹介する。

XKさんは1928年に慶尚北道永川郡に生まれ、1939年に父親とともに「綏化安全農村」に入った。

当時、朝鮮では「満州」に行けば犬でも白米を食べられるという噂が広まっていた。私たちは叔母「父方の妹」を頼ってきた。(中略)「綏化安全農村」には綏化第一農村と綏化第二農村があった。私の家族が入ったのは、綏化第二農村（現在の勤労村）だった。綏化第一農村には朝鮮半島の各道からきた移民がいたが、綏化第二農村の人たちはほとんどが慶尚道からきた。

XKさんと同じ「綏化安全農村」に移住した洪福南さんに話を伺うことができた。洪福南さんは1925年に慶尚北道永川郡に生まれ、1936年に家族とともに「集団移民」として「満州」に渡った。朝鮮での生活について洪福南さんは次のように証言した。

生活が困難だったので、毎日ボロボロの服を着ていた。1ヵ月間ぐらい学校に通ったが、日本人や朝鮮人の地主の子供たちに汚い服を着てきたと苛められてすぐ学校をやめた。生活が貧しかったため、私は小さい時から他人の家で保母の仕事をした。(中略) 朝鮮から出発する前に朝鮮各地から集められた朝鮮人は、大邱で列に並べられた。列が少しでもずれたら殴られた。汽車に乗る前にある幹部のような日本人は、北満州にご飯を食べに行くから移民に行きたい人は手をあげるように命じられた。手を上げな

⁸⁴ 陳祥「日中戦争による『満洲国』農業政策の転換」新潟大学コアステーション人文社会・教育科学系付置環東アジア研究センター編『環東アジア研究センター年報』第6巻、2011年、p. 81。

かった人は引っ張り出されて連れて行かれた。また、何人かは「皇国臣民の誓詞」を暗誦させられた。私は体を震えながら「皇国臣民の誓詞」を暗誦したら、下駄 2 足と缶に入ったビスケット 1 缶をくれた。

当日、座ってインタビューを受けていた洪福南さんは大邱で汽車に乗った際の話になったら、急に立ちあがって体をピシッとして「皇国臣民の誓詞」を暗誦した。インタビュー終了後、村に他の移民体験者がいないかと尋ねたら、洪福南さんは同じ汽車で「満州」に渡り、今日まで「綏化安全農村」の跡地に暮らしている権弼蘭さんを紹介してくれた。権弼蘭さんは 1925 年に慶尚北道慶州郡に生まれ、1936 年に家族とともに「集団移民」として「綏化安全農村」に入った。権弼蘭さんは植民地朝鮮での日常生活の 1 つのエピソードを紹介してくれた。「日本人のお墓のお供えを盗んで食べたことがあった。怒られることもあった。今だったら汚いと思って食べないだろうが、その時は食べ物がなかった。」続けて権弼蘭さんは「安全農村」に入った後の状況を紹介してくれた。

「綏化安全農村」のなかには 9 つの部落に分けられた。ほかの部落には朝鮮半島のほかの地域からきた朝鮮人もいたが、私たちが入った部落にはすべて慶尚道の出身者だった。(中略) 入村した人には一戸に 2.4 町歩の土地が与えられた。実家では農作業をするために借金して牛一頭を買った。債務を返済したらほとんど穀物は残らなかった。

権弼蘭さんは 1943 年に同じ村の慶尚道出身の男性と結婚し、翌年長女が生まれた。「日本の奴ら」は米を全部持って行って腐った粟を食糧としてくれた。腐った粟でご飯を炊いたらご飯はまっ赤だった。長女は栄養失調になり、一時期口が歪んだという。インタビュー終了後、「安全農村」時代に実家が持っていた水田まで筆者を案内してくれた。



写真 2-5 「安全農村」時代の水田を案内する権弼蘭さん。
筆者撮影。

「綏化安全農村」の跡地でのフィールドワークを終えた後、「安全農村」の跡地をめぐる旅を続けた。「鉄嶺安全農村」の跡地で移民体験者の田辛秀さんに出会った。田辛秀さんは 1928 年に慶尚南道宜寧郡に生まれ、1936 年に家族とともに「集団移民」として「鉄嶺安全農村」に入った。

朝鮮では生活が困難だったからきた。「安全農村」に入った後でもご飯を満足に食べることはできなかった。秋になって米を収穫したら全部持って行かれてその代わりに

粟をくれた。戦争の末期、日本人は米をもっと徴集しようとして米を供出したら布をくれた。兄の家は布をもらったことがある。「安全農村」は安全に米を産出する場所だ。

田辛秀さんは「鉄嶺安全農村」に移住した後、跡地に住み続けてきた。インタビュー終了後、田辛秀さんは「鉄嶺安全農村」の跡地を案内してくれた。

3-7 家族や親族を頼って渡満

筆者がインタビュー調査をした事例のなかでは、家族や親族を頼って「満州」に渡った人々が多かった。以下では6人の事例を紹介する。

父親が生きていた時は水田と畑を持ち、何人かの小作農を雇っていた。タバコの商売もしていた。生活は裕福だったので、兄は書堂に行き勉強することができた。しかし、父親が病気で亡くなって小作農たちが離れてしまい、農作業ができなくなったため、河東にいる親戚を頼ってきた。(金柳漢さん、1936年渡満)

私は14歳の時に結婚し、夫が先に「満州」に渡った。私は夫を頼ってきた。私が最初に入ったのは北安だった。2年後に私たちは通化県に移り住んだ。

(林珠順さん、1941年渡満)

日本の植民地統治が厳しかったので、姉〔林珠順さん〕のいる所に行こうとした。汽車代を払えないので、開拓団に入ったら自由がないと聞いたが応募した。同じ村からは5家族が開拓団に応募した。私たちが最初に入ったのは北安だった。移民を募集していた日本人の話では、「満州」に行ったら住む所もあるし、白いご飯も食べられるし、学校にも入れるといわれた。しかし、実際にきてみると、当初約束したこととまるきり違っていた。至るところ荒地ばかりで、水田はまだ開墾されていなかった。(中略)開拓団での過酷な労働に耐えられなくなり、3ヵ月後のある夜、一家6人は開拓団から脱出した。(林漢姫さん、1943年渡満)



写真 2-6 林漢姫さん(左)と林珠順さん姉妹。
筆者撮影。

朝鮮での生活は貧しかった。私が5歳の時に母親は生活困難のために自殺した。その後、父親は兄と私を連れて朝鮮半島内で転々とした。1937年頃、父親は一人で「満州」に渡った。その後、父親は友人を頼んで私たち兄弟二人を自分のところに連れて

きた。(李東烈さん、1941 年渡満)

故郷で生活できるなら、故郷を離れなかった。(中略) 父親は朝鮮で漁師をしていたが、生活は困難だった。「満州」に行けばご飯を腹いっぱい食べられるという噂を聞き、親戚を頼ってきた。(G X さん、1942 年渡満)

私の家はお金も土地もなかったため、他人の家で小作農をした。朝鮮での日本の統治が厳しかった。食糧、木綿、唐辛子などをすべて供出しなければならなかった。「日本の奴ら」がくると聞いたら、食糧を隠したり、犬を隠したりした。どぶろくを作っても隠して飲まなければならなかった。「日本の奴ら」に付いてくる朝鮮人の手先らはもっと憎たらしかった。お金をもらうことを目当てで酷いことをした。(中略) 私は 17 歳の時に結婚した。当時、朝鮮では結婚していない若い女の子を供出することになっていた。近所の女の子たちは供出されることを避けるために顔に墨を塗ったりしていた。夫は中国で生まれた人で日中戦争の時に朝鮮に戻った。その後、夫の両親が再度中国に渡ったので、それを頼りに 1945 年 2 月に夫と 3 歳だった長女と一緒にきた。(鄭龍善さん、1945 年渡満)

3-8 出稼ぎのため

水野直樹は「20 世紀前半の東アジアにおける国境・地域を越えた人口・労働力移動を促すシステムがつくられていったと考えられる。それは、特に日本帝国の支配圏の拡大、日本資本主義の発展による労働力需要などの要因によって形成されたものである。(中略) 朝鮮人の国外移住は、東アジアに生じた労働力移動の重要な一環であった(水野、1999:p. 256)」と述べている。筆者のインタビュー調査に基づけば、水野がいう東アジアに生じた労働力移動の出稼ぎのために「満州」に渡った事例が多かった。

祖父の代までは土地を持ち、それなりに裕福な生活を送っていた。父親の代になった時、所有していた土地が地主に奪われた。(中略) 当時、ちょうど図佳線が建設されていた。父親は図佳線の建設の工事に参加した。私より 12 歳年上の兄も参加した。我が家は出稼ぎのためにきた。(姜哲さん、1935 年渡満)

朝鮮では生活が貧しかったため、私は出稼ぎのためにきた。体が丈夫だったので、農作業は他の人の 2 倍できた。お金を貯めて母親に送った。(劉寿岩さん、1938 年渡満)

1939 年頃、父親は出稼ぎで鉄道建設のために「満州」に渡った。その後、ずっと連絡がなかったため、お爺さんは心配した。1943 年の秋に父親探しにお爺さん、母親、私の 3 人できた。その時、移民するつもりではなかった。(中略) 当時、大洪水が発生して鉄道が水害で壊れたため、図們から牡丹江の東京城まで歩いたことを覚えている。ここにきてから朝鮮より住みやすかったので、私たちはそのまま住み着いた。(H T さん、1943 年渡満)

朝鮮での生活は困難だった。日本の統治が厳しかったので「満州」に渡った。朝鮮

から汽車に乗ってきた。私たちが最初に入ったのはチチハルだった。(中略) 当時、朝鮮人は水田の農作業に就く人が多かったが、父親は土木関係の仕事をして生計をたてた。(R C さん、1943 年渡満)

第4節：考察

今までの研究では、朝鮮人が「満州」へ移住した要因を体系的に整理してこなかった。本章では移民体験者の証言を詳しく検討した。この節では第2節と第3節を踏まえたうえ、朝鮮人が「満州」へ移住したさまざまな要因を考察する。

4-1 日本の植民地統治を耐え難く感じていたため

本章では具体的事例に基づき、日本の植民地統治が厳しかったため、朝鮮人が「満州」へ移住した1つの側面を紹介した。3-1は日本の植民地統治を抵抗したため、政治的な理由で「満州」に亡命した事例である。3-2は日本の植民地統治を耐え難く感じて「満州」へ移住した事例である。蒋汝柱さんが証言したように、田植えする際に1ヵ所でもずれたら全部やり直しをさせられるほど管理が厳しかった。また、金鐘洙さんが証言したように、日本人と朝鮮人の間にランクが付けられ、差別の構造が存在していた。そして、朴在和さんが証言したように、食糧の収奪が厳しかった。

4-2 強制的に連行されることから逃れるため

1930年代には「内鮮一体」の政策が執行された。「内鮮一体」とは、提唱者である第7代朝鮮総督南次郎の定義によれば、「半島人ヲシテ忠良ナル皇国臣民タラシムル」⁸⁵という一語に尽きる。南次郎の時代(1936年～1942年)は、皇民化政策がより徹底的に行われた。神社参拝、日本語使用の強要、「創氏改名」⁸⁶などの強制を通して朝鮮民衆の民族性を剥ぎとろうとした。さらに、「陸軍志願兵令」(1938年)、「朝鮮徴用令」(1942年)、「朝鮮学徒兵制」(1943年)、「朝鮮徴兵制」(1944年)が布かれ、多くの朝鮮の青壮年を戦場や労務動員に狩り立てた。徐丙鐘さんは「強制連行」から逃れるために「満州」に亡命したが、亡命先に「強制連行」や徴兵から逃れるために「満州」に渡る人がいた。具鳳順さんとYNさんは「処女供出」の徴集を避けるために「満州」に渡った。また、朴在和さんと鄭龍善さんが「処女供出」の徴集があったと証言した。これらの証言からいえるのは、朝鮮半島から多くの人々が強制的に連行されることから逃れるために「満州」に渡った。

⁸⁵ 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1985年、p. 148。

⁸⁶ 日本が植民地支配のため皇民化政策の一環として、朝鮮人から固有の姓を奪い日本式に名前を変えさせ、天皇家を宗系とする家父長制に組み入れようとした政策。1939年11月朝鮮民事令改正という形で創氏改名が公布され、翌年2月から施行された。創氏改名は、①氏の創設、②朝鮮人が日本式に名を改める道を開く、という2つの部分からなっていた。①は従来朝鮮社会が男系血統とその血族団体を基本構成とし夫婦別姓であったのを改め、戸主を中心とする家の観念を確立するものとされ、②は同時にその際日本式に改名するものとされた。①は全朝鮮人に適用され、②は任意とされた。しかし日本式に改名することは<皇民化の指標>とみなされ有形無形に強要された(伊藤亜人他監修『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社、2000年、p. 249)。

4-3 小作争議の圧力を軽減するため

窮乏化した朝鮮人過剰人口を朝鮮から排出することによって、小作争議の頻発にあらわれる朝鮮における矛盾「解決」せんとした（松村、1972：p. 228）。日本の朝鮮半島における「土地調査事業」と「産米増殖計画」に始まる一連の植民地政策は朝鮮人農民の土地喪失や貧困化を招き、朝鮮人農民に「満州」への移住を余儀なくさせた。第2節で見てきたように、小作争議の頻発地域は南部朝鮮地域、特に朝鮮の最大の穀倉地帯である全羅北道と全羅南道に集中していた。J Xさんによれば、故郷の全羅北道金堤郡は朝鮮半島で反日運動が多発した地域であった⁸⁷。ここでJ Xさんがいう反日運動を小作争議だと理解しても差し支えないであろう。朝鮮総督府農林局が作成した当時のデータを確認してみると、金堤郡は1935年に小作争議が2,989件発生して朝鮮半島で最も数値が高かった。J Xさん一家は1936年に「集団移民」として「満州」へ移住した。1936年に金堤郡の小作争議の件数が990件になり、1935年より大きく減った。1936年頃から他の地域の小作争議の件数も次第に減り始めた。J Xさんの証言だけで早急に結論を下すことはできないが、下記の表2-9を合わせてみれば、朝鮮半島内の小作争議の圧力を軽減するために朝鮮人を「満州」に移住させたという要因もあると考えられる。

表2-9 全羅北道における郡別小作争議件数の推移（単位：件）

	1935 年	1936 年	1937 年	1938 年	1939 年	計
群山府	1	1	—	—	1	3
全州郡	—	3	6	—	4	13
完州郡	470	580	229	151	105	1,535
鎮安郡	185	112	298	74	57	726
錦山郡	5	151	190	76	35	357
茂朱郡	63	134	96	35	34	362
長水郡	284	212	235	95	66	892
任実郡	124	274	472	226	207	1,303
南原郡	125	237	354	283	89	1,088
淳昌郡	392	113	196	111	36	848
井邑郡	206	464	746	138	122	1,676
高敞郡	48	65	86	66	67	332
扶安郡	186	153	104	94	46	583
金堤郡	2,989	990	960	160	158	5,257
沃溝郡	134	128	78	94	45	489
益山郡	288	324	286	219	143	1,260
計	5,500	3,941	4,336	1,822	1,215	16,814

出所：朝鮮総督府農林局編『朝鮮農地年報』（第1輯、1940年、p. 12）に基づき筆者作成⁸⁸。

⁸⁷ 金堤郡は日本人地主の最大の密集郡であるのみならず、千町歩以上日本人巨大地主の、朝鮮における最大の盤踞郡でもあった（浅田喬二「大正末期—昭和10年代初期・朝鮮における抗日農民運動の地域的特徴（1920-1939年）」『朝鮮史研究会論文集』第8集、1971年、p. 89）。

⁸⁸ 前掲浅田論文も参考した。

4-4 日本人や日本の植民地企業が朝鮮に入ったため

朝鮮人が「満州」へ移住したのは、送り出されたさまざまな要因もあった。その1つの要因は、日本人や日本の植民地企業が朝鮮に進出したからである。日本人が増えていた理由は、「韓国併合」後、「土地調査事業」という名目で行われた日本人地主による土地略奪も進行し、日本の大地主の全羅北道の群山などの南部朝鮮地域への進出が急激に進行していた。

日本人が朝鮮に入ったため、朝鮮人が「満州」へ移住せざるをえなくなった。金鐘洙さんが証言したように日本人が朝鮮に入り、朝鮮人を「満州」に移住させた。姜哲さんの家にも土地があったが、日本人の地主に土地が奪われたために一家が「満州」に渡った。また、日本の植民地企業が朝鮮に進出したため、朝鮮人が「満州」へ移住せざるをえなくなった。楊龍錫さん一家は、日本の植民地企業が故郷でダムを建設したためにやむ得なく開拓団に参加して「満州」に渡った。洪吉俊さん一家は、日鉄が故郷で工場を建設したために故郷を離れて「満州」に渡った。移民体験者たちが証言したように、日本人や日本の植民地企業が朝鮮にやってきたため、朝鮮人が「満州」へ移住した1つの要因だと考えられる。

4-5 「満州国」の「治安」と「国防」に利用しようとするため

朝鮮人強制連行真相調査団によれば、「集団移民には武装訓練がほどこされた。それは当時、東満で活発に展開されていた金日成將軍を中心とする朝鮮人抗日武装闘争の弾圧に集団移民を利用する謀略であった。つまり朝鮮人と朝鮮人をたたかわせようとする新手の植民地政策であった」という⁸⁹。J Xさんはまさに関東軍を悩ました朝鮮人「抗日連軍」の抗日運動を遮断するため、「満州国」の「治安」の役割を強いられた事例である。戦時中、朝鮮半島は日本の兵站基地となり、「満州」は日本対ソ連の前線となった。「満州事変」以降、日本は「満州国」をつくりあげ、実質的に日本の国境をソ連と接する「満州」までに拡大した。これらの出来事は朝鮮人の「満州」への移住にも影響を与えた。

李鐘瑞さんと李福順さん、そして朴圭善さんは「集団移民」としてソ満国境に移住した。当時、拓務省の外務課勤務していた鬼塚一男は、開拓団輸送記でソ満国境地帯に朝鮮人移民を送りこんだ記録を残している⁹⁰。朴圭善さんが「移民することは徴兵されることと同じだ」と証言したように、多くの朝鮮人が「満州」へ移住して「満州国」の国防に当てられた。全孟徳さんと金有順さんは、J Xさんと同じく「満州国」の治安に当てられたが、その目的は達成できなかったためにソ満国境地帯に再び移住させ、新たに国防の責務が与えられた。以上の複数の移民体験者の証言に基づけば、「満州国」の治安と国防に利用するため、朝鮮人を「満州」に移住させたという要因も考えられる。

4-6 戦争に備えて日本軍（関東軍）に食糧を供給するため

筆者のフィールドワーク調査に基づけば、朝鮮人の「満州」移民の要因としてもう1つ考えられるのは、日中戦争に備えて日本軍に食糧を供給するために朝鮮人を「満州」に移住させた。論点をより明確するためにこの要因を朝鮮総督府が投資して「満州」で建設した5

⁸⁹ 朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行強制労働の記録』現代史出版会、1974年、p. 59。

⁹⁰ 鬼塚一男「開拓団輸送記」『朝鮮』第342号、1943年、pp. 46-51。

カ所の「安全農村」に焦点を当てて考察する。

「安全農村」は「北満」と「南満」の稲作が盛んだ地域に建設しており、在満朝鮮人が多く暮らしていた畑作を主とする間島ではなかった。複数の移民体験者が証言したように、「安全農村」に移住した朝鮮人移民は稲作農業に長けている慶尚道出身者が多かった⁹¹。現段階では「安全農村」に移住した朝鮮半島出身別のデータがまだ見つかっていないため、断言することはできないが、権弼蘭さんとXKさんが証言したように、「安全農村」には慶尚道出身者が多かった。慶尚道は稲作農業に長けている地域である。その意味では田辛秀さんがいうように、「安全農村」は「安全に米を産出する場所だ」といっても過言ではない。それは満鉄の総裁や関東軍の司令官が「安全農村」に行ったことを考えれば、「満州国」と関東軍がいかに「安全農村」を重視していたのかを推測することができよう⁹²。実際に「営口安全農村」で生産された米は軍用にも回された。1937年度にはもみ45,000石が軍用米として納入された⁹³。「安全農村」は朝鮮半島から過剰人口の送り出しの受け皿になったうえ、長期的には移民を受け入れて食糧を確保する「試験場」⁹⁴だった。

また、筆者のインタビュー調査に基づけば、「安全農村」に移住した朝鮮人移民は「集団移民」が多かった。権弼蘭さんや洪福南さん、そして田辛秀さんも「集団移民」である。また、移民体験者たちの「安全農村」への移住の時期は日中戦争勃発の1937年前後に集中していた。それで、朝鮮人が「満州」へ移住した要因を考える際、戦争に備えて関東軍に食糧を供給するために朝鮮人を「満州」へ移住させたという要因も考えられる。

4-7 「満州国」に縁故者がいたため

松本は日本人「満州」移民は「集団移民」が多いのに対して、朝鮮人「満州」移民は「分散移民」が多いことを確認した。その理由については、「朝鮮人の場合は満州農村にすでに朝鮮人社会が存在するために、その縁故を通じて移住することが可能であった（松本、1998：p. 115）」と述べている。表2-2で示したように、李勲求の調査では親戚の誘いで「満州」に渡ったのは1人しかいなかった。しかし、筆者の調査では縁故者を頼って「満州」に渡った者が多かった。第3節の3-7で縁故者を頼って「満州」へ移住した6人を紹介した。金柳漢さん一家は「満州」にいる親族を頼って渡った。李東烈さんは先に渡満した父親に呼び寄せて「満州」に渡った。鄭龍善さんは夫の両親を頼って「満州」に渡った。また、筆者の調査では縁故者を頼って「満州」に渡った移民体験者が多かった。総じていえば、「満州国」に縁故者がいることが、朝鮮人が「満州」へ移住した1つの要因である。

⁹¹ 筆者がインタビュー調査を行った「安全農村」関係者の移民一世のうち、慶尚道出身者が12人、忠清道出身者が2人、黄海道出身者が1人、咸鏡道出身者が1人である。これらの事例は筆者が「安全農村」跡地に赴き、現地の老人協会を通して偶然出会った人々である。

⁹² 「満鉄」総裁だった松岡洋右、関東軍司令官だった植田謙吉、関東軍参謀長だった東条英機が前後「営口安全農村」を視察した（孫、2003：口絵写真）。

⁹³ 金周溶「満洲地域韓人『安全農村』研究—営口、三源浦地域を中心として—」『韓国近現代史研究』第38号、韓国独立運動史研究所、2006年、p. 328。

⁹⁴ 鎌田澤一郎『朝鮮人移民問題の重大性』朝鮮総督府、1935年、p. 61。

おわりに

本章では文献資料のほかに、移民体験者たちの証言を用いて朝鮮人が「満州」へ移住したさまざまな要因について考察した。第 2 節では文献資料を通してマクロな視点で朝鮮人を「満州」に送り出した植民地朝鮮の社会状況を概観した。第 3 節では事例の証言を通して、ミクロな視点で移民体験者たちが生き抜いた時代の社会状況を概観した。

先行研究が取り上げた朝鮮人の「満州」へ移住した要因としての政治・経済的要因を確認した。各要因については複数の移民体験者の証言と文献資料を突き合わせて具体的に説明した。政治的要因と一口にいても本研究を通して分かったのは、「強制連行や「処女供出」から逃れるためなど複雑であった。経済的要因として、先行研究では朝鮮での生活困難を挙げている。本研究ではその状況を確認したうえ、「毎日、水のような粥を食べた」や「お墓のお供えを盗んで食べた」などの証言に基づいて具体的に説明した。また、先行研究では主に農業移民に着目しているが、本研究では農業移民以外の状況も紹介した。本章では「強制連行」や「処女供出」から逃れるため渡満した事例を紹介した。この人たちは一種の亡命移民なので、当時の植民地機関の統計データには反映されていなかっただろう。ライフヒストリー法を用いることによって文献資料研究だけでは、とらえ切れない当時の複雑な社会状況を知ることができた。朴圭善さんが「移民することは徴兵されることと同じだ」と証言したように、朝鮮人「満州」移民は植民地や戦争と深く関わっている問題である。全孟徳さんと金有順さんは一度朝鮮から「集団移民」として、「満州」に移住してから「満州国」内で再び移住した。林珠順さんと林漢姫さんは同じ家族で姉妹でありながら移住年代も移住形態も違っていた。このような複雑な状況は文献資料では読み取れない。

本章では朝鮮人の「満州」へ移住した要因を 8 つの事例群に分けて検討したが、他の要因以外にもあると考えられる。例えば、筆者がインタビュー調査をした移民体験者の多くは、汽車に乗って「満州」に渡った。姜哲さんと HT さんの一家は、「満州」での鉄道建設への出稼ぎのために「満州」に渡った。鉄道インフラの整備により、朝鮮人が「満州」に渡りやすくなった要因も考えられる。しかし、朝鮮人の「満州」への移住と鉄道の関連性については、資料が不十分であるため今後の課題とする。

第3章 朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点 ——「五族協和」の破綻の要因に着目して——

はじめに

本章では文献資料のほかに移民体験者の証言に基づき、「満州国」の建国理念の1つである「五族協和」の破綻の要因に着目して朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点を探る。本章では移民体験者たちの証言を4つの事例群に分けて論を進める。まず、「満州国」において民族間にランクが付けられていた「歴史的事実」を確認する。次に「住」に着目して「五族協和」の理念と現実の乖離について検討する。それから学校教育を通して「五族協和」の理念と現実との乖離について検討する。最後に在満朝鮮人の視点で見た各民族の姿を概観する。

第1節：問題の所在

「満州事変」を経て中国東北地域に建国された「満州国」は、日本の傀儡国家であったことはすでに繰り返し論じられてきている。本研究は直接の「満州国」に関する研究ではないが、本研究の研究対象者の移民体験者たちが生きてきた人生に「満州国」が大きく絡んでくるので、そのかぎりでは本研究は「満州国」と接点があると考ええる。「満州国」に関する研究は多い⁹⁵。本章ではこうした「満州国」に関する研究に学び、朝鮮人が「満州」へ移住した後の定着時の問題点を探る。

1-1 「五族協和」とは

1932年3月1日に「満州国」成立し、首都を新京（現長春）に置いた。「満州国」皇帝は清朝最後の皇帝溥儀である。「満州国」は建国理念を漢族と満州族からなる満州人による民族自決の原則に基づき、「満州国」に在住する主な民族（漢族・満州族・蒙古族・朝鮮人・日本人）による「五族協和」を掲げた国民国家であることを宣言した。「五族協和」は、孫文が漢・満・蒙・回・蔵の五族代表による共和制の確立を目指すために唱えた「五族共和」を意識していると考えられる。「満州国」建国理念を集約的に示した文章として、「満州国建国宣言」がある。その建国宣言のなかに「五族協和」については次のように書かれている。

凡ソ新国家領土内ニ在リテ居住する者ハ皆、種族ノ岐視尊卑ノ分別ナシ。原有ノ漢族、蒙族及日本、朝鮮ノ各族ヲ除クノ外、即チ其他ノ国人ニシテ長久ニ居留ヲ願フ者モ亦平等ノ待遇ヲ享クルコトヲ得。其ノ応ニ得ヘキ權利ヲ保証シ、其ヲシテ絲毫モ侵損アラシメス⁹⁶

これが漢・満・蒙・朝・日の五民族が一律平等に共存共栄をはかっていくという「五族協和」ないし「民族協和」の理念である。この理念は一見すると、どの民族も分け隔てな

⁹⁵ 管見する限り、代表的な研究は、山本有造『「満洲国」の研究』（緑蔭書房、1995年）、塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』（吉川弘文館、1998年）、山室信一『増補版 キメラ満洲国の肖像』（中公新書、2004年）などがある。

⁹⁶ 駒井徳三『大満洲国建設録』中央公論社、1933年、p. 6。

く「満州」国民として協和することを明言しているが、「満州国」が唱えた「五族協和」は建前であり、実際には日本人の統率のもとで実現されるものであった。



写真 3-1 「満州国」 皇宮跡地（現「偽満宮博物院」）
筆者撮影。

「満州国」には多くの民族が暮らしており、「満州国」が民族の坩堝であったのは事実である。しかし、文献資料、および複数の移民体験者の証言に基づけば、「満州国」の民族構成では圧倒的多数は漢族であったが、支配権は人口構成上極少数の日本人によって握られていた。以下では「満州国」の民族構成について見てみよう。

表 3-1 「満州国」 在住内地人・朝鮮人人口の推移（1932～1943 年 数字は年度末）

年度	総人口	内地人	朝鮮人
1932	29, 968, 837	(116, 589)※	(27, 956)※
1933	31, 234, 032	178, 680	579, 884
1934	33, 135, 296	241, 804	690, 716
1935	34, 702, 319	318, 770	774, 627
1936	35, 870, 573	392, 742	894, 744
1937	36, 949, 972	418, 300	931, 620
1938	38, 623, 640	522, 189	1, 056, 308
1939	39, 454, 026	642, 356	1, 162, 127
1940	41, 660, 672	862, 245	1, 345, 212
1941	43, 188, 000	1, 017, 000	1, 465, 000
1942	44, 462, 000	1, 097, 000	1, 541, 000
1943	45, 323, 000	1, 148 000	1, 634, 000

※満鉄附属地

出所：遠藤正敬「満洲国統治における『日本臣民』という存在——戸籍問題からみる『民族協和』の実相」
松村史紀他編著『東アジア地域の立体像と中国』、2011 年、p. 65。

表 3-2 「満州国」における第 1 回臨時国勢調査の結果（1940 年）

内訳		人数	比率 (%)
満洲国総人口		43, 202, 880	100. 0
満 洲 人	総数	40, 858, 473	94. 6
	漢族	36, 870, 978	90. 2
	満洲族	2, 677, 288	6. 2
	モンゴル人	1, 065, 792	2. 5
	回教族	194, 473	0. 5
日 本 人	総数	2, 271, 495	5. 3
	内地人	819, 614	1. 9
	朝鮮人	1, 450, 384	3. 4
無国籍人		69, 180	0. 2
第三人		3, 732	0. 0

出所：満洲国史編纂刊行会編『満洲国史 各論』（満蒙同胞援護会、1971 年、p. 58）⁹⁷

以上の表 3-1 と表 3-2 を見て分かるように、「満州国」には多くの民族が居住しており、人数的に多いのは漢族だった。また、朝鮮人が日本人より人数が多かった。

1-2 先行研究の検討

朝鮮人が「満州」へ移住した後の定着時の問題点について言及した研究は、洪鐘必の『「満州」（中国東北地方）における朝鮮人農業移民の史的研究——1910～1930 年を中心として——』（京都大学農学研究科博士論文、1987 年）、孫春日の「満洲事変前の『在満朝鮮人』問題とその苦境」東アジア近代史学会編『東アジア近代史——特集・満洲事変と東アジア』（第 5 号、2002 年、pp. 36-52）、田中隆一の『「満洲国民」の創出と『在満朝鮮人』問題——『五族協和』と『内鮮一体』の相剋——』東アジア近代史学会編『東アジア近代史——特集・『植民地』支配と地域的課題』（第 6 号、2003 年、pp. 28-43）などがある。洪は朝鮮人「満州」移民の渡満の歴史的な背景を概観し、「満州」での定着時の問題点を社会活動や独立運動、朝鮮人移民に対する圧迫などの側面に着目して論じた。しかし、洪は主に 1930 年以前の朝鮮人「満州」移民問題を対象としており、1930 年以降の問題点については論じていない。孫は主に「満洲事変」前の在満朝鮮人の国籍問題について論じた。田中は主に教育・国籍・兵役に関する在満朝鮮人の政策に着目し、「満州国」のイデオロギーの「五族協和」と「内鮮一体」という日本の朝鮮統治のイデオロギーの相剋を指摘した。筆者は孫と田中の問題意識を共有しながら、主に民族関係に着目して朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点を探る。管見するかぎり、朝鮮人「満州」移民に着目した民族体験や民族関係に関する研究は、依田憲家の「満州における朝鮮人移民」満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』（龍溪書舎、1976 年、pp. 491-603）、鄭雅英の『中国朝鮮族の民族関係』（アジア政経学会、2000 年）、尹輝鐸の『「満洲国」の『2 等国（公）民』——その実像と虚像——』（『歴史学報』第 169 号、2001 年、pp. 139-171）がある。依田は「満州」にお

⁹⁷ 遠藤正敬「満洲国統治における『日本臣民』という存在——戸籍問題からみる『民族協和』の実相」松村史紀他編著『東アジア地域の立体像と中国』（2011 年、p. 65）より転載。

る日本人と中国人、そして朝鮮人の民族関係に着目し、「満州」における朝鮮人移民の増大過程と存在形態を明らかにした。鄭は移民初期から現代に至るまでの朝鮮族と漢族との関係を中心に考察した。尹は「満州国」時代、在満朝鮮人は農業分野や商工業分野で差別的に扱われていたことについて論じた。

上記の研究はほとんどが文献資料に基づいて政策や制度についてマクロな視点で論じており、当事者の移民体験者に着目したミクロな視点での論考が少ない。本章では先行研究を踏まえて文献資料のほか、「満州国」時代を体験した移民体験者たちへのインタビューの調査資料に依拠して考察する。以下では「満州国」時代を体験した移民体験者たちの証言を通して、朝鮮人が「満州」へ移住した後の定着時の問題点を見てみよう。

第2節：インタビューの調査概要

本章では21人の事例の証言に基づき、朝鮮人が「満州」へ移住した後の定着時の問題点について考察する。事例の基本状況は以下の通りである。

事例	氏名	性別	出身地	生年	移住年代
事例1	蔣汝柱さん	男性	慶尚北道英陽郡	1914年	1933年
事例3	姜哲さん	男性	慶尚北道安東郡	1927年	1935年
事例4	洪福南さん	女性	慶尚北道永川郡	1925年	1936年
事例5	権弼蘭さん	女性	慶尚北道慶州郡	1925年	1936年
事例6	李太福さん	男性	慶尚北道青松郡	1930年	1936年
事例7	J Xさん	男性	全羅北道金堤郡	1934年	1936年
事例8	田辛秀さん	男性	慶尚南道宜寧郡	1928年	1936年
事例9	P Sさん	男性	慶尚北道義城郡	1924年	1937年
事例10	許福貴さん	女性	慶尚北道金泉郡	1925年	1937年
事例11	金鐘洙さん	男性	慶尚北道義城郡	1911年	1939年
事例12	楊龍錫さん	男性	平安北道楚山郡	1926年	1939年
事例13	全孟徳さん	男性	慶尚南道泗川郡	1928年	1939年
事例14	N Zさん	男性	慶尚北道英陽郡	1934年	1939年
事例15	朴圭善さん	男性	全羅南道谷城郡	1921年	1941年
事例16	Y Yさん	女性	慶尚北道醴泉郡	1930年	1941年
事例17	徐丙鐘さん	男性	全羅南道木浦府	1919年	1942年
事例18	洪吉俊さん	女性	咸鏡北道清津府	1924年	1942年
事例19	G Xさん	女性	慶尚北道永川郡	1934年	1942年
事例20	金宗雲さん	男性	平安北道亀城郡	1933年	1943年
事例21	朴在和さん	女性	慶尚北道慶州郡	1931年	1944年

2-1 民族間にランクが付けられていた

多くの移民体験者は「満州国」のさまざまな場面で日本人が優遇され、また民族によって階層があったと証言した。「満州国」では「五族協和」の理念を掲げており、建前上は五族平等だが、実際には民族間に地位の差があり、処遇の差があった。以下では4人の移民

体験者の証言を紹介する。

「満州国」が成立した翌年に撫順に渡った蒋汶柱さんは、戦後も撫順に住み続けて周りから「撫順通」といわれた。蒋汶柱さんは撫順時代の生活について次のように証言した。

当時、撫順では日本人と朝鮮人にしか米、タバコ、砂糖の配給がなかった。米とタバコは日本人と朝鮮人の間にも配給のランクが付けられた。砂糖の配給は日本人と朝鮮人は同じだった。中国人には何の配給もなかった。配給を受けるには身分証明書の提示が必要だった。当時、中国人の地位は低かった。電車は甲等席、乙等席に分けられて、もし中国人が甲等席に乗ったら殴られた。ほとんど毎日のように中国人が殴られている場面に出くわした。中国人がいい服を着ていても甲等席に乗るのは禁止され、朝鮮人はぼろぼろな服を着ていても甲等席に乗ることができた。朝鮮人と中国人が喧嘩して警察に捕まえられた場合、明らかに朝鮮人に非があっても朝鮮人はすぐ釈放され、中国人は尋問を受けた後、釈放された。

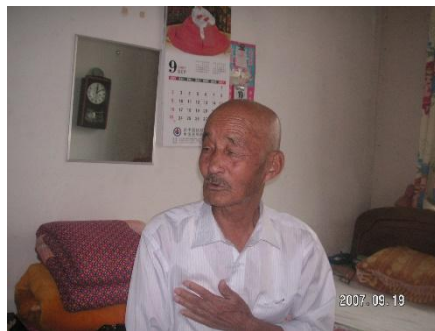


写真 3-2 インタビューに応じる蒋汶柱さん。
筆者撮影。

「満州国」時代、日本人は中国人と朝鮮人へ違う態度を取った。民族によって配給が違ってことはほかの事例からも証言を得た。戦時中、ハルビン近郊のキリスト開拓団で小作農をしていた徐丙鐘さんは、体験したことを次のように証言した。

食糧の配給手帳が配られ、食糧の配給はハルビン市内で行われた。民族によって配給が違っていった。日本人には割当の食糧をすべて配給したが、朝鮮人と中国人には半分しか配給しなかった。当時、ハルビンにはロシア人がたくさん住んでいた。日本人は一等国民、朝鮮人は二等国民、中国人は三等国民、ロシア人は四等国民だった。

徐丙鐘さんはロシア人が四等国民であった、あまり知られていない事実を証言した。蒋汶柱さんと徐丙鐘さんと同じ世代に属し、20歳を過ぎてから「満州」に渡った金鐘洙さんも民族によって待遇の差があったことを証言した。

日本人は一等国民、朝鮮人は二等国民、中国人は三等国民だった。食糧の配給も民族によって違っていった。日本人には米を配給し、朝鮮人には米半分と高粱半분을配給し、中国人には高粱だけ配給した。当時、県庁の県長や警察所の所長は中国人だが、副県長や副所長は日本人だった。しかし、中国人には実権がなく、実権はすべて日本

人に握られていた。

以上の3人は戦前と戦後を通して農作業に携わった。3人は農民の立場で「満州国」時代の民族差別の事実を証言した。筆者のインタビュー調査の事例のなかで、洪吉俊さんは唯一工場で働いた体験を持つ。「満州」に渡った年に父親が病気で亡くなり、長男なので生計をたてるため仕事を探した。いろいろな仕事を探して、最後に牡丹江にある関東軍第450部隊所属の銃弾の火薬をつくる工場で働くことにした。工場では給料以外に毎月食糧の配給があった。食糧の配給が家計の助けになると思ってその工場を選んだという。洪吉俊さんは工場で働いた体験を次のように証言した。

当時、民族によって地位の差があった。日本人は一等国民、朝鮮人は二等国民、中国人は三等国民だった。工場のなかでも民族間に待遇に差があった。日本人の給料は毎月40円、朝鮮人は24円、中国人は18円だったと覚えている。私は工場内の倉庫で火薬を分ける仕事をした。学校に通ったことがあり、朝鮮人なのでそのような仕事ができたとする。内部秘密なので中国人には、火薬を直接触る仕事を与えなかった。

洪吉俊さんが証言したように、工場の給与の面でも民族によって歴然とした差異があった。日本人は朝鮮人と中国人には違う対応をした。以下では「住」に着目して「五族協和」の理念と現実との乖離について追及する。

2-2 「住」に着目してみる「五族協和」の理念と現実との乖離

人々の移動を研究する際に「住」は重要なキーワードである。本研究では「住」を住居だけではなく生活環境も指す。朝鮮人が渡満した際に個人や家族で移住した場合は、縁故を頼る場合が多く、最初の頃、家族や親戚の住まいに身を寄せた。「満州国」成立後、国策移民で特に「集団移民」の場合は、「満州国」の官憲が元々その場所に暮らしていた中国人を追い出して朝鮮人を移住させる場合があった。

在満朝鮮人の多くは農村地域に入っており、主に「散居村」⁹⁸と「集団部落」、そして「安全農村」に暮らしていた。洪鐘泌は「朝鮮総督府が建設した安全農村あるいは集団部落、そして関東軍が建設した集団部落は形態が違っていたが、全部植民地民衆であった在満朝鮮人を統制するために日帝（日本帝国主義）が1931年9月18日以降建設した共通点を持っている」と述べている⁹⁹。以下では移民体験者たちの証言に基づき、在満朝鮮人と他の民族との関わりに着目し、朝鮮人が「満州」へ移住した後の定着時の問題点を探る。

在満朝鮮人は著しい移動を繰り返しており、また僻地に入る人々も多く、管見するかぎり「散居村」に暮らした朝鮮人の人数の統計は見当たらない。筆者のインタビュー調査に基づけば、家族や親族を頼って移住した場合、特に「分散移民」の場合は「散居村」で暮らす場合が多かった。1937年に渡満したP Sさんによれば、自分たちが住んでいた舒蘭県地域には日本人の開拓団が入っていたという。

⁹⁸ 本研究では「満州」で散居していた集落形態を「散居村」と呼ぶ。

⁹⁹ 洪鐘泌『『満州』（中国東北地方）における朝鮮人農業移民の史的研究—1910～1930年を中心として—』

「日本の奴ら」は開拓団を移住させ、鉄道沿線に日本人が移住した。日本人は鉄道沿線に住んでいた朝鮮人を新安に移住させた。新安は鉄道沿線から約 50 里 (25 キロ-) 離れた山奥のところだ。さらに元々新安に住んでいた中国人を山奥に追い出した。

移住地で朝鮮人移民を入れて、現地の中国人農民が追い出されたという証言は、許福貴さんと徐丙鐘さんから聞いた。

最初の頃、私たちはテントで生活した。暫く時間が経ってから日本人は私たちを中国人の家に入れた。中国人は泣いていた。(許福貴さん、1937 年渡満)

双峰にはすでに日本人開拓団が入っていた。日本人開拓団が入ることによって、現地に元々住んでいた中国人農民は追い出された。(徐丙鐘さん、1942 年渡満)

戦時中、在満朝鮮人は「散居村」のほかに「集団部落」にも多く暮らしていた。かつて「満州国」には数多くの朝鮮人の「集団部落」がつくられた。以下ではかつて「集団部落」で暮らした 4 人の移民体験者の証言を紹介する。

1939 年に「集団移民」として間島の「集団部落」に移住した後、翌年に浜江省葦河県亜布力の「集団部落」に移住させられた全孟徳さんは、「集団部落」での生活を証言した。インタビュー終了後、全孟徳さんは「集団部落」の跡地を案内してくれた。

私たちが入っていた「集団部落」の周りには、頑丈な塀に囲まれ、外には川が掘られた。そして、砲台が作られ、「集団部落」からの出入りは監視されていた。



写真 3-3 「集団部落」の塀があった場所を示す全孟徳さん。
筆者撮影。

「集団部落」を造ったのは朝鮮人移民を現地の「抗日連軍」との接触を遮断し、共産主義運動を抑えるためだった。しかし、「集団部落」のなかではしなやかな抵抗運動が続いていた。J X さんがその事実について次のように証言した。

父親は自衛団の団長に任命されたが、約 2 ヶ月でやめた。母親が「日本人の手先になって、同じ民族の人々を圧迫してはいけない」と父親を説得したのを覚えている。

1944 年頃、今でも印象に残っている出来事があった。「安重根が伊藤博文を撃つ」という題名の演劇が「集団部落」で行われた。当時、私はまだ 10 歳、共産主義とは何かも分からないでただ面白がって見に行った。寒いなかで鼻水を垂らしながら見たのを覚えている。反戦気運が高まっている時期だったためか、自衛団の団員たちも一緒に演劇を見た。

楊龍錫さんは 1939 年に家族とともに「集団移民」として浜江省葦河県の亜布力に移住した。楊龍錫さんに「集団部落」で暮らした生活体験を聞いてみた。

移住する前に「鮮満拓殖株式会社」の説明では、家も土地もすべて提供すると説明していたが、実際に着いてみたら家は建てている最中だった。そのため仕方がなく、先にできた錦河屯にある「満鮮拓殖株式会社」の倉庫で生活した。1939 年の秋、錦河屯から約 2km 離れた太陽村に楚山郡からきた開拓団のために住宅が建てられた。私たち全員が平安北道の楚山郡の出身者なので、村の名前を楚山屯に変えた。1 つの「集団部落」に 50 個の住宅が建てられた。住宅は中国人の苦力によって建てられた。広さ 30 m²の住宅に 2 家族が住まなければならなかったのが狭かった。



写真 3-4 「集団部落」に残る住宅¹⁰⁰。
筆者撮影。

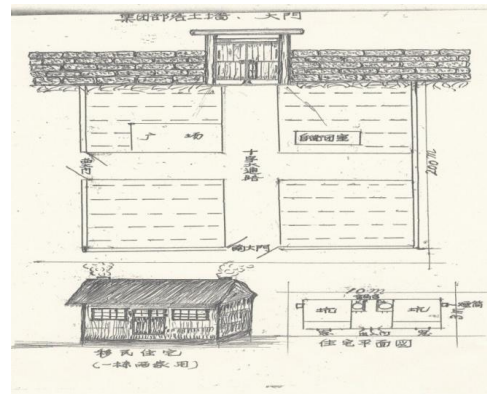


図 3-1 「集団部落」の平面図。
楊龍錫さん提供。

楊龍錫さんが暮らした「集団部落」では自警団による警備態勢が敷かれていたが、住居条件や労働条件への不満から脱走者が多かったという。当日、楊龍錫さんは自身が作成した「集団部落」の平面図を筆者に見せながら証言した。

「集団部落」は縦横 200 メートルの正方形で、高さ 2 メートルの土城で囲まれてその外には深さ 1 メートルの外濠が掘られ、さらにその外には鉄条網が張られていた。大門の所には自衛団室があり、電話も設置されていた。勤務する人には銃が配られ、定期的に「集団部落」を見回っていた。もし何かがあったら、すぐ亜布力警察所から警察官が駆けつけてくる。さらに実態が深刻になれば軍隊もやってくる。「集団部

¹⁰⁰ この数年間、筆者は中国東北地域の多くの農村地域を訪ねた。都市部における「満州国」時代のコンクリート構造の建物はまだ数多く残っているが、農村地域の住宅はほとんどなくなった。この「集団部落」時代の住宅は亜布力楚山屯に残っており、まだ住民が住んでいるが、かなり老朽化が進んでおり、近いうちになくなる可能性がある。

落」に住んでいる人は証明書を見せて出入りできたが、部外者の出入りは禁止されていた。朝鮮人移民は「集団部落」に集められて他の地域に自由に行き来できなかった。しかし、住居条件や労働条件への不満から、「集団部落」から逃げる人もいた。

「集団部落」は土城で囲まれてその外には外濠が掘られたり、さらにその外には鉄条網が張られたりして、内部と外部との接触を禁じていた。「集団部落」を出入りするのに証明証が必要だったことは、1936 年に渡満した李太福さんから聞いた。李太福さんは先に渡満した叔父を頼りに家族とともに「満州」に移住した。最初に入ったのは阿城だった。

1940 年頃、日本軍が阿城で軍事工場を造ることになり、大量の日本人兵士が阿城県に集まってきた。頻繁に軍事演習をして砲弾が落ちた時もあった。同じ年に私たちは阿城県から木蘭県の「集団部落」に移住させられた。「集団部落」では出入りするのに証明書が必要だった。私は幼かったので証明書を持っていなかったが、両親は証明書を持っていた。

「満州国」には数多くの「集団部落」のほかに 5 カ所の「安全農村」があった。「安全農村」は 1932 年の「鉄嶺安全農村」の建設に始まり、1945 年の日本の敗戦により「満州国」とともに崩壊した。以下ではかつて「安全農村」で暮らした 4 人の事例を紹介する。

1936 年に同じ汽車で渡満し、「綏化安全農村」に入った洪福南さんと権弼蘭さんは、「安全農村」の状況について証言した。

最初の頃、同じ長屋に慶尚道から移住してきた 8 家族と一緒に住んだ。その長屋は元々中国人農民の家だったが、日本人が中国人農民を追い出して朝鮮人移民を入れた。村に入った頃、その長屋の居間は馬糞だらけで井戸のなかにも馬糞が入れられていた。中国人農民は自分たちが追い出されたことを、怨んでそのようなことをしたのではないかと思う。井戸が使えなかったので、仕方がなく雪を溶かして飲んだ。(洪福南さん)



写真 3-5 インタビューに応じる洪福南さん。
筆者撮影。

日本人は中国人農民を追い出して私たち朝鮮人を入れた。中国人農民からの襲撃を防ぐため、私たちが入った部落の周辺は塀に囲まれていた。井戸に中国人農民によって馬糞が入れられた。中国人農民は追い出されたことに怨みを持っただろう。バケツで井戸の水を汲んでも、汚い水が出るばかりだった。仕方がなく雪を溶かしてご飯を

炊いて食べた。井戸の水が使えなかったため、暫くの間は洗濯すらできなかった。農作業をして秋になって脱穀が済んだら、米は「日本の奴ら」が全部持って行った。藁に稲を残さずに脱穀するように命じられたが、私の家ではわざと藁に稲を残して、藁のなかの稲を拾って食べるようにした。しかし、藁まで没収される時もあった。（権弼蘭さん）

権弼蘭さんと洪福南さんが証言したように、「安全農村」を建設するのに元々その土地に住む中国人農民を追い出して朝鮮人移民を入れたため、中国人農民の反感を買って井戸や居間に馬糞を入れて抵抗を示した。また、「安全農村」のなかでは朝鮮人同士を相互監視させる連帯責任制をとっていた。1934年に家族とともに「営口安全農村」に入った李圭善さんが次のように証言した。

農作業をしても、脱穀後、米はすべて徴集された。小さい時、脱穀前の自分の家でできた稲を盗んで食べたことがあった。臼が没収されてしまったので、稲を瓶に入れて棒で搗いて食べた。何度も稲を盗んだ。両親は「自分家の水田なのに、働いても米が食べられない。このままでは子供たちが悪いことを覚える」といって、「安全農村」から脱出する計画を立てた。（中略）「安全農村」では人々を相互監視させる連帯責任制をとっていた。そのため、1936年のある夜、他の村民に知られないように夕食後、食器をそのままにして密かに脱出した。

「安全農村」は建設当初から正当性を欠いていた。「安全農村」のなかでは徹底的に米の収奪を行い、相互監視を強めた。また、そこに暮らしていた朝鮮人青年たちは徴兵に駆り出された。戦時中、「鉄嶺安全農村」で暮らした田辛秀さんに話を伺った。

18歳になった1945年に海城で軍事訓練を数ヵ月間受けた。同じ「鉄嶺安全農村」からも多くの朝鮮人青年たちが選ばれて行った。実際赤紙がきて、戦場に駆り出された人もいた。日本の敗戦が近くになった時、日本の統治がもっと厳しくなった。「安全農村」に住む何人かの朝鮮人はラジオを持っていたが没収された。外からの情報を遮断するためだ。「安全農村」から逃げる人たちがいた。

以上の数人の証言が示したように、「散居村」にしろ、「集団部落」にしろ、「安全農村」にしろ、朝鮮人移民は日本の植民地統治から逃れることはできなかった。また一方では、朝鮮人移民は日本の植民地統治の抑圧を受けながら、中国人農民を追い出してからの土地で暮らしたため、他の民族を抑圧する役割を果たしてしまった。

2-3 学校教育に着目してみる「五族協和」の理念と現実との乖離

学校教育に着目したのは、駒込武の『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）に触発されたからである。駒込は文献資料を用いて植民地帝国日本が台湾、朝鮮、「満州国」における教育・言語政策と宗教・思想統制の実態を明らかにした。2-3では5人の移民体験者の証言を紹介し、学校教育を媒介とした朝鮮人への文化統合に着目し、「五族協和」の理念と現実との乖離について考察する。戦前、北満の巨源に移住したYYさんに学校の状況

について話を伺った。

朝鮮で4年間小学校に通った。移民してからは巨源で国民優等学校に通った。同じクラスには日本人生徒が2人いたが、ほとんど交流はなかった。当時、学校では日本語を喋らなければならなかった。朝鮮語を喋ったら罰せられた。1945年の敗戦時には民族言語がほとんどできなくなり、半ば日本人になってしまった。(中略)名前を伊藤英子に変えられた。しかし、名前を変えられても、日本語の使用を強要されても、心のなかでは一度も日本人だと思ったことはなかった。

YYさんは名前を変えられても、日本語の使用を強要されても、一度も日本人だと思わなかったと述べて日本の植民地統治に抵抗感を示した。インタビューの途中でYYさんは1930年代に流行った日本の軍歌を紹介してくれた。当時、「満州」ではみんながよく歌っていた。歌の大意は日本人が「満州」に渡って故郷を偲ぶ内容だったという。その話を受けて同じ人間である朝鮮人移民も故郷を偲ぶのは当然ではないかと、筆者に質問を投げかけてきた。YYさんと同じ巨源に移住したGXさんにも話を伺った。

私は巨源で小学校に通った。学校では朝鮮語を話すのが禁止されていた。学校で朝鮮語を話したら罰金か、トイレ掃除をすることになっていた。私はよく無意識のうちについて朝鮮語を話した。家は貧しくてお金がなかったために、数えられないほどトイレ掃除をさせられた。

学校で朝鮮語の使用が禁止されたことは、他の多くの事例からも聞いた。1935年に家族とともに「満州」に渡り、中学校はハルビンの大道館国民高等学校に通っていた姜哲さんは次のように証言した。

校長先生は鹿児島からきた今村貞治という人だった。民族別の生徒の割合は、朝鮮人が約8割で日本人が約2割だった。各クラスに1人か2人の中国人がいた。先生も何人かの中国人がいた以外は、ほとんどが日本人だった。大道館は社会的に地位が高かった。大道館の生徒は日本人と同じ米の配給をもらった。学校では朝鮮語の使用は一切禁止され、講義はすべて日本語で行われていた。私の名前は山本秀雄に変えられた。民族の言語の使用が禁止され、名前まで変えられたことは受け入れ難かった。

植民地統治時代、朝鮮人は朝鮮語の使用が禁止され、名前を日本式に変えられたほか、神社の参拝も強要された。特に学校ではその統制が厳しかった。本文で何度も登場した楊龍錫さんは次のように証言した。

小学校は亜布力の新興国民優級学校に通った。朝鮮の簡易学校に3年間通ったので、亜布力では3年生から編入して6年生まで通った。5年生までは朝鮮総督府が編集した教材を使用して朝鮮語を習った。1941年以降は朝鮮語の使用が一切禁止され、日本語のみ使用することになった。小学校を卒業した後、ハルビン市にある第二師道学校に進学した。校長先生の名前は中山といい、鹿児島出身だった。

師道学校でも日本語を話すのが義務付けられていた。日本語を話さなければ罰せられた。寮に泊まり、毎朝ハルビン神社まで走らされ、神社参拝をしなければならなかった。当時、日本人は朝鮮人を「半島人」だと呼んでいた。もし、日本の支配がもっと長かったならば、朝鮮人は日本人に完全に同化してしまったかもしれない。

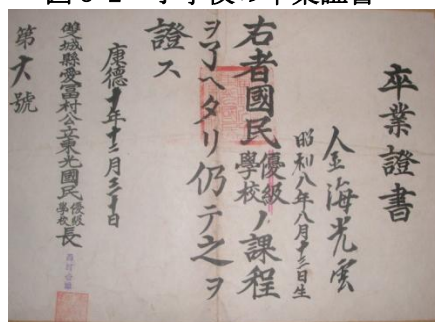
私の名前は清本龍錫と変えられた。最後まで抵抗して名前を変えなかった人もいたが、ほとんどの人は仕方がなく名前を変えた。日本式の名前に変えなければ、日常生活で米の配給や汽車の切符購入時に制限があった。米や砂糖などの配給を受ける際、身分証明書の提示を求められた。氏を自分で選択することはできた。私の家は「清州楊氏」なのでそこから「清」の字を取り、本貫¹⁰¹を忘れないように「本」の字を入れて「清本」にした。名前まで変えられたことを簡単に赦すことはできない。

楊龍錫さんの証言から分かるように、小学校に通った時から朝鮮語の使用は禁止され、中学校に通った際には毎日のようにハルビン神社まで走って参拝させられた。朝鮮民族の名前を日本式の名前に変えられた際、楊龍錫さん一家は本貫を忘れないようにし、日本の植民地統治に抵抗を示した。アイデンティティの表象である名前を変えられるのは苦痛であるに違いない。民族の名前を変えられた証拠は「文化大革命」時期にほとんど焼却したため、ほとんどの事例は持っていなかった。幸いにその証拠を持つ金宗雲さんに出会った。金宗雲さんは1943年に「満州国」で教員をしていた叔父に連れられて「満州」に渡った。

私の家の本貫は金海なので、名前を金海に変えた。名前を変えなかった人もいたが、名前を変えなければ、食糧や日常生活用品の配給がしてもらえなかった。

インタビュー終了後、金宗雲さんは小学校の卒業証書を見せてくれた。1943年に発行した卒業証書には創氏改名された「金海光雲」と書いてあった。

図 3-2 小学校の卒業証書



金宗雲さん提供。

2-4 在満朝鮮人の視点で見た各民族の姿

2-4 では在満朝鮮人の視点から見た朝鮮人、日本人、中国人、ロシア人の姿を紹介する。ここでは7人の事例を通して在満朝鮮人の視点で見た各民族の姿を追う。「集団移民」として「安全農村」に移住した権弼蘭さんは次のように証言した。

¹⁰¹ 氏族発祥の地名を指し、姓氏と組み合わせて表記される。

秋になって脱穀したら「日本の奴ら」だけではなく、「日本の奴ら」の下で働く朝鮮人の手先たちも一緒にやってきた。解放後、その人たちはみんな朝鮮に逃げた。もし、中国に残っていたら、きっと殴られて殺されただろう。

権弼蘭さんは日本の植民地統治に加担した朝鮮人がいたことを証言した。その歴史的事実についても 1 人の事例が証言した。1941 年に「集団移民」としてソ満国境の柏根里に移住した朴圭善さんは次のように証言した。

〔移住地に近づいたら〕汽車のなかからたくさんの麻袋が見えた。麻袋の間に所々日本の国旗が挿されていた。その時、穀物がたくさんあってお腹いっぱいご飯が食べられると思った。しかし、汽車を降りて見たらその麻袋は人の群れだった。私たちより 1、2 年先に移住した朝鮮人移民が私たちを迎えにきた。彼らは着るものも履くものも全部麻袋だった。これは誰が聞いても嘘だと思うかもしれない。朝鮮から持ってきた服は全部破れて仕方がなく麻袋を着たようだ。その人たちは私たちに「あなたたちは苦勞しにきた」といった。その一言は〔移民が〕何を意味しているのかをいった。(中略) 柏根里開拓団には洪隊長という朝鮮人がいた。彼は団長の下で朝鮮人移民を厳しく管理していた。ある朝鮮人が開拓団から脱出しようとしたが捕まえてしまい、洪隊長に気絶するほど殴られた。

「満州」に渡った 1 年後、朴圭善さん一家は柏根里開拓団から脱出して珠河県に逃げた。朴圭善さんは朝鮮と「満州」で共同体内部の被害を体験した。「満州国」では民族ごとに住み分けて居住する場合が多かったようだが、各民族が混住する地域もあった。その体験を 1 人の移民体験者の N Z さんに聞いてみた。N Z さんは 1939 年に両親とともに「満州」に渡り、阿城県亜溝の三姓屯に入った。

三姓屯には日本人が 2 戸と朝鮮人が 4 戸住んでいた。それ以外はすべて中国人だった。三姓屯に住むその 2 戸の日本人は正反対だった。そのうちの 1 戸は裕福な家で、苦力を 3 人雇っていた。苦力たちはほとんどが関里(山海関以西または嘉峪関以東の地域)からきた人たちだった。その裕福な家の日本人は人使いが乱暴だった。それで、村人たちはこの家の家主のあだなを「悪い奴」と名づけた。朝鮮語でいったので、相手は分からなかった。「悪い奴」は苦力たちをよく殴ったり、罵ったりした。苦力たちは殴られても黙っていた。もう一戸の日本人の家族は心優しくかった。その家族には、私と同じ歳のまっちゃんという男の子がいた。まっちゃんと一緒によく遊んだ。まっちゃんには他の日本人の友達がいなかったの、よく私の家に遊びにきた。私もまっちゃんの家によく遊びに行った。

筆者のインタビュー調査に基づけば、「満州国」では日本人が他の民族と雑居する場合は少なかった。N Z さんのように同じ村で日本人、朝鮮人、中国人が雑居する場合は珍しい。N Z さんが証言したように、村では日本人が優位性を保っており、「悪い奴」は頻繁に苦力たちに暴力を振るった。N Z さんの目には中国人に暴力を振るう日本人、そして圧迫を受

けていた中国人の姿が映された。厳しい状況に置かれている中国人を見た事例は他にもいた。1937 年に「集団移民」としてソ満国境の八面通に移住した金仁徳さんは、小さい時に移住先で見たことを次のように証言した。

苦力たちは裸で鉄道を建設していた。パンツを汚さないように、傍らにおいて裸で働いていた。

苦力たちが裸で働いているのを見たという証言は、李圭善さんからも聞いた。李圭善さんは 1934 年に「営口安全農村」に移住して、その後「営口安全農村」から脱出して現在内モンゴル地域の前国旗でも同じような様子を見たという。かつて「満州国」には複数の民族が暮らしていた。そのなかにロシア人もいた。本研究でよく登場する楊龍錫さんはハルビンに暮らすロシアからきたユダヤ人と交流した体験を持つ。楊龍錫さんはハルビン第二師道学校に通っていた時、学校の近所にあるユダヤ人教会学校に遊びに行ったという。

私は学校のなかに入ってユダヤ人の子供たちと話したり、歌ったりした。〔筆者：何語で話しましたか。〕日本語で話した。彼らはロシアからきていた。ユダヤ人はお金持ちが多かった。〔筆者：当時、ロシア人は四等国民であったようですが〕四等国民だといわれたけれども、彼らは日本人を相手にしなかった。確かに権力は日本人が握っていた。ユダヤ人はお金を持っていた。彼らはお金を湯水のように使っていた。私たち朝鮮人の問題はお金がないことだ。私のように農村からきた者は特に貧しかった。

楊龍錫さんの証言に基づけば、2-1 で徐丙鐘さんが証言したロシア人が四等国民であったこと、「満州国」では民族間に序列がつけられた事実を検証できた。



写真 3-6 旧ユダヤ人学校。
筆者撮影。



写真 3-7 学校紹介の案内板。
筆者撮影。

第 3 節：考察

塚瀬進はその著書『満洲国「民族協和」の実像』のなかで、朝鮮人は国境を境として、一方では「皇民化」が強要され、他方では「国民化」が求められるという複雑な政治状況下に置かれていた。また社会的にも、心ない日本人からは亡国者と馬鹿にされ、漢人からは「二鬼子」（日本鬼子の手先という意味）と陰口をたたかれる難しい立場にあったと述べ、戦時中の朝鮮人の置かれていた状況を説明している（p. 104）。日本は朝鮮半島を併合した

後、植民地朝鮮で数々の植民地政策を実施したため、朝鮮人は国外に移住せざるを得なかった。朝鮮人移民は移住地の「満州」においても、定着時にはさまざまな問題にぶつかった。最後に文献資料のほか、移民体験者たちのインタビュー調査結果に基づき、「五族協和」の破綻の要因を以下の6点にまとめることができると考える。

3-1 植民地統治に加担した在満朝鮮人の存在

「満州国」では日本人が頂点とする統治体制になっており、主に日本人が他の民族を支配した。朝鮮では朝鮮人は日本人からの一方的な支配を受けたが、「満州国」では朝鮮人は二等国民の身分が付与された。これは朝鮮人の地位が上昇したのではなく、中国人に三等国民の身分を押しつけたことによって、あたかも朝鮮人の地位が上昇したように見せかけた。朝鮮人は朝鮮においても、「満州」においても日本帝国主義の統治を受けた。しかし、二等国民という与えられた身分を受容し、日本の植民地統治に加担する在満朝鮮人もいた。

2-4 で権弼蘭さんが証言した米の収奪に加わった在満朝鮮人は、日本の植民地統治に加担した。いわば、丸山真男が指摘した「抑圧の移譲」¹⁰²だったといえよう。一部の在満朝鮮人は日本人からの抑圧を受けながら、自分たちより弱い立場の者を抑圧し、「被害者」から「加害者」に転じた。「満州」に渡った朝鮮人は被害と加害の複雑な立場におかれていた。この事実について今まで公の場ではほとんど語られてこなかった¹⁰³。これまでの研究では在満朝鮮人が二等国民であった論考はあるが、「満州国」時代を体験した当事者たちの証言に基づく研究は少ない。特に移民体験者の証言に基づく研究はほとんど見られない。在満朝鮮人が「加害者」と「被害者」という二重の立場におかれていたことは、植民地問題を考えるうえで重要であると考ええる。

3-2 つけられた民族間の序列

「五族協和」を掲げたにもかかわらず、「満州国」には日本人を頂点とした民族集団間のヒエラルヒーがあって、各民族は平等ではなく差別が日常的に存在していた。金鐘洙さんが証言したように、行政組織の重要なポストには日本人官吏が就いた。「満州国」では民族間に序列化をつけた。日本人が一等国民、朝鮮人が二等国民、中国人が三等国民、ロシア人が四等国民だった。複数の移民体験者の証言があったように、民族によって食糧の配給が違っていた。2-3 で見てきたように、姜哲さんが通っていた大道館国民高等学校の朝鮮人は日本人と同じ米の配給をもらった。ただし、この姜哲さんの例外は、逆に「五族協和」の虚偽性を浮き彫りにしたといえよう。また、蒋汝柱さんが証言したように、電車に乗る際に民族によって処遇が違っていた。そして、洪吉俊さんが証言したように、工場でも給料は民族によって違っていた。洪吉俊さんの証言を裏付けるために1つの文献資料を紹介する。以下の表3-3は吉林省における民族別による賃金差の一覧表である。

¹⁰² 丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1971年、p. 25。

¹⁰³ 在満朝鮮人のなかに中国人を差別した者がいたことは、朝鮮族コミュニティのなかではしばしば聞かれ

表 3-3 民族別賃金差一覧表（1934 年 7 月 30 日現在 単位：円）

種目	大工	石工	木挽	左官	鍛冶	人夫
朝鮮人	1.40	1.80	1.40	3.00	1.80	0.70
日本人	4.00	4.00	4.00	4.00	—	1.20
満人	1.50	1.50	1.00	1.70	1.60	0.60

出所：満鉄資料課『満鉄調査月報』（第 15 巻 2 号、1935 年、p. 193）¹⁰⁴。

表 3-3 で示しているように、日本人、朝鮮人、中国人には賃金格差があった。日本人は中国人の給料より 2 倍以上高い。朝鮮人は日本人より賃金が低い、中国人より賃金が高い。朝鮮人「満州」移民の多くが農業移民であったため、工場で働いた体験を持つ事例は少ない。その意味で洪吉俊さんの証言は貴重である。以上の移民体験者たちの証言は文献資料でも指摘した民族間に序列があり、処遇が違っていたことを実証できた。移民体験者たちは民族間に序列をつけたという事実に対して証言したうえ、意味づけも行った。本研究ではライフヒストリー法を用いてその事実を実証しただけではなく、移民体験者たちがその事実に対して批判的な態度をとっていたことも確認できた。

3-3 日常的に行なわれていた民族差別

「満州国」では中国人の地位が低く、日頃差別されていた。この「歴史的事実」を裏付けるため、「満州国」で少年時代を過ごしたある日本人の証言を紹介する。

私たちの住んでいた鉄道附属地の行政は、建国後も 1937 年まで治外法権をみとめさせる形で「満洲国」政府の手に渡さず、日本の特権を維持していました。ですから私自身の体験でも、家のすぐ前に警察官派出所があったので、日本側警察官の中国人にたいする非人道的行為を何度も見えています。うしろ手に縛られたまま悲鳴をあげながら路上をオートバイでひきずられる場面、水道ホースを口につっこまれて水責めの拷問を加えるなど、私たち子どもの見ている前で平然と残虐行為が行われました¹⁰⁵。

以上は 1926 年に生まれた野村章さんの証言である。野村章さんは「満州国」で過ごしたある日、日本人警察官が中国人に対して残虐行為を行う場面を目撃した。「満州国」には「五族協和」というスローガンの下で、いろいろな言語や民族があった。しかし、「五族協和」を享受するはずの朝鮮語の使用は禁止されていた。GX さんが証言したように、朝鮮語を話したらトイレ掃除、罰金を取られたりした。また、「創氏改名」という政策で朝鮮民族の名前を変えて朝鮮民族の民族性を抹消しようとした。朝鮮人の民族性を剥ぎ取ろうとした政策に関する研究は、主に植民地朝鮮の状況に着目して行われてきた。本研究では複数の移民体験者の証言に基づき、「満州国」においても朝鮮人の民族性を剥ぎ取ろうとした政策がとられたことを実証できた。

る。しかし、インタビューではこの話題について語りたがらない人も少なくない。

¹⁰⁴ 表の書式は、尹輝鐸『『満洲国』の『2等国（公）民』—その実像と虚像—』（『歴史学報』第169号、2001年、p. 142）を参考した。

¹⁰⁵ 野村章『植民地そだちの少国民』岩波ブックレット No. 186、1991 年、p. 15。

3-4 各民族間に交流がなく、住み分けて生活していた過去の現実

「満州国」には多くの民族が住んでいたが、インタビュー調査を通して分かったのは、日本人は朝鮮人および他の民族とほとんど交わり合うことなく、住み分けて生活していた。NZさんは幼い頃日本人移民の子供と交流した。しかし、筆者が行った約 100 人の移民体験者へのインタビュー調査に基づけば、日本人は他の民族との交流は少なかった。2-2 で見てきたように、楊龍錫さんと全孟徳さんは朝鮮半島から「集団移民」として「集団部落」に移住した。権弼蘭さんは朝鮮半島から「集団移民」として「安全農村」に移住した。李太福さんは「散居村」から「集団部落」に移住した。朝鮮人を「集団部落」と「安全農村」に入れさせたのは、「抗日連軍」との接触を断っただけではなく、朝鮮人と日本人、そして朝鮮人と中国人との交流の機会も断ち切った。そして、「散居村」に目を転じれば、PSさんが証言したように日本人は鉄道沿線のいい場所に住んでおり、他の民族と住み分けて住んでいた。日常生活だけではなく、学校においても日本人と他の民族との共学は少なかった。「五族協和」で掲げるどの民族も平等に教育を受けることは実質的になく、ほとんどの日本人は満鉄が管轄する日本人学校に通っていた。姜哲さんが通っていた大道館国民高等学校のように日本人、朝鮮人、中国人が共学した学校は稀だった。2-3 でNZさんが証言したように、学校に行けるのは日本人と一部の朝鮮人に限られていた。

3-5 日本帝国主義がとった朝鮮人と中国人との民族分断政策

満州国成立以前においては、在満朝鮮人の移動は、失敗した日本人移民の代行するものとして、放任ないし「保護」され、日本帝国主義の満州侵略の楯杆（梃子-引用者注）として利用されたのであるが、その基本方針は満州国成立以降も貫かれた（松村、1972:p. 226）。つまり、日本帝国主義が朝鮮人と中国人との民族分断政策をとったのは、「満州国」が成立してから始まったのではない。「満州国」が成立する以前からすでに民族分断政策をとっていた。その象徴的な出来事が「万宝山事件」¹⁰⁶である。

表 3-1 と表 3-2 を見て分かるように、「満州国」で日本人は人数的に少数であった。多くの民族が居住していた「満州国」で日本人の優位性を保つため、日本帝国主義はさまざまな面で民族分断政策をとった。塚瀬によれば、「それ（「五族協和」-塚瀬注）は対漢人、対モンゴル人といった方向で行われており、漢人と朝鮮人の協和をどのように進めるのかという方向性は存在しなかった（塚瀬、1998 : p. 116）」という。蒋汶柱さんが証言したように、電車に乗る際の朝鮮人と中国人の対応が違っていた。また、朝鮮人と中国人が喧嘩して警察に捕まえられた場合でも、朝鮮人と中国人への対応が違った。「満州国」では日本人は朝鮮人の肩を持ち、中国人を抑えた。それにより異民族間の関係が疎遠になった。そして、複数の移民体験者が証言したように、日本人は元々現地に暮らしていた中国人を追い出して朝鮮人を移住した。

今までの研究でも、民族分断政策をとったことの指摘があった。しかし、今までの研究では文献資料に基づくマクロ視点での論考、また日本人や中国人の視点での論考が多く、

¹⁰⁶ 万宝山事件とは、1931 年 7 月に長春近郊の万宝山で中国人地主から借りた朝鮮人農民と現地中国人農民との水路に関する小競り合いをきっかけに、出動した中国人警察とそれに対抗して動いた日本の領事館警察と中国人農民が衝突した事件である。事件自体は死者なく収まったが、事件の詳細が誤って伝えられると、朝鮮各地に住む華僑への襲撃事件が多数発生した。

在満朝鮮人の視点での論考が少ない。本章ではライフヒストリー法に用いて移民体験者たちの証言に基づき、民族分断政策を実施した事実を確認し、民族分断政策がどんな弊害をもたらしたことを確認することもできた。権弼蘭さんと洪福南さんが証言したように、移住地では中国人に井戸に馬糞を入れられた。敗戦直後、許福貴さん一家は避難するために山に隠れたり、逃げ回ったりしていた。民族分断政策により、在満朝鮮人は中国人を敵に回した。

3-6 「五族協和」という美名下での対外侵略政策

「満州事変」以降、日本国内では軍部の独走から始まった大陸侵略が遂行された。朝鮮総督府はそれまでの「文化政治」¹⁰⁷をやめて兵站基地化を推し進めた。「満州国」では関東軍の発言力が強くなった。ドイツ現代社会史と労働史を専門とする経済学者の矢野久は次のように述べている。

関東軍が1929年頃から満蒙領有計画の準備にとりかかっていた。この計画の指導理念は「王道楽土」「五族協和」のイデオロギーであったが、目的は総力戦準備にあった。

「満州国」成立後には関東軍は日本の実質的支配権を確立し、「満州国」を日本の総力戦準備の一環に組み込んだ¹⁰⁸。

矢野がいうように「五族協和」はイデオロギーであり、目的は総力戦準備にあった。2-1で見てきたように、徐丙鐘さんが入った阿城県双峰では、日本人開拓団が中国人農民を追い出した。2-2で見てきたように、P Sさんが住んでいた地域では、日本人移民が朝鮮人移民を追い出し、朝鮮人移民は中国人農民を追い出した構図になっていた。また、権弼蘭さんや洪福南さんなどの複数の移民体験者が証言したように、多くの地域では日本人が中国人農民を追い出して朝鮮人移民を入れた¹⁰⁹。「満州国」が成立した後、国策移民の時期においては、日本人移民と朝鮮人移民は「開拓移民」とも呼ばれた。ここでは「開拓」という言葉に注目する。日本人移民と朝鮮人移民が移住した地域は、無人の地とは限らなかった。特に「集団移民」の場合は既耕地に入植する場合も少なくなかった。「満州国」の官憲は中国人農民が元々持っていた既耕地を関東軍の後ろ盾を得て収奪した後、日本人移民や朝鮮人移民を移住させた¹¹⁰。「五族協和」は美名の下での対外侵略政策でもあった。

¹⁰⁷ 三・一独立運動後の1919年8月、第3代朝鮮総督に就任した斎藤実が表明した植民地支配政策である。併合以来の「武断政治」が朝鮮民族の抵抗によって行き詰まると、総督府は民族運動の分断・弱体化し植民地支配を維持するため、〈文化の発達、民力の充実〉を掲げて危機打開を図った。「文化政治」の基本方針は当時の首相原敬の考えによるもので、究極の目標は同化に置かれていた（伊藤他監修、2000：p. 380）。

¹⁰⁸ 矢野久「日本の植民地労働者の強制労働―日独の比較社会史の観点から―」『三田学会雑誌』第100巻第4号、2008年、p. 119。

¹⁰⁹ 「河東安全農村」で小学校の校長を務めた宋ジェウォンさんによれば、「河東村には元々、山東省や河北省からの中国人の農民が入って畑を耕していた。しかし、1930年代から東亜勸業会社が強制的にこの地を接収し、水田に転換させる開拓農場を作った。元々ここに住んでいた中国人農民は水田農業をしたことがないので、周りの山間に追いやられ、その代わりに朝鮮人農民を入居させて、螞蟥河の豊富な水を利用して水田を作った。こうした経緯から附近を中国人農民は朝鮮人農民を敵対視するようになった（中国朝鮮族青年学会編『聞き書き中国朝鮮族生活誌』社会評論社、1998年、p. 222）」という。

¹¹⁰ 日本人「満州」移民における中国人農民の土地の収奪状況については、劉含発「満洲移民の入植による現地中国農民の強制移住」『現代社会文化研究』（第21号、2001年）が詳しい。

以上で移民体験者たちの証言に基づき、朝鮮人移民の「満州」での定着時の問題点を探り、「五族協和」の破綻の要因を6点にまとめた。いうまでもなく、また別な要因もあると考えられる。「五族協和」が達成できなかった理由として、塚瀬は「日本人が日本的発想から抜け出すことができなかった点が挙げられる。他民族を日本人とは異なる他者として、日本的価値観から離れて認識していた日本人はごくわずかであった。民族の多様性を統合した結果、新たな誕生する王道楽土は、実は各民族の多様性が認められていなく、基本的には日本社会と同質なものと考えられていた。また、制度面でも民族協和を促す試みは行われていなかった。教育・兵役・裁判などでは、日本人と日本人以外の民族は別扱いされる部分が多く、民族協和と相容れない方向性がとられていた（塚瀬、1998：p. 137）」と述べている。「満州国」はその建国宣言において「王道楽土」、「五族協和」といった理念を掲げていたが、事実上関東軍が「満州国」運営の主導権を握っていた。「満州国」では「五族協和」どころか、民族間の反目、離間をはかることを統治手段とした。小熊英二の言を借りれば、「五族協和」というスローガンには、「人びとのあいだに境界を引き、『日本人』と『非日本人』に区分する暴力」が含まれていた¹¹¹。いわば、「満州国」では各民族の協和でなく日本人の一族支配であった。複数の移民体験者が証言したように、「満州国」では民族間にランクをつけ、食糧の配給も民族によって違っていた。食は人々の日常生活に欠かせないものであるが、「満州国」では日常的に民族的差別が存在していた。

山室信一はその著書『増補版 キメラ——満洲国の肖像』のなかで、真の民族協和とは、異質の民族や文化が、混在しながら衝突や摩擦を引き起こし、そのぶつかり合いが発するスパークスを活力源として新たな社会編成や文化を形成していくことによってもたらされるはずのものであらうと述べ、理想と現実の余りの違いを鋭く指摘している（p. 284）。協和を重んずるのであれば、最初から他の民族の土地を奪って「開拓」と誤魔化すはずがない。協和を重んずるのであれば、他の民族の言語と名前を奪うはずがない。仮に1945年の日本の敗戦によって「満州国」が崩壊せず存続したとしても、「五族協和」は実現できなかったに違いない。

おわりに

本章では移民体験者たちの証言に基づいて「五族協和」の破綻の要因を追及し、朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点を探った。本章ではライフヒストリー法を用いてミクロな視点で、「五族協和」の理念と現実の乖離を追及した。今までの先行研究では、食糧の配給が民族によって違っていた指摘はあった。本研究は多くの移民体験者の証言でその事実を検証できた。ただし、今までの研究では日常生活のほかの側面についてほとんど注目しなかった。本章では民族によって乗り物に乗る際の処遇の違い、給料の面での待遇の違いがあった事実も確認できた。

また、本章では分析枠組みとして「住」に着目して、「五族協和」の理念と現実の乖離を追及した。本章では「住」をさらに「散居村」、「集団部落」、「安全農村」に分けて具体的に考察した。今までの研究では、「集団部落」については、主に「抗日連軍」との接触を遮断する役割について論じてきた。「安全農村」については、文献資料に基づいてマクロな視点で「安全農村」の社会的および経済的な状況について分析・考察した。今までの研究で

¹¹¹ 小熊英二『＜日本人＞の境界』新曜社、1998年、p. 639。

は、ミクロな視点で「集団部落」や「安全農村」のなかに暮らしていた当事者に着目した論考はほとんど見られない。本研究では当事者の証言に焦点を当てて、ミクロな視点で「散居村」、「集団部落」、「安全農村」について考察した。洪福南さんと権弼蘭さんが証言した日本人が中国人農民を追い出して朝鮮人を入れたため、中国人農民からの怨みを買ひ、井戸に馬糞が入れられた事実は、インタビューでなければ聞き取れなかっただろう。そして、学校教育に着目して「五族協和」の理念と現実の乖離を追及した。複数の移民体験者の証言があったように、「五族協和」を享受するはずの朝鮮語はその対象から外されて、学校では朝鮮語の使用が禁止されて日本語の使用が強制された。朝鮮語の使用を禁止する手段は、罰金か、トイレ掃除か、除籍など剥き出しの暴力的支配が伴った。また、学校にも「創氏改名」の制度が浸透し、朝鮮人の名前を日本式の名前に変えた。これまでの研究では、文献資料によるマクロな視点で学校教育における文化統合の実態を概観した。ライフヒストリー法を用いることによって、先行研究で指摘した文化統合の実態が確認できたのみならず、文化統合を受けた人々の「抵抗の語り」も聞き取ることができた。朝鮮人は植民地朝鮮で日本の植民地統治を受けたが、「満州」に移住した後もさまざまな問題にぶつかった。そして、朝鮮人移民は自分たちの意志とは関係なく、日本帝国主義が推し進めていた国家総力戦に巻き込まれていった。次の章では移民体験者たちがいかに戦争を記憶しているのかを考察する。

第4章 移民体験者たちの戦争の記憶のかたち

はじめに

本章では移民体験者たちの戦争体験に着目し、戦争の記憶のかたちについて考察する。本研究では広範囲の戦争問題には立ち入らないで、扱う範囲を1931年の「満州事変」から1945年の日本の敗戦までの「十五年戦争」に限定する。本章は4節構成になっている。第1節では基本概念としての記憶について説明する。第2節では戦争の記憶を取り上げる意義を説明し、フィールドワークの体験に基づいて戦争の記憶を聞くことの難しさについて触れる。第3節では移民体験者たちのさまざまな戦争の記憶にアクセスする。第4節では戦争の記憶が問いかけるものについて考察する。

管見するかぎり、朝鮮人「満州」移民の戦争の記憶を取り上げた研究は少ない。今までの研究は主に在満朝鮮人の抗日運動に重点を置いたり、少数の特殊な人物を取り上げたりしており、「満州」に暮らしていた一般の朝鮮人移民に着目した戦争の記憶に関する体系的な研究はほとんど行われてこなかった¹¹²。

第1節：基本概念の整理

現在、記憶の概念が人文社会科学で重要視されているのは、フランスの歴史学者であるピエール・ノラが率いるプロジェクト『記憶の場』の役割が大きいと考えられる。ノラによれば、「『記憶の場』とは、物質的なものであれ、非物質的なものであれ、きわめて重要な含意を帯びた実在である。それは人間の意志もしくは時間の作用によって、なんらかの社会的共同体のメモリアルな遺産を象徴する要素となったものである」という¹¹³。

本章で主眼としているのは、現在において移民体験者たちがいかに生きられた現実を解釈し、記憶していることにあるため、ノラの「記憶の場」の概念は参考になる。果たして記憶とはなにか。ノラは記憶にお互いに異なる2つの種類があることを、明確に意識する必要があると指摘している。

一つは、真の記憶であり、今日では動作や習慣のなかに、言葉によって伝えられない技のなかに、身体の知のなかに、刷り込まれた記憶のなかに、そして本能的な知識のなかに潜んでいる。もう一つは、みずからの対極に近い存在である歴史を通過することによって変容した記憶である。それは、任意の、熟慮された記憶、自発的ではなくひとつの義務として生きられる記憶、もはや社会的、集团的、包括的ではなく、心理的、個別的、主観的な記憶である。(中略) 第二の記憶は、第一の記憶とは異なり、記録としての記憶である。その記憶は、もっとも明確な痕跡、もっとも物質的な遺跡、

¹¹² 戦争との関連性について、これまで在満朝鮮人の抗日運動に関する研究が主に行われてきた。先行研究としては、金静美の『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』（現代企画室、1992年）、和田春樹の『金日成と満州抗日戦争』（平凡社、1992年）、姜在彦の『満州の朝鮮人パルチザン——一九三〇年代の東満・南満を中心として』（青木書店、1993年）、水野直樹の「満洲抗日闘争の転換と金日成」（『思想』No. 912、岩波書店、2000年）などがある。金は日本帝国主義が支配した「満州」において朝鮮と中国の民衆がいかに抗日運動を展開したかを究明した。和田は金日成の「満州」での抗日運動について論じた。姜は一九三〇年代の東満・南満を中心とした在満朝鮮人の抗日運動を取り上げた。水野は「満州」での抗日運動の転換と金日成との関連性について考察した。

¹¹³ ノラ、ピエール編／谷川稔監訳『記憶の場』第1巻、岩波書店、2002年、pp. 18-19。

もっとも具体的な記録、もっとも明白なイメージに基づいている¹¹⁴。

歴史学者の笠原十九司はピエール・ノラの規定を平易な言葉に置き換えて次のように説明している。

第一の記憶は、医学や心理学などで研究対象としている心理学的な記憶であり、直接経験に基づく個体的な記憶である。この記憶は人間にかぎらず、脳を有する動物類にも程度の差はあるが備わっている。第二の記憶は、言葉や絵などを使って表象可能な記憶であり、文字や絵などを用いて記録でき、さまざまな表象行為、手段を使って他人や集団の記憶と溶解し、共有できる記憶である。それは経験しなかった人々の集合的な空間で歴史化され、その空間に宿るものである¹¹⁵。

本章で取り上げる戦争の記憶は、医学や心理学で議論する心理学的な記憶ではなく、戦前世代である移民体験者たちのさまざまな表象行為などを通して、戦後世代も共有できる記憶を指すので、第二の記憶に属しているといえよう。もう 1 人の歴史学者の小関隆は記憶を、「過去を認識しようとするあらゆる営み、そしてこの営みの結果得られた過去の認識のあり方である」¹¹⁶と定義したうえ、次のように述べている。

記憶とは、ほとんどあらゆる人々が過去に関して抱く知や思いのアンサンブルである。こうした記憶の営みは、いずれも表象行為である。すなわち、数知れぬ過去の出来事の中から、現在の想像力に基づいて特定の出来事を選択し呼び起こす行為、表象を媒介とした再構成の行為である。記憶とは過去の出来事の単なる貯蔵としてではなく、現在の状況に合わせて特定の出来事を想起し意味を与える行為として理解されねばならない。それゆえ、記憶はその担い手である現在に生きる人間、そしてその人間が所属するさまざまな集団のアイデンティティと本質的に絡み合っている（小関、1999:p. 7）。

上記 3 人の歴史学者の記憶についての定義をまとめると、記憶の営みは表象行為であるといえよう。本研究では移民体験者たちが数多い過去の移民体験および戦争体験から、インタビューした時点で戦後 60 年以上が過ぎた時期に、現在の想像力に基づいて過去の出来事をどのように表象しているかに注目する。

¹¹⁴ ノラ、ピエール著／長井伸仁訳「記憶と歴史のはざまに—記憶の場の研究に向けて—」『思想』No. 911、岩波書店、2000 年、p. 22。

¹¹⁵ 笠原十九司「総論—記憶の比較文化」都留文科大学比較文化学科編『記憶の比較文化論—戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』柏書房、2003 年、p. 10。

¹¹⁶ 小関隆「コメモレイションの文化史のために」阿部安成、小関隆、見市雅俊、光永雅明、森村敏己編『記憶のかたち—コメモレイションの文化史』柏書房、1999 年、p. 7。

第2節：なぜ戦争の記憶を論じるのか

近年、日本において戦争の記憶という問題が活発に論じられている¹¹⁷。その理由としては直接戦争を体験した世代の高齢化が急速に進み、戦争体験の風化が懸念されていることが考えられる。しかし、今までのほとんどの議論は主に日本国内の文脈で行われており、かつて日本が侵略したアジアの諸国における戦争の記憶の状況については、さほど関心が示されていないようだ。

2-1 戦争の記憶を取り上げる意味

東アジアでは今なお息苦しいほどの長い戦後が続いている。小熊英二はこのように戦後が長く続いていることに対して次のように述べている。

考えてみれば、かれこれ60年も「戦後」が続くというのは、奇妙なことだ。しかし、「戦後」を相対化するためには、「戦争が残したもの」と向きあい、「戦後」を理解するべく努めることしかないであろう。いまだに「戦後世代」でしかありえない私たちは、いまだに「戦後」でしかありえない時代を生きてゆくなかで、そうした努力を迫られざるをえない¹¹⁸。

「戦後」が続くかぎり、戦後世代としてその現実を直視しなければならないとの小熊の問いかけは、戦後70周年を迎えた今でも有効であるといえよう。戦前世代が戦争をどうとらえ、戦争をいかに記憶しているのかを推測するだけではいけない。今しかできない戦争体験をした当事者たちの声に耳を傾けなければならない。戦前世代が徐々にしかし確実に歴史の舞台から去ってゆくなかで、当事者たちの戦争体験を聞き取ることが緊急の課題である。筆者はフィールドの現場で多くの移民体験者から「私たちが亡くなったら、その時代の歴史は誰も分からなくなる」、「歴史が分からなければもっと悲惨なことが起きるのではないか」というような戦争体験の風化を懸念する声を多く聞いた。以下では2人の移民体験者の声を紹介する。

歴史はいつも生きている。かつて日本が朝鮮半島を植民地化し、中国を侵略した。その事実を認めなければならない。歴史を継承していかなければならないが、孫や若い世代はあまり歴史を知らない。戦争が起きれば、被害を受けるのは罪のない一般の民衆なので、戦争を二度と起こしてはいけない。(L Oさん、1938年渡満)

私が若い時に移民体験をした。私の童年時代を振り返ってみると、中国人でも、朝鮮人でも、日本人でも、同じ人間ではないか。当時、中国にきて私たちは苦勞した。日本が朝鮮を植民地化して、朝鮮で生活できないために仕方がなく私の家族が中国にきた。中国にきてから中国人に日本人の先兵だと罵られた。敗戦後になってみたら、日本人は私たちより可哀想だった。駅に行ってみたら、親に捨てられた日本人の子供

¹¹⁷ 例えば、NHKは「戦争証言アーカイブス」を作成しており、戦争を体験した世代の声や記録を掲載している。新風書房は『孫たちへの証言シリーズ』を出版している。そのほかに、北海道新聞社編の『戦禍の記憶―戦後60年百人の証言』（道新選書、2005年）など多数ある。

¹¹⁸ 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が残したもの』新曜社、2004年、p. 10。

たちが多かった。日本人の女性たちは、世のなかで女にとって尊い髪を切られて身売りされたりしていた。どの民族がどうであるかをいうことではない。同じ人間として残酷なことをしないことだ。お互いに理解しあうことだ。日本は他の国を侵略して、逃げる時は自分たちの子供まで捨ててしまう。私たちが死んだらその歴史は誰も知らなくなる。私たち 70 歳を過ぎた人たちも死んだら、その歴史を語る人は誰もいなくなる。その歴史を知らなかったら、今後もっと悲惨なことが起きる可能性があるのではないか。それで、私たちが生きている間に体験したことを話して、若い世代が参考して私たちと同じような体験をさせたくない。若い世代には私たちと同じような体験をしてほしくない。人によって日本に対していろいろな見方があると思う。百姓はみんな同じだ。お互いに理解しあうべきだ。今、過去の歴史を語っても、意味がないと思う人もいるかもしれない。私たちが過去のことを語るのも、若者たちがそれを聞いて、「私たちはそのように生きてはいけない」と気づき、団結して幸せに生きてほしい。(中略)それで、私たちが過去の歴史を語るのだ。過去の歴史をいう必要はないと思う人もいるかもしれない。過去を知ることができて、未来を読むことができる。私の家族が中国にきた時、汽車で鴨緑江を渡った際に母親は泣いた。母親は泣きながら「この川を渡ったら満州だ」といった。私はまだ幼かったので、何故母親が泣いたのかはよく分からなかった。今日、若い世代が関心を持って話を聞きにきたから、私がいろいろな話をした。歴史を研究しなければ、時間が過ぎたら全部忘れてしまい、誰も知らなくなる。(金蓮珠さん、1940 年渡満)

多くの移民体験者は L O さんと金蓮珠さんと同じく、若い世代が歴史を知らないがゆえに同じようなことが繰り返されるのではないかと懸念を示し、「戦争は二度と起こしてはいけない」という平和への切実なメッセージを発した。日本で「希望学」という新しい研究領域を推進している経済学者の玄田有史は、希望を語るために絶望の体験者の声に耳を傾ける必要があると唱えている。玄田はその著書『希望学』のなかで次のように述べている。

戦争や殺戮が多くの人々の生命を理不尽なかたちで奪ってきたという悲しい歴史を、私たちは持っています。太平洋戦争から半世紀以上を経て、今や戦争を体験していない世代が国民の大多数を占めています。そのために戦争がもたらす絶望についての想像力を、私たちはときに失いがちです。だからこそ、私たちは過去に起きてしまった絶望の体験者の声に耳を澄まし、そして歴史から謙虚に学ぶ姿勢を失ってはいけません。歴史を軽視した先には、再び絶望が待っているのだということを、私たちはつねに肝(きも)に銘(めい)じておくべきです。歴史を蔑(ないがし)ろにして、希望は決して語れません(p. 173)。

筆者は玄田の問題意識を共有したい。歴史を無視して希望は決して語れない。ただし、本研究は能天気な希望を語るわけではない。筆者は移民体験者たちにインタビューを行い、絶望の語りにも耳を傾けてきた。また、日中韓 3 国の多くの戦争の遺跡地にも訪ねてきた。フィールドに降り立つ度に痛感するのは、日本の植民地統治と侵略戦争による被害の深刻さである。今の東アジアにおけるさまざまな側面での摩擦や断絶はその過去の不幸な出来事が尾を引いており、今も引きずっている。

2-2 戦争体験を語ることの難しさ

この数年間、筆者は中国でのフィールドワークを続け、多くの移民体験者に会ってきた。フィールドワークを通して痛感するのは、聞き手の立場からは過去の体験を聞き取ることの難しさであるが、語り手の立場からは過去の体験を語ることの難しさである。以下では筆者が出会った戦争を体験した3人の朝鮮族の戦前世代を紹介する。

2007年3月20日、筆者は東寧県に行った際に養老院に入っている元朝鮮人「従軍慰安婦」の李鳳雲さんに会ってきた。



写真 4-1 筆者のインタビューを受ける李鳳雲さん。
朴通海さん撮影。

李鳳雲さんについては中国人と韓国人、そして日本人¹¹⁹がすでに紹介してきた。また、地元のエスニック新聞の『黒龍江新聞』でも李鳳雲さんのことを紹介した。筆者は養老院を訪ねる前から李鳳雲さんのことについてはある程度知っていた¹²⁰。当日、養老院に約30分滞在したが、その間、李鳳雲さんは長い沈黙が続き、インタビュー調査はほとんどできなかった。李鳳雲さんから聞き出したのは、「我只会哭（私は泣くしかできない）」、「腦子不好使了（頭が悪くなった）」などの断片的な言葉だけだった¹²¹。

筆者はまた、2008年8月17日、黒龍江省尚志市にある「河東安全農村」の跡地でフィールドワークを行った際、村で暮らしている姜任順さんにお話を聞く機会があった。



写真 4-2 姜任順さんと三男。
筆者撮影。

¹¹⁹ 倉橋綾子『憲兵だった父の残したもの一父娘二代、心の傷を見つめる旅』（高文研、2002年、pp. 157-158）を参照されたい。

¹²⁰ 当日、養老院まで案内してくれた東寧県文物管理所宋吉慶所長の話によると、李鳳雲さんは1922年に朝鮮半島の黄海道に生まれ、仕事を紹介してくれると騙されて軍隊の慰安施設に捕らわれた。

¹²¹ 宋吉慶さんの話によると、李鳳雲さんは戦後中国人男性と結婚したが、「慰安婦」の経歴が知られた後、家庭内暴力をよく振るわれた。李鳳雲さんはさまざまなトラウマを体験したためか、朝鮮語を忘れて中国語しか話せなくなった。

姜任順さんは1924年慶尚北道に生まれ、両親が先に「満州」に渡った後、1933年頃に抗日戦士だったお爺さんに連れられて「満州」に渡った。姜任順さんに戦争体験について聞くと、「長男は病気で死んだ」、「次男は『日本の奴ら』に銃で殺された」、「息子3人を生んで、2人が死んだ」というような断片的な語りが続いた。もう少し詳しく話を聞こうとしたが、姜任順さんは感情が高ぶり、「息子を殺さないで」、「息子を連れて行かないで」と繰り返すために、インタビュー調査は続けられなかった。当日、姜任順さんの三男がインタビューの場面に立ち会ってくれたので、話を聞いてみた。三男の話によると、姜任順さんは元抗日戦士だった。ある日、大人たちが家にいなかった際、留守番していた次男が日本軍の討伐隊に殺されたという。

そして筆者は、2008年8月24日、「安全農村」について調べるために吉林省三源浦鎮鮮光村の老人協会を訪ねた。ある年配の朝鮮族の女性Aさんにインタビューをお願いしたが、思いがけず断わられた。Aさんによれば、家族に自分の移民体験を話したことがあるが、子孫たちに「今はこんな時代なのに、何故そんな古い話をするのか」と笑われて以来、過去のことを語る意欲がなくなったという。筆者はフィールドワークの現場で、Aさんと似たような体験を持つ多くの方に出会った。

以上で筆者が出会った事例を紹介し、過去の体験、特に戦争体験を語ることの難しさの一端を見てきた。Aさんは聞き手がいないため語る意欲がなくなり、姜任順さんと李鳳雲さんは戦争体験が「トラウマ的な記憶」¹²²となり、語ることを難しくしたと考えられる。

第3節：インタビューの調査結果

戦争体験者が高齢になっており、戦争体験を聞くのはいよいよ最後の機会となってきた。筆者はフィールドワークのなかで、日中韓3国の多くの戦争体験者に耳を傾けてきた。本章では移民体験者たちから聞き取った戦争の記憶を、便宜的に「戦前の記憶」と「戦後の記憶」に分けて論を進める。本章では21人の移民体験者を紹介する。事例を選ぶ際には、移住の年代、移住地域、年齢、性別などを考慮した。事例の基本状況は以下の通りである。

事例	氏名	性別	出身地	生年	移住年代
事例1	蔣汶柱さん	男性	慶尚北道英陽郡	1914年	1933年
事例2	李圭善さん	男性	慶尚北道統営郡	1926年	1934年
事例3	金順姫さん	女性	慶尚北道盈徳郡	1932年	1935年
事例4	権弼蘭さん	女性	慶尚北道慶州郡	1925年	1936年
事例5	J Xさん	男性	全羅北道金堤郡	1934年	1936年
事例6	李太福さん	男性	慶尚北道青松郡	1930年	1936年
事例7	P Sさん	男性	慶尚北道義城郡	1924年	1937年
事例8	K Yさん	男性	咸鏡北道明川郡	1934年	1938年
事例9	金鐘洙さん	男性	慶尚北道義城郡	1911年	1939年

¹²² 「トラウマ的な記憶」とは、語り手の自己（語る自己）と＜物語世界＞の自己（語られる自己）が分離できない状態におかれていることである（桜井厚『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年、p. 281）。

事例10	韓錫鎬さん	男性	咸鏡南道端川郡	1925年	1939年
事例11	楊龍錫さん	男性	平安北道楚山郡	1926年	1939年
事例12	N Z さん	男性	慶尚北道英陽郡	1934年	1939年
事例13	金蓮珠さん	女性	慶尚北道安東郡	1934年	1940年
事例14	Y S さん	女性	慶尚北道迎日郡	1935年	1940年
事例15	徐丙鐘さん	男性	全羅南道木浦府	1919年	1942年
事例16	洪吉俊さん	女性	咸鏡北道清津府	1924年	1942年
事例17	金宗雲さん	男性	平安北道亀城郡	1933年	1943年
事例18	孫英淑さん	女性	慶尚北道慶州郡	1925年	1944年
事例19	安晩植さん	男性	慶尚南道咸陽郡	1929年	1944年
事例20	朴在和さん	女性	慶尚北道慶州郡	1931年	1944年
事例21	金太任さん	女性	全羅南道海南郡	1927年	1945年

3-1 戦前の記憶

「戦前の記憶」の部分では、「学校生活のなかの戦時色」、「徴兵に関わる戦争の記憶」、「敗戦直後の避難体験」、「在満朝鮮人の目からみた在満日本人」などの分析枠組みを設定して論を進める。

3-1-1 学校生活のなかの戦時色

生活の貧しさやさまざまな制度の制限などにより、移民体験者の全員が学校に通えたわけではない。ただし、学校生活は当時の社会状況を反映する重要な側面なので、学校に通ったことのある4人の移民体験者の事例を紹介する。金太任さんは全羅南道の練成所に通ったことがあり、戦場に行くのを避けるために結婚した後、夫と一緒に1945年8月に「満州」に渡った。金太任さんは次のように回想した。

私は練成所に3年間通った。成績優秀な人が選ばれた。練成所は男女共学で、豊岡という先生がいた。練成所に入ったら簡単に他の所に行けなかった。毎日軍事訓練をし、勉強するよりは軍事訓練が多かった。砲弾が落ちた時の消火訓練などをした。(中略) 男性はみんな軍隊に行った。私は軍隊に行きたくなくて結婚してすぐ中国にきた。

金太任さんは軍隊に行きたくなくて「満州」に渡った。「文化大革命」時代、朝鮮で練成所に通ったことが他人に知られたら人身攻撃されると怖くて写真などを全部焼却し、名前も変えた。「全部忘れた。あまりにも苦労したから頭が悪くなった」といいながら、金太任さんは静かに過去のことを振り返っていた。金太任さんの静かな語りと対照的に、1937年に「満州」に渡った安晩植さんは、やや感情を込めて戦争体験を振り返った。

学生の体育の授業で軍事訓練がよく行われた。生徒たちは持ってくるよういわれたものを全部持ってこなければならなかった。牛や馬、そして犬の毛などを献納させられた。持っていかなければ罰せられた。

安晩植さんは家系に関する記録である族譜¹²³を作成したいと思い、調べてみたら自分の先祖は元々中国人だと分かった。知人たちとの飲み会で、ある漢族から「二鬼子」といわれ、議論したという。知人たちとの集まりで「二鬼子」といわれた後、ショックを受けて外出を控えるようになった。テレビで日本人が出たら、ウェノム（「日本の奴ら」）と呼ぶ癖になったという。2009年に安晩植さんは恨（ハン）¹²⁴が解けないまま亡くなった。

在満朝鮮人徴兵 2 期生だった P S さんによれば、小学校に通った際に通う小学校の近くに砲台があった。ある日、同級生たちとその砲台で遊んでいて、日本軍に見つかってしまった。校長先生が日本軍に呼び出されて叱られたという。小学校卒業後、P S さんは小学校附設の補習学校に 2 年間通い、1944 年に卒業した。

大東亜戦争の後期は朝鮮人も徴兵された。当時、徴兵を避けるために朝鮮からに逃げてきた人もいた。私が補習学校に通っていた時、〔学校には〕朝鮮から逃げてきた人が 5 人もいた。すでに結婚する人もいた。

P S さんは砲台で遊んだり、徴兵を逃れるために朝鮮からきた人々と接したりして、さまざまな形で戦争体験をした。筆者は赤紙をもらった体験を持つ楊龍錫さんに話を聞いた。当時、楊龍錫さんはハルビン第二師道学校に通っていた。

1945 年 7 月 20 日から夏休みに入ったのに、校長先生は生徒たちに毎日軍事訓練をさせて家には帰らせなかった。7 月 31 日になって校長先生は突然「みんな家に帰れ」と一言だけいって、生徒たちを解散させて家に帰らせた。亜布力に着いたのは 7 月 31 日の夜だった。

8 月 12 日の日に学校から「召集令状あり、すぐ帰ってこい」という電報がきた。家族は学校に戻ることに強く反対した。当時、私は毎日天皇崇拝をして大和魂を持ち、精神状態は日本人になっていた。電報をもらって行かなかったら大変なことになると思い、家族が反対しても学校に戻ろうとした。しかし、駅に行っても切符を売る人はいなくなり、列車は止まらずに通過した。列車に乗っているのは、ほとんど全員が日本人の避難民だった。8 月 13 日、14 日も出かけてみたが、同じ状況だった。結局、学校に戻れないまま 8 月 15 日になって日本の敗戦を迎えた。もし、戦場に行ったら私も死んだかもしれない。当時、戦争にはみんな死ぬ覚悟で行った。

戦争は人の意識を変えてしまう。楊龍錫さんが召集令状をもらった後、家族が反対したにも関わらず、駅に連日に出て学校に戻ろうとするエピソードはリアリティーがあった。かつて楊龍錫さんが通っていた師道学校の跡地は、現在ハルビン市第一高校の校舎として使われている。2010 年 6 月 22 日、筆者は楊龍錫さんと師道学校の跡地を訪ねた。警備員の了承を得て学校のグラウンドまで入ることができた。

¹²³ 家系に関する記録である。

¹²⁴ 恨（ハン）は朝鮮語で発散できず、中にもってしこりをなす情緒の状態をさす。怨恨、痛恨、悔恨などの意味も含まれるが、日常的な言葉としては悲哀とも重なる。挫折した感受性、社会的抑圧により閉ざされ沈黙した情緒の状態がつづくかぎり、恨は持続する（伊藤亜人他監修『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社、2000 年、p. 355）。



写真 4-3 師道学校の旧地を訪れる楊龍錫さん。
筆者撮影。

グランドに入ったとたん、楊龍錫さんは突然持っていた杖を横にして、「銃剣術は分かるか？ここで銃剣術をやった」といった。「その場所で語られるべき戦争の記憶がある」¹²⁵といわれるように、直接現場に行くことによって戦争の記憶が蘇った。戦時中に軍事訓練を受けた戦争の記憶は、いまだに楊龍錫さんの体に染みついているようだ。

3-1-2 徴兵に関わる戦争の記憶

1910 年の「韓国併合」により朝鮮半島が日本の植民地となった。「日本帝国は朝鮮支配の全時期を通じて、朝鮮人を日本国籍に縛りつけることによって、国外に移住した朝鮮人をも統制下に置く政策をとった」と水野が述べているように¹²⁶、朝鮮人は朝鮮半島から「満州」に渡っても、日本の植民地支配と戦争からは自由にならなかった。

朝鮮人は大日本帝国崩壊の年になってもなお、日本国籍から逃れられなかった。間島地方をはじめとした「満州国」地域では、朝鮮人の徴兵検査にあわせるべく、それまで朝鮮戸籍への登録から漏れていた満洲在住朝鮮人の調査が強行された。その結果、1944 年 8 月までに就籍や漏籍整理などあわせて 22 万人以上があらたに登録され、そのなかから多くの者が「日本人」として徴兵された¹²⁷。このようにして朝鮮人でありながら日本式の名乗る日本兵が誕生して、日本帝国主義が推進する戦争に続々と駆り出されることになった。以下では戦争と直接関わる徴兵がいかに記憶されているのかを考察する。

多くの移民体験者は幼い時に「満州」に渡ったため、直接戦場に行った人は少ない。ただし、筆者は数人の徴兵体験を持つ移民体験者および親族や知人が徴兵された移民体験者にインタビューを行った。敗戦直前に徴兵された戦争体験を持つ韓錫鎬さんに話を伺った。ほとんどの移民体験者は移民体験を子孫や家族に語っていないが、韓錫鎬さんは移民体験を録音して、家族や子孫に語り継ごうとしている。

当時、日本軍はソ連軍と戦っていた。朝鮮人も徴兵に駆り出された。年頃になった人

¹²⁵ この表現は、姜尚中・森達也の『戦争の世紀を超えて—その場所で語られるべき戦争の記憶がある』（講談社、2004 年）から借りた表現である。フィールドワークを行う際にインフォーマントから許可を得て、相手の健康状況が大丈夫であれば、なるべくインフォーマントと一緒に戦争体験をした現場に行くようにしている。

¹²⁶ 水野直樹「朝鮮人の国外移住と日本帝国」『岩波講座世界歴史 19 移動と移民—地域を結ぶダイナミズム』岩波書店、1999 年、p. 269。

¹²⁷ 小熊英二『＜日本人＞の境界』新曜社、1998 年、p. 456。

を全部連れて行った。同じ村から3人が徴兵された。私たちが延辺方向に連れて行ったが、東京城で水飲みに行くと嘘をいって逃げた。私たちは逃げたが、逃げられなかった人も多かった。彼らはソ連軍の捕虜になってソ連に連れて行かれた。解放後、その人たちからよくシベリア抑留の話を聞いた。密山市の李春一さんと鶏西市の崔昌道さんがシベリアに抑留された。李春一さんは学校の校長を務めたこともあるが、亡くなった。崔昌道さんはまだ生きていのかどうかは分からない。(中略)戦前の制度が良くなかっただけで、日本の民衆は悪くない。ある日本人が軍隊に入ったが、戦後、日本に戻らないで中国に残った。先日の『黒龍江新聞』にそう書いてあった。日本人のなかにも戦争に反対する人がいた。戦争に反対する日本人は延安にもいた。当時、日本の制度が良くなかった。朝鮮人を自分たちの民族にしようとした。言葉、朝鮮語を無くそうとした。戦前、「日本の奴ら」は「三光政策」をした。当時、制度が良くなかった。

韓錫鎬さんは徴兵後の脱走体験を淡々と語ったが、戦時中の緊迫した様子が伝わってきた。韓錫鎬さんは紙一重の差でシベリア抑留にされた可能性があった。韓錫鎬さんへのインタビューを終えた後、その日にバスに乗り込んで鶏西市に向かって、崔昌道さんを訪ねようとした。しかし、崔昌道さんは数年前にすでに亡くなったことを知った¹²⁸。韓錫鎬さんは戦争被害の当事者として日本政府の戦争責任について批判する一方、日本人のなかにも戦争に反対する人がいることを説明し、戦争体験を複眼的にとらえていた。インタビューを受けながら、韓錫鎬さんは移民の歴史を記録したテープを聞かせてくれた。その記録のなかには子孫たちへのメッセージが多く込められていた。インタビュー終了後、対話のなかで言及した新聞記事を筆者に渡してくれた¹²⁹。筆者はまた、在満朝鮮人徴兵2期生だったP Sさんに話を伺った。

私は在満朝鮮人徴兵2期生だった。誕生日が遅かったため〔1924年11月24日〕、2期生だった。(中略)体が弱かったため、徴兵検査で乙種合格した。軍事訓練を受ける前に戦争が終わったので、戦場には行かないで済んだ。

戦場に喜んで行きたい人はいないはずである。P Sさんは「誕生日が遅かったため」、「体が弱かったため」というような偶然のせいで戦場に行かないで済んだと思っており、静かに過去を振り返っていた。P Sさんと同じインタビューの場に立ち会ってくれた在満朝鮮人の徴兵3期生の李圭善さんは、徴兵体験を次のように回想した。

私は在満朝鮮人徴兵3期生に乙種で合格した。1945年6月からハルビンの顧郷で軍事訓練を受けた。人間的な扱いではなくまるで犬のような扱いを受けた。よく叱られた。叱られるのはまだ我慢できたが、殴られるのは怖かった。(中略)私は徴兵検査に合格した後、戦場に行ったら生きて帰るのはほぼ不可能だと思い、生きているうちにもう一度故郷を見たいと考えて母親と一緒に朝鮮に帰ってきた。

¹²⁸ 筆者はこのいもづる式のフィールドワークを多く行われ、インタビューのなかから分かった情報に基づいて次々にインフォーマントを探しにいった。

¹²⁹ この新聞記事を手がかりに、筆者は2010年3月に山東省済南市に住む山崎宏さんを訪ね、話を伺うことができた。2010年12月に山崎宏さんは亡くなった。

李圭善さんは言葉を選びながら戦争体験を語り、徴兵検査で合格した後の複雑な心情を吐露した。軍事訓練が終わる前に日本の敗戦を迎えたので、幸い戦場には行かないで済んだ。インタビュー終了後、別れる際に「このようなことを日本で紹介したら、君は酷い目に遭うのではないか」といい、心配してくれた。

上記の事例のように兵士体験はないが、女性として銃後で戦争を体験した孫英淑さんと金蓮珠さんに話を伺った。夫が徴兵から逃れるために先に「満州」に渡った孫英淑さんは次のように語った。

ある日、人を捕える人たちがきた。夫は田植えしていたが、苗を捨てて逃げた。夫は徴兵を避けるために、1944年5月、先に中国に逃げた。私は9月に夫を探しに、中国がどこにいるのかも分らないで一人で汽車に乗ってきた。立ったままできたので足が腫れた。〔筆者：本当に苦労しましたね〕その頃は生き辛かった。今でもテレビに日本人が出たら憎らしい。

孫英淑さんの夫が徴兵を避けるために、「苗を捨てて逃げた」という語りは、当時の戦時色が重く押し掛かってきたことをリアルに伝えている。孫英淑さんによれば、「夫は中国にきてからも徴兵を避けるために逃げ続けた」という。この語りで孫英淑さんご家族の壮絶な戦争体験に聞き手は適切な言葉が見つからず、「本当に苦労しましたね」と応答したが、戦争が個人や家族、そして民族に与えたダメージは言葉に表せないほど大きい。孫英淑さんは中国に来てから1990年に韓国に行き、46年振りに当時86歳だった母親に再会できた。孫英淑さんは、「今でもテレビに日本人が出たら憎らしい」ほど、夫が徴兵を逃れるために亡命し続け、自身は家族と約半世紀間も分断されてしまったやりきれぬ思いを語った。

もう1人の移民体験者の戦争体験を聞いてみよう。金蓮珠さんが通っていた黒龍宮馬家店の小学校の呉先生が徴兵された。そのことについて金蓮珠さんは次のように回想した。

呉先生は民族性が強くて授業する時、いつも朝鮮民族の服装を着ていた。呉先生は徴兵されてしまった。クラスの女子生徒たちは、呉先生に千人針を作ってあげた。

戦後、金蓮珠さんはハルビン市内の病院で看護婦をしていた時、1955年に病院で偶然呉先生に会った。「呉先生に再会できて感激した。呉先生によれば自分は北安まで連れて行かれたが、ちょうど戦争が終わったので、戦場には行かないで済んだといった。」金蓮珠さんには複数回インタビューを行った。金蓮珠さんは呉先生が徴兵されたこと、呉先生に千人針を作ったこと、そして思いがけず呉先生に再会できたことをよく語った。金蓮珠さんの戦争の記憶には、先生が徴兵されたこと、千人針の布を持たされたことが深くインプットされていたようだ。戦前、「満州」に移住した日本人男性も徴兵の対象者だった。徐丙鐘さんは日本人が徴兵される場面を見た。徐丙鐘さんは「強制連行」から逃れるために、1942年に「満州」に渡り、阿城県双峰の日本人開拓団に入っていた。そこで、日本人が徴兵される場面を見たという。

当時、開拓団にはお年寄り、女性、子供しかいなかった。若い男性団員は毎日軍事

訓練をして戦場に駆り出されていった。

徐丙鐘さんは戦争が在満日本人にも降りかかってきたことを目の当たりにした。文献資料では日本人の開拓団に朝鮮人がいた記録はあるが、当事者の声は今までほとんど表に出てこなかった。その意味で徐丙鐘さんの証言は貴重であるといえよう。

3-1-3 敗戦直後の避難体験

敗戦直後、中国東北地域は混沌たる状況に陥っていた。都市部に暮らしていた在満朝鮮人の一部は朝鮮半島に帰った。しかし、ほとんどの在満朝鮮人は僻地の農村地域に入っていたため、さまざまな状況により朝鮮半島に帰れない人が多かった。敗戦直後、在満朝鮮人も避難体験を余儀なくされた。以下では2人の事例の敗戦直後の避難体験を紹介する。

1935年に母親と「満州」に渡り、13歳で日本の敗戦を迎えた金順姫さんは、敗戦直後の記憶がまだ鮮明に残っている。

解放前、私の家族は呼蘭の中国人の村で暮らしていた。呼蘭の市内には多くの日本人が暮らしていた。ある時、呼蘭で洪水が発生した。その日、日本人は大きな船で私たちを市内に運んでくれた。その日、日本が投降したと聞いた。

日本が投降した後、中国人は日本人から迫害を受けてきたため、物を奪ったり、日本人を追いかけたりした。ある7人家族の日本人家族は船に乗って逃げようとしたが、中国人たちに追いかけられ、逃げることはできなかった。男〔主人〕は子どもたちと妻を河に突き落としてから、自分も河に飛び込んで自殺した。朝鮮人は日本人の先兵と見なされて、中国人に鎌を振り回されて追いかけられた。今思い出しても怖い。その時、私は死ぬのではないかと思った。私たちは旅館に避難した。後に政府から朝鮮人を殺してはいけないとの命令がきたようで、私たちは生き延びることができた。

戦争は民間人まで巻き込んでいった。金順姫さんは敗戦直後の「満州」の混乱を直接体験した。金順姫さんはある日本人家族が自殺する生々しい場面を目の当たりにし、中国人に鎌を振り回されて追いかけられ、生死の体験をした。「その時、私は死ぬのではないかと思った」という語りに端的に表れているように、戦後60年以上が過ぎた時点でも、金順姫さんは戦争の恐怖を覚えていた。

金順姫さんと同じ世代で同じく少女時代に敗戦を体験した朴在和さんに話を伺う機会があった。朴在和さん一家は1943年に「満州」の南天門農場に移住した。敗戦直後、風呂敷一枚に物を包んで避難した。当時の様子を朴在和さんは次のように証言した。

南天門農場には、「日本の奴ら」が中国人を追い出して朝鮮人を入れた。解放後、中国人は黙っていなかった。自分たちの土地を返せ、家を返せとやってきた。農場を中国人に明け渡した。私たちは風呂敷包み一つの荷物であちこちを逃げ回った。避難する人々は延寿に行ったり、尚志に行ったり、通河に行ったりして逃げ回った。その際に多くの朝鮮人が死んだ。餓死したり、殴られたりして死んだ。

朴在和さん一家は日本の植民地支配の被害を受けたが、渡満後、元々中国人の農場に入

ったため「加害者」の立場に立たされた。それで戦後、朝鮮人移民は中国人からの襲撃の対象になった。朴在和さんは逃避行体験を今でも忘れられないようだ。

3-1-4 在満朝鮮人の視点から見た在満日本人

本章ではまず移民体験者たちの戦争の記憶がいかにかに表象されているかに注目した。次に戦時中および敗戦直後、在満朝鮮人の目に映った他の民族の様子にも注目した。この項目では在満朝鮮人の目に映った日本人の姿を紹介する。

李太福さんは慶尚北道青松郡に生まれ、1936 年に家族とともに「満州」に移り住んだ。最初に移住したのは阿城県だった。1940 年に阿城県で軍需工場を建造することになり、大勢の日本兵が阿城県に集まってきた。その時の体験を李太福さんは次のように回想した。

最初の頃、若い日本兵は〔私の〕頭をなでてくれたり、腕ぶらんこをしてくれたりした。しかし、段々と日本兵たちは乱暴になっていった。(中略)中国人が蹴られるのを見た。



写真 4-4 インタビューに応じる李太福さん。
筆者撮影。

李太福さんは若い日本人兵士が、子供を可愛がってくれる普通の人間から、中国人に暴力を振る乱暴な人間に豹変する過程を目の当たりにした。戦争は人間を獣に変貌させるとよくいわれるが、李太福さんの戦争体験はまさにそのことを証明したといえよう。日本兵の様子をほかの移民体験者も見た。戦時中、洪吉俊さんは牡丹江にある関東軍第 450 部隊所属の軍需工場で働いた。日本軍が撤退した時にある日本軍人が自分に「10 年後また満州にやってくる」といった。「今でもその日本軍人がいったことを思い出したら、許し難い気持ちだ」という。敗戦直後、日本の軍人が真っ先に逃げて、民間人は引揚げを急いだ。日本人が朝鮮人と一緒に引揚げる場面を見た Y S さんに話を伺った。

解放後、叔父（母親の弟）の家族は朝鮮に帰った。叔父の家族が朝鮮に帰る際、近所に住むある日本人女性にチマチョゴリを着せて朝鮮に連れて行った。その日本人女性は赤ん坊をおんぶしていた。(中略) 敗戦直後の混乱のなか、日本人は中国人からの襲撃を受けた。チマチョゴリを着せたのはその襲撃を避けるためだ。

日本人がチマチョゴリを着て避難する場面を見かけた話は姉からも聞いたと金蓮珠さんが証言した。敗戦直後、金蓮珠さん一家は暮らしていた「北満」の黒龍宮馬家店から避難

した。その際に日本人の避難民も見かけたという。

日本人開拓団の人たちは私たち〔朝鮮人〕と離れた遠い所で暮らしていた。解放後、日本人は子供たちをリヤカーに乗せて市内に向けて避難した。その時、私は初めてリヤカーを見た。私たちも避難した。途中で尚志の大きな工場の跡地にたくさんの日本人女性が入れられたのを見た。虱が付くのを防ぐためか、みんな髪を切られて丸坊主にされて売られていた。値段は高いのが 8 円か 7 円、5 円が一番安かった。当時、独身の中国人男性が多かったようで、買いに行く人もいた。尚志で近所に住んでいたある家族は家に娘が 6 人いた。息子がほしかったので、〔妾として〕一人の日本人女性を 5 円で買ってきた。私たち近所の子供は見に行った。その日本人女性はずっと悲しそうに泣いていた。その家族は心優しかったので、日本人女性をすぐ帰らせた。日本人の女性たちは可哀想だった。日本からきたことによって本当に苦労した。

筆者は金蓮珠さんに何度もインタビューを行ってきた。金蓮珠さんのインタビューのなかで、日本人の残留婦人たちが髪を切られて売られていたエピソードがよく語られた。金蓮珠さんは敗戦直後の混乱の様子を証言のなかでそのことについて、「日本人の女性たちは可哀想だった。日本からきたことによって本当に苦労した」と意味づけも行った。金蓮珠さんの語りからは戦争が被害者側の民衆だけではなく、加害者側になっていた日本の民衆にも悲劇をもたらしたことを物語っている。

金蓮珠さんの夫である金宗雲さんは、他の地域で日本人開拓団の生活様子や避難の様子を見てきたという。2010 年 3 月 20 日、筆者はある日本人研究者とともに金宗雲さんの家を訪ねてインタビューを行った。金宗雲さんは日本語ができるので、当日のインタビューは主に日本語で行った。金宗雲さんは日本語で次のように語った。

日本人は中国にきて兵隊かまたは役人か警察官をしたけど、日本の農民もたくさんきました。集団できた者が開拓団だ。日本の政府が計画したのは、100 万の日本人を「満州」に送って開拓団を作る。これは農民だけ武器があります。すなわち、軍隊の防衛隊として武器のある農民たちを、日本の 1 つの県、岡山、熊本から開拓団として「満州」に送った。その人たちは朝鮮人と同じく生活はとても苦しかった。私は小学校 4 年生の時に見ました、小学校 4 年か 5 年の時に見ました。村の近くに日本の開拓団が住んでいました。私は行って見ました。朝鮮人より生活が苦しい日本人がいました。ご飯を作って釜をそのまま持ってきて食べる。皿などはない。日本からきた〔ばかりだ〕から何もない。ご飯をそのまま食べる。それぐらい苦しかった者がいる。〔「満州」に〕きて 2、3 年なれば、朝鮮人より生活は良くなったけれども。日本が滅びた時に彼らは自殺する。中国人がすべての物をみんな持って行ったから何もない。それから若い女たちは中国人の嫁に行った者、子供たちは中国人にやった者がたくさんあります。後に中国政府はみんなを日本に送った。その時、日本の開拓団は苦しかった。日本はこれを恥だと思って、開拓団のことについて書いたものは日本では少ない。これは戦争が作った 1 つの罪、戦争が作った悲劇だけど、日本人はこれを恥だと思ってこれについて書いたのが本当に少ないです。これについて、日本人はきちんとたくさん書いたほうがいいですよ。

金宗雲さんは村の近くに住む日本人開拓団の生活の様子を見てきた。また、敗戦直後の混乱のなかで開拓団の日本人が襲撃を受けたり、自殺したり、家族と引き裂かれる場面も目の当たりにした。「これは戦争が作った1つの罪、戦争が作った悲劇だ」と語ったように、金宗雲さんは作家であることもあり、作家の視点で戦争が作った罪と悲劇を隠さずに書き残すべきだと述べ、戦争の記憶を継承する必要性を強調した。

敗戦直後の避難体験を、強制連行から逃れるために「満州」に渡った徐丙鐘さんにも伺った。徐丙鐘さんは1942年に「満州」の阿城県双峰に入った後、翌年にハルビン近郊のキリスト開拓団に行った。ハルビンで日本の敗戦を迎えたという。

解放後、日本人開拓団員はトラックに乗ってハルビン方向に向けて逃げていった。中国人たちはそのトラックを追いかけた。当時、朝鮮人は二等国民で日本人の手先と見なされていた。私は中国人から襲撃を受けるのを恐れて、約2ヵ月間ほとんど家から出なかった。

徐丙鐘さんは日本人の避難の様子を目の当たりにし、自身の避難体験も紹介した。徐丙鐘さんは淡々と語ったが、「2ヵ月間ほとんど家から出なかった」という証言からは、当時の恐怖に陥っていた状況を察することができる。敗戦直後の避難体験を1939年に「満州」に移住したNZさんに聞いてみた。NZさん家族が住んでいた村の近くの三大家屯には日本人開拓団が入っていた。敗戦直後、体験したことをNZさんは次のように証言した。

開拓団の日本人はみんな三大家屯に集合し、夜になってから暖気（現在の継電器工場）に避難した。私の家族も日本人と一緒に避難した。多くの苦力たちが報復に立ち上がって棒で殴ったりして、日本人2人が死んだという噂があった。苦力たちが報復したのは、日頃日本人に抑圧されていたから怨んでいたと思う。暖気に避難した日本人は、戦争の時に使ったヘルメットを鍋にしてご飯を炊いて食べた。冬が過ぎた翌年の春、中国政府はほとんどの日本人を日本に帰らせたが、帰れなかった日本人女性と子供も数人いた。そのなかの1人の子供が朝鮮人の家に引き取られ、イ・シュンセイと名づけて育てられた。

NZさんは日本人移民団と一緒に避難し、日本人移民団員らの戦後の逃避行の様子を目の当たりにした。戦後、NZさんは日本人の残留孤児と遊び、交流した体験を持つ。NZさんによれば、その残留孤児のイ・シュンセイは数年前に日本に住んでいる伯父を見つけ、日本に戻ったという。「シュンセイはいい人だ。日本語を忘れて朝鮮語を使っていたので、日本語が通じるかな」と心配していた。

3-2 戦後の記憶

日本の敗戦後、ほとんどの在満日本人は日本に引揚げた。その後、冷戦構造が長く続き、長い間、在満朝鮮人（1949年以降、朝鮮族となった）は日本人との接触や交流はなかった。ただし、筆者がインタビューした事例のなかで、日本人と接触や交流した体験を持つ方もいた。本章ではそれぞれ違う状況で、移民体験者たちと日本人との接触体験を通して、戦

争の記憶について考察する。政治学者石田雄は、記憶という行為について現在の立場から過去を再構成し、そのことによって未来にむけた行為を意味づける作用を持っているといえよう。その意味で記憶は過去と未来の間にある行動主体が、現在において行なう——意識しなくてもなされる——選択をとまなう行為であると述べている¹³⁰。以下では2人の移民体験者が戦後日本人との接触体験を通して紡ぎだされた記憶のかたちを確認する。

KYさんの息子さんが日本の大学を卒業した後、日本で就職している。KYさんは孫の面倒をみるために1年のうちに半年は中国、半年は日本で過ごしているという。

日本人は礼儀正しい民族だと思った。しかし、日本では外国人を差別する現象が見られた。日本滞在期間中、かつて日本の朝鮮と「満州」の統治について日本人と議論もした。(中略)日本人が「満州」に渡って、確かに「満州」の工業化を進めた。しかし、それで植民地統治をして良かったといっているはいけない。戦前、日本人は朝鮮人の民族性を無くそうとした。私は金山と名前を変えられた。

KYさんは定年退職まで中学校で体育の先生をやってきた経験を活かし、日本に行った時にボランティアで日本人に太極拳を教えた。太極拳を習う日本人のなかには、かつて「満州」に渡った元日本人の開拓団員もいたという。

片言の日本語でたくさんの日本人と交流した。彼らとは一緒に酒も飲んだ。開拓団員だったからといって、みんなが悪い人ではない。「[満州]」に行った人も悪いかもしれないが、行かせた当時の為政者が責任を取るべきだ。

KYさんは為政者へは終始厳しい姿勢だった。その一方、一般の民衆には理解を示した。戦後の記憶をもう1人の移民体験者に聞いてみた。金宗雲さんは地元で名を知られた朝鮮族作家であり、日本人の文学者とも親交を続けている。金宗雲さん¹³¹の娘さん一家が日本に住んでいるため日本に何度もきた。日本で戦争体験を紹介したことがあるという¹³²。金宗雲さんは日本での滞在体験を踏まえて日本語でいった¹³³。

50歳、60歳代の人でも731部隊のことを知らない。(中略)歴史を知らない民族は発展することはできないです。科学、技術だけでは発展することはできません。歴史をよく知って、歴史をよく知ってから前に進むことができます。

金宗雲さんは50歳、60歳代のなかでも、731部隊のことを知らない人がいたという戦争記憶の風化に懸念を示した。ある時、一緒に食事する時に金宗雲さんは、「もう少し長生き

¹³⁰ 石田雄『記憶と忘却の政治学—同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店、2000年、p. 12。

¹³¹ 金宗雲さんは作家であり、日本人研究者とも交流を続けている。金宗雲さんが書いた小説は日本でも翻訳された。

¹³² 金宗雲さんによれば、ペスト菌の感染でお爺さん、妹、従妹を失った。そのほかに、朝鮮から出稼ぎにきて自分の家で泊まっていた一人の朝鮮人も亡くなったという。金宗雲さん一家がペスト菌に感染して戦争被害を受けた出来事は、韓国のKBSテレビ局が取材して韓国で放送された。

¹³³ この語りは2010年3月20日のインタビュー記録に基づいている。当日、ある日本人研究者と金宗雲さんの家を訪ねた。金宗雲さんは日本語ができるので、インタビューは主に日本語で行った。

したい。まだ書きたいことがいっぱいある」といった。金宗雲さんは書き手として、語り部として、次の世代に向けて平和を実現するためのメッセージを送り続けている。



写真 4-5 インタビューに応じる金宗雲さん。
筆者撮影。

第4節：考察

本章では移民体験者たちのライフヒストリーを通して戦争記憶のかたちについて考察した。戦争や平和について積極的に発言している政治学者の藤原帰一は、参戦を強いられる軍人にとっても、またその暴力の犠牲となった人々にとっても、戦争は忘れたくても忘れられない記憶に属していると述べている¹³⁴。総じていえば、移民体験者たちにとっての戦争は忘れられない記憶であるに違いない。記憶は現在の時点で過去を表象する営みなので、必ずしもきれいに分けることはできないが、本章では便宜的に記憶を「戦前の記憶」と「戦後の記憶」に分けて論を進めた。

4-1 さまざまな戦争の記憶のかたち

本章では複数の分析枠組みを設定し、移民体験者たちのさまざまな戦争の記憶を取り上げた。戦前の記憶を「学校生活のなかの戦時色」、「徴兵に関わる戦争の記憶」、「敗戦直後の避難体験」、「在満朝鮮人の目から見た在満日本人」に分けて論を進めた。戦後の記憶を「戦後日本人との接触体験」という分析枠組みで論を進めた。岩井洋は「現在」の時点で過去を「想起」することについて以下のように述べている。

「想起」が「現在」という場を起点として生起し、そこでは過去が現在の状況と未来への予期にづけられて「制作」され、今度は「制作」された過去が未来を方向づける創造的行為である。(中略) 過去の出来事Aは、想起されるときにはXにもaにもなりうるのである。想起という行為が歴史の再構築を可能にする創造性をもつように、記憶を「貯蓄庫」のなかに凍結してしまうのではなく、個人的なものに限らず社会的条件との関連で、想起のたびに「生成」されるものとして、今後とらえ直していく必要がある¹³⁵。

移民体験者たちは戦争体験に基づき、現在の時点で戦争の記憶を想起した。その際に想

¹³⁴ 藤原帰一『戦争を記憶するー広島・ホロコーストと現在』講談社、2001年、p. 48。

¹³⁵ 岩井洋「想起することと歴史をつくること」佐々木正人編『現代のエスプリ』第298号、至文堂、

起した記憶を岩井がいうように、「貯蓄庫」のなかに凍結してしまうのではなく、個人的や社会的条件との関連で、想起のたびに「生成」すると考えられる。

まず、戦争の記憶を想起する記憶の場を学校に指定した時、移民体験者たちは軍事訓練、戦時用品の献納、B29 飛行機、赤紙、銃剣術などを想起した。楊龍錫さんと一緒にかつて通っていた学校のグラウンドに入ったとたん、楊龍錫さんは突然持っていた杖を横にして銃剣術のポーズを取った。戦争の記憶は今でも楊さんの体に染みついていた。

次に、戦争の記憶を想起する記憶の場を徴兵に指定した時、移民体験者たちは乙種合格、脱走体験、千人針などを想起した。戦前、日本人だけではなく、帝国臣民としての朝鮮人も徴兵に駆り出された。金蓮珠さんのように学校の先生が徴兵されたりして、在満朝鮮人も日本の総力戦体制に組み込まれていった。

そして、戦争の記憶を想起する記憶の場を敗戦直後の避難体験に指定した時、本文で見てきたように、朴在和さんは風呂敷一枚分の荷物で逃避行を容儀なくされた戦争体験を思い出し、金順姫さんは日本人家族の自殺および自身の逃避行体験を思い出した。

さらに、移民体験者の目にはさまざまな日本人が映された。李太福さんが見た豹変する若い日本兵、金宗雲さんが見た日本人の開拓団員、洪吉俊さんが見た敗戦を認めようとしない日本軍人、Y Sさんが見たチマチョゴリを着て避難を容儀なくされた日本人女性、金蓮珠さんが見た頭を丸坊主されて売られていた日本人女性・・・、さまざまな角度から戦時中および敗戦直後の在満日本人の姿が映し出された。

最後に、戦争の記憶を戦後日本人との接触体験に指定した場合、K Yさんは元日本人開拓団員、金宗雲さんは歴史を知らない人々を思い出した。移民体験者たちはそれぞれの戦争体験に基づき、さまざまな戦争の記憶を想起した。

4-2 想起された戦争の記憶が問いかけるもの

本章では移民体験者たちのさまざまな戦争の記憶のかたちに基づき、戦争の愚かさや悲惨さを伝えた。戦争の世紀を乗り越え、再度戦争を起こさないためどうすればいいのか。移民体験者たちの戦争体験に耳を傾ければ、何らかのヒントが得られるだろう。

限られた事例であるが、移民体験者たちは戦後の日本人との接触体験を通して、現在の時点でさまざまな過去を想起した。K Yさんは日本に行った際、日本人に太極拳を教える過程で多くの日本人と交流した。K Yさんはその日本での滞在体験を言及し、戦前も日本人開拓団員と接触したことを「想起」した。K Yさんは一般の日本民衆には理解を示しながら、日本の戦争責任と植民地責任に対して厳しい姿勢をとった。金宗雲さんは50歳や60歳の日本人のなかでも731部隊のことについて知らない人がいたことに懸念を示し、日本人と戦後世代に向けて歴史を知ることの大切さを語った。金蓮珠さんのインタビューのなかで、日本人女性が髪を切られて売られていたエピソード、そして敗戦後、日本人の開拓団員が逃げる時は自分たちの子供まで捨てるエピソードが語られた。その体験を踏まえて、「私たち70歳を過ぎた人たちも死んだら、その歴史を語る人は誰もいなくなる。その歴史を知らなかったら、今後もっと悲惨なことが起きる可能性があるのではないか。それで、私たちが生きている間に体験したことを話して、若い世代が参考して私たちと同じような体験をさせたくない」というようなメッセージは切実な平和のメッセージである。

インタビュー調査を通して感じ取ったのは、移民体験者たちのライフヒストリーには植民地体験と戦争体験が分離しているのではなく、複雑に絡み合っていることである。金順姫さんと朴在和さんは日本の敗戦直後の逃避行の体験を回想した。複数の事例が証言したように、日本人が中国人農民を家や土地から追い出して朝鮮人移民を入れたため、戦後朝鮮人は日本人の手先と見なされて中国人からの襲撃を受けた。また、複数の移民体験者が証言したように、徴兵を逃れるために朝鮮から「満州」に逃げてきた人々がいた。しかし、朝鮮にいても「満州」にいても戦争から逃れることはできなかった。日本の敗戦後、在満朝鮮人は避難を余儀なくされた。移民体験者のほとんどは非戦闘員として戦争を体験した。本研究の事例を通して分かるように、当時、戦争の陰影が民衆の生活全般に重くのしかかっていた。日本が引き起こした日中戦争は中国人に被害を与え、朝鮮人は戦争の資源と見なされ、在満朝鮮人まで戦争に駆り出されていった。そして、日本の民衆も戦争に巻き込まれていき、国策で「満州」に移住した日本人移民は、敗戦後、日本政府に切り捨てられた。民衆の視点から戦争を見つめれば、戦争の悲惨さや愚かしさがよく伝わる。

おわりに

本章では多くの移民体験者の戦争の記憶を取り上げた。移民体験者たちは段々と歴史の舞台から去っていくため、インタビュー調査を急がなければならない。今後の課題として考えられているのは以下の2点である。

第1、多くの移民体験者は戦争体験をよく語った。しかし、戦争の恐怖体験（トラウマ）により戦争体験を語れない人もいた。冒頭で紹介した元朝鮮人「従軍慰安婦」の李鳳雲さんを訪ねた際に長い沈黙が続き、インタビューはほとんどできなかった。今後、まだ埋もれている戦争の記憶を聞き取る必要がある。

第2、この数年間、筆者は移民体験者たちへのインタビューを平行して、戦争を体験した数人の中国人（漢族）と韓国人、そして日本人の戦前世代にもインタビューを行ってきた。これらの事例についての分析は今後の課題とする。

第5章 世代を超える対話 —— 一人称で探求する移民体験者たちの生 ——

はじめに

本章では語り手の移民一世と聞き手の移民三世との対話を手がかりに、植民地経験の継承、および移民一世たちとの対話を通して紡ぎ出した語り結び付ける関係性について考察する。本章では「歴史への真摯さ」¹³⁶を求め、聞き手の筆者は一人称として対話のなかに登場して、語り手の移民一世たちの生、特に「語りとしての生」¹³⁷を探求するプロセスを提示して総合的に考察する。

第1節：なぜ「世代」と「対話」に着目するのか

1-1 なぜ世代に着目するのか

ピエール・ノラはその著書『記憶の場（第1巻）』のなかで、記憶の場は「場」という語のもつ3つの意味——物質的な場、象徴的な場、そして機能としての場——においての場であるといえる。また、程度は異なれ、そのいずれの属性をも持っている。たとえば、文書館は純粋に物質的な場に思われるが、想像によって象徴的なオーラが与えられてはじめて記憶の場となる。教科書や遺言や退役軍人会のようなまったく機能的な場でも、それが儀礼の対象になってはじめて記憶の場となる。1分間の黙祷は象徴的な場の極端の例だろうが、それがあある時間単位の物質的な断片であり、時として記憶の集中的な想起に用いられると述べている（p. 48）。3つの場が相互関連している例として「世代」を挙げている。ノラによれば、「世代は、人口上のことを指し示すがゆえに物質的である。また、記憶の結晶化も伝達もおこなうがゆえに機能的であると考えられる。そして、ごく少数のものたちが経験した出来事や体験によって、それを経験しなかった多数の者たちを性格づけるがゆえに、本質的に象徴的である（p. 48）」という。語り手としての移民一世たち、および聞き手としての筆者は、物質的な場、象徴的な場、そして機能としての場を備えているといえよう。

また、ノラは同書で、「記憶の場は二重の場である。すなわち、みずからに閉じこもり、みずからのアイデンティティに閉じこもり、そしてみずからの名に凝縮されている極端な場であるが、また他方、みずからの意味が広がる限りでつねに開いた場でもある（pp. 54-55）」と述べている。長い間、移民一世たちは移民の歴史をみずからの記憶のなかだけに閉じ込めており、「語りとしての生」はなかった。しかし、聞き手が現れ、移民一世たちの生きてきた個人史に関心を示すと、移民一世たちは記憶を語り始めた。フィールドワークを通して分かったのは、同じような境遇を経てきた移民体験者同士が語り合う場面は度々見かけたが、若い世代に語る場面はほとんどなかった。つまり、ほとんどの移民一世はさまざまな原因により、朝鮮半島から「満州」へ移住したことをまだ子孫たちに直接伝えることができていなく、植民地経験の世代間継承はほとんどなされていない状態である。この先は

¹³⁶ 過去についての特定の表現がどこまで“真実”か—絶対かつ究極のリアリティにどこまで肉迫しているか—を議論するより、人々が過去の意味を創造するプロセスの“真摯さ”を検討評価する方が有益である（モーリス＝スズキ、テッサ著／田代泰子訳『過去は死なない』岩波書店、2004年、p. 34）。

¹³⁷ 第1章で言及したように、移民一世たちには「生活としての生」と「経験としての生」があっても、長い間「語りとしての生」はなかった。

さらにその機会が少なくなっていくと推測できるので、移民一世たちの植民地経験を継承し、語り継ぐことは緊急の課題である。社会学者の小林多寿子は、戦時中、強制収容された日系アメリカ人の子孫へのインタビュー調査の経験を踏まえ、「ストーリーが語られず、家族のなかで受け継ぐことができない場合、ストーリーの共有を求めて、外の集団であるコミュニティが志向されている」と述べている¹³⁸。移民一世たちへの聞き取り調査は戦後世代の研究者で行うしかない。

朝鮮人「満州」移民に関する研究は少なくないが、これまでの研究は文献資料に基づいてマクロの視点での移民史や移民政策などについて分析・考察したものが多く、世代に着目して、移民一世たちの植民地体験・戦争体験の語りによるミクロの視点で分析・考察した研究は少ない。ましてや移民一世たちが植民地朝鮮時代、「満州国」時代、そして中華人民共和国時代でたどってきたライフコースや心情などは、まったくといっていいほど知らされていない。一方、朝鮮人「満州」移民研究以外に目を転じれば、世代に着目した研究は多い¹³⁹。

1-2 なぜ対話に着目するのか

移民体験者たちの波瀾に満ちた「生」を一言では表現できない。澤田稔によれば、「唯一の正解がないような問題を扱う場面では、非自立的主体が形成する同調性・協調性ではなく、自立的主体が相互に差異を確認しつつ継続する対話こそが生産的に機能するはずである」という¹⁴⁰。フィールドワークを始めたばかりの頃、「会話」の比重が大きかったが、フィールドワークの経験を積んできた現在は、「対話」の比重を増やすように意識している。筆者は有末の『『会話』と『対話』を分別して使うべきだ』¹⁴¹と提起していることに触発も受け、「対話」を重視するようになった。いうまでもなく、インタビューが「会話」に留まらないで「対話」を深化するためには事前に準備してインタビューに臨むことが求められる。

¹³⁸ 小林多寿子「ミニドカ・ピルグリメージャーオーラルストーリーからみる日系アメリカ人の『記憶の場』」日本オーラル・ヒストリー学会編『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号、2006年、p. 47。

¹³⁹ 例えば、山本須美子の『文化境界とアイデンティティー—ロンドンの中国系第二世代』(九州大学出版会、2002年)、張嵐の『「中国残留孤児」の社会学—日本と中国を生きる三世代のライフストーリー』(青弓社、2007年)、南川文里の『世代の言葉でエスニシティを語る—日本人移民はいかに『日系アメリカ人』になったのか』『移民研究と多文化共生』(御茶の水書房、2008年)、中川恵里子の「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」(『生涯学習基盤経営研究』第34号、2010年)などがある。山本はイギリス社会で生まれ育った中国系第二世代の若者の自己形成過程を、彼らの教育の経験やライフヒストリーを辿りながら検討した。張は第2次世界大戦の後、日本に引き揚げられず中国に残留し、肉親と離れて孤児になった日本人子女である中国残留孤児が日中の狭間でどう生きてきたのかを一世と二世、そして中国人養父母へのインタビューからすくい取り、戦争と日中関係に考察している。南川は世代による話法がいかに移民とその子孫が生きる世界を意味付けたのかという問いを、1950年代から1960年代におけるアメリカ日系二世の動きに着目して論じた。中川は対話的構築主義の立場に依拠して、年配者の生き方の継承について論述し、語りの分析を行った。

¹⁴⁰ 澤田稔「〈脱自〉としてのカリキュラム—バフチン言語哲学による『個性』概念の再検討」『名古屋女子大学紀要(人・社)』第55号、2009年、p. 58。

¹⁴¹ 「会話」は、(1)「挨拶」などの慣習的行為か、(2)自分自身の言いたい事に重点を置かれる発話行為のみの意志伝達行為か、あるいは(3)通常2〜3回から多くて4〜5回の往復で済んでしまう簡単な会話行為に分類される部分がほとんどである。それに対して、「対話」は最低でも1時間、通常2〜3時間はかかるインタビューの状況である(有末賢「ライフヒストリーにおけるオーラル・ヒストリー」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号、2006年、p. 56)。

第2節：移民体験者たちの語りの諸相

今までのインタビューの経験に基づけば、対話を行うためにはインフォーマントとの間である程度の「マクロな歴史」を共有することが重要である¹⁴²。なぜなら、対話は証言だけを得るための営みではない。本章では3人の移民体験者たちの語りを取り上げる。事例の基本状況は以下の通りである。本章ではインフォーマントとの対話のプロセスを重視するため、事例の数には拘らなかった。

事例	氏名	性別	出身地	生年	移住年代
事例1	P Cさん	男性	咸鏡南道洪原郡	1924年	1927年
事例2	L Dさん	男性	慶尚北道善山郡	1927年	1937年
事例3	Z Rさん	男性	全羅北道益山郡	1934年	1945年

事例1——L Dさん

L Dさんは1927年に慶尚北道善山郡に男3人兄弟の末子として生まれ、1937年に一家は移民団に参加して営口安全農村に入った。「満州」に渡った理由は、父親が金融組合にお金を借りて朝鮮人参の栽培を始めたが、朝鮮人参の栽培期間が長く、収穫した頃には朝鮮人参の値段が暴落してしまった。金融組合に借りた金は年利息だけでも120円で、当時、その金は大金で農作業するだけでは返済できなかったため、仕方がなく父親の決断で移民団に参加した。移民団に参加すれば、今までの債務を返済しなくてもいいと朝鮮総督府側にいわれた。当初、家族のみんなは有難く思っていたが、「満州」に渡ってから朝鮮総督府が朝鮮人移民団を募集したのは、関東軍に食糧を供給するためだと分かった。「満州」に渡った後、営口農村学校に通い、1942年12月に卒業し、学校の推薦を受けて海城師道学校に進学した。1944年12月に海城師道学校を卒業し、1945年3月に営口の月城米穀増産隊国民優級学校に赴任した。戦争で日本は負け続けている頃だったため、給料をもらえないで日本の敗戦を迎えた。戦後、農作業をしたり、商売をしたりした後、民族学校の教員を約40年間勤めた。「満州国」時代、教員をやった経歴が汚点になり、「文化大革命」時代、糾弾を受けたという。L Dさんは2014年8月に亡くなった。L Dさんにはインタビュー調査を7回行った。L Dさんにはフォーマルなインタビューのほか、食事をしながらインフォーマルなインタビューも長時間行った。また、中国で長期滞在する期間中に電話インタビューを百数回行った。ただし、本研究では主にフォーマルなインタビューの記録を扱う。

<対話1>

この対話は1次調査で2008年8月23日に行ったインタビュー記録に基づいている。フィールドワークを進むにつれて、インタビューを行う前にインフォーマントに自分がどんな研究をしているかを分かりやすく説明するため、関連資料を事前に渡すようにしている。

¹⁴² もしある程度のマクロな歴史を知らなければ、インタビューのなかで語り手は一般的なマクロな歴史の説明に終始し、語り手の個人の生活史の言及および意味付けが疎かになる可能性がある。

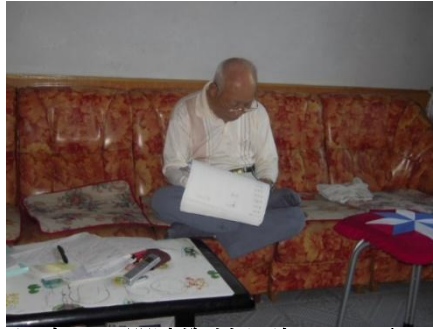


写真 5-1 関連資料を読むLDさん。
筆者撮影。

LD：疑わないでね。君がどんな研究をして最終的に到達したい目標を私にきちんと教えてください。それを知らないと何をいえばいいか分からない。

筆者：はい。分りました。私は今、朝鮮人「満州」移民の生活史について研究しています。

LD：ウズベキスタンに行ったことがあるの？

筆者：ウズベキスタンには行ったことはありませんが、サハリンには2回行きました。

LD：サハリン、樺太だね。かつてサハリンは樺太と呼ばれた。

筆者：そうですね。サハリンはかつて樺太と呼ばれていました。私は日本に行ってから在日同胞に会い、サハリンではロシアに住んでいる朝鮮人に会ってきました。このような自分の体験から、どうして朝鮮人がこんなに散らばっていることに興味を持つようになり、今の研究を始めました。

LD：（渡した資料を捲りながら）黄有福さんと孫春日さんにも会ってきたね¹⁴³。

筆者：LDさんもお会いしたことがありますか。私は一昨年に会いました。2人の先生からアドバイスを頂き、貴重な資料も頂きました。

LD：これで私は安心して話すことができる。「安全農村」の歴史を知ることは、中国と日本だけでなく世界平和にもつながると思うので、私が知っていることを君にすべて話す。

筆者：それでは具体的にお話を聞いても宜しいですか。私は移民三世ですけれども、移民の歴史についてはほとんど知らなかったです。LDさんの移民の生活史について教えてください。

LD：これは朝鮮人の悲慘な歴史だ。移民生活について「営口安全農村」に関する記録がどうなっているか分からないが、「日本の奴ら」が直接支配した朝鮮総督府が、第二次世界大戦で日本軍の食糧供給を保証するために朝鮮八道の朝鮮人を連れてきた。

初回のインタビューでは聞き手の筆者が何者であるのかを問われた。研究のため中国各地をはじめ、ロシアまで行き、いろいろな方に出会ってきたことを伝え、徐々に信頼関係を築くことができた。筆者の発話には良好なラポール（人間関係）を築こうとするさまざまなメッセージが入っている。ホルスタインらによれば、「標準的なインタビューは、一つのインタビューから別のインタビューへ情報が『漏れる』のを食い止めようとするが、これに対してアクティヴ・インタビューではインタビュアーは、これまでのインタビューか

¹⁴³ 黄有福さんは中央民族大学の教授で、孫春日さんは延辺大学の教授である。2人とも朝鮮族研究に関する研究業績が多く、知名な学者として中国朝鮮族のコミュニティで広く知られている。LDさんには2

ら収集され、どんどん増えていく背景知のストックを利用して、具体的な質問を考えたり、回答者がおかれた状況の諸側面についてさらに明らかにすることができる」という¹⁴⁴。筆者はアクティブなインタビュアーを目指し、語り手の語りの吐露を促すように意識した。LDさんは質問を受けて、「これは朝鮮人の悲惨な歴史だ」というコミュニティを代表するキーワードを語りだした後、筆者との相互行為を通して対話が段々と深まっていった。

LDさんは「満州」に渡った後、「営口安全農村」の学校に通い、1941年に優秀な成績で卒業して学校から推薦されて海城師道学校に進学することができた。海城師道学校に通った際の話について聞いてみた。

<対話 2>

筆者：師道学校に行った時、教育実習がありましたか。

LD：行ったことがある。学生たちは必ず小学校に行って1ヵ月間ぐらい、教育実習をしなければならなかった。

筆者：その時代でも教育実習がありましたね。実習は何年生の時でしたか。

LD：2年生の時だった。当時、私たちが行った小学校には教員が6人いた。

筆者：そこで何を教えましたか。

LD：和歌や俳句を教えた。私たちが行ったら生徒たちは喜んでくれた。背伸びして私にとっても難しい習い立ての日本語を生徒に教えた。

筆者：習い立ての日本語を教えたのですね。

LD：難しい日本語を使ったら、能力がありそうに見えると思った。同じ師道学校から10人が行った。

LDさんは師道学校に通った際に教育実習に行った時の経緯を紹介してくれた。LDさんは責任者として教育実習に参加した。教育実習先では背伸びして自分にとっても難しい習い立ての日本語を生徒に教えた。難しい日本語を使えば、能力があるように見えたからだ。その出来事を語る際には、LDさんの顔にはいささか複雑な表情を見せて、対話のなかにはアンビバレントな態度が見られた。自分の意志と関係なく、教育実習に参加したこと自体が間接に日本の植民地支配に加担した。LDさんは海城師道学校を卒業し、1945年3月に営口の月城米穀増産隊国民優級学校に赴任し、代理校長となった。

<対話 3>

筆者：当時「満州国」の教員の給料はどうなっていましたか。

LD：私はタバコの配給をもらったが、給料は正式にはもらえなかった。

筆者：そうでしたか。

LD：給料をもらえないで光復¹⁴⁵した。

筆者：毎月もらうものではないですか。

LD：本当はそうすべきだが、戦争で日本は負け続けている頃だった。

人に会った際に撮った写真を見せた。

¹⁴⁴ ホルスタイン、ジェイムズ&グブリアム、ジェイバー著／山田富秋他訳『アクティブ・インタビュー ― 相互行為としての社会調査』せりか書房、2004年、p. 120。

¹⁴⁵ 1945年8月15日に日本が敗戦した。韓国では日本の植民地統治から解放したことを光復という。

筆者：そうですか。負け続けていたのですね。

LD：玉砕した、サイパンで玉砕したとか、などの報道が多かった。ちょうど私が赴任した時期だった。その前はずっと勝った勝ったといった。給料はもらえなかったが、食糧は月城米穀増産隊から配給してくれた。

筆者：給料がもらえたなら、いくらだったですか。

LD：27円だった。このようなことをいったら、日本帝国主義を美化するといわれるかもしれないが、事実はそうだった。

筆者：いいえ。それは事実なので美化ではないと思います。

LD：事実をいわなければならない。

筆者：その事実や歴史を知らなければならないと思います。

LD：そうだ。そうだ。今の世のなかで隠したらだめだ。

LDさんの植民地経験の語りにはアンビバレントな態度が見られた。いうまでもなく、LDさんの語りは生きてきた個人史に規定されている。LDさんはまだ19歳で、「まだ子どもだった」時に代理校長の「大任」を任されて「地位が高かった」。「満州国」時代の待遇についてのLDさんの語りは、今までは抑圧されて表舞台に出ることはなかったため、マスター・ナラティヴ¹⁴⁶を突き破った新しい語りである。LDさんは「如果你不来啊，也许这些话我一辈子都无法和人说（もしあなたが来なかったら、たぶんこのような話は誰にもいえなかった）」といった。筆者が関心を持って聞き手になったため、LDさんは長年胸に秘めていた複雑な気持ちを語った。戦争の末期、朝鮮人は日本式の名前への変更を強いられた。LDさんの「創氏改名」の体験について聞いた。

<対話4>

筆者：「満州国」時代、名前は日本式に変えられましたか。

LD：「エミツ」に変えられた。

筆者：漢字でどう書きますか。

LD：「エ」は「江」と書き、「ミツ」は「満」と書く。私が名前を付けた。

筆者：え？本当ですか。

LD：兄も小学校を卒業したが、兄がやらないで私に任された。私が辞書を調べて名前を付けた。「江」は「エ」でいいですが、「満」は「ミチ」とも読むし、「ミツ」とも読んだ。私は「エミツ」にした。その名前の意味は、私が朝鮮で住んだ村の名前が「江亭洞」だった。離れた故郷が「江亭洞」であって、着いたのが「満州国」だった。

筆者：そうですか。

LD：その時、李は「木村」に変えられるのが多いが、私はそのルールには従わなかった。朝鮮と「満州」を子孫も永遠に忘れないようにその名前を考えた。

¹⁴⁶ 語りには大別すると、支配的文化が保持しているマスター・ナラティヴ（ドミナント・ストーリー）と、それに同調したり対抗したりするコミュニティのモデル・ストーリーがある。こうしたストーリーは、あるときは個人のアイデンティティ形成や行為の動機を提供するが、またあるときは多様なストーリーを抑圧する権力としても作用する。語りのなかで、ドミナント・ストーリーやモデル・ストーリーに対して使われる、揶揄、哄笑、冗談、照れ、笑いなどは、自分の個別的なストーリーをそうしたストーリーへ回収されまいとする語り手の〈個別化＝主体化〉の実践なのである。そして、そのような実践こそが、新しいストーリー生成の契機になる潜勢力を秘めている（桜井、2002：p. 288）。

筆者：LDさんが名前を付けたのですね。

LD：その時、私は在郷軍人だったが、教員の身分は高かったので、軍事訓練には行かなかった。在郷軍人には日本式の名前が書かれた名札をつけることになっていた。名札の表には「江満」と書き、裏面には「LD」と書いた。当時、何の考えがあったか、そうやることによって満足感を得た。私だけではなく、多くの朝鮮人青年も同じようなことをやっていた。当時、多くの朝鮮人青年は独立思想を持っていたし、反日思想も持っていた。声高に表に出すことはしなかったが、名札に民族の名前を書くことで、自分たちが朝鮮民族であることを忘れなかった。その時、何を考えていたかは分からないが、よくやったと今になっても思う。

筆者：捕まったら大変ではないですか。

LD：捕まったら大変だ。当時は一つの賭け事のようなことをやった。自分が朝鮮民族であることを忘れなかった。

植民地経験を語る表情はさまざまであり、必ずしも悲しく語るわけではない。LDさんは名札の裏に民族の名前を書いたその経験を語る時、時々笑い声を出しながら誇らしげな表情を見せた。LDさんの語りから分かるように、当時、多くの在満朝鮮人はしなやかな抵抗運動を続けた。このような抵抗運動は一種の「生活戦略」¹⁴⁷だったといえよう。LDさんは朝鮮民族であることに誇りを持っていた。日本の植民地統治で「創氏改名」という政策で、民族の名前を変えられることを迫られた時、名前に故郷の漢字を取り入れることにして民族性を保とうとした。また、在郷軍人になった時、名札の裏に民族の名前を書いて日常生活のなかの植民地主義に抵抗した。

<対話 5>

この対話は2次調査の2009年9月18日に行ったインタビューに基づき、インタビューは2009年8月21日の『黒龍江新聞』¹⁴⁸に掲載した記事を対話の主題としていた。

筆者：（新聞を見せながら）この記事を読んだことがありますか。

LD：あまり新鮮味はない。今の時期にこのような記事を報道してもあまり効果はない。

これは古い話だ。これは何十年間ずっと論じてきて証明された事実だ。今の時期に論じべきことは、日本がアジアの人々にどんな被害を与えたか、過去を清算することだ。

日本人のなかには過去について素直に謝罪した人は少なくない。

筆者：そうですね。

LD：南京事件について直接参戦した日本人の老戦士が謝罪したのは少なくない。これは

¹⁴⁷ 桜井厚は生活戦略を「人びとはおかれた状況のなかで、状況をのりこえようとしてそれぞれ固有の立ち向かい方をする。そのときに働かせるのがこうした工夫や知恵であり、特に仕事や暮らしに関わる生活の技法」であると定義している（桜井厚『境界文化のライフストーリー』せりか書房、2005、p. 37）。

¹⁴⁸ 『黒龍江新聞』は朝鮮語によって書かれたエスニック新聞である。この2009年8月21日の記事は、「敗戦64年2つ顔の日本一戦犯参拝を継続する政治家と侵略を謝罪する参戦兵士」というタイトルで、日中戦争に参加した元日本兵である山崎宏さんが、戦後、中国に残って小児科医師として中国人を診察することによって謝罪し続けてきたと書かれている。この対話は新聞記事の信憑性についてではなく、新聞記事を対話の主題とした。山崎宏さんの戦争体験については、（方軍『我認識的鬼子兵』山東画報出版社、2009年）が詳しいので参照されたい。

世界中のみんなが知っている。

筆者：日本ではそれに関する報道もあるし、関連書籍も多いです。

LD：この記事は古い話題であってあまり新鮮味はないと思う。日本では民主党¹⁴⁹が新政権を取ったね。民主党はアジアに対して、友好関係を築き直すといっている。日本の政治についてはよく分からないが、日本が本当にアジアと友好関係を築こうとしたら、真に第二次世界戦争の際にアジアの人々にどんな災難を与え、どう侵略したか、という歴史的事実を認めるべきだ。今はその事実を認める時期だ。もし、認めなければ、この罪は永遠に背負わなければならない。

筆者：私もそうだと思います。まず、過去の過ちを認めるべきだと思います。

LD：大東亜戦争が起きた時、日本は大東亜共栄圏といいだした。その考えからは抜け出さなければならない。

筆者：よくいわれるように、共栄は自分だけの発展だけで相手がいらないです。私が専攻している多元文化では、共存・共生を目指しており、共栄ではありません。共に発展するためには、相手がいなければならないと思います。

LD：そのような視点を持つことはいい。アジアの人々に対して日本の民衆がそのような視点を持てれば、納得できる。

筆者：似たような記事は日本で読んだことがあります。私はこのような記事が日本で報道されたら普通だと思います。中国で報道されていたので興味を持ちました。この新聞はある移民体験者にインタビューした時に私にくれたものです。その方も敗戦直前に徴兵で駆り出されましたが、脱走したのです。確かにこの記事は最初『中国青年報』に載ったと思います。私はこのような新聞記事などを通して、日中間の対話ができるのではないかと考えています。

LD：中国と日本、東アジア全般の人々と日本の問題は、何十年間も議論してきたのに、いまだに解決していない。日本は過去を反省していないかぎり、過去の罪を背負わなければならない。そのことを銘記すれば、対話の切り口にはなるかもしれないが、この新聞記事は新鮮な話題ではない。

筆者：私はこのような記事を初めて読みました。

LD：似た記事は中国に多い。日本人の老戦士が中国にきて謝罪した記事を私は何度も読んだ。私はそのような記事を読んで、日本民族の良さがそこに現われていると思う。正義の前では素直に頭を下げている。そのような精神が必要だ。そのような人は少数であって認めていない人もいるが、認めている人がいることはいい現象だ。

筆者：失礼ないい方かもしれませんが、私は移民体験者たちに聞き取りをして論文を書いています。論文を書いて発表して読む側の大多数を、私と同じく戦争や植民地を体験していない日本、中国、韓国の若い世代だと想定しています。恐らく多くの人はこのような記事を読んだことはないと思います。私が注目しているのは記事の新鮮味ではなく、過去の出来事に対して反省する人がいるかどうかということです。

LD：この新聞記事の主題は「一生謝罪してきた」だ。こう書けば、〔日本と中国の〕連続的な関係になると思う。

¹⁴⁹ 2009年9月16日、自民党から民主党に政権交代した。



語り手のLDさんは終始日本の戦争責任を厳しく迫及した。聞き手の筆者も日本の戦争責任を迫及することに共感しながら、新聞記事を話題にして相互行為を通してインタビューを進めた。このインタビューは2次調査で行い、新聞記事を提示して対話を臨んだ時、LDさんは厳しい表情を見せ、最初対話に対して消極的だった。特に大東亜共栄圏の偽善性を迫及する時の表情は厳しさそのものだった。語り手の反応はいささか聞き手の予想を超えていたため、聞き手は一瞬戸惑った。その後、聞き手は気持ちを立て直して対話を続けた。語り手に「共栄」と「共存・共生」の違いを説明した時、対話が新しい段階に進み、対話を深化することができた。聞き手はこのような新聞記事を用いて、日中や日中韓3国の若い世代間の対話のきっかけをつくる可能性があるかと伝えた。聞き手が注目しているのは新聞記事の新鮮味ではなく、新聞記事のなかに書かれていたように、日本人のなかにも過去の事実に対して謝罪し反省する人がいることを伝えた。語り手も聞き手の思いを感じ取り、新聞記事の新鮮味如何にかかわらず、日本と中国の世代間に対話の可能性があるかと理解を示した。LDさんとは戦争の記憶について度々対話を行った。

<対話6>

筆者：戦争になれば、どの国でもまず民衆が苦しめられると思います。私は直接戦争を体験していませんが、本を読んだり、映画を見たり、そして現場に行ったりして、戦争が民衆にもたらした苦しみや悲しみの大きさを感じ取るようになりました。私は自分だけが分かるのではなく、次の世代にも戦争の記憶を伝える必要があると思います。

LD：それは大事だ。

筆者：私は元朝鮮人「慰安婦」の方にインタビューしたことがあります。しかし、インタビューはほとんどできませんでした。どうして沈黙しているのか、どうして泣くのか、その沈黙の背後には何かがあると思います。

LD：「慰安婦」は言葉で表現できない。言葉で表せないことがたくさんある。苦しみが限界を超えたと思う。

この対話では戦争の記憶の世代間継承をめぐる展開した。聞き手の筆者は、冒頭で自分の観点から戦争の記憶を継承することの必要性を述べた。LDさんは元朝鮮人「慰安婦」と同じ時代を生きてきたゆえに理解を示し、聞き手が持ちかけた元朝鮮人「慰安婦」が沈黙することへの問いに対して自身の考えを述べた。このインタビューの場では、語り手と聞き手が対等な立場で対話が進められ、戦争の記憶の継承の営みが行われた。LDさんの「植民地経験」の語りには現実の生活に関わる話題も含まれている。

<対話 7>

LD：中国にはお金持ちが多いが、私は毎月 2,000 元の年金しかもらっていない。二度もない人生をこのように送っていいのか。私は約 40 年間、教育事業に身を捧げてきた。しかし、食べることのほかに満足できることはない。年金をもらってほとんど食べることに全部使う。年金の 20%ぐらいを生活費に使うべきだが、私の場合はほぼ全部使ってしまう。

筆者：「満州国」時代に教員になったことで、何かの影響を受けましたか。

LD：その影響は大きかった。教員になった経歴が歴史の汚点になってしまった。歴史の汚点になったため、私は重用されない。もし 1949 年に仕事に参加したら、もし解放後にもすぐ仕事に就いたら離休の待遇を受けられた。2001 年に同窓会が開き、関係者 8 人か 9 人が参加したが、参加者のなかで私の地位が一番低かった。

筆者：海城師道学校を卒業したら、みんな学校の先生になりましたか。

LD：はい。みんな小学校の先生になった。1989 年に私は韓国に行ってきた。その時、小さい時に一緒に遊んだ同じ村の友人に会った。彼とはよく議論して喧嘩もした間柄だ。彼に「LDよ、もしあなたが韓国にいたら道議会の議員にもなったのに、今どんな仕事をしているか」と聞かされた。私には不満がある。歌が好きだが、歌う場所がない。食べるもののほかに満足することがない。私は定年してから 20 年以上が経った。私の経歴がそうだから、私を認めてくれる人はいない。誰も私を認めようとしない。そのような社会的な雰囲気になっている。私は定年退職した後、何の役にも立たなくなった。日頃、新聞を読んで私はこのように生きてはいけないと思った。何かを言おうとしたがやめた。私は価値のない人間だ。

この対話でLDさんは「満州国」時代の仕事の経歴があったため、歴史の汚点になって周りに理解してもらえない気持ちを語った。LDさんは文学や哲学にも精通し、歌も上手で優れた才能を持っている。韓国の同じ村で暮らした友人がLDさんにいったように、もし韓国にいたら道議会の議員にもなったかもしれない。その友人の言葉に困っていえば、もし戦乱がなくて移民しなければ、LDさんはきっと別な人生を歩んだはずだと考えられる。LDさんがいうように、「私の経歴がそうだから、私を認めてくれる人はいない。誰も私を認めようとしない。」聞き手の筆者は関心を持ってLDさんに接したため、LDさんが長年の煩悶の気持ちを打ち明けてくれた。

2 次調査の 2009 年 9 月 18 日には、LDさんに筆者が泊まったホテルにきてもらい、泊りながらインタビューを行った。当日、夜 10 時頃までさまざまな話題について対話を続けた。お互いに疲れてきたため、ベットで横になりながらさらに対話を続けた。

<対話 8>

LD：私が学生だった時代、学校にはあまり系（学科）がなかった。しかし、今現在の学問は細分化した。今の時代、情報の流通は速くてコンピューターが発達している。

筆者：そうですね。コンピューターの役割は大きいです。しかし、コンピューターに全部頼るのではなく、やはり直接会って交流することが大事だと思います。世代を超えた対話、歴史文化を継承しながら発展することが大事だと思います。私は移民体験者たちの

記憶を継承して行きたいと考えています。

LD：この複雑な時代で何かを研究するのは難しいと思う。交流と対話は重要だ。自分たちが唯一正しいと思うのは適切ではない。

筆者：そうですね。私もそう思います。

LD：日本語のなかに「切磋琢磨」という言葉があるね。私が学生だった時代、「切磋琢磨」という言葉をよく使った。「qiecuozuomo」、中国語にも似たような言葉がある¹⁵⁰。今の研究を進めてください。我衷心希望啊（心から願っているよ）！

筆者：今の研究は自分の生き方だと考えています。私が教わったある先生から、「生きること自体が研究、研究すること実体が生きること」ということを教えて頂きました。

LD：そうだ。一体になっている。自分が意識して参加すると意識しないで研究することは違う。君はいい研究テーマを選択した。冷戦がどうして終了したのか。問題の半部は解決したが、まだ半分は残っている。鄧小平は「現在中国不要对立要对话」（今中国では対立ではなく対話が必要だ）。中国は特殊でソ連と違う。中国の民主化は緩やかに進めており、後退はしないだろう。古代的文化、現在想用的話、肯定会有不足的地方。爱因斯坦都被否定、别人就不用说了（古代の理論を現代にそのまま援用するのは不足な点もある。アインシュタインでさえ否定されたことがある。他の人はもちろんのことだ。）

この対話はICレコーダーを消し忘れたため、残った2人の眩き、率直の意見交換の記録である。LDさんは冷戦などの国際情勢にも関心を持っており、広い観点で自分の考えを語ってくれた。難しい時代だからこそ交流と対話の重要性をLDさんは強調した。この対話のなかで、LDさんは朝鮮語と中国語、そして日本語を用いて語ってくれた。この対話にはさまざまな声が響き合っていた。LDさんは文学作品を愛読し、歌も好きである。文学と歌をめぐって対話が弾む時もしばしばあった。

<対話9>

LD：私は魯迅の文学が大好きだ。魯迅は偉大な人だ。

筆者：私も魯迅の文学が好きです。魯迅は日本でも広く知られており、魯迅の研究者として竹内好という方がいます。竹内は1943年に大学の教員を務めていた時に徴兵されました。その時、竹内は『魯迅』という同名の小説を書いていたので、ある意味で遺書の形でその小説が出版されたようです。竹内は徴兵された中国にもきたが、幸いに戦死しなかったです。戦後、竹内は魯迅研究を続けていました。魯迅と竹内は批判的な精神を持っており、多くの悩みも抱えていたと思います。中国社会科学院の孫歌さんという方が竹内好研究をしています。孫歌さんは『アジアを語ることのジレンマ』という本を出版しました。この本のタイトルにあるジレンマは、LDさんがよく語る恨（ハン）ではないかと思います。

LD：朝鮮人はみんな恨（ハン）を抱えている。

筆者：そういえば、恨（ハン）を表す歌として『木浦の歌』がありますね。

¹⁵⁰ この語りのなかの「切磋琢磨」をLDさんは日本語と中国語でいった。「qiecuozuomo」は「切磋琢磨」の中国語の発音である。

LD：私は『木浦の涙』¹⁵¹をよく歌った。この歌はただの歌、ただの曲ではない。私の心を動かした歴史を表す歌だ。

筆者：そうですか。私は韓国に行った際に儒達山¹⁵²に登ったことがあります。

LD：私は登ったことがないが、木浦は植民地の大本営だった。木浦から朝鮮人が連れ出され、朝鮮のいい米が奪われていった。それで、『木浦の涙』は普通の歌ではない。人々の思いが込められている歌だ。それを意識して歌うのが木浦の歌だ。もし、それを知らなければ木浦の歌ではない。

筆者：そうですね。当時、1930年代や1940年代、この歌をよく歌いましたか。

LD：はい。この歌を歌う時期はちょうど私が少年期から青年期に入る頃だった。

筆者：『他郷ぐらし』、『旅人の悲しさ』も歌いましたか。

LD：私の人生が旅人の悲しさだった。この歌〔『木浦の涙』〕は他人の生活を描いたのではなく、私の気持ち、私の生活を描いた。その時、希望はなかった。今日も、明日も、希望のない生活を過ごしていた。この歌はまるで私の人生を表しているようだ。

筆者：しかし当時、この歌は自由に歌えなかったでしょうね。

LD：そうだった。ある意味では私たちの人生は波瀾万丈だった。私は日本帝国主義が中国の侵略戦争の末期では、涙を流し、憤激した。そのような時期だった。私は木浦や儒達山に行きたくても行けなかった。私は歌の歌詞の意味が分かるので、特別な思いがあった。どうして儒達山と『木浦の涙』ができたのか。木浦の涙でもいい、木浦の悲しさでもいい、そうならざるをえなかった。

筆者：私は多くの移民体験者にインタビューをした時にこの歌がよく話題になりました。

LD：この歌を聞くとまるで夢みたい。

筆者：どうしてそういいいますか。

LD：その時、私はこの歌を理解する年頃だった。ちょうど18、19歳、多感な時期だった。他の歌も多かったが、ほとんど忘れた。



写真 5-2 『木浦の涙』の歌碑。
筆者撮影。

この対話では最初に魯迅の文学の話題から朝鮮民謡の『木浦の涙』に及び、恨（ハン）

¹⁵¹ 1935年に発売されたこの歌はまたたく間に朝鮮全土を風靡し、朝鮮半島最南端の港町・木浦をロマンと追憶の故郷として一躍有名にした（朴燦鎬『韓国歌謡史（1895—1945）』晶文社、1987年、p. 207）。

¹⁵² 韓国全羅南道の木浦市の儒達山に『木浦の涙』の歌碑が建てられている。2007年6月、筆者は韓国に行った際に『木浦の涙』の誕生のルーツを探しに儒達山に登った。

の話題になった。『木浦の涙』は朝鮮人の恨（ハン）が集約されている歌であり、今日でも国境を越えて朝鮮民族の世界で広く歌い継がれている。この対話ではメタ・コミュニケーションを行う場面が多かった。冒頭で語り手のLDさんが『木浦の涙』はただの歌、ただの曲ではないと語った際、聞き手の筆者は『木浦の涙』の歌碑が建てられた儒達山に登ったことを伝え、共感できる意思を示した。それを受けてLDさんは『木浦の涙』への意味付けを再度行った。また、筆者は同じく朝鮮民族の恨（ハン）を表す『他郷ぐらし』や『旅人の悲しさ』の状況を確認した。「人生が旅人の悲しさだった」や「そうならざるをえなかった」という語りは、植民地統治への恨（ハン）が端的に表れた。

筆者は『木浦の涙』の誕生のルーツを確認するために儒達山に登り、LDさんとマクロレベルの「過去」を共有できたのが、LDさんのミクロレベルの「過去」の語りを紡ぎ出すのに刺激を与えたと考える。LDさんは『木浦の涙』という歌を通して植民地と戦争を体験した心情を語った。エリクソンのアイデンティティの理論を引くまでもなく、18、19歳という多感な時期に出会った『木浦の涙』という歌は、LDさんのアイデンティティの形成にも大きな影響を与えたようだ。LDさんは人生哲学を語るのが好きで、ソクラテスやカントの言葉なども適宜に織り交ぜてさまざまな話題が対話の素材になった。

<対話 10>

LD：今、君は大事な研究をしている。

筆者：今まで私は日本人と中国人、そして韓国人に話を聞いてきました。また、スポーツ交流を中心とした交流にも参加してきました。65億人がいれば、65億人の視点がありますね。日中韓の間では戦争と植民地の問題があり、関係が一向に良くなりません。私は交流と対話があつてからこそ、相互理解ができると思います。今、国際化時代ですが、本当の対話にはなっていないような気がします。今日、東アジアの相互関係が良くないので、他の地域の人から笑われるかもしれません。

LD：もし、私が月に移民して月の上から地球上のことを見たら、日中韓の人々、日中韓の学者が喧嘩している。距離が視角を産む。自分の位置を離れて物事を見るべきだ。

筆者：離開自己的位置看问题（自分の位置を離れて物事を見ることですね）。私は今、多元文化教育論を専攻しており、研究を通して日中韓の共存・共生の在り方を追求しようとしています。日中韓3国が仲良くするためにどうしたらいいでしょうか。

LD：月の上に登ってこの3国を見なければならない。

筆者：月の上に登って3国を見るのですか。

LD：物事を見るためには、距離をおかなければならない。

筆者：傍観者清（隣で見るほうが、当事者よりはっきり見える）ですね。

LD：そうだ。そうだ。もし、月に移民した研究者がいたら日中韓3国におけるいろいろな問題がはっきり見えているはずだ。日本の研究書は東アジアで一番価値があると思う。

筆者：そうですね。日本にはたくさんの優れた研究書が出版されています。また、日本には良心的な学者が多いです。これは別に美化するつもりはありません。日本国内はもちろん、中国と韓国でも知る必要があると思います。同じく中国にも韓国にも良心的な学者も多いです。

LD：中国に頭のいい人がいないわけではない。中国の文化は豊富多彩だが、中国の文化は遮断されている。これからは外国と中国との交流、古代と近代との交流が必要だ。医

者が病気をたくさん診療して病気をよく診断できる。勉強する人としらない人ではその点で違う。他人の意見が合うかどうかを一旦おいて、まず相手の意見を聞くことが重要だ。いろいろな角度から物事を見てからこそ物事がはっきり見えてくる。他人の意見がいいか悪いかを選別しないで、まず聞いてみるのが大事だ。

筆者：そうですね。他人の意見を聞くのは大事です。LDさんしか分からないことがあります。今まで政治家たちの声は現われましたが、一般の民間人の低い声はほとんど現れませんでした。私は65億人にインタビューすることは不可能です。限られた人たちですが、一人一人の視点を深く掘り下げる必要があると思います。現段階で私は約100人に話を聞いてきました。私とLDさんとの間は、移民三世と移民一世との対話でいろいろな視点が交差しています。

LD：私がどんな視点で話すか。私の視点は違う。私の考え方は学校で学んだことではなく実際の生活から得た。

筆者：先ほどの病気診断の話は興味深かったです。どうして日中韓3国がこんなに誤解や憎しみが多いのでしょうか。私の考えではお互いに既成観念を持って物事を見ているのではないかと思います。

LD：そうかもしれない。最近、私はキリスト教会に通い始めた。そこで、私は感じたことがあった。キリスト教を信じれば病気を治すことができる。これは嘘ではない。誠意を持って信じれば病気が治る。私が病気になったため、子どもたちが私に教会に行くことを勧めてくれた。心理作用と生理作用で、病気を治すのは一理があると思う。

筆者：私は宗教を信仰していませんが、そのような考え方もありますね。

LD：他人の意見を無条件で否定しては良くない。中国には儒教や道教などがある。自分ができるから他人を否定してはいけない。如果我不接受你的意見、你不接受我的意見（もしあなたが私の意見を受け入れない、私があなたの意見を受け入れないとすれば）社会は分裂してしまう。中庸之道は弁証法だ。

筆者：中庸之道は弁証法ですね。

LD：何かを解決しようとしたら、中庸と折衷を離れたらいけない。喧嘩になってしまう。喧嘩して問題を解決できない。

LDさんは強い信念を持っており、自分の考え方を簡単に折り曲げなかった。毎回、インタビューに真剣に向き合い、率直に自分の意見を語ってくれた。LDさんは病気を患っており、いろいろな人生体験をしたため、「これからは外国と中国との交流、古代と近代との交流が必要だ。医者が病気をたくさん診療して病気をよく診断できる」というような人生哲学を語り、交流の重要性を強調した。この対話ではさまざまな関係性について展開できた。筆者の日中韓3国が仲良くするためにどうしたらいいかという質問に、LDさんは月の上に登って3国をみるという建設的な回答を返してくれた。LDさんは波乱万丈の人生を生き抜いたため、日中韓3国の複雑な関係を1国1民族でとらえないトランスナショナルな視点を持っていたと考える。また、国や民族、そして個人間の相互関係をよくするためには、中庸と折衷を離れたらいけないと強調した。

LDさんは筆者の研究に理解を示し、インタビュー調査にはいつも積極的に応じてくれた。インタビューを行うと、故郷の話がよく登場し、故郷を流れる洛東江がよく登場する。2013年3月23日、LDさんを再度訪ねた際に洛東江が話題になった。

<対話 11>

LD：『洛東江』はただの詩ではない。詩を書いたその人の心であり、血だ。

筆者：ええ。私は洛東江に行ったことがあります¹⁵³。

LD：私は国家のために思想家のように話していると思われるかもしれない。

筆者：いいえ。

LD：私は思想家ではない。私はただ故郷を恋しくて、故郷を懐かしくて話すだけだ。私は誰の指示を受けて政治意識が生まれて、国家のために、民族のために、人民のために、奉仕する政治家ではない。

故郷の話になったらLDさんはいつも目が輝き、熱く語る。LDさんは故郷に対して強い思いを抱いている。自然の河である洛東江と詩である『洛東江』は、LDさんの記憶に根付いているようだ。エリクソンの言を借りれば、移民体験者たちは「自分の住みなれた土地から根をひきぬいてしまうような悲痛な気持ちで移住の決意を行った」といえよう¹⁵⁴。筆者が実際にインタビューを行った約 100 人の移民体験者たちのなかには、望郷の念に駆られている方が多かった。故郷はいつまで経っても移民体験をした人々にとって特別である。LDさんは生前ほとんど毎日欠かさずに、KBSの目玉テレビ番組である『私の故郷 6 時』を見ていた¹⁵⁵。LDさんは「満州」に移住してから 70 年以上が経っても、故郷を熱く語り続けていた。「○○のために」ではないことを 3 回も連発したように、LDさんは中国人というナショナルな立場でもなく、朝鮮民族というエスニックな立場でもなく、個人の立場で故郷への思いを語っていると強調した。

これまでLDさんには 7 回インタビューを行い、百回を超える電話での交流があったため、LDさんは筆者の研究を熟知しており、高い関心も示してくれた。

<対話 12>

LD：君はいい研究テーマを選んだ。誰 1 人の意見を絶対化しないこと、誰 1 人の意見を無視しないこと、さまざまな視点で物事を見るべきだ。

筆者：私 1 人で研究しているのではなく同じような考えを持つ方々と研究を進めています。

LD：大体人間は物事を見る際にこれは必ずこうだ、それは必ずそうだと決め付ける。このやり方をやめなければならない。物事を絶対化しないほうがいい。私の命はもうすぐ消えてしまうと思う。人の命のことを考える時、屈辱の人生を持つ人、何かを目指して成功したい人、人間は誰でも不足な点がある。その不足な点を克服するためには、物事を絶対化しないことだ。他人からの多くの意見を聞き、さまざまな角度で考え、またその意見を参考して絶対化しないことだ。それによって自かでの考えの幅を広げ、見識を広げ、物事を見る視野を広げてほしい。

¹⁵³ LDさんにインタビューを行った後、フィールドワークを行うために韓国に行った際に洛東江を訪ねた。追跡調査を行う際、韓国で撮った洛東江の写真をLDさんに見せた。洛東江についてLDさんと筆者との間では、背景知識の共有がある程度できていたと考える。

¹⁵⁴ エリクソン, E. H. 著／鐘幹八郎訳「現代における同一性と根こぎ感」小此木啓吾編集・解説『現代のエスプリ アイデンティティ』至文堂、1974年、p. 124。

¹⁵⁵ 実際LDさんを訪ねた際、この番組と一緒に見たことがある。LDさんがこのテレビ番組を見る際にはテレビを食い入るように真剣に見ていた。

筆者：私はこの移民研究を始めてから数年が経ちました。その間、私はたくさんの方々に会ってきました。知る喜びを実感しながら複雑な気持ちにもなりました。前もいったことがあると思いますが、私の父方の祖父母は「自由移民」で 1920 年代に中国に移住し、母方の祖父母は 1937 年に「集団移民」で移住しました。後で知ったことですが、母方の祖父母が移住した地域は元々中国人が住んでいた所です。朝鮮人が移住することによって、中国人は別な所に行かなければならなかったのです。

LD：朝鮮人は罪人ではないけれど罪人だ。

筆者：何か哲学的な言葉ですね。

LD：そうではないか。朝鮮人が中国人を追い出したのではない。しかし、朝鮮人がそこに住み込んだ。

LDさんは会うたびに「君はいい研究テーマを選んだ」という。この語りはLDさんが自分たち移民体験者の声を聞いてくれたことへの評価だと考えられる¹⁵⁶。2013 年 3 月にLDさんを訪ねた際に半分寝たきり状態で体がだいぶ弱っており、一つ一つの言葉を噛みしめながらゆっくり語った。この最後のインタビューではLDさんの遺言を扱った。対話のなかでLDさんは繰り返して物事を絶対化しないことを強調した。それは聞き手へのメッセージだけではなく、アンビバレントな願望でもある。「人の命のことを考える時、屈辱の人生を持つ人」と語ったように、LDさんは屈辱の人生体験をした。「帝国臣民」として朝鮮半島から「満州」に移住し、「満州国」時代に教員をやったことが汚点になって孤独な余生を送ることを強いられた。LDさんは屈折した人生体験をしたためか、聞き手のアンビバレントな気持ちを汲み取り、「朝鮮人は罪人ではないけれど罪人だ」と意味付けを行った。この言葉は朝鮮人「満州」移民が置かれていた複雑な立場を的確に表したといえよう。

事例 2——PCさん

PCさんは 1924 年に咸鏡南道洪原郡に男 2 人、女 1 人の 3 人兄弟の末子として生まれ、1927 年に家族とともに「満州」に渡った。「満州」に最初に入ったのは吉林省長白の直寿村だった。「満州」に渡ったのは 1919 年の「三・一運動」にリーダーとして参加し、朝鮮総督府に命を狙われ、「亡命移民」として先に「満州」に渡った親戚に頼りにきた。

小学校は長白の一道岡国民優級学校に通い、1940 年に卒業して通化第 1 国民高等学校に入った。学校には鮮系クラス（朝鮮人クラス）と満系クラス（中国人クラス）があった。1943 年頃、朝鮮人クラスを単独分離して通化第 3 国民高等学校を成立した。1944 年、20 歳になる年の在学中に召集令状が届いた。その後、舒蘭県の訓練所で訓練を受けて 1945 年 3 月に入隊した。入隊したのは関東軍 515 部隊だった。初年兵として送り込まれたのはフルキだった。1945 年 5 月末頃、初年兵の訓練が終わってから本隊に行った。当時、関東軍はソ連軍と対峙していたため、ソ連との戦争に備え、部隊は大興安嶺に行って密林のなかで塹壕を掘り続けた。1945 年 8 月 13 日、撤退との連絡を受けて密林のなかから駅のある所まで出てきた。「私たちが汽車に乗ってチチハルの方向に向かったが、途中で鉄道が爆

¹⁵⁶ 2013 年 3 月、LDさんが入っている養老院を訪ねた際にLDさんは筆者に 300 元を渡して、「ご飯でも食べなさい」と丁重にいった。それを断ったらLDさんは真剣な顔で、「私のような使い物にならない人に時間をかけて会いにきてありがとう」といった。

撃されて汽車が動かなくなった。歩く途中でソ連兵に武装解除されて捕虜になった¹⁵⁷。歩いてチチハルに向う途中、鉄道沿線にある軍官たちの住宅の前で彼らの家族が捕虜になった日本兵を見送っていた。女性たちと子供たちは泣いたり、叫んだりしていた。本当に悲惨だった。これは悲劇ではないか」という。9月中頃までにチチハルにいて、9月末に約3,000人の捕虜たちが汽車に乗せられてシベリアのクラスノヤルスクに運ばれた。シベリア抑留期間中にクラスノヤルスク地区捕虜収容所の朝鮮人中隊の中隊長に選ばれた。シベリアで約3年半抑留された後、1948年12月に中国に帰った。帰国後、地元の中学校のロシア語の教員をはじめ、村の村長を務めたり、中学校の校長を長年勤めたりした。2010年3月8日に初めてP Cさんに会い、2次調査は2010年3月25日に実施した¹⁵⁸。

<対話1>

筆者：P Cさんが移住した時期は、「韓国併合」を経て朝鮮半島が日本の植民地になりましたね。中国に移住した理由を聞いたことはありますか。

P C：私の故郷は咸鏡南道の洪原郡だ。「三・一運動」のことは知っているね。

筆者：1919年に起きましたね。

P C：父親が「三・一運動」に参加した。リーダーではなかったが、積極的に参加した。そのため、注目されて警察に捕まって拷問を受けて全身が痣だらけになった。親戚がリーダーとして「三・一運動」に参加し、日本の警察に命を狙われたので亡命するために中国にきた。その親戚が先に中国にきて、朝鮮より生活がしやすいと手紙を書いたようだ。我が家はその親戚に頼ってきた。長白県に入った朝鮮人はほとんどが畑作農民だった。

筆者：水田はなかったですね。

P C：水田はなかった。8歳の時に母親が死んだ。回虫病で死んだ。今だったら簡単に治る病気なのに、当時は治す術がなかった。私たちが最初に入ったのは長白県の直寿村という所だった。最初の頃、そこに朝鮮人は3、4家族しかいなかった。食べ物は主に小麦とジャガイモだった。

筆者：そうでしたか。話を少し戻しますが、お父さんが「三・一運動」に参加して拷問を受けたのですね。

P C：はい。全身が痣だらけだった。

筆者：その痣の跡が残っていましたか。

P C：はい。痣の跡が残っていた。

筆者：拷問が厳しかったようですね。私は韓国に何回か行ったことがありまして、その際に一度バゴダ公園に行ってみました。

P C：バゴダ公園、聞いたことがある。

¹⁵⁷ 一般にシベリア抑留というと、太平洋戦争（1941年12月～45年8月）の最終末期に突如、対日参戦したソ連軍が、戦後、投降した関東軍将兵約64万人をシベリアなどソ連各地に拉致・連行して、過酷な強制労働を科したことを指す。（中略）現実はその中に、日本人名を名乗る朝鮮人兵士が約1万人も含まれていた（白井久也「朝鮮人元シベリア抑留兵は訴える」『世界』No. 793、2009年、p. 237。）

¹⁵⁸ 筆者は2011年から2013年までに中国で長期滞在する機会があり、期間中にP Cさんに対して4回の追跡調査を行った。

この対話ではP Cさんは家族が「満州」に移住した理由を言及した。「三・一運動」は大きな歴史的な出来事である。筆者はインタビューを実施する前にすでに韓国のバゴダ公園を見学したことがあるため、「三・一運動」が起きたマクロな歴史背景を共有していた。P Cさんは父親が「三・一運動」に参加して拷問を受けて全身が痣だらけだった被害の家族史を、感情の起伏をほとんど見せずに淡々と語った。1944年、P Cさんは在学中に召集令状がきて翌年入隊したという。

<対話2>

P C：同じ分隊の兵士は九州からきた者が多く、流氓（与太者）も数人いた。

筆者：え？流氓（与太者）もいましたか。

P C：人がいなかったの、根こそぎで連れてきただろう。日本の温かい地域から連れてきた人が多く、寒さには弱くて夏でも帽子をかぶっていた。私たちは苦労した。戦壕を懸命に掘って休憩する時に〔戦壕〕の外に出た。密林のなかでちらちらと輝く空の星が見えた。星を見ながら、私たちは早く戦争が終わって家に帰りたいと願っていた。分隊のなかには与太者が5人もいた。与太者はみんな悪い人ではなかった。彼らは講義気（男前だ）。与太者たちは物を盗むのが得意だった。戦壕を掘る場所から約 10 キロ離れた所に中隊の倉庫があった。夜になったら与太者たちはその倉庫に行き、水飴やビスケット、そして米などを盗んできてみんなで一緒に食べた。腹いっぱい食べた。よく考えれば、与太者たちは講義気（男前だ）。

この対話でP Cさんは与太者たちと戦壕を掘り、星を見ながら戦争が早く終わって家に帰りたいと話したエピソードを紹介した。与太者たちが中隊の倉庫に行き食べ物盗んで食べたエピソードを紹介した時、P Cさんは笑いながら語った。この短い対話のなかでP Cさんは変化に富んだ表情を見せてくれた。P Cさんは自分を徴兵した日本の為政者を「日本の奴ら」と呼び、自分と同じく無理矢理に徴兵された与太者たちを「与太者はみんな悪い人ではなかった」と意味付けた。P Cさんの語りのなかでは、さまざまな日本兵がよく登場する。

<対話3>

P C：私たちはシベリアに捕虜として送られた。一般の日本兵は私たちと同じく戦争を嫌っていた。日本が敗けて良かったという人もいた。特にソ連軍の兵器を見た時に敗けたと彼らはいった。

筆者：このような話は初めて聞きました。日本人は武士道精神があって、最後まで戦ったような話が多いと思いますが、日本人だからみんな戦争が好きなわけではないですね。

P C：私は515部隊第4中隊の所属だった。第4中隊の分隊長に長谷川という人がいた。彼は沖縄で招集された。長谷川は優しい人だ。日本人の軍官はよく人を殴ったが、彼は人を殴らなかった。入隊して8年経ったのに、まだ上等兵で星は3つしかなかった。彼は話をするのが好きで、いろいろなことを話してくれた。

この対話のなかでP Cさんは自分と同じく戦争を忌み嫌う日本兵に出会った体験を語った。それに対して聞き手の筆者は自分の意見を述べ、対話は語り手と聞き手との相互行為

のなかで進行した。この対話のなかでP Cさんは日本兵のなかにも「日本が敗けて良かったという人もいた」と回想した。もし、聞き手の反応がなかったら、沖縄からきた長谷川という人物は語りのなかで出てこなかっただろう。具体的名前を持つ長谷川という人物が、対話のなかに出てくるのは偶然のコミュニケーションによって構築されたといえよう。本研究目的の1つは移民一世たちの「植民地経験」を継承し、語り継ぐためである。P Cさんに若い世代に伝えたいことを聞いた。

<対話4>

筆者：私たち若い世代に伝えたいことはありますか。私は移民三世で朝鮮族です。私は日本や韓国に行って伝える機会があります。

P C：〔約3秒間の沈黙を経て〕特にないが、民族間で互いに理解し合って、かつてのように民族間で先入観を持って民族差別したり、人を見下したりすることをなくさなければならぬ。

筆者：具体的にどうすればいいのかを私は悩んでおり、考えています。私は少し勉強して理解しているつもりですが、先生は直接体験をして長年の具体的な体験がありました。具体的にどうすれば、過去を乗り越えられると思いますか。

P C：沈黙¹⁵⁹

筆者：ご子息や孫さんたちに先生の歴史を伝えたことはありますか¹⁶⁰。

P C：〔頭を軽く横に振って約3秒間の沈黙を経て〕私は無理やり徴兵されて連れて行かれた。しかし、日本人、一般の日本人にはむしろ好感を持つようになった。〔シベリアで〕一緒に生活したなかで民衆と民衆の間では永遠に仲良くしなければならないと思った。

筆者：徴兵は無理やりだったのですか。

P C：軍官たちのなかには、確かに乱暴な人がいた。しかし、一般の兵士とは名前を呼びあったりして親しくしていた。朝鮮人中隊が成立した後、かつて一緒に〔宿舎で〕共に生活した日本人に会ったら、大きな身振りで喜んでくれた。〔1948年に〕クラスノヤルスクからハバロフスクに移動して、別れる際に泣いてくれた人もいた。私の個人的な体験では、一般の兵士、多くの日本人とは仲良くできた。

筆者：泣く人までいたのですか。

P C：日本人は豊かな感情を持っている。

筆者：お話を聞いて過去のことが分かり、過去を乗り越えられると思いました。過去を分かってからこそ、過去を乗り越えられると思います。

P C：唐代があったね。その時代、日本からたくさんの日本人が中国に留学してきた。

筆者：遣唐使の時代ですね。

P C：数年前に一度青島に行った。そこから約2時間もバスに乗ってある大きなお寺に行った。ガイドの説明によると、唐の時代そこに日本人留学僧が300、400人いた。その

¹⁵⁹ 語りの進行途中で語り手が沈黙したとき、それは必ずしも語りの終結を意味しないばかりか、そこで語りの流れを支持する質問も不要に感じられるときがある。（中略）したがって、インタビュアーは語り手の熟考をまつためにも、十分な沈黙の時間を確保する必要がある（桜井、2002：p.266）。このインタビューを行う時点では、筆者はインタビューのなかの沈黙について深く考えてこなかった。今後、インタビューのなかの沈黙についても留意する必要があると考える。

¹⁶⁰ P Cさんとの雑談の際にご子息や孫さんたちにシベリア抑留の体験談をしたかを確認したら、ご子息や孫さんはその歴史についてあまり関心がないので、まだ語っていないという。

時代、日本人は中国から多くのことを学んでいた。

筆者：遣唐使のことですね。

P C：〔約 2、3 秒間の沈黙を経て〕シベリアで私は日本人から日本の文化や料理などについて学んだ。カステラの作り方も教えてもらった。〔ロシアの〕古典についても多く学んだ。いろいろなことを教えてもらった。

インタビューの冒頭で聞き手の筆者はインサイダーとアウトサイダーのポジションにあることを伝え、聞き取りの内容は中国だけではなく日本や韓国でも伝えることを説明し、対話を朝鮮族のコミュニティの内だけに閉ざすことなく、国境を越えて開かれた対話を目指した。インタビューは相互作用を通して進めて行き、P Cさんの語りはシベリア抑留の話から遣唐使の話に及んだ。その後、話題が再度シベリア抑留の体験談に戻り、日本人に日本文化や料理、そして古典を教えてもらった体験を語った。語りは台本が決まったようにすらすらと産出したわけではなかった。インタビューのなかでP Cさんは沈黙する場面が多かった。この対話のなかで聞き手との相互行為によって、「一般の日本人にはむしろ好感を持つようになった」や「日本人は豊かな感情を持っている」などの語りは、沈黙の後に語り出した。このような語りは今までのマスター・ナラティヴやモデル・ストーリーを突き破った新しい声である。もし、このような新しい声が生み出された時、聞き手がその声を無視したり、否定したりしたら語り手は語る意欲を失い、新しい語りは産出しなくなると考えられる。

P Cさんとの対話はシベリア抑留にめぐって行く場合が多かった。次の対話ではシベリア抑留体験の日常生活について行った。

<対話5>

筆者：何時頃に起きましたか。

P C：4時頃には起きなければならなかった。

筆者：ご飯は何時頃に食べましたか。

P C：5時に出かけるために、朝食は4時頃に食べた。夜食は7時頃に食べた。

筆者：そうですか。夜、すぐ寝ましたか。

P C：寝た。いや。まだ学習しなければならなかった。

筆者：学習もしなければならなかったですね。

P C：個別に学習していた。ロシア語を勉強する人もいたし、新聞を読む人もいた。

筆者：夜は何時頃に寝ましたか。

P C：大体8時か9時頃に寝た。朝5時に出かけなければならなかったから。

筆者：そうですか。4時に起きて5時には出かけたのですね。

P C：そうだ。朝5時になったら銃を持つソ連兵の監視の下、私たちは列を並んで工場に行った。工場に着いたらソ連兵は私たちを工場側に引き渡した。

筆者：シベリア抑留についてどう思いますか。何か反感や怨みはありませんか。先ほど手紙を出したいといいましたね。

P C：私は日本人の住所が分からない。住所が分かれば連絡したかった。住所も分からないし、名前も分からないからもう連絡する術はない。クラスノヤルスクにもう一度行ってみたい。しかし、お金もないし、もう歳だから永遠にその機会はないだろう。

筆者：私も一度は訪ねてみたい所です。

P C：バイカル湖にも行ってみたい。〔1945 年〕9 月末にバイカル湖を渡った。クラスノヤルスクに着いた時、すでに雪がたくさん積もっていた。

この対話の前半では P C さんがシベリア抑留体験を語った。聞き手の筆者はその体験に共感をしながら対話に臨んだ。この対話の後半で P C さんは「クラスノヤルスクにもう一回行ってみたい」と語った。重いシベリア体験をされた所、どうして行きたいと思うだろうか。「クラスノヤルスクにもう一回行ってみたい」という一見理解しがたい語りには複合的なメッセージが含まれており、いわば、「二つの声を持った言葉」¹⁶¹であるといえよう。実証的アプローチではこのような整合性がないと思われる語りは排除してしまう。しかし、対話的アプローチで語りを紡ぎ出された時には、いかに小さな語りでも耳を傾け、細心の注意を払う必要がある。

インタビューを行う当日、昼食を食べながら行ったインフォーマル・インタビューで P C さんは、「日本の首相に手紙を出したい」とつぶやいた。徴兵に駆り出してシベリア抑留までされたのに、戦後は何のお詫びや補償もないことに異議があるという。また、シベリア捕虜収容所で出会った日本人の名前や住所が分かったら、手紙を出したいともつぶやいた。このフォーマル・インタビューのなかの「手紙」は、メタ・メッセージ¹⁶²になったといえよう。P C さんは徴兵されて戦争体験を持つため、次の対話ではずばり「慰安婦」問題について話を伺った。

<対話6>

筆者：少し難しい話になりますが、「従軍慰安婦」についてお話を伺いたいと思います。私は東寧県で元朝鮮人「慰安婦」の方に会ったことがあります。しかし、あの方は泣いたり、体が震えたりしてほとんどインタビューはできませんでした。その後、韓国の「ナヌムの家」¹⁶³にも行ってきました。恐らく「ナヌムの家」については聞いたことがあると思いますが、元朝鮮人「慰安婦」の方々が暮らしている施設です。

P C：「慰安婦」は各部隊にいた。「慰安婦」のなかには日本人と朝鮮人、そして中国人もいた。兵士たちは1ヵ月に1回か2回、「慰安所」に行った。〔慰安所の前で〕みんなが列を並んで待っていて、1人が性関係を終わって出たらもう1人が入っていった。

筆者：行ったことはありますか。

P C：私はまだ初年兵の訓練が終わっていなかったのので、「慰安婦」と性関係を持つことはできなかった。もし、私が初年兵の訓練が終わったら、「慰安婦」と性関係を持ったかもしれない。

筆者：まだ、初年兵だったからですか。

P C：訓練が終わらなければ、その待遇を与えてくれなかった¹⁶⁴。それは待遇だった。

¹⁶¹ バフチン、ミハイル著／望月哲男、鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫、1995 年、p. 373。

¹⁶² あるメッセージが持っている本来の意味を超えて、別の見方・立場からの意味を与えるメッセージ。

¹⁶³ ナヌムの家（朝鮮語で「分かち合いの家」の意味）は、韓国京畿道広州市にある元朝鮮人「慰安婦」のハルモニ（おばあさん）たちが共同生活する福祉施設である

¹⁶⁴ 「慰安所」は日本軍の階級組織の中での最下層にあたる初年兵たちには与えられなかった。（中略）階級の1 番下から数えて2 番目にあたる二年兵には、2 番目であることの特権として「慰安所」に行く資格

冒頭で筆者は「慰安婦」問題について取り組みの姿勢を示した。P Cさんは軍隊に「慰安所」があったことを証言し、軍隊に慰安所を設ける制度はでたらめだと意味付けた。P Cさんは徴兵された被害を受けており、「慰安婦」にされた女性たちが悲惨であると同情を示した。その一方、P Cさんはもし初年兵ではなかったら、慰安所に行ったかもしれない自身が持つ加害者性も語り、自省的に過去を振り返っていた。P Cさんは徴兵されたがゆえにシベリア抑留された。P Cさんはその体験を独自の解釈を行った。

<対話 7>

P C：これは因縁ではないか。日本人たちによれば、「汽車のなかで会うのは縁である」¹⁶⁵という言葉がある。

筆者：はい。縁（えにし）ですね。

P C：因縁があった。

筆者：縁、因縁ですね。

P C：運命が同じなので、お互いに気持ちの共有ができた。

筆者：運命共同体といえるでしょうか。

P C：そうだ。捕虜として連れて行かれて、あんな寒いシベリアで強制労働をされた同じ運命を持っている。それで、お互いに共感できるし、思いやることもできた。〔約3秒間の沈黙〕私は教育事業に参加して、指導者を何十年間も務めた。今考えてみれば、シベリアで苦労も多かったが、得るものも多かった。私は500数人の朝鮮人捕虜を率いて仕事を分配したり、生活の面倒をみたり、学習をさせたりした。その経験〔シベリア抑留体験〕から得られたことは多かった。

筆者：捕虜を指導したのですね。

P C：後に〔学校で〕指導する際に大局的に物事を考えることは、その経験から得られた。

物事を自分に置き換えて考え、全面的に分配する。その才能はその経験から得られた。

筆者：経験、経験ですね¹⁶⁶。

P C：もし、日本に行ってシベリアと一緒に労働した人たちに会ったら、私は〔みんなを〕忘れていないこと、〔みんなが〕幸せでいてほしいと思っていることを伝えてください。

この対話で語り手と聞き手は朝鮮語と日本語を交互に交えながら、対話を進めていったのが特徴である。P Cさんにとってシベリア抑留は大きな転機だったためか、P Cさんはさまざまな表現でシベリア抑留について意味付けていた。シベリアに抑留され、厳寒のなかで強制労働をさせられたのは、耐え難いことだったに違いない。しかし、P Cさんはその苦労のなかで得た経験が、教育機関で働く際に役に立ったと考えている。この対話のなかでP Cさんは違う角度で戦争体験を意味付けていた。つまり、P Cさんは同じ出来事に対して違う2つの評価を下した。1つはP Cさんが日本人捕虜との連帯を示し、世間で一般

が与えられたと考えられる」（古橋綾「日本軍『慰安所』制度とセクシュアリティー—日本軍将兵による『戦争体験記』に着目して」立命館大学コリア研究センター編『コリア研究』第4号、2003年、pp. 68-69。）

¹⁶⁵ この語りは日本語で語った。語りのなかの汽車はシベリアに捕虜を運ぶ汽車だと考えられる。

¹⁶⁶ インタビュー記録を確認したところ、聞き手の筆者は2つの経験をそれぞれ日本語と朝鮮語で返答していた。インタビューの場で無意識的に発した言葉である。

的に語られているシベリア抑留体験の「モデル・ストーリー」に沿い、「捕虜で連れて行って、あんな寒いシベリアで強制労働された同じ運命を持っている」と語った。シベリアで同じ運命を持つ日本人たちに出会い、厳しい環境のなかで友情が芽生えた。もう1つはシベリア抑留体験から「得るものも多かった」と語り、今までほとんど語らなかった新しい語りを産出した。過去の体験について聞き手が興味関心を聞くと、P Cさんは語り続けた。

<対話 8>

P C：私が見てきたかぎり、日本の軍国主義は良くないが、一般の民衆は悪くない。一緒に生活してみてもみんな親しくできた。朝鮮人中隊が成立してから、朝鮮人は1ヵ所に集められた。その前、かつて酷いことをした班長や軍官たちは毎日ように罰せられた。私たちに酷いことをしたと罰した。厳しくやつつけられた人が多かった。

筆者：シベリアで。

P C：しかし、一般の兵士たち、特に後で連れてこられた年をとった人たちはいい人が多かった。みんないい人だった。

筆者：学校の先生もいましたね。

P C：はい。大学の先生もいた。みんないい人だった。日本人だからみんな悪いとは限らない。〔約3秒間の沈黙を経て〕今、日本人はみんな悪いといわれているね。私の体験では全く違うと思う。

筆者：そうですね。今の〔中国と韓国の〕社会的な文脈では、一般的に日本が加害者で中国と韓国が被害者であるという言説があります。しかし、小さな歴史、つまり個人の歴史はあまり出てこなくて二項対立になっています。（中略）

P C：われわれチョソンサラム（朝鮮人）と中国人は先入観を持って、かつての日本軍国主義が犯した罪を日本の一般民衆に負わしては良くない。いつまでも民衆と民衆との間は、永遠に友好関係を結ばなければならない。〔友好関係を〕結べる基盤はあると信じている。人間同士はみんな心が通じ合う。

筆者：民衆レベルでは心が通じ合うのですね。

P C：そうだ。通じ合う。私はシベリアで親しくした日本人が多かった。腹を割って話し合ったり、家族のことも話したりした。

筆者：家族のことも話題になったのですか。

P C：はい。自分たちの妻の話や両親の話もしてくれた。夜、横になったら夜遅くまで話し続けた。

筆者：朝鮮人と日本人は別々に寝泊まりしていたのではなかったのですか。

P C：朝鮮人中隊が成立する前までは、朝鮮人と日本人は同じ所にいた。

筆者：同じ所で寝泊まりしたのですか。

P C：同じ収容所にいたので、みんな知っていた。労働する場所でも日本人と朝鮮人は一緒にいたので、その時は会っていた。その後〔朝鮮人中隊として分かれた後〕、お互いに出会ったら喜んでいた。

この対話の冒頭でP Cさんは、中国で一般的に認識されている「日本の軍国主義は良くないが、一般の民衆は悪くない」というモデル・ストーリーを切り出した後、具体的なエピソードも紹介した。シベリア抑留の期間中、P Cさんは仲間たちと一緒にかつて酷いこ

とをした軍官たちを罰し、一般の兵士たちとは交流した。活字の字面には現れないが、インタビューのなかで苦渋に満ちた沈黙がしばしば訪れた。P Cさんは頻繁にタバコを深く吸い込みながら言葉を搾り出した。中国では日本兵の残虐説が一般的であり、マスター・ナラティヴが出来上がっている。それゆえに日本兵を人間化する語りは、まだ抑圧を受けていると考えられる。そのような言説を突き破り、新しい声を生み出すのにP Cさんはストレスを抱えているようだ¹⁶⁷。

また、この対話で注目に値するのは、「われわれチョソンサラム（朝鮮人）と中国人は先入観を持って、かつての日本軍国主義が犯した罪を日本の一般民衆に負わしては良くない」という語りである。P Cさんは自分のポジショナリティを、「チョソンサラム（朝鮮人）」と「中国人」だと複合的に規定している。その自己規定の語りを唐突的に語り出したわけではない。「われわれ」という代名詞が表しているように、聞き手も「われわれ」のなかに含まれている。後で考察のところで詳述するが、「チョソンサラム（朝鮮人）」は、中国朝鮮族だけを指す呼称ではない。この対話のなかには世代と国境を越えて継承できるメッセージが多く含まれている。

2010年3月8日の午前中にインタビューを行い、お昼は地元の朝鮮族レストランで食事をしながら、インフォーマルなインタビューを行った¹⁶⁸。

<対話9>

P C：解放前、少なくない朝鮮人は二等国民になった気分で中国人を蔑視した。

筆者：二等国民の身分は日本人が朝鮮人に与えたと思っていましたが、自ら二等国民だと思う朝鮮人もいましたか。

B Z：中国人の警察官も朝鮮人に干渉することはできなかった。

筆者：そうだったのですか。初めて聞きました。

P C：当時、中国人の地位は低くて、「チャンコロ」と呼ばれた。

筆者：失礼ですが、P Cさんもそう呼んだことはありますか。

P C：〔暫くの沈黙を経て〕みんながそう呼んだ。みんなが・・・

「満州国」時代、在満朝鮮人が二等国民だったことは散見する文献資料からも確認できる。しかし、当事者たちが中国人を差別したことは、公の場面ではほとんど語られてこなかった。P CさんとB Zさんは在満朝鮮人のなかにも中国人を差別した人がいたことを語った。P Cさんが「みんな」を繰り返しているように、P Cさんの語りにはアンビバレントな態度が見られた。「みんな」のなかにはP Cさんも入っていただろう。対話のなかの沈黙はP Cさんも中国人を蔑視したことが暗示された。2次調査でP Cさんを伺った際に、P Cさんはかつて中国人を蔑視した出来事をアンビバレントな態度で語ってくれた。

インフォーマルなインタビューの場で語った加害の語りは、フォーマルなインタビューの場で語り出す場面があった。

¹⁶⁷ インタビューを行う際に沈黙する場面が多く、タバコを手放さず、深く吸い込む様子からも読み取れる。普段あまりタバコを吸わないというP Cさんは1次調査時の午前中と午後を合わせて、約5時間半に渡ってインタビューを行うなかでほぼ2箱のタバコを吸い終わった。

¹⁶⁸ 当日、その場にはP Cさんの友人のB Zさんと教え子の1人、そして筆者の父親が同席した。

<対話10>

PC：私が中隊長に選ばれ、指導員は牛〇〇だった。彼は吉林師道大学を卒業し、頭が相当いい人だ。彼の父親が中国人で母親が朝鮮人だ。元々彼は父親の苗字を名乗っていたが、私は彼に母親の苗字に変えるように説得した。シベリアから帰った後、よく考えたら良くないと思って彼は元の苗字に戻した。その時代、少なくない朝鮮人の頭のなかでは中国人を蔑視した。

筆者：そうだったのですか。前回と今回、お話を聞かせて頂きました。今、私が関心を持っているのは日中韓3国、朝鮮半島の関係をよくすることです。

PC：そうだ。関係をよくする必要がある。

筆者：関係をよくするためには加害者と被害者に関して、朝鮮人移民は被害者だけではなく加害者になる可能性もあったと思います。中国人を蔑視して。

PC：朝鮮人が「二鬼子」といわれたのは、そこに原因があると思う。

筆者：他の移民体験者からも話を聞きました。朝鮮族、朝鮮民族も反省しなければならぬという方もいました。朝鮮人移民は日本の植民地統治を受けたために中国にきました。その点では被害者だと思います。しかし、中国にきてからは加害者になった部分もありましたね。

PC：そうだ。加害者になった。

筆者：その点について反省する必要があると思います。

PC：そうだ。反省する必要がある。

1次インタビュー調査で、<対話9>のようなインフォーマルな会話が行われた後、PCさんは自ら自分の加害体験も語り始めた。この対話でPCさんは「その時代、少なくない朝鮮人の頭のなかでは中国人を蔑視した」と語った後、自分が加害に加担したエピソードを紹介した。聞き手の筆者は対話を促すように自分の問題意識を対話のなかで提示した。ホルスタインらによれば、「アクティヴな視点からすると、インタビュアーと回答者間の相互作用のあらゆる局面は、インタビューをどう進めるかについての前例となりうる。インタビュアーの自己紹介や、これから行う調査を紹介するという、まさにそこから始めることによって、インタビュアーはこれから展開する会話に対して、物語のリソースと準拠すべきポイントを提供する」という¹⁶⁹。PCさんが「朝鮮人が『二鬼子』といわれたのは、そこに原因がある」と語ったように、対話のなかには反省的な態度が見られた。この対話では語り手と聞き手の視点をぶっつけ合わせ、加害と被害について語り手の視点を掘り起こすことができた。

PCさんに初めて会った日、午前と午後を合わせて数時間もインタビューを行った。PCさんの体調を考慮して夜は駅近くのホテルに泊まって翌日再度訪ねることを考えたが、PCさんご夫妻に引き止められて家に泊まらせてもらった。夕食後、PCさんはコーヒーを入れてからコーヒーを一口飲んだ後、また語り出した。

<対話11>

PC：私は日本軍に徴兵されたことで死ぬほどの苦勞をした。しかし一方では、その体験

¹⁶⁹ ホルスタインら前掲書：p. 107。

を通して私のなかには日本という概念が生まれ、日本に関心を持つようになった。私は日本の小説をたくさん読んできており、日本の情勢に強い関心を持っている。「文化大革命」の前まで、中国でも『読売新聞』や『朝日新聞』などの日本の新聞の購読が可能だった。当時、私は『読売新聞』を購読した。

筆者：『読売新聞』を購読しましたね。

PC：学校で購読した。読売新聞のほかにロシアの新聞も購読した。しかし今、購読ができなくなった。その時、校長だったので私が決めて購読した。

筆者：PCさんはロシア語もできますね。

PC：シベリアから帰ってきたばかりの時は、日常会話ができた。しかし、もう70年も過ぎたからほとんど忘れた。言葉は若いうちに学ばないと身に着かない。私は20歳を過ぎてからロシア語を学んだ。時間が経ったらほとんど忘れた。学校でロシア語を教えたこともあるが、今、他人にロシア語を学んだことがあるといえない。私は地理が好きで地理を教学する授業風景は、取材を受けてテレビでも放映された。いろいろな資料を参考して、授業の手応えは良かった。

筆者：地理が好きなのはご自身の体験と関係があるのではないかと思います、移民体験やシベリア抑留体験と関係がありますか。

PC：関係があるかもしれない。私は学生時代から地理と歴史が好きだった。

筆者：歴史も好きでしたか。

PC：小学校と中学校時代、歴史と地理に興味があつて成績が良かった。私は地理と歴史を専門分野として学んだことはない。日本で出版した参考書が役に立った。学校には日本で出版した書物が約20冊あった。担当教員が急に休んだ時、私は臨時に歴史と日本語も教えた。

筆者：万能な先生でしたね。さて、一つ聞きたいことがあります。これは他の移民一世にも聞くことですが、もしご家族の誰かが日本に留学したいといい出したら、反対しますか。

PC：我が家には留学できそうな人がいない。留学を反対する理由はない。もし、誰かが留学できるようになったら嬉しいことだ。

筆者：実は反対する方もいました。PCさんは日本留学を反対しないですね。

PC：私は日本文化の薫陶を受けた。そのため、私は日本文化に親近感を持っている。

筆者：なるほどですね。PCさんは日本のさまざまな側面を見ていますね。私は日本に行ってから、日本にもさまざまな側面があることに気づきました。

PC：日本人も出身地域によって差異がある。鹿児島からきた人は本州からきた人との間で発音が違った。例えば、「か」と「が」の発音に違いがあつた。日本語は本当に難しい。また、沖縄からきた人の発音も違った。

筆者：それは長谷川のことですか。

PC：かつて沖縄は琉球王国だったね。中国との交流関係が長かった関係なのか、沖縄人は中国に親近感を持っているようだ。元職場同僚の藩さんの娘が沖縄に留学した後、日本人と結婚して日本に住んでいる。藩さんは娘に会うために、年に一度日本に行っている。藩さんが帰国した後、「本当に不思議だ。沖縄人は中国人にあんなに親近感を持っている」とみんなにいった。

筆者：そうですね。PCさんは日本文化にも関心を持っていますね。

PC：私は小学校の時から日本の小説をたくさん読んできた。ほぼ毎日のように小説を読み、1日1冊のペースで読む時期もあった。そのため、私は日本文化の薫陶を受けた。私は徴兵されたことで過酷な体験をした。しかし、そのなかで日本人との間に生まれた友誼と友情は、今でも覚えている。それは忘れられない。

冒頭で説明したように、昼間に長時間のインタビューを行ったため、PCさんの体力を配慮して夜は難しい話題を避けるように意識した。しかし、PCさんは語る意欲が衰えなかった。PCさんにとっては戦前と戦後の体験が分けたかった。PCさんが自ら説明したように、「私は日本軍に徴兵されたことで死ぬほどの苦労をした。しかし一方では、その体験を通して私のなかには日本という概念が生まれ、日本に関心を持つようになった。」日本という概念とは何か。PCさんの語りから読み取ることができるだろう。徴兵された後、軍隊で出会ったさまざまな地域からきた日本人、教員をした時に参考した日本語の参考書、『読売新聞』の購読・・・PCさんは日本の情勢に関心を持ち続けた。まさに、聞き手の筆者が咄嗟に回答したように、PCさんは日本のさまざまな側面を見ている。いうまでもなく、徴兵されたことはPCさんにとっても過酷な体験だった。その過酷な体験を通してより深い日本（人）の側面を知り得ることができ、PCさんにとって日本（人）は1枚岩ではなかった。

筆者はPCさんの家で泊まり込みながらインタビュー調査を行ったことがあり、また参与観察によってPCさんが日頃から複数のメディアを利用していることを知っていた。PCさんは好奇心が強く、80歳を超えた後でも貪欲的に情報を吸収していた。ほぼ毎日欠かさずに中国語の新聞（『参考消息』¹⁷⁰）を読み、中国のCCTVニュースと韓国のKBS番組を見ている。PCさんはシベリア抑留の補償問題について調べるため、2009年頃からインターネットを使い始めた。ほぼ毎日欠かさずにインターネットを閲覧しており、よく朝日新聞デジタル版とMSN産経ニュースを閲覧しているという。

<対話 12>

筆者：どうしてこんなたくさんの情報を利用しているのですか。

PC：世界情勢を知らなければならない。世界がいかに関心を持っているかを知る必要がある。

筆者：その習慣はいつ頃からですか。

PC：私は中学校の時から本を読むのが好きだった。『満洲公論』という雑誌がある。有名な雑誌だ。授業中に見つからないように机の下に置いて読んだことがある。シベリアにいた時も新聞を読んでいた。最初の頃は意味がよく分からなかったけど。

筆者：そうだったのですか。今は『参考消息』を読み、CCTVとKBS、そしてインターネットまで見て、毎日の生活が充実していますね。

PC：中国と韓国、そして日本の3カ国の情報を利用している。

筆者：こんなたくさんの情報を利用するのは、なかなかできないことです。私も含めて若い世代は努力が足りないです。今の若者は大抵1つのメディア、自国の情報に偏っている部分があります。PCさんがインターネットまで利用していることには驚きました。

¹⁷⁰ 『参考消息』は新華社通信が発刊する中国で発刊部数が最大の日刊紙である。国家の指導者から一般の民衆まで広く読まれており、影響力が大きい新聞である。PCさんによれば、1950年代から今日まで

PC：情報は一方だけではなく、左も右も知る必要がある。



写真 5-3 インターネットをみるPCさん。
筆者撮影。

この対話では情報の利用について行われた。この対話のなかでPCさんは「満州国」時代とシベリアにいた時のエピソードを紹介し、多くの情報を利用することの意義を解釈した。PCさんが多くのメディアを利用しているのは、「満州国」時代の植民地体験、およびシベリア抑留体験の影響もあるようだ。PCさんは批判的な目で情報を利用しており、物事を複眼的にとらえていた。

事例3——ZRさん

ZRさんは1934年に全羅北道益山郡に男2人女2人の4人兄弟の末子として生まれ、1945年に「満州」に渡った。家には元々土地があってそれなりに裕福な生活をしていたが、日本人が朝鮮に入った後、協働組合という制度を利用した。名目的には朝鮮人と一緒に農業するといったが、結局、協働ではなくて強制的に朝鮮人の土地を奪い取った。農作業をしても米は全部持って行かれた。土地が無くなり、朝鮮では食べていけないため、両親が先に満州に移住した。1945年7月に両親が朝鮮に戻って、家族全員を連れて「満州」に行った。移住した地域は鶏西で、父親が鉄道で務めていたので、よく鉄道近辺で遊び、敗戦直後の日本人の撤退の場面や集団自決した後の場面をよく見かけた。戦後、農業技師として工場で働いた際、反戦同盟に参加して中国に残留した日本人と一緒に働き、交流もした。

ZRさんへのインタビュー調査は2回行い、1回目は2009年9月21日、2回目は2010年3月12日である。ZRさんには単独インタビューのほか、ハルビン市老人協会副会長の金宗雲さん夫妻を交えて座談会も行った。

<対話1>

筆者：私は多元文化について勉強しており、日中韓の言語や文化について関心を持っています。多元文化を研究するためには、まず一元文化を知る必要があると思います。特に留学してからそのことを痛感しました。私は朝鮮族で移民三世ですので、まず朝鮮民族の歴史や文化を知る必要があると思うようになりました。私の父方のお婆ちゃんも移民体験者でまだ生きています。日本に行ってから在日同胞に会いました。ロシアのサハリンにも行ったことがあります。ロシアで多くのコリアンにも会いました。このような体

『参考消息』を読み始めたという。

験から、どうして朝鮮民族がこんなに散らばって生活しているのかを考えるようになりました。私は韓国に複数回行ったことがあり、全羅道で開いた学会に参加し、全羅道からの移民の状況について発表したことがあります。

Z R：どうして全羅道に着目したの？

筆者：（韓国の学会に参加した際の招聘状を見せながら）論文を書くのに焦点が必要です。以前、慶尚道について発表したことがあります。今回は全羅道についてまとめたいと考えています。

Z R：私が君の研究に役に立つことはあるかな？

筆者：私は移民体験者の生活史について聞き取り調査をしています。Z Rさんが生まれてから今日までの個人の生活史を語って頂ければと思います。現段階で私は約 90 数人の移民体験者にインタビューをしてきました。個人の背後には社会があります。1 人や 2 人だけではなく、90 数人に話を聞けば、大体の時代背景を読み取ることができると思います。あまり難しく考えなくてもいいです。たとえば、農作業の体験や学校生活などを語って頂ければと思います。Z Rさんはいつ生まれましたか。

Z R：1934 年 7 月 5 日に生まれました。

筆者：故郷は全羅北道だと聞きましたが。

Z R：全羅北道の益山郡だ。かつては益山郡だったが、今は益山市になった。

筆者：私が初めて韓国に行った時、益山に行きました。確かに日本統治時代、益山には不二農場がありましたね。

Z R：聞いたことがある。全羅道と慶尚道は農業中心の地域だ。全羅道は湖南平原で米が豊富に取れる地域だ。しかし、秋になったら「日本の奴ら」は、米を全部持って行かれた。その代わりに中国から持ってきたコーリャンや豆餅をくれた。豆餅は大豆の油を搾った残りかすで、牛や豚にやるものだ。それも新鮮なものであればいいが、腐ったものをくれた。それは美味しくないし、栄養もない。

筆者：美味しいはずがないですね。

Z R：しかし、仕方がなかった。食べるものがなかったから仕方なく食べた。農作業をしても米は食べられない。豆餅も腹いっぱい食べればいいが、それも足りなくて草を取って食べる時もあった。それで、全羅道出身の人が海外に移住する人が多かった。



写真 5-4 地図を見ながらインタビューに応じる Z R さん。
筆者撮影。

唐突に訪ねた筆者に対して、Z R さんは何を応えればいいのか分からないようで少し戸惑った様子だった。語り手の個人史を語ってもらうためには、聞き手の個人史も語る必要が

ある。冒頭で聞き手の筆者は、自分のポジショナリティや訪問の目的などを説明した。筆者が初めて韓国を訪ねた地域が、偶々 Z R さんの故郷であることを伝えた後、Z R さんの表情が少しずつ和らぎ、語りの意欲が湧いてきたようだ。この対話で Z R さんは自身が生きてきたマクロな生活状況を紹介してくれた。Z R さんとの対話のなかでは、学校生活のエピソードがよく語られた。

＜対話 2＞

Z R：私は朝鮮人が経営する学校と日本人が経営する学校に両方通った。朝鮮人が経営する学校に 1 年間通った。ある日、朝鮮総督府の教育を担当する部門の人たちが調査しにきた。調査にきた日本人は生徒たちに、「今日、何を食べたか」と聞いたら生徒たちは「豆餅を食べた」と答えた。次に「美味しかったか」と聞いたら、生徒たちは幼くて素直なので、「美味しくなかった」「腐った豆餅を食べたから下痢した」と答えた。子供たちがこのようなことをいったのは校長先生や学校の指示を受けたとして、学校で反日教育を行っていたと決めつけられ、数日後に学校は閉鎖されてしまった。

筆者：学校の名前は覚えていますか。

Z R：益山郡五山面の永万里にあった小学校だ。名前は覚えていないが、確かに永万里小学校だと思う。

筆者：永万里小学校ですね。

Z R：あの出来事で学校が閉鎖された。学校の先生や校長先生はきっと苦しめられたと思う。私たちは何も分からないで無邪気なことをいったことで、今考えれば、学校側は厳しく罰せられたかもしれない。日本人が経営する学校に行った後、試験を受けなさいといわれた。

筆者：試験を受けたのですね。

Z R：私が住んでいた村に日本人が住んでおり、日本人の子供と遊んだことがあるので、簡単な日本語は話せた。試験監督は日本のある自動車会社を経営する者の娘である国枝という人で、まだ独身だった。国枝は担任でもあった。試験が始まった。まだ、1 年生だったから簡単な問題だった。鼻を指して「はな」と答え、目を指して「め」と答え、耳を指して「みみ」と答えた。暫く経ってから同じ問題を聞いた。それで、1 回目は日本語で答えたから今度は朝鮮語で答えようと思って、「코」「눈」「귀」¹⁷¹と答えたら、試験は不合格だった。そのことを知った同じ村から 4、5 学年に通う生徒たちが国枝に「この子は日本語が良くできるのにどうして不合格ですか」と説得して、私の入学を認めてもらった。あの学校はまだ韓国に残っており、現在は五山小学校となった。私は勉強ができたため、学校から弁当と運動靴をもらったことがある。放課後、国枝は私たちを校門まで見送ってくれた。それでも、私は腹が立っていた。幼かったけれども、反日思想を持っていた。私たちの朝鮮人学校を閉鎖し、朝鮮語の使用が禁止されたからだ。朝鮮語の使用を禁止しようとして、生徒たちに毎週学校から銅で造った札（ふだ）を 7 枚配られた。生徒たちにお互いに監視するようにした。誰かが朝鮮語を使用したら、札 1 枚を取るようなルールがつけられた。毎週、学校側は生徒の札の数を確認した。札が少なくなった生徒には、札 1 枚に 10 銭罰金され、札が多くなった生徒は褒められた。私たちは国

¹⁷¹ 朝鮮語による鼻、目、耳の意味である。

枝を見かける度に朝鮮語と日本語を交えて、「この女は本当に酷い奴だ」「朝鮮人が朝鮮語を話すのに何が悪いのか」とののしった。それで、国枝は泣く時もあった。あの人のまだいい所は、私たちが悪口をいったことを学校にいわなかった。もし、そのことが学校に知られたら大変なことになる。当時、教導主任をしていたのは趙という者だ。

筆者：趙という者ですね。

Z R：あの奴に知られたら大変なことになる。ある日の休み時間に、同級生 2 人とグラウンドにある木に登った。国枝は女性だからか、まだ優しい面があって私たちに「危なくて怪我するから早く降りてきて」といった。私たちが木に登ったことは趙も見かけたようで、放課後に 3 人が教員室に呼ばれた。趙は竹の棒で 1 人 30 回ずつ叩いた。最初の 3、4 回はまだ感覚があったが、その後、足が痺れて感覚がなくなった。翌日、起きられなくて暫く学校を休んだ。

この対話で Z R さんは学校生活における植民地統治の状況の一側面を紹介した。植民地朝鮮時代、朝鮮人が経営する学校は反日教育を行ったと決めつけられて閉鎖されたため、Z R さんは日本人が経営する学校に移った。転校した先で担任先生の日本人の国枝に出会った。Z R さんのインタビューのなかでは、国枝が頻繁に出てくるので注目したい。Z R さんは国枝に対して異なった意味付けを行っていた。試験を行う際に朝鮮語で答えたため、不合格だった。また、学校では朝鮮語の使用が禁止された。そのため、Z R さんは国枝に対して「この女は本当に酷い奴だ」と「悪口」をいった。しかし、その「悪口」を国枝は学校にいわなかったため、「あの人はまだいい所がある」といった。

Z R さんの語りには日本人の国枝と朝鮮人の趙が並列的に出てきた。対話の後半に趙が登場した。趙は生徒を体罰して植民地統治に加担したため、「奴」と呼びつけた。もし、聞き手の筆者が朝鮮民族ではなければ、朝鮮人の趙は登場しなかった可能性があると考えられる。なぜならその出来事は、共同体内部の加害の問題である。この対話で趙は生徒に暴力を振るった冷徹な植民地統治の協力者として登場した。国枝は生徒たちに「悪口」をいわれ、泣く時もあったような感情を持つ女性として登場した。

Z R さんがいうように、「私たちの朝鮮人学校を閉鎖し、朝鮮語の使用が禁止された」ため、「幼かったけれども、反日思想を持っていた。日本の植民地統治の複雑性は、日本人が朝鮮人を統治した側面だけではなく、朝鮮人が朝鮮人を統治した側面もあった。Z R さんの語りを通してみれば、Z R さんの「反日思想」は一枚岩の日本（人）を反対することではなく、日本の植民地統治を反対していた。2 次調査に伺った際にも、朝鮮で学校に通った時の出来事が話題になった。

<対話 3>

Z R：昨年も紹介したが、私は小学校 1 年を 2 回も通った。豆餅事件で朝鮮人が経営する学校が閉鎖された。日本人が経営する学校に通った時、日本のある自動車会社を営む者の娘である国枝という人がいた。

筆者：国枝先生ですね。

Z R：授業中で私はよく話を聞いた。学校では朝鮮語の使用が禁止されたが、授業が終わったら、私たちはよく背後で朝鮮語を交えて国枝の悪口をいった。私は勉強がよくできた。そのためか、学校から運動靴と弁当箱をもらったことがある。当時、靴がなくて普

段は素足か草履を履いた。足が凍ったことは何度もあった。中国東北地域はこんなに寒いのに、こっちにきてから足が凍ったことはない。なぜ朝鮮で足が凍ったのか。私が住んでいた地域は湿気が高い。冬になると気温がマイナスに下がる。足が凍ったら痒くて堪らない。運動靴をもらった時は喜んだ。

筆者：私は他の方から聞きましたが、太平洋戦争の時に日本がシンガポールで戦争に勝った時、生徒たちにゴムボールやキャンディを配ったりしたようですね。

Z R：そうだ。どこかの戦争で勝ったらキャンディなどを配ったりした。しかし、全員に配ったわけではなく勉強ができる生徒だけに配った。私は勉強ができた。他の子供たちと一緒に背後で悪口もいったが、国枝は私を可愛がってくれた。これは日本を美化することではない。日本人も知識を重視した。そのようなことがあったことも知る必要はある。

日本の植民地統治は戦争と並行して行っていた。Z Rさんは学校生活のエピソードを取り入れながら、植民地統治の特徴を紹介した。この対話のなかで担任先生だった国枝が再度登場した。勉強ができたため、国枝に可愛がってもらい、学校から運動靴と弁当箱をもらった。学校では朝鮮語の使用が禁止されたため、背後では国枝の「悪口」をいった。Z Rさんの語りから国枝への一様でない気持ちが読み取れる。Z Rさんは日本の植民地統治を美化することでもなく、一元的に批判することでもなく、その真実を知る必要があることを語った。学校生活のほかに故郷の全羅北道永万里での日常生活についてもよく話題になった。

<対話 4>

Z R：私が住んでいた永万里という地域には、「全」を苗字とする全氏家族が多く住んでいた。あの地域は反日的な雰囲気が強かった。

筆者：永万里は反日的な雰囲気が強かった地域でしたか。

Z R：それは当然だろう。植民地統治が厳しくてそこに住む人々の生活を脅かしたから、人々は自然に反日的な態度をとった。同じ地域に住む「全」の苗字を名乗らない人々も団結していた。そのためか、永万里に住む日本人は少なく、ある日本人の家族だけが住んでいた。

筆者：1家族だけでしたか。

Z R：1家族だけだった。

筆者：その家族の名前は覚えていますか。

Z R：もう何十年前のことなので覚えていない。当時、私はまだ小学生で、あの日本人の家族には子供が2人いた。

筆者：男の子ですか。

Z R：2人とも男の子だ。あの子たちも小学校に通っていた。永万里には五山面に向かう鉄道があった。鉄道の南側には日本人が通う学校で、北側には朝鮮人だけが通う学校だった。登校する際にあの子たちと一緒にいる時も多かった。偶に私たちはあの子たちを辛かったりした。

筆者：あの子たちを叩いたり、苛めたりしたことはありますか。

Z R：いいえ。そこまではしていなかった。彼らは私より年下だ。私たち朝鮮人が多数な

ので、あの子たちは従順だった。私たちが何かをいったら従ってくれた。

LDさんとの対話で取り上げた『木浦の涙』について説明したように、植民地時代、全羅道地域は米の収奪がもっとも厳しく行われた地域だった。ZRさんは生活体験に基づき、故郷の永万里は反日的な雰囲気が強かった地域だと認識していた。朝鮮人が反日的になったのは、ZRさんがいうように「植民地統治が厳しくてそこに住む人々の生活を脅かしたから」である。ZRさんは反日思想を持っていたが、すべての日本人に反対することではなかった。自分より立場の弱い日本人の子供を叩いたり、苛めたりしなかった。ZRさんの少年時代の植民地体験を通して、朝鮮人と日本人との関係性の一側面を読み取ることができる。ZRさんは1945年の7月に「満州」に渡ってさまざまな形で戦争を体験した。その戦争体験について聞いた。

<対話 5>

ZR：中国にきてきてから 1 ヶ月も経たないうちにソ連軍が空爆を始めた。その後、関東軍が撤退し始めた。

筆者：その撤退の場面を見ましたか。

ZR：もちろん見た。関東軍はトラックに乗って撤退したり、汽車に乗って撤退したりした。近くに日本軍の飛行場もあったが、燃料タンクが爆撃を受けたためか、飛行機を飛ばすのをほとんど見たことはない。私はよく父親が務めていた機関庫のポイント小屋に行き手伝いもした。

筆者：なかなか珍しい体験をしましたね。

ZR：ポイント小屋から関東軍が撤退する様子を見た。家の近くに関東軍の家族が住む住宅街があった。ソ連軍の空爆があった後、ソ連軍がもうすぐ入ってくるから撤退する命令を受けたようだ。私の家族も風呂敷で物を包んで避難した。列車はなくて無蓋車に乗り込んだ。私たち朝鮮人は 1 号車、関東軍兵士は 2 号車、関東軍の家族は 3 号車に乗った。空爆が続いており、爆弾が落ちた場面を見て怖がった。その混乱の最中にお婆ちゃんと兄嫁がはぐれてしまった。

筆者：赤ん坊がいましたね。大丈夫でしたか。

ZR：赤ん坊は私たちが抱っこして先に乗った。お婆ちゃんは年を取り行動が不便だったので、乗り遅れてしまった。しかし、汽車は出発した。汽車はそのまま止まらないで牡丹江まで行った。そこで、ほとんどの軍人はどこかに行ってしまった。牡丹江では空爆が激しくなったため、みんなが車輻の下に潜って避難した。空爆が一段と静まり、みんなが車輻の下から出てきたが、ある軍人が出遅れた際に汽車の車輪が少し動いた。あの人のお股が車輪にひかれて、「助けてください」と大きな声で助けを求めた。しかし、みんな逃げることで精いっぱい、誰もあの人を助けようとしなかった。私はまだ子供だったが、人情とは何かについて疑問を持った。私たちが乗った汽車はハルビンの香房駅に向かったが、ハルビンでも空爆が続いていた。それで、進行方向を変えて吉林省の山河屯に向かった。山河屯に着いた後、そこで数日間滞在した。ある日本人は「日本は必ず勝つ」といったが、私はその言葉を信じなかった。数日後、8月15日になった。しかし、山河屯に住む「日本の奴ら」は日本が敗れたことを知らないで馬に乗って威張っていたところ、ある者は中国人に長い鎌で頭を切り落とされた。また、ある者は馬から引

き下ろされて叩かれたり、蹴られたりした。あのような形で殺された「日本の奴ら」は少なくなかった。その場面を見て私は日本が敗けたと分かった。

この対話ではZ Rさんの戦争体験を語ってもらい、主にZ Rさんが語り、筆者は忠実に聞き手を務めた。事実の確認を行いながら、語り手が自由に語るように対話を進めた。Z Rさんは敗戦後の避難体験を紹介した。父親が務めていた鉄道に行って遊んだこともあり、鉄道を利用して敗退する関東軍兵士の姿を見かけた。また、やがてZ Rさんの家族も日本人と一緒に避難することになった。Z Rさんは少年時代に移住して戦場には行っていないが、日常生活のなかで身近に戦争を体験した。1945年8月15日の出来事も、Z Rさんは少年の目線でつぶさに見ていた。

<対話6>

Z R：ある意味で日本人は残忍だ。

筆者：それはどういう意味ですか。

Z R：テレビでも見たことがあるだろうが、避難した際に少なくない日本人が集団自決した。その場面は直接見てないが、集団自決した後の死体をよく見かけた。

筆者：死体を直接見たのですね。

Z R：当時、半分笑い話の逸話があった。日本人の集団自決した後の場面を見た中国人は、「死了」（死んだ）、「咽气了」（息を引き取った）、「断气了」（息を引き取った）、「蹬腿儿了」（足を伸ばした）など、同じ死ぬことに対して複数の表現があった。そのことを聞いて私は中国語が難しくて勉強できないと思った。日本人は武士道精神を持っている。解放後、私は鶴岡炭鉱で働いたことがある。そこに反戦同盟に参加した日本人もいた。

筆者：反戦同盟に参加した人ですか。

Z R：彼らはほとんどが20歳前後の若者で、一番年をとったのが25歳ぐらいだった。日本が敗けた後、鶴岡炭鉱で働く人がいなくなり、反戦同盟に参加した人もそこで働かされた。あの日本人たちは規律があった。毎日の仕事が終わったら整列して、「最後の決戦に出迎えよう」と歌い、「1、2、1、2」と掛け声をかけながら坑内から出てきた。その後、私はハルビンの王岡機械修理工場に行った。その工場には日本人の飛行機整備士やパイロットが働いていた。あのような汚い仕事をしながらも、彼らは毎日服を着替えて清潔にしていた。彼らは指示される仕事をこなしながら、時には意見も提起した。

筆者：どんな意見ですか。

Z R：確かに1957年頃のことだった。彼らは、「私たちのような高級技師を農業機械修理の仕事にさせるのは、人材の無駄使いだ」というような意見を出した。日本が中国を侵略して、日本人が戦争に参加したのは良くない。しかし、人間の素質面や教養面からみれば、日本人は清潔だし、教養がある。

この対話でさまざまな日本人が登場した。集合的な日本人像から具体的な日本人像に移っていった。敗戦直後、集団自決の日本人の死体を見たため、「日本人は残忍だ」と意味付けた。その後、Z Rさんの語りには武士道精神を持つ日本人が登場した。戦後、工場で反戦同盟に参加した日本人と一緒に働くことを通して、表情を持つ日本人を発見した。「あのような汚い仕事をしながらも、彼らは毎日服を着替えて清潔にしていた」と評価をし、「日

本が中国を侵略して、日本人が戦争に参加したのは良くない。しかし、人間の素質面や教養面からみれば、日本人は清潔だし、教養がある」と日本人を相対的にとらえた。この対話では語り手のZ Rさんが主導的に語り、筆者は忠実な聞き手を務めた。対話のなかでは、「日本人は残忍だ」というステレオタイプの日本人ではなく、複数の表情を持つ具体的な日本人が登場した。

<対話 7>

筆者：私は多元文化について勉強していることもありまして、顔の見える関係性について関心を持っています。Z Rさんは反戦同盟に参加した日本人と一緒に働きましたね。何か印象に残っている出来事がありますか。

Z R：日本人、中国人、そして韓国人は同じ黄色民族であるが、それぞれ違う面がある。例えば同じ服を着ても、歩き方や仕草などでその人がどの国の人であるかを判断できる。かつて私は日本人を「日本の奴ら」と呼び、日本人は背が低くて歩き方も変だと思っていた。しかし今は違う。食習慣が変わったためか、日本人も背が高くなった。朝鮮人も同じだ。元々背が低かったが、今は高くなった。表面的なことで、人を判断できないと思うようになった。

筆者：そうですね。さて先の話に戻りますが、反戦同盟に参加した日本人が帰国した後、手紙を送ってくれたようですね。

Z R：反戦同盟に参加した人たちのなかに飛行機整備士もいた。

筆者：それは王岡での出来事ですね。

Z R：そうだ。当時、私は技術員をしていた。

筆者：山田さんとか、誰かの名前を覚えていますか。

Z R：あまりにも昔のことなので名前までは覚えていない。元々私は日本人に対して反感を持っていて、日本人を「日本の奴ら」と呼んだ。しかし、直接あの人たちと一緒に生活してみて、親近感を持つようになった。

筆者：何語で話しましたか。

Z R：日本語で話したり、日本語で上手く伝わらなかったら中国語に切り替えたりして日本語と中国語を入り混じて交流した。彼らは私のことを好きだったし、私も彼らのことが好きだった。飛行機整備士が小さな工場にきて、油まみれの仕事をする姿を見て可哀想に思う時もあった。

冒頭では筆者の専攻分野に引き付けて話題を提起した。それを受けてZ Rさんは普遍的な文化論のことを語り出した。聞き手は話が本題から少し逸れたと気づき、話を本題に戻してZ Rさんの具体的な体験を聞いた。戦後、Z Rさんは工場で反戦同盟に参加した日本人と一緒に働き、交流もした。日本人と交流する前までは、日本人を「日本の奴ら」と呼んだ。交流を経て親近感を持つようになった。

この対話は歴史上反戦同盟がいたかどうかを実証するものではない。しかし、対話を通して反戦同盟が存在したことを間接的に確認できたのみならず、Z Rさんが反戦同盟に参加した日本人と接する前と接した後の見方の変化も聞き取ることができた。ミクロな視点でZ Rさんの個人の体験に着目することによって、戦後朝鮮人と日本人が同じ職場で働き、交流もしたという今まで語られてこなかった新しい語りを聞き出すことができた。

<対話 8>

筆者：何かいやな思い出はありますか。

Z R：幼い時の私は悪戯っ子だった。親が近くにいないとお婆ちゃんに育てられた。学校には欠かさずに行った。学校のグラウンドに木があって、ある日の中休みの時に私は同級生と一緒に木に登った。そのことを国枝に見られた。放課後、私たちは教導主任の趙に教職員室に呼ばれて、竹の棒でふくらはぎを約 30 回も叩かれた。最初の 5、6 回はまだ痛い感覚があったが、その後は痛い感覚を失った。足が痛くて翌日から暫く学校に行けなかった。その出来事を今思い出してもやりきれない気持ちだ。同じ朝鮮人なのに子供に暴力を振るった。子供が木に登って遊ぶのに何が悪いのか。この間、韓国に行った時にかつて私が通った学校に行ってみた。もし趙に会ったら、「あなたは日本人の担任先生より酷かった」と告げたかった。しかし、学校側に聞いても、趙がどこにいるかは分からないといわれた。

筆者：もう歳だから死んだかもしれないですね。

Z R：その他にもう 1 つの出来事があった。私が中国に移住してから鶏西の小学校にすぐ編入した。何があっても勉強したい思いが強かった。日本が戦争に敗ける 1 ヶ月前の時期だったが、その当時はまだ分からなかった。担任先生は張という者だ。ある日、張に国民教訓を暗唱させられた。朝鮮では習ったことがなくて暗唱できなかった。すると張は拳で私の頭を 10 数回殴った。きたばかりの生徒に対して、本来先生は習ったかどうかを確認すべきではないか。あの奴は確認するどころか、子供に暴力を振るった。このように私の学校生活のなかで体罰を 2 回受けた。私は勉強ができてずっと褒められたが、このような屈辱な体験もあった。

筆者：張も朝鮮人ですか。

Z R：あの奴も朝鮮人だ。

筆者：私は他の移民体験者の方からも聞きましたが、少なくない朝鮮人が日本の植民地統治に加担しましたね。

Z R：そうだ。朝鮮人のなかに日本人の手先がいた。中国語でいえば漢奸だ。朝鮮においても、「満州」においても、日本人に協力する朝鮮人がいた。

人によって嫌な思い出はそれぞれ違う。嫌な思い出を聞くと、Z Rさんは 2 つのエピソードを紹介した。1 つは朝鮮で学校に通った際の出来事で、<対話 2>で出てきた教導主任の趙に体罰を受けた出来事である。もう 1 つは「満州」に渡った後、担任先生による体罰である。Z Rさんが何度も繰り返していうように、自分が優等生でいつも褒められたのに、体罰を受けたのは屈辱な体験だ。この 2 つの嫌な思い出は、朝鮮人による朝鮮人の植民地統治のエピソードで、共同体内部の加害と被害の問題である。もし、聞き手の筆者が朝鮮族ではなければ、Z Rさんは他のエピソードを提示した可能性もあるだろう。朝鮮民族の共同体内部の加害と被害の話は、今までほとんど語ってこなかった。嫌な思い出だから忘れられない。Z Rさんが 1 つ目のエピソードを言及した際、韓国に行った時にかつて通っていた小学校まで行って、自分を体罰した教導主任の行方を探したことを紹介した。「あなたは日本人の担任先生より酷かった」と告げたかったと語ったように、語りのなかにさらに語りが含まれており、複合的なメッセージが発せられた。

<対話 9>

Z R：世界中を見渡せば、戦争を通して利益を得た人はほとんどいないと思う。一部の人には利益があるかもしれないが、大多数の人は被害者だ。日本が戦争を起して中国の民衆に被害を与えただけではなく、自国民も苦しめたのではないか。戦争で使うお金があれば、国の発展のために使えばいいのに。

筆者：そうですね。昨年、Z Rさんから頂いた「研究する際に感情的にしてはいけない」というアドバイスが印象深かったです。

Z R：感情的になってはいけない。私は今でも口癖のように「日本の奴ら」という場合がある。日本人には悪い所もあるが、学ぶべき所もある。悪い所はあの主義、つまり軍国主義に走り、他の国を侵略したことだ。それによって他の国の民衆に被害を与え、自国の民衆も苦しめた。この事実に対して感情的になれば、やり切れぬ思いになり、物事を絶対化してしまう。しかし、戦争が終わり、相手が投降した以上、物事を絶対化してはいけない。互いに助け合い、会って理解し合って平和的に暮らす。感情的になれば切りがない。あなたたちがたくさんの人を殺した。それで、あなたたちを許さないとしたら理性的ではない。あなたたちが悪いことをしたので、私たちも同じことをしてはいけない。

筆者：同じことをしないことです。

Z R：そうだ。相手と同じことをしない。感情的になってはいけないことは、もう 1 つの意味がある。確かに日本は戦争に敗けた。しかし解放後、日本は短期間で復興して先進国になった。日本人は決心したら遂行する。そこまで努力したことは学ぶべきだ。解放後、日本は中国と韓国と経済協力をし、経済的な支援もした。助け合えば互いに受益する。

筆者：学ぶべき点は学ぶことです。

Z R：今日、私は自分が体験したことおよび家族が体験したことを中心に話した。この体験談は私自身のことだが、恐らく他の人たちも私と似たような体験もしただろう。私の体験はあの時代を生きてきた人々の普遍的な側面もあると思う。

筆者：そうですね。私は現段階で約 100 人の移民体験者にインタビューをしてきました。時間が限られていますので、何千人や何万人にインタビューすることはできません。個人的には 100 人の方々の個人史を聞けば、移民体験者が生きてきた時代背景をある程度浮かび上がらせることができますと思います。

Z R：朝鮮人が海外に移住した理由は 2 つあると思う。1 つは生活が貧しいからだ。もう 1 つ一旗を揚げるためだ。私の家族が移民した理由は、生活が困難だからだ。もし、朝鮮で生活ができるなら移民する必要もなく、苦労もしなかった。

筆者：移住の背景には、このような理由がありましたね。

Z R：しかし、日本人の一生懸命働くことは学ぶべきだ。一生懸命働くことは日本人の長所だ。

筆者：「一生懸命」という言葉は、戦前も使われていましたか。

Z R：使われていた。朝鮮にいた時もこの言葉をよく耳にした。植民地時代、日本は奴隷化教育を行って朝鮮語の使用を禁止した。それは事実でやってはいけない。しかしその一方、学校では「兄弟仲良く、一生懸命働く」とも教えられた。兄弟が仲良くすること、

一生懸命働くことは、間違っていない。日本人が一生懸命仕事することは学ぶべきだ。
筆者：学ぶべきことは学ぶことですね。
Z R：ここで注意しなければならないのは、軍国主義者と一般の民衆が違うことだ。もし感情的になれば、物事を絶対化する恐れがある。

この対話は世代を超えて植民地経験（戦争体験・植民地体験）を、いかに継承するかについて行われた。筆者はZ Rさんに「感情的に研究してはいけない」というアドバイスの意味の説明を求めたところ、Z Rさんは物事を絶対化しないことを強調した。Z Rさんはかつて日本が軍国主義に走り、中国を侵略し、朝鮮を植民地化したことは事実でいけないことだと明言した。その一方、日本が戦後短時間で復興したこと、日本人が一生懸命働くことを評価した。Z Rさんが自ら指摘したように、Z Rさんの語りのなかには「日本の奴ら」という呼称が出てくる。しかし、それは固定不変ではなく、文脈によって日本人と「日本の奴ら」が使い分けていた。「感情的に研究してはいけない」というアドバイスは、筆者に向けたメッセージだけではなく、Z Rさん自身も自省的に過去を相対的にとらえていた。Z Rさんは直接戦争と植民地を体験したため、対話は空疎な説教ではなく、具体的なエピソードを交えて進められた。2009年9月21日の午前、Z Rさんへの単独インタビューを行った。昼食を一緒に取った後、午後は場所をハルビン市内に住む金宗雲さんの家に移り、金宗雲さん夫妻を交えて座談会式のインタビューを行った。

<対話 10>

金：歴史に対して仇を討ちあってはいけない。仇を討ちあえば切りがなくなる。日本の統治者、特に日本の軍国主義者は徹底的反省しなければならない。地球全人類の発展のために、私たちは団結すべきだ。戦前、日本は私たちを敵と見なした。私たちも日本を敵と見なしてはいけない。仇を討ちあっては切りがなくなる。私たちは過去の恩讐を忘れるべきだ。しかし、私たちは歴史事実を明確に認識すべきだ。反省すべき点は反省する。最終目標は地球全人類の発展のためにともに団結努力することだ。これは多くの人が望んでいることではないか。

筆者：私もそう思います。

金：日本は歴史を反省すべきで、中国と韓国は歴史を理解すべきだ。共同発展のために、人類の平和のために、私たちはお互いに理解すべきだ。

Z R：歴史を忘れない。お互いに歴史を忘れないことだ。中国と朝鮮は日本の侵略を受けた。日本の民衆も戦争のために苦労を強いられた。私がいいたいのは、「私たちは正しかった、あなたたちは間違った」という仇の討ちあいではない。

筆者：仇の討ちあいではないですね。

Z R：はい。私がいう歴史を忘れないということは歴史を知る意味だ。今の若者たちは、過去の歴史があったかどうか知らない。今、問題になっているね。日本が侵略したか、しなかったか。日本が勝ったか、敗けたか。このようなことはあまり望ましくない。

筆者：あったことを認める。歴史を知らないことは対話する以前のことですね。

Z R：私の望みは日中韓 3 国が協力して共に発展することだ。共に発展するために歴史を忘れないことだ。仇を討ちあえば切りがなくなる。

第4章で紹介したように金宗雲さんの家族3人がペスト菌の感染によって死亡し、戦争の被害を受けた。この座談会は戦争の記憶の継承の一環のなかで行われた。筆者は語り手に日中韓3国の若い世代への平和のメッセージを送るようお願いした。ZRさんは金宗雲さんの話を受けて歴史を知ることの重要性を言及し、勝者の歴史あるいは敗者の歴史を論じることではなく、歴史をトータルに知ることの重要性を語った。また、歴史を忘れないことは仇の討ちあいではないことを強調した。

第3節：考察

本章では3人の移民体験者との対話を紹介した。以下では3人との対話を通して見えてきたものについて考察する。

3-1 加害と被害の二元論を超えた植民地経験の継承

移民体験者たちとの対話のなかで、植民地経験がさまざまな語りを通して表象された。「継承」といえば、一方的に伝え、一方的に受け取る意味合いが強い。しかし、ライフヒストリー法を用いる場合は、継承が一直線に語り手から聞き手に流れているわけではない。聞き手がテープレコーダーのように語り手の語りを単純に吸い込んだのではなく、語り手と聞き手の役割関係は流動的である。その流動的な関係のなかでの語り手と聞き手の相互作用を通して、「事実」と「意味」の継承が行われる。

移民体験者たちは歴史の証人ではあるが、決して「被害者」として決めつけてはならない。長年、ハンセン病患者へのインタビュー調査を重ねてきた蘭由岐子は、自身の調査過程を自省的に振り返って、人生の来し方を振り返り、その出来事を時系列に並べるだけで、『被害』を聞き取ることは容易であったと述べている¹⁷²。植民地体験と戦争体験を一身に受けた移民体験者たちへのインタビュー調査で、単純に被害の語りを聞くのは容易である。本研究で重視しているのは移民体験者たちの被害の語りだけを聞くことではなく、「満州」移民という「歴史的事象」について、移民体験者たちが何を語り、いかに意味付けているのかも聞き取ることである。

朝鮮人「満州」移民は日本の植民地統治の「被害者」であったが、中国の民衆には日本人の手先と見なされていた。朝鮮人と日本人との関係に限定してみれば、朝鮮人「満州」移民は「被害者」であるといえよう。しかし、朝鮮人と中国人との関係でみれば、朝鮮人「満州」移民は「加害者」の部分もあった。小熊英二は日本の戦争責任と植民地責任を問い、物事をみる際に視点の重要性を指摘し、鋭い問題提起をした。小熊は「日本の民衆が被害者であり加害者であったように、朝鮮の民衆も被害者であり加害者であった側面があります。たとえば日本統治下の満州では、当時の『日本人』だった朝鮮人が、中国人を差別するという事例がありました。また元『従軍慰安婦』の女性が、自分をだましたり売ったりした朝鮮人の養父や夫を恨んでいる事例もあります。『朝鮮人は被害者』、『日本人は加害者』という二分法は、こういう事例を掬い取ることができない。(中略) 朝鮮の民衆は、日本統治の被害者だったからこそ加害者になったのだ、という視点が必要なのです」と述べている¹⁷³。在満朝鮮人を考える際には、「加害者」と「被害者」の二分法では掬い取るこ

¹⁷² 蘭由岐子『「病いの経験」を聞き取る—ハンセン病患者のライフヒストリー』皓星社、2004、pp. 314-315。

¹⁷³ 小熊英二『私たちはいまどこにいるのか』毎日新聞社、2011年、p. 55。

とができない。本研究では歴史上の朝鮮人「満州」移民とはなにかという問いを持ちながら論を進めてきた。朝鮮人「満州」移民は複雑な立場に置かれていた。このような立場を考えずに、朝鮮人「満州」移民を短絡的に「被害者」または「加害者」とすると決めつけては早急であろう。植民地経験の継承について考える際には植民地や戦争を体験した当事者のほか、植民地体験や戦争体験を持たない記憶を受け継ぐ側も自ら問いかけなければならない。もし、歴史事実を知らずに一元的な視点で移民体験者たちをみた場合、移民体験者たちは「被害者」または「加害者」とであるという二項対立的な構図に陥りやすい。

P Cさんは徴兵されたうえ、シベリアに抑留までされた。本研究は朝鮮人のシベリア抑留研究ではない。ただし、移民体験者たちの個人史のなかにシベリア抑留が絡んでいるため、シベリア抑留について考える必要がある。日本にはシベリア抑留に関する研究や記録が多い。管見するかぎり、今までシベリア抑留問題についての研究や記録は、日本対ソ連（ロシア）という二国間の文脈で論じてきたようだ。その議論自体が間違っているわけではない。しかし、日本対ソ連（ロシア）というナショナルな視点でとらえれば、朝鮮人のシベリア抑留という出来事は隠れてしまい、日本の植民地責任の問題が見えなくなる恐れがある。在満朝鮮人も徴兵されたのは彼らが強制的に大日本帝国の国民に組み入れたからである。在満朝鮮人が徴兵され、シベリアに抑留された「歴史的事実」には、日本の植民地責任と戦争責任が内包されているといえよう。

ひとつの出来事についてのさまざまに異なる表現に耳を傾ければ、歴史知識の伝達形成する力を理解し、歴史のプロセスへのわたしたち自身の“連累”¹⁷⁴を理解するために豊かな知識の宝庫を理由することができる（モーリス＝スズキ、2004：pp. 34-35）。筆者のインタビュー調査に基づけば、移民体験者の全員が日本の植民地統治を批判し、日本の戦争責任を追及した。しかし、移民体験者たちは一元的に日本（人）を批判したわけではなく、ほとんどの移民体験者は過去の出来事を加害と被害の二元論的に論じることではなく複眼的にとらえていた。LDさんとZRさんは物事を絶対化しないことを強調した。ZRさんは「感情的に研究してはいけない」というアドバイスを重ねてしてくれた。またP Cさんは「先入観を持って民族差別したり、人を見下したりすることをなくさなければならない」と語った。LDさんは「満州国」時代、「創氏改名」などの日本の植民地主義に対してしなやかな抵抗を続けた。しかし、「満州国」時代、学校の教員を勤めたことが、「文化大革命」時代、糾弾され、日本人の協力者だったというレッテルを貼られた。「満州国」時代、P Cさんは中国人を差別し、軍事訓練を受けていた初年兵の時に「慰安所」に行く可能性もあった。P Cさんが加害者性も持つがゆえに反省的に語ったと考えられる。社会学者の蘭信三は「戦争体験（植民地体験）をいかに伝えるか、あるいはいかに聞き取るかは、屈折し

¹⁷⁴「連累」はモーリス＝スズキが提起した概念である。わたしは直接に土地を収奪しなかったかもしれないが、その盗まれた土地の上に住む。わたしは虐殺を実際に行わなかったかもしれないが、虐殺の記憶を抹殺するプロセスに関与する。わたしは「他者」を具体的に迫害しなかったかもしれないが、正当な対応がなされていない過去の迫害によって受益した社会に生きている。わたしたちが今、それを撤去する努力を怠れば、過去の侵略的暴力的行為によって生じた差別と排除（prejudices）は、現世代の心の中に生き続ける。現在生きているわたしたちは、過去の憎悪や暴力を作らなかったかもしれないが、過去の憎悪や暴力は、何らかの程度、わたしたちが生きているこの物質世界と思想を作ったのであり、それがもたらしたものを「解体（unmake）するためにわたしたちが積極的な一歩を踏み出さない限り、過去の憎悪や暴力はなおこの世界を作りつづけていくだろう。すなわち、「責任」は、わたしたちが作った。しかし、「連累」は、わたしたちを作った（モーリス＝スズキ、テッサ著／田代泰子訳『過去は死なない』岩波書店、2004年、pp. 57-58）。

た体験、屈折した想い、記憶の裂け目を、いかに掬い取るかにかかっている」と述べている¹⁷⁵。筆者は一人一人の聞き手が移民体験者たちの経験した屈折した想いの世界に分け入ることができれば、移民体験者たちの「植民地経験」の継承はできると考える。

3-2 世代を超える対話が結びつける「困難な私たち」

1949 年以降、かつて日本の帝国臣民だった移民体験者たちは中国の公民となった。筆者が朝鮮人「満州」移民に着目したのは、移民体験者たちが中国人だから、朝鮮民族だから、といった簡単な理由ではない。筆者が注目したのは、移民体験者たちが持つ複合的な要素および一身に刻まれたさまざまな体験である。富山一郎は「一切の根拠を拒否しながら、遂行的に記述し続ける中でつむぎ出そうとする関係性」を「困難な私たち」と呼んでいる¹⁷⁶。筆者は富山の議論から触発を受け、移民体験者たちとの対話を通して紡ぎ出した語りが結びつける関係性にも目を配るようになった。移民体験者たちは国境を越えて移動し、複数の時代を経験しており、今でも過去を引きずりながら生きている。多くの移民体験者の語りには南北朝鮮関係と日中関係のみならず、日韓関係や中韓関係とも関わる複数の視点が含まれている。

筆者は移民体験者たちとの対話を通して、移民体験者たちの語りは朝鮮族という小さいコミュニティを越えようとしていることが分かった。その 1 つの兆しは、インタビューを行う際に使われた言語に現れている。桜井厚はその著書『インタビューの社会学』のなかで、言語について「言語はたんに事態や出来事の叙述の仕方を伝えるのではなく、人々の動機をつくりだし行為に導く機能をもつ。個人の経験や人生は語りを通して人々に共有され、社会の経験や歴史に属するようになる (p. 36)」という。インタビューは朝鮮語をメイン言語としながら、随所に中国語と日本語を織り混ぜて複数の言語で行われた。そのことに示されているように移民体験者たちの語りは、朝鮮族のコミュニティのなかだけで流通する閉ざされたメッセージではなく、東アジア社会が共有できる開かれたメッセージが含まれている。

もう 1 つの兆しは、移民体験者たちが自分を名付ける自称詞に表れている。移民体験者たちが用いる自称詞は、チョウセンジンや朝鮮族ではなく、チョソンサラム (조선사람) である。チョソンサラムは朝鮮語による朝鮮人の意味である。この呼称は中国朝鮮族だけを指す言葉でもなく、韓国人だけを指す言葉でもなく、北朝鮮民主主義人民共和国の人々だけを指す言葉でもない。強いていえば、世界中に散らばって暮らしているコリアン・ディアスポラの人々に広く使われているニュートラルな呼称である¹⁷⁷。この自称詞にはナショナリズムを呼び覚ますような意味合いは含まれていない。しかし、チョウセンジンという呼称は日本帝国主義者が名付けたものであり、その呼称には帝国主義的な眼差しが色濃く投影されている¹⁷⁸。移民体験者たちはその名付けられた呼称には拒絶反応を示し、自らチョソンサラムと名乗っている。

¹⁷⁵ 蘭信三「戦後日本社会と満洲移民体験の語りつぎ」浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成—戦争体験の世代間継承』慶応義塾大学出版会、2008 年、p. 78。

¹⁷⁶ 富山一郎『暴力の予感』岩波書店、2002 年、p. 311。

¹⁷⁷ 私見では「チョソンサラム」という呼称は「アイヌ」という呼称と共通する役割がある。この 2 つの呼称にはその該当民族を指すほか、普遍的な人間自体を指す意味合いも含まれていると考える。この呼称についての議論は今後の課題とする。

¹⁷⁸ この呼称には「劣った民族」、「非人間」というようなマイナス的な意味合いが含まれていると考える。

筆者は対話のなかに表れている関係性に注目し、語りが結び付ける関係性を重視している。移民体験者たちはこの名付けられた抑圧の体験を持つため、他者への名付けにも敏感であるようだ。LDさんは日本の植民地統治者を指す時には、「日本の奴ら」と呼び、日本の民衆を指す時には「日本人」と呼んだ。本文のなかでは移民体験者たちが、日本人に対する呼称を使い分けていたことについて随所解釈してきた。対話のなかの呼称の使い分けは、複合的な関係性を表しているといえよう。

3人ともに対話のなかで個人や民族、そして国家間との関係性も語った。LDさんは国や民族の相互関係をよくするためには、中庸と折衷を離れたらいけないと強調した。PCさんは「民衆と民衆の間は、永遠に仲良くしなければならない」、「われわれチョソンサムと中国人は先入観を持って、かつての日本軍国主義が犯した罪を日本の一般民衆に負わすのは良くない」・・・と語った。ZRさんは「私がいう歴史を忘れないということは歴史を知る意味だ。今の若者たちは、過去の歴史があったかどうかとも知らない」・・・と語った。移民体験者たちは多層的なアイデンティティを持っており、複合的な立場で経験を語った。これらの語りは平和のメッセージであり、和解のメッセージでもあるといえよう。しかし、ここで1つ注意しなければならない。長年、和解研究を続けている心理学者の井上孝代は「過去のこととして忘れましょうという、水に流す和解は、真の謝罪と、それに対する許しがないかぎり、相手にとっても自分にとっても、一種のごまかしにすぎない」と述べている¹⁷⁹。井上の議論に引きつけていえば、3人から発した和解のメッセージは水に流す和解ではなく、事実を知ったうえでの和解のメッセージであると理解すべきであろう。

田中隆一によれば、「19世紀後半から20世紀半ばまでの約100年間に在満朝鮮人の所属した（することを強制された）国家（政権）とその国籍は朝鮮政府、大韓帝国、清朝、中華民国、日本、『満洲国』、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国、さらにロシアまで加えれば、実に10以上になり、この期間の満洲をめぐる国際関係の激しさをそのまま体現している」という¹⁸⁰。移民体験者たちの個人史はまさに激動の北東ユーラシア近代史の縮図であるといえよう。移民体験者たちの語りは時間の幅が広く内容也多岐に渡っていた。語りのなかの時間はクロノロジカルな時間とは限らなかった¹⁸¹。インタビューは聞き手と語り手の相互作用を通して進めていった。LDさんの語りには朝鮮での生活、および「満州国」時代の生活、そして現在の生活についての紹介が含まれていた。その他に歌、詩、俳句などについての幅広い話題が含まれていた。PCさんの語りはシベリア抑留の話から遣唐使の話まで及んだ。その後、話題が再度シベリア抑留の体験談に戻り、日本人に日本文化や料理、そして古典を教えてもらった体験を語った。ZRさんの語りには朝鮮で学校に通った際の担任先生、同じ村に住んでいた日本人の子供、戦後中国で出会った反戦同盟に参加した日本人・・・さまざまな人間が登場した。3人の回想は国境や民族を越えて

¹⁷⁹ 井上孝代『あの人と和解する一仲直りの心理学』集英社新書、2005年、p. 29。

¹⁸⁰ 田中隆一「日本の朝鮮植民地支配と『在満朝鮮人』問題―「満州国」時期を中心に」日韓文化交流基金編『訪韓学術研究者論文集』第6巻、2006年、p. 59。

¹⁸¹ 物語の時間は、クロノロジカルな時間とは異なり、逆行したり、回帰したり、循環したり、止まったり、いろいろな流れ方をします。多様な時間軸を設定できることが物語の強みです。物語の時間は、人間の経験する時間に近いといえましょう。人生を物語とみなすアプローチは、多様で多次元の時間軸を扱う視点をひらき、記憶研究にも影響すると考えられます(やまだようこ「人生を物語ることの意味―ライフストーリーの心理学―」やまだようこ編著『人生を物語る』ミネルヴァ書房、2000年、p. 7)。

縦横無尽だった。回想と記憶について、モーリス＝スズキは次のように述べている¹⁸²。

国家のような巨大な「記憶」、アイデンティティ集団の小さな「記憶」、そしてさらに小さな「記憶」は、相互にうまく噛み合う性質のものではなく、多層多重に絡み合い、対立する。「記憶」がより大きく、かつ、一般化すれば、より明瞭に、かつ、単純化される。国家あるいは大陸レベルでの「記憶」は、正邪、勝敗を語るのがたやすい。一方、アイデンティティ集団や個のレベルでの「記憶」は、すべてが不明瞭で複雑化するのである。なぜなら「回想」とは、地理的なそして倫理的な境界線を無視して、自由な奔流となるからなのだ。忘れてはならないのは、すべてのレベルでの「記憶」の保持である。

3人の語りは正邪や勝敗を語る大きな物語ではなく、多層多重に絡み合っており、複雑さを内包していた。対話を通して紡ぎ出された移民体験者たちの語りには、さまざまな声が響いており、いわば、ロシアの文芸学者ミハイル・バフチンが唱えたポリフォニー¹⁸³性が含まれていたといえよう。そのポリフォニー性を持つ移民体験者たちの語りを、朝鮮民族のものあるいは中国人のものだと決め付けることはできない。なぜならば、3人は国籍上では中国人であるが、日本が敗戦するまでは帝国臣民であったからである。しかし、3人の精神世界では「チョソンサラム」だと意識しており、国家とは距離を置いていた。

おわりに

移民体験者たちは重い歴史を背負ってきたにもかかわらず、インタビューを受ける際にはほとんどの方は感情的になることなく淡々と語った。しかし、その静かな語り口からは恨（ハン）の重みを感じ取ることができる。移民体験者たちの「植民地経験」の語りに耳を傾けば、日本の植民地責任と戦争責任の重さを知り、東アジア社会がいかに難しい問題を抱えているのかも分かるだろう。歴史学者の外村大は植民地時代の朝鮮人の移動の実態とそれをめぐる議論や日本の施策を概観し、植民地時代において「日本人は朝鮮人を対等な存在ではなく、動かされるべき客体として認識していた。そして、日本人の利益のために自分たちが忌避するような劣悪な条件・環境の職場や地域への配置や、移動の抑圧、移動先での管理を通じて日本人中心の社会秩序を維持しようと目論んできた」と述べている¹⁸⁴。戦前、朝鮮人は動かされるべき客体としての「チョウセンジン」として移動させられた。対話を通して移民体験者は客体ではなく主体として、「チョソンサラム」としての存在が浮かび上がってきたのである。

¹⁸² モーリス＝スズキ、テッサ著／大川正彦訳『辺境から眺める』みすず書房、2000年、p. 250。

¹⁸³ バフチンはその著書『ドストエフスキーの詩学』のなかで、ポリフォニー小説の基本的な特徴は、「それぞれに独立して互いに溶け合うことのない多数の声と意識、そのそれぞれがかけがえのない価値をもつ声による真のポリフォニー」にあると述べている（バフチン、1995：p. 15）。バフチンが提起した「ポリフォニー小説」は、文学理論の枠を超えて、日常言語（例えば日常的ナラティヴ）や社会的言語（例えば論文執筆）の分析にも適用されるようになっている（小田博志「ナラティヴの断層について」江口重幸、斎藤清二、野村直樹編『ナラティヴと医療』金剛出版、2006年、p. 63）。

¹⁸⁴ 外村大「日本帝国と朝鮮人の移動—議論と政策—」蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動—引揚げ、送還、そして残留』勉誠出版、2011年、p. 19。

終章 まとめと総合考察

日本帝国史と日本植民地史を専門とする歴史学者の山本有造は、「公式の日本帝国は、『内地』を中核とし、その外周を『純領土たる外地』と『準領土たる外地』が取りまく三重の円構造として描くことができる」と述べている¹⁸⁵。山本の議論に引きつけていえば、朝鮮人「満州」移民は、「純領土たる外地」である朝鮮半島から「準領土たる外地」である「満州」へ移住したといえよう。朝鮮人の「満州」への移住と定住の歴史には日本の朝鮮・「満州」支配が深く関わっている。しかし、かつて日本の植民地時代に中国東北地域に朝鮮人が移住したという「歴史的事実」については、一部の研究者を除けばほとんど知られていないといつてよかろう。現在、生存している移民体験者たちは高齢になっており、今後、数年でその事実の証言者は消えて行くことになる¹⁸⁶。その意味で本研究は「消えゆく声を聞く／見えないものをみる」¹⁸⁷ことができ、残された数少ない聞き取りの機会を活かした。本文のなかでは移民体験者たちが語った生の声を1次資料として用いた。

第1節：本研究の到達点

本研究では朝鮮人「満州」移民という「歴史的事象」に対してライフヒストリー（生活史）法を用いて、「事実の探求」と「意味の探求」ができた¹⁸⁸。本研究では連続的な視点で移民体験者たちの個人史を通して、移民体験者たちが生きてきた社会史を照射し、朝鮮人「満州」移民研究、植民地研究、ライフヒストリー研究に新たな視点を導入することができたと考える。以下では本研究の到達点についてまとめる。

第1に本研究は従来の朝鮮人「満州」移民研究に新しい視点を導入することができた。本研究では文献資料によるマクロな視点、および移民体験者たちのライフヒストリーによるミクロな視点を組み合わせて、朝鮮人が「満州」へ移住した要因を多層的な視角から考察した。本文中に数十人の移民体験者を登場させた。移民体験者たちの証言（語り）を重ね合わせると、移民体験者たちが「満州」へ移住した要因にはいくつかの共通のパターンが見られ、「満州」に定着した際にも共通の問題点が見られた。第2章では朝鮮人が「満州」へ移住したさまざまな要因を考察した。先行研究では主に国策農業移民を取り上げており、そのほかの移住形態についてはさほど注目してこなかった。その1つの原因は統計データ特有の限界に求められるだろう。本文中で言及したように、当時の各植民地統治機関の統

¹⁸⁵ 山本有造「満洲国—ある歴史の終わり、そして新たな始まり—」藤原書店編集部編『満洲とは何だったのか』藤原書店、2004年、p. 68。

¹⁸⁶ 筆者がインタビューした事例のなかには、すでに20数人が亡くなった。

¹⁸⁷ この表現は文部科学省21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」総括班編「〈企画〉シンポジウム：消えゆく声を聞く／見えないものをみる：オーラル・ヒストリーの可能性とアーカイブの課題」『史資料ハブ：地域文化研究：東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」』2003年、から借りたものである。

¹⁸⁸ 「事実の探求」と「意味の探求」は有末（2006）から借りた言葉である。有末によれば、「歴史的事実の記述を中心とした政治史、外交史、経済史、社会史などに比べると、生活史には人間主体の『生きる意味の探究』という意味の側面が重要視されている。しかし、人間の内面や『生きる意味』自体に主題を置いた小説、文学や哲学に比較すると、生活史は、個々人の『生きた経験』に根差しているという意味で、決してフィクションではなくて『事実』を根拠にしている。したがって生活史調査の場面においても、『事実の探究』と『意味の探究』が重なり合いながら進行していくと考えられる」という（有末賢「ライフヒストリーにおけるオーラル・ヒストリー」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号、2006年、p. 54）。

計データはまちまちであった。本研究ではライフヒストリー法を用いることによって、この統計の範疇に含まれていない人々の声も拾いあげることができた。筆者がインタビューした事例のなかには、「強制連行」や「処女供出」から逃れるため「満州」へ移住した人々がいた。また、朝鮮半島から「満州」に移住してから「満州国」で再び移住させられた人々がいた。そして、縁故者を頼って「満州」へ移住したと多くの移民体験者から証言を得た。証言と文献資料を突き合わせることによって、文献資料だけでは分からなかった移住当時の人々の生きていた姿と移動の様子がはっきり見えてきた。例えば、J Xさんの故郷の金堤郡は朝鮮半島で小作争議が最も多く発生する地域だった。J Xさん一家が所属する開拓団は「満州国」で抗日運動が活発に行われた地域に移住し、「満州国」の治安の役割を当てられた。本研究ではライフヒストリー法を用いることによって、文献資料だけではとらえきれない朝鮮人の「満州」移住の複雑な要因について考察することができた。

第2に本研究は植民地研究に新しい視点を導入できた。本研究では朝鮮人移民の「満州」での定着時における問題点にさまざまな角度からアプローチした。従来の植民地研究では、「日本と植民地朝鮮」あるいは「日本と『満州国』」という図式で別々に取り扱ってきた。本研究では文献資料のほかに移民体験者たちの証言に基づき、日本帝国主義の植民地統治の実態のさまざまな側面を明らかにすることができた。第2章では朝鮮人移民が「満州」へ移住した要因に着目し、文献資料ではあまり見られない植民地朝鮮における朝鮮民衆の日常生活の様子を掘り起こすことができた。第3章では「満州国」において民族間にランクが付けられていた「歴史的事実」を確認し、「住」に着目して「五族協和」の理念と現実との乖離について紹介した。また、学校教育を通して「五族協和」の理念と現実との乖離の事実を、在満朝鮮人の視点で概観した。第5章では移民体験者たちの植民地経験の継承、および世代を超えた対話が結びつける関係性について考察した。対話のなかから紡ぎ出された語りに注目することによって、移民体験者たちの微細な心情も聞き取ることができた。また、アンビバレントな語りを通して加害と被害についても考察し、在満朝鮮人は「被害者」だけではなく、「加害者」の側面もあったという事実を聞き取ることができた。本文のなかでは特にP Cさんとの対話を手がかりに、在満朝鮮人が被害を受けながら加害者性を持っていた側面を考察した。在満朝鮮人が持つ加害の側面の語りは聞き手である筆者が朝鮮民族で、一人称でアプローチしたため聞き取れたといえよう。本研究は戦争問題と植民地問題を包括的な視点で論を進め、東アジアにおける脱植民地化についても問題を提起したと考える。

第3に本研究は朝鮮人「満州」移民のライフヒストリー（生活史）研究に新しい視点を導入できたと考える。質的研究方法による朝鮮人「満州」移民研究は、まだ始まったばかりの萌芽的な研究である。筆者はフィールドワークを積極的に行い、現場ではフォーマルインタビューのほか、インフォーマル・インタビューを行い、参与観察も実施してきた。また、本研究では実証的アプローチと対話的アプローチの研究手法の融合を試み、移民体験者たちのライフヒストリー（生活史）に多面的にアプローチすることができた。対話的アプローチでは「自己」という概念を重視し、聞き手の筆者は一人称としてインタビューのなかに登場してアクティヴなインタビューに努め、移民体験者たちの語りの「意味の地平の可視性」¹⁸⁹を高めることができた。ライフヒストリー法は調査者が思いもよらなかった

¹⁸⁹ ホルスタインらによれば、「物語と物語を結びつけて、あるパターンを形成すると、そこから一貫性を

意外な事実発見へと導く可能性を秘めており、セレンディピティ¹⁹⁰の力もある。第5章で論じたように、移民体験者たちとの世代を超えた対話を通して新しい視点を見つけ、例えば、本研究では「チョンソナム」というナショナリズムを呼び覚ますような意味合いを持たない自称詞を発見することができた。

そして本研究は平和研究の一環に位置付けることができると考える。本研究では波瀾に満ちた個人史を持つ移民体験者たちの生に着目した。歴史学者の和田春樹は、「朝鮮民族の歴史が生んだディアスポラの過程は今日も終わっていない。朝鮮人の移動はつづいている。しかし、その移動の苦しみと悲しみを抱きしめつつ、この地域に住む朝鮮人は朝鮮半島を中心とする東北アジアの人的、平和的協力のために働く潜在的可能性をもった集団である」と述べている¹⁹¹。本文のなかでは、家族の戦争被害体験を持つ金宗雲さんと奥さんの金蓮珠さんの事例を紹介した。金宗雲さんは「歴史に対して仇を討ちあつてはいけない。仇を討ちあえば切りがなくなる」と語り、金蓮珠さんは「中国人でも、朝鮮人でも、日本人でも、同じ人間ではないか。(中略)どの民族がどうであるかをいうことではない。同じ人間として残酷なことをしないことだ」と語った。金宗雲さん夫妻のメッセージは平和のメッセージであり、和解のメッセージでもあると考える。序章で言及したように、小田博志は「和解の前提は歴史の傷口を開くこと。(中略)歴史の傷口を開くとは、被害者の声(ナラティヴ)を聴き、被害の実態を公の記録に留めて社会で共有していくことである」と述べている¹⁹²。第2章と第3章では移民体験者たちの植民地体験を論じ、第4章では移民体験者たちの戦争体験を論じた。いわば、本研究では植民地と戦争を体験した「被害者」の声(ナラティヴ)に耳を傾け、歴史の傷口を開き、突き刺さったトゲを抜くプロセスでもあると考える。平和を構築するためには、憎悪の連鎖を断ち切る必要がある。本研究では加害と被害の問題を通して平和について考えることができる。平和は戦争がない状態だけを指すものではなく、抑圧の委譲も決して平和ではない。「被害者」は「加害者」になる可能性がある。第3章で数人の移民体験者は在満朝鮮人のなかに日本の植民地統治に加担した者がいたことを証言した。第5章でPCさんが中国人を差別した体験を語った。PCさんはシベリア抑留という戦争体験、および中国人を差別した植民地体験を踏まえて、日中韓の若者に向けて発した「民族間で互いに理解して、かつてのように民族間で先入観を持って民族差別したり、人を見下したりすることをなくさなければならない」という反省的な語りには、傷ついた関係を修復したいメッセージが含まれており、和解のメッセージでもあるといえよう。本研究は従来の戦争と対置する平和研究に新しい要素を付け加えることができたと思う。

もった有意義な配置が現れてくる。われわれはこのパターンを、意味の地平と呼ぶ。(中略)アクティヴ・インタビューの第一の目標は、このような物語と物語の結びつきと意味の地平の可視性を高めることである」という(ホルスタイン、ジェイムズ&グブリアム、ジェイバー著/山田富秋他訳『アクティヴ・インタビュー ―相互行為としての社会調査』せりか書房、2004年、pp.149-150)。

¹⁹⁰ セレンディピティとは何かを探している時、偶然に意外な出来事に出会うことでひらめきを得て、もともと探していたのと別な価値のある大切な何かを発見する才能のことを意味する(玄田有史『希望学』岩波書店、2010年、p.138)。

¹⁹¹ 和田春樹「ディアスポラ朝鮮族の新たな可能性」『言語』第33巻5号、2004年、p.85。

¹⁹² 小田博志「エスノグラフィーとナラティヴ」野口裕二編『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009年、p.49。

第2節：本研究の限界と課題

2-1 本研究の限界

本研究は既存の朝鮮人「満州」移民研究に対していくつかの新しい要素を付け加えたが、限界点もある。まず、研究方法が洗練されていない。本研究では実証的アプローチと対話的アプローチの融合を試みたが、この2つの質的研究方法の有機的対話の模索が必要である。次に本研究では朝鮮人「満州」移民の移住要因を植民地期（1910年～1945年）に絞って考察した。今後、文献資料の解読を進み、長いスパンでの朝鮮人「満州」移民の移住要因を探る必要がある。そして、本研究では朝鮮人「満州」移民の定着時の問題点を、主に移民体験者たちの証言に基づいて五族協和の破綻要因だけに絞ってみた。今後、もっと広い視点で論考を深めていく必要がある。

2-2 今後の課題

本研究はライフヒストリー研究、移民研究、植民地研究、平和研究と関連性がある学際的な研究である。今後、隣接研究領域との対話を行いながら、さらに研究を深めていく必要がある。本研究の限界点を踏まえたうえ、今後、さらに議論を進めていくうえでの課題としては以下の3点を考える。

第1、移民一世たちの植民地経験をいかに継承するか、という課題である。竹中憲一はその著書『大連アカシアの学窓——証言 植民地教育に抗して』のなかで、「人間という記憶媒体から歴史を再構成する作業は、まさに時間との競争である」と述べている（p.7）。移民一世たちのほとんどは80歳を超えており、後5年から10年が経つと、移民一世たちは植民地経験を自らの口から語ることなくこの世から去っていくだろうと考えられ、インタビュー調査を急がなければならない。社会学者の山田富秋と藤井泰は、「当事者から話を聞くという行為は、当事者が経験した出来事を忘れないという意思表示につながり、聞き手である調査者も彼らの語りを語り継ぐという、ある意味ではバフチンの応答責任を負う可能性を常に潜在的に持っている」と述べている¹⁹³。今後、聞き取り調査を続け、移民一世たちの植民地経験がいかに継承され、また、筆者自身が「当事者」としていかに移民一世たちの植民地経験を語り継ぐのかについても模索していく。

第2、インタビュー調査のデータに基づき、移民体験者たちの内面の意味世界（アイデンティティ）を考察することである。日本の敗戦後の混乱を経て、1949年の中華人民共和国が成立した後、在満朝鮮人は中国の少数民族の一員である中国朝鮮族となった。移民体験者たちは自分たちの意志と関係なく、戦前は「日本人」として生き、戦後は「中国人」になった。まさに日本で公共哲学という新しい領域を切り開いた金泰昌がいう「国民的アイデンティティの人為的トランスフォーメーション」¹⁹⁴を体験した。いわば、移民体験者たちは朝鮮人、日本人、そして中国人を遍歴したといえよう。朝鮮人「満州」移民の歴史は、朝鮮史だけでも、日本史だけでもなく、トランスナショナルヒストリーであると考えられる。移民体験者たちのアイデンティティについての考察は今後の課題とする。

¹⁹³ 山田富秋、藤井泰「あとがき」桜井厚、山田富秋、藤井泰『過去を忘れないー語りつぐ経験の社会学』せりか書房、2008年、p.240。

¹⁹⁴ 金泰昌「コスモポリタンーグローバル市民」佐々木毅、金泰昌編『公共哲学5 国家と人間と公共性』東京大学出版会、2002年、p.206。

第3、世代というフレームワーク（枠組み）を用いて移民体験者たちへの追跡調査を継続するほか、移民一世たちの子孫にもインタビュー調査を行う。筆者が聞き取り調査の段階で分かったのは、20 数人の移民体験者の子孫が日本に留学したことがあり、もしくは留学している。約4人に1人の割合だった。管見するかぎり、かつての旧植民地出身者の子孫が旧宗主国に還流する研究は、東アジアにおいてはまだ萌芽的な研究に属する。筆者はインタビュー調査で、移民体験者たちに子孫の日本への留学についていかに考えているのかについても質問した。本文のなかでは断片的にしか紹介できなかったが、より詳しい考察は今後の課題とする。また、この第3の課題と並行して、戦争と植民地を体験していない日中韓の若い世代が、戦争問題と植民地問題をとらえているのかについて研究を進めることである。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にご支援とご指導を賜りました。指導教官である北海道大学名誉教授の野澤俊敬先生には大学院時代の修士課程から現在に至るまで言葉に尽くせないほどお世話になりました。修士課程の時に先生からいただいた「歴史を学ばなければならない。歴史を学ぶ努力をしなければならない」という言葉を今でも肝に銘じております。先生は学生の自主性を尊重しつつ、私の研究を厳しくも温かく見守ってください、退官後も本論文の副査としてご指導くださいました。先生から受けた学恩に対して感謝申し上げます。

野澤先生の定年退職に伴い、指導教官として親身なってご指導ご鞭撻を承り、本論文の主査を務めていただいた北海道大学教育学院の竹本幸博先生に深く感謝の意を表します。先生は引用文献の表記方法や注などの細部にもしっかりと気を配り、謙虚な姿勢で研究に臨むようにご指導くださいました。また、本論文の副査を引き受けてくださった北海道大学教育学院の土田映子先生に感謝しております。先生には修士課程の時からお世話になり、本論文を完成させるにあたって、クリティカルな視点から有意義かつ的確なご意見をたくさんいただきました。同じく本論文の副査を引き受けてくださった北海道大学文学研究科の小田博志先生に感謝致します。2008年から2010年まで、先生の学部生向けの講義「人類学と平和」を聴講させていただき、人類学と平和学に強い関心を持つことができました。小田先生には研究方法論を中心にアドバイスを多くいただきました。

そして、北海道大学教育学院国際多元文化教育論講座の先生方からもさまざまなアドバイスをいただいたことを感謝致します。青木和佳先生は東京大学に移られた後、出張で札幌に来られた際にも論文のご相談に乗っていただきました。北海道大学名誉教授の工藤正廣先生には学部時代から現在に至るまでお世話になりました。一時期体調を崩して研究を断念しようとした時に温かく応援していただき、励ましてくださいました。ありがとうございました。多くの先生方からコメントをしていただきましたが、修正がうまくできたとは言い難いです。本論文の完成を持って御礼に代えさせていただきます。いうまでもなく本論文の文責はすべて私にあります。

本論文を作成することにあたり、北海道大学図書館に大変お世話になりました。学外や海外の文献を取り寄せる際には、いつも迅速に対応してくださいました。また、私が集中的に海外でのフィールドワークを行うことができたのは、日本文部科学省国費留学生奨励金（2006～2009年）、富士ゼロックス小林節太郎記念基金の研究助成（2009年）を受けてからです。研究助成を賜りました両団体にこの場を借りて御礼を申し上げます。

そもそも、移民体験者の方々のご協力がなくしては、本論文は生まれなかったです。私の研究に協力をしてくださった移民体験者の方々に、心からの感謝とその生涯に敬意を捧げます。また、亡くなったの方々のご冥福をお祈り致します。私にインタビュー調査の場を与えてくださった中国東北地域の多くの老人協会や養老院、そして村の役場の皆様にもお礼を申し上げます。本論文を完成するまで何度も壁にぶつかりましたが、なんとか完成までこぎつけることができました。ご支援とご協力をいただきながら、ここにお名前を記すことができなかった多くの方々にも心より感謝申し上げます。

最後に精神的に支えてくれた両親と妻に感謝します。父親は時にはフィールドワークに同行し、カメラマンを務めました。本論文を2010年10月に急逝した父親に捧げます。

参考文献

日本語

- アルヴァックス, M. 著／小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989 年。
- アレント, ハンナ著／志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994 年。
- 浅田喬二「大正末期―昭和 10 年代初期・朝鮮における抗日農民運動の地域的特徴(1920-1939 年)」『朝鮮史研究会論文集』第 8 集、1971 年、pp. 68-98。
- 荒井信一『歴史和解は可能か——東アジアでの対話を求めて』岩波書店、2006 年。
- 有末賢「ライフヒストリーにおける記憶と時間」三田社会学会編『三田社会学』創刊号、1996 年、pp. 67-82。
- 有末賢「ライフヒストリーにおけるオーラル・ヒストリー」日本オーラル・ヒストリー研究学会編『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号、2006 年、pp. 50-64。
- 蘭（あららぎ）由岐子『「病いの経験」を聞き取る——ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社、2004 年。
- 蘭信三『「満州移民」の歴史社会学』行路社、1994 年。
- 蘭信三「満州移民研究における社会学的方法の可能性」札幌学院大学社会情報学部編『社会情報』Vol. 9、No. 2、2000 年、pp. 73-101。
- 蘭信三「中国『残留』日本人の記憶の語り——語りの変化と『語りの磁場』をめぐって——」山本有造編『満洲——記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007 年、pp. 212-251。
- 蘭信三「戦後日本社会と満洲移民体験の語りつぎ」浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成——戦争体験の世代間継承』慶応義塾大学出版会、2008 年、pp. 53-84。
- 青山和佳『貧困の民族誌』東京大学出版社、2006 年。
- 市井三郎『歴史の進歩とはなにか』岩波新書、1971 年。
- 伊藤亜人他監修『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社、2000 年。
- 伊藤一彦「異民族支配の模索——在満朝鮮人調査」松村高夫、柳沢遊、江田憲治編『満鉄の調査と研究』青木書店、2008 年、pp. 271-335。
- 井上勝生「札幌農学校と植民学——佐藤昌介を中心に——」『北大百二十五年史』（論文・資料編）、2003 年、pp. 111-162。
- 井上孝代『あの人と和解する——仲直りの心理学』集英社新書、2005 年。
- 石黒武人「多文化関係研究における構築主義的アプローチの有効性——ライフストーリー研究を中心に——」多文化関係学会編『多文化関係学』第 4 号、2007 年、pp. 123-132。
- 石田雄『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店、2000 年。
- 石牟礼道子『新装版 苦海浄土——わが水俣病』講談社文庫、2004 年。
- 岩田基碩「朝鮮人満州移民開拓の史的考察」朝鮮総督府『朝鮮』第 342 号、1943 年。
- 岩井洋「想起することと歴史をつくること」佐々木正人編『現代のエスプリ』第 298 号、至文堂、1992 年、pp. 195-202。
- 林志弦「『世襲的犠牲者』意識と脱植民地主義の歴史学」三谷博、金泰昌編『東アジア歴史対話——国境と世代を越えて』東京大学出版会、2007 年、pp. 167-186。
- 板垣竜太「植民地支配責任を定立するために」岩崎稔、大川正彦、中野敏男、李孝徳編『継続する植民地主義——ジェンダー・民族・人種・階級』青弓社、2005 年。
- 板垣竜太、鄭智泳、岩崎稔編『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011 年。

上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房、1999年。

臼杵陽監修；赤尾光春、早尾貴紀著『ディアスポラから世界を読む』明石書店、2009年。

上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、2005年。

エリクソン, E. H. 著／鎌幹八郎訳「現代における同一性と根こぎ感」小此木啓吾編集・解説『現代のエスプリ アイデンティティ』至文堂、1974年、pp. 123-136。

江頭節子「社会学とオーラル・ヒストリー——ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に——」『大原社会問題研究所雑誌』第585号、2007年、pp. 11-32。

遠藤正敬「満洲国統治における『日本臣民』という存在——戸籍問題からみる『民族協和』の実相」松村史紀他編著『東アジア地域の立体像と中国』早稲田大学現代中国研究所、2011年、pp. 57-81。

鬼塚一男「開拓団輸送記——蘇満国境を拓土と共に——」朝鮮総督府編『朝鮮』第342号、1943年、pp. 46-51。

岡真理『記憶／物語』岩波書店、2000年。

小熊英二『単一民族神話の起源——＜日本人＞の自画像の系譜』新曜社、1995年。

小熊英二『＜日本人＞の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮-植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998年。

小熊英二、姜尚中編『在日一世の記憶』集英社新書、2008年。

小熊英二『私たちはいまどこにいるのか』毎日新聞社、2011年。

小田亮「関係性としてのポリフォニー」早稲田大学文化人類学学会編『文化人類学研究』4、2004年、pp. 57-65。

小田博志「ナラティヴの断層について」江口重幸、斎藤清二、野村直樹編『ナラティヴと医療』金剛出版、2006年、pp. 49-69。

小田博志「エスノグラフィーとナラティヴ」野口裕二編『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房、2009年、pp. 27-52。

小田博志『エスノグラフィー入門——＜現場＞を質的研究する』春秋社、2010年。

小田博志、関雄二編『平和の人類学』法律文化社、2014年。

大迫俊夫「ドイツ学生とユダヤ人高齢者——歴史を癒す枠組みとしての世代間の対話」カプラン, マシュー、ヘンケン, ナンシ、草野篤子編／加藤澄訳『グローバル化時代を生きる世代間交流』明石書店、2008年、pp. 295-309。

鎌田澤一郎『朝鮮人移民問題の重大性』朝鮮総督府、1935年。

カー, E. H. 著／清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書、1962年。

風間秀人「農村行政支配」浅田喬二、小林英二編『日本帝国主義の満州支配』時潮社、1986年、pp. 255-326。

河合和男『朝鮮における産米増殖計画』未来社、1986年。

梶村秀樹「1930年代満洲における抗日闘争に対する日本帝国主義の諸策動——『在満朝鮮人問題』と関連して——」『梶村秀樹著作集』第4巻、明石書店、1993年、pp. 171-211。

菅英輝「戦争と記憶——トランスナショナル・ヒストリーの可能性——」東アジア学会編『東アジア研究』第8号、2006年、pp. 4-20。

笠原十九司「総論 記憶の比較文化」都留文科大学比較文化学科編『記憶の比較文化論——戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』柏書房、2003年、pp. 9-20。

加藤周一『日本文化における時間と空間』岩波書店、2007年。

加藤陽子『戦争の日本近現代史』講談社現代新書、2002年。

加藤聖文「満洲体験の精神史——引揚の記憶と歴史認識」劉傑、川島真編『1945年の歴史認識——「終戦」をめぐる日中対話の試み』東京大学出版会、2009年、pp. 53-80。

姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン——一九三〇年代の東満・南満を中心として』青木書店、1993年。

姜尚中『東北アジア共同の家をめざして』平凡社、2001年。

姜尚中編『ポストコロニアリズム』作品社、2001年。

姜尚中、吉見俊哉『グローバル化の遠近法』岩波書店、2001年。

姜尚中、森達也『戦争の世紀を超えて——その場所で語られるべき戦争の記憶がある』講談社、2004年。

韓景旭『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』中国書店、2001年。

川村湊、山室信一「対談 <アジア>の自画像をいかに描くか」『世界』第 614 号、1995 年、pp. 136-154。

片桐雅隆『過去と記憶の社会学——自己論からの展開』世界思想社、2003年。

片桐雅隆「マンハイムの世代論と『語り継ぐこと』」桜井厚、山田富秋、藤井泰編『過去を忘れない——語り継ぐ経験の社会学』せりか書房、2008年、pp. 192-194。

金賛汀『『満州』・そこに打ち捨てられし者』『世界』（第 498 号、第 499 号、第 501 号）、岩波書店、1987 年、pp. 314-324、pp. 316-328、pp. 330-338。

金賛汀『日の丸と赤い星——中国大陆の朝鮮族を訪ねて』情報センター出版局、1988 年。

金静美『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』現代企画室、1992 年。

金泰昌「コスモポリタン-グローバル市民」佐々木毅、金泰昌編『公共哲学 5 国家と人間と公共性』東京大学出版会、2002 年、pp. 199-226。

金美花『中国東北農村社会と朝鮮人の教育——吉林省延吉県楊城村の事例を中心として』御茶の水書房、2007 年。

金永哲『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂、2012 年。

金洛年『『植民地近代化』再論』今西一編『世界システムと東アジア——小経営・国内植民地・「植民地近代」』日本経済評論社、2008 年、pp. 205-241。

貴志俊彦、松重充浩、松村史紀『二十世紀満州歴史事典』吉川弘文館、2012 年。

木村敏『偶然性の精神病理』岩波現代文庫、2000 年。

北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』北海道大学出版会、2008 年。

ギアーツ、クリフォード著／吉田禎吾他訳『文化の解釈学 I』岩波書店、1987 年。

クラパンザーノ、ヴィンセント著／大塚和夫、渡部重行訳『精霊と結婚した男——モロッコ人トゥハーミの肖像』紀伊国屋書店、1991 年。

クリフォード、J. 著、春日直樹他訳『文化を書く』紀伊国屋書店、1996 年。

栗本英世、井野瀬久美恵「植民地経験の諸相」栗本英世、井野瀬久美恵編著『植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院、1999 年、pp. 11-46。

倉橋綾子『憲兵だった父の残したもの——父娘二代、心の傷を見つめる旅』高文研、2002 年。

権香淑『移動する朝鮮族——エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社、2011 年。

玄田有史『希望学』岩波書店、2010 年。

五味川純平『人間の条件（上・下）』三一書房、1967 年。

駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996年。

小森陽一、高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超える』東京大学出版会、1998年。

高成鳳『植民地鉄道と民衆生活——朝鮮・台湾・中国東北』法政大学出版局、1999年。

小関隆「コメモレイションの文化史のために」阿部安成、小関隆、見市雅俊、光永雅明、森村敏己編『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』柏書房、1999年、pp. 5-22。

小菅信子『戦後和解——日本は〈過去〉から解き放たれるのか』中公新書、2005年。

高全恵星監修、柏崎千佳子訳『ディアスポラとしてのコリアン——北米・東アジア・中央アジア』新幹社、2007年。

小林多寿子「〈親密さ〉と〈深さ〉——コミュニケーション論からみたライフヒストリー——」日本社会学会編『社会学評論』第168号、1992年、pp. 89-104。

小林多寿子「ミニドカ・ピルグリメージ——オーラルストーリーからみる日系アメリカ人の『記憶の場』——」日本オーラル・ヒストリー学会編『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号、2006年、pp. 34-49。

小林多寿子「ミニドカを語り継ぐ——日系アメリカ人のインターンメント経験とジェネラティヴィティ——」桜井厚、山田富秋、藤井泰編『過去を忘れない——語り継ぐ経験の社会学』せりか書房、2008年、pp. 20-34。

齋藤純一『思考のフロンティア 公共性』岩波書店、2000年。

桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002年。

桜井厚、小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房、2005年。

桜井厚『境界文化のライフストーリー』せりか書房、2005年。

桜井厚「オーラル・ヒストリーの対話性と社会性」歴史学研究会編『歴史学研究』No. 811、2006年、pp. 2-10。

桜井厚「ライフストーリーの社会的文脈」能智正博編『〈語り〉と出会う——質的研究の新たな展開に向けて』ミネルヴァ書房、2006年。

桜井厚『『事実』から『対話』へ——オーラル・ヒストリーの現在——』『思想』No. 1036、岩波書店、2010年、pp. 235-254。

酒井直樹編『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会、2006年。

サイード、エドワード著／今沢紀子訳『オリエンタリズム』（上・下）、平凡社、1993年。

サイード、エドワード著／大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社、1998年。

坂口満宏「移民史研究の射程」日本史研究会編『日本史研究 特集「日本」史を見直す』第500号、2004年、pp. 131-151。

坂部恵『かたり——物語の文法』ちくま学芸文庫、2008年。

坂部晶子『『満洲』経験の社会学——植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008年。

佐藤郁哉『フィールドワーク——書を持って街に出よう』新曜社、1992年。

佐藤健二「ライフヒストリー研究の位相」中野卓、桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年、pp. 13-41。

佐々木寛「危機から〈共生〉へ——『東アジア』論の地平——」佐々木寛編『東アジア〈共生〉の条件』世織書房、2006年、pp. 3-26。

辛基秀『朝鮮通信史——人の往来、文化の交流』明石書店、1999年。

清水透「フィールドワークと歴史学」『歴史学研究』No. 811、2006年、pp. 11-19。

- 澤田稔「〈脱自〉としてのカリキュラム——バフチン言語哲学による『個性』概念の再検討——」『名古屋女子大学紀要（人・社）』第55号、2009年、pp. 49-58。
- 白井久也「朝鮮人元シベリア抑留兵は訴える」『世界』No. 793、2009年、pp. 234-242。
- 塩原良和（2012）『共に生きる——多民族・多文化社会における対話』弘文堂、2012年。
- 許寿童『近代中国東北教育の研究——間島における朝鮮人中等教育と反日運動』明石書店、2009年。
- 下河辺美知子『トラウマの声を聞く——共同体の記憶と歴史の未来』みすず書房、2006年。
- 徐明勲「中国東北地方における朝鮮人移民」京都大学総合人間学部編（研究代表者：池田浩志）『「満蒙開拓団」の総合的研究——母村と現地』（1995～1997年度文部省科学研究費補助金国際学術研究中間報告書）、1996年、pp. 80-92。
- 徐明勲「朝鮮人集団移民の性質と事情について」京都大学総合人間学部編（研究代表者：池田浩志）『「満蒙開拓団」の総合的研究——母村と現地』（1995～1997年度文部省科学研究費補助金国際学術研究成果報告書）、1998年、pp. 121-131。
- 徐禎完「＜韓国併合 100 年＞を問い直すために」徐禎完、増尾伸一郎編『植民地朝鮮と帝国日本——民族・都市・文化』（アジア遊学 138）、勉誠出版、2010年、pp. 4-5。
- 徐京植『植民地主義の暴力』高文研、2010年。
- 辛培林『「五族協和」の実施と民衆の悲惨な生活』植民地文化学会、中国東北淪陥 14 年史総編室編著『〈日中共同研究〉「満洲国」とはなんだったのか』小学館、2008年、pp. 226-236。
- 鈴木常勝『大路（ターラー）——朝鮮人の上海電影皇帝』新泉社、1994年。
- 杉原達『中国人強制連行』岩波新書、2002年。
- 瀬名秀明、橋本敬、梅田聡『境界知のダイナミズム』岩波書店、2006年。
- 孫歌「日中戦争——感情と記憶の構図」『世界』第 673 号、岩波書店、2000年、pp. 158-170。
- 孫歌『アジアを語ることのジレンマ——知の共同空間を求めて』岩波書店、2002年。
- 孫春日「満洲事変前の『在満朝鮮人』問題とその苦境」東アジア近代史学会編『東アジア近代史——特集・満洲事変と東アジア』第 5 号、2002年、pp. 36-52。
- 孫春日「中国朝鮮族における国籍問題の歴史的経緯について」桜井龍彦編『東北アジア朝鮮民族の多角的研究』ユニテ、2004年、pp. 49-63。
- セン、アマルティア／大門毅編、東郷えりか訳『アイデンティティと暴力——運命は幻想である』勁草書房、2011年。
- ダワー、ジョン著／三浦陽一、高杉忠明訳『敗北を抱きしめて（増補版）』岩波書店、2004年。
- ダワー、ジョン著／明田川融訳『昭和——戦争と平和の日本』みすず書房、2010年。
- 玉野井麻利子編、山本武利監訳『満洲——交錯する歴史』藤原書店、2008年。
- トンプソン、ポール著／酒井順子訳『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』青木書店、2002年。
- トッド、エマニュエル著／石崎晴己、東松秀雄訳『移民の運命』藤原書店、1999年。
- ドゥルーズ、ジル、ガタリ、フェリックス／宇野邦一他訳『千のプラトー』河出書房新社、1994年。
- 竹国友康『ある日韓歴史の旅——鎮海の桜』朝日選書、1999年。
- 竹中憲一『「満州」における教育の基礎的研究——朝鮮人教育』柏書房、2000年。
- 竹中憲一『大連アカシアの学窓——証言 植民地教育に抗して』明石書店、2003年。
- 竹沢尚一郎『サバンナの河の民——記憶と語りのエスノグラフィ』世界思想社、2008年。

- 竹沢泰子「移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2008年。
- 高崎宗司『中国朝鮮族——歴史・生活・文化・民族教育』明石書店、1996年。
- 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』岩波新書、2002年。
- 高橋哲哉『戦後責任論』講談社、1999年。
- 田中隆一『『満洲国民』の創出と『在満朝鮮人』問題——『五族協和』と『内鮮一体』の相剋——』東アジア近代史学会編『東アジア近代史——特集・『植民地』支配と地域的課題』第6号、2003年、pp. 28-43。
- 田中隆一「日本の朝鮮植民地支配と『在満朝鮮人』問題——「満州国」時期を中心に」日韓文化交流基金編『訪韓学術研究者論文集』第6巻、2006年、pp. 39-75。
- 田中隆一「朝鮮人の満洲移住」蘭信三編著（2008）『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年、pp. 177-189。
- 谷富夫編『新版 ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、2008年。
- 中国朝鮮族青年学会編／舘野哲、武村みやこ、中西晴代、蜂須賀光彦訳『聞き書き中国朝鮮族生活誌』社会評論社、1998年。
- 中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』アジア経済文化研究所、2006年。
- 朝鮮総督府編「間島集団部落建設概況」『調査月報』第6巻第3号、1935年、pp. 105-120。
- 朝鮮総督府編『昭和十年朝鮮国勢調査報告』（全鮮編）、1939年。
- 張嵐『「中国残留孤児」の社会学——日本と中国を生きる三世代のライフストーリー』青弓社、2007年。
- 陳天璽『華人ディアスポラ』明石書店、2002年。
- 陳天璽、小林知子編著『東アジアのディアスポラ』明石書店、2011年。
- 陳祥「日中戦争による『満洲国』農業政策の転換」『環東アジア研究センター年報』第6巻、2011年、pp. 67-87。
- 崔真碩「朝鮮人」板垣竜太、鄭智泳、岩崎稔編『東アジアの記憶の場』河出書房新社、2011年、pp. 319-340。
- 鄭雲鉉著／武井一訳『ソウルに刻まれた日本——69年の事蹟を歩く』桐書房、1999年。
- 鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会、2000年。
- 鄭根埴「コリアン・ディアスポラの形成と再編成」松田素二、鄭根埴編『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』京都大学学術出版会、2013年、pp. 1-21。
- 鶴見俊輔、上野千鶴子、小熊英二『戦争が遺したもの』新曜社、2004年。
- 鶴嶋雪嶺『中国朝鮮族の研究』関西大学出版部、1997年。
- 塚瀬進『満洲国「民族協和」の実像』吉川弘文館、1998年。
- 寺林伸明、劉含発、白木沢旭児編『日中両国から見た「満洲開拓」』御茶の水書房、2014年。
- チャン、エドワードデハン「中国東北部（満州）への朝鮮人移住 1869～1945——日本の植民地支配への抵抗——」高全恵星監修、柏崎千佳子訳『ディアスポラとしてのコリアン——北米・東アジア・中央アジア』新幹社、2007年、pp. 320-344。
- トーマス、W. I. & ズナニエツキ、F. 著／桜井厚訳『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』御茶の水書房、1983年。
- 富山一郎『戦場の記憶』日本経済評論社、1995年。

- 富山一郎『暴力の予感』岩波書店、2002年。
- 戸田郁子『中国朝鮮族を生きる——旧満洲の記憶』岩波書店、2011年。
- 外村大「日本帝国と朝鮮人の移動——議論と政策——」蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動——引揚げ、送還、そして残留』勉誠出版、2011年、pp. 11-20。
- 外村大『朝鮮人強制連行』岩波新書、2012年。
- 並木孝三「安全農村に関する調査」南満洲鉄道株式会社総務部労働課編『労務時報』63、1935年、pp. 75-134。
- 成田龍一『「故郷」という物語』吉川弘文館、1998年。
- 成田龍一『「帝国責任」ということ』コミュニティ・自治・歴史研究会編『ヘスティアとクリオ』第4号、2006年、pp. 3-4。
- 中野卓編著『口述の生活史——或る女の愛との呪い日本近代』御茶の水書房、1977年。
- 中野卓編著『日系女性立川サエの生活史』御茶の水書房、1983年。
- 中野卓「歴史的現実の再構成——個人史と社会史——」中野卓、桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年、pp. 191-218。
- 中村政則「オーラル・ヒストリーの可能性——満州移民体験を中心に——」神奈川大学日本常民文化研究所編『歴史と民俗』第22号、平凡社、2006年、pp. 31-84。
- 中川恵里子「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営研究』第34号、2010年、pp. 99-112。
- 永原陽子「和解と正義——南アフリカ『真実和解委員会』を超えて」内海愛子、山脇啓造編『歴史の壁を超えて——和解と共生の平和学』法律文化社、2004年、pp. 156-186。
- 永原陽子編『植民地責任論——脱植民地化の比較史』青木書店、2009年。
- 西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』東京大学出版会、1997年。
- 西川長夫『増補版 国境の越え方——国民国家論序説』平凡社、2001年。
- 西川長夫『戦争の世紀を越えて——グローバル時代の国家・歴史・民族』平凡社、2002年。
- 聶莉莉『中国民衆の戦争記憶』明石書店、2006年。
- ノラ、ピエール著／長井伸仁訳「記憶と歴史のはざまに——記憶の場の研究に向けて——」『思想』No. 911、岩波書店、2000年、pp. 13-37。
- ノラ、ピエール編／谷川稔監訳『記憶の場』第1巻、岩波書店、2002年。
- 野村章『植民地そだちの少国民』岩波ブックレット No. 186、1991年。
- 野村進『コリアン世界の旅』講談社、1996年。
- 野田正彰『戦争と罪責』岩波書店、1987年。
- 野田正彰「戦争と心の傷——罪責」総合人間学会編『総合人間学4 戦争を総合人間学から考える』学文社、2010年、pp. 35-50。
- 朴慶植『日本帝国主義の朝鮮支配（上）』青木書店、1973年。
- 朴慶植『在日朝鮮人関係資料集成』第4巻、青木書店、1975年。
- 朴燦鎬『韓国歌謡史（1895-1945）』晶文社、1987年。
- 朴裕河著／佐藤久訳『和解のために——教科書、慰安婦、靖国、独島』平凡社、2006年。
- 朴敬玉「満洲国における「安全農村」の建設と朝鮮人農民——濱江省珠河県河東村を中心に——」『近きに在りて』第57号、2010年、pp. 68-82。
- 韓錫政「満洲の記憶」小森陽一、中野卓元植、朴裕河、金哲編『東アジア歴史認識論争のメタヒストリー——「韓日、連帯21」の試み』青弓社、2008年、pp. 225-240。
- ピーティー、マーク著／浅野豊美訳『植民地——帝国50年の興亡』読売新聞社、1996年。

- 樋口雄一『戦時下朝鮮の農民生活誌 1939～1945』社会評論社、1998 年。
- 樋口雄一『戦時下朝鮮人労働動員基礎資料集』（第 2 巻）、緑蔭書房、2000 年。
- 玄武岩「越境する周辺——中国延辺朝鮮族自治州におけるエスニック空間の再編」『現代思想』（特集＝中華世界の行方）青土社、2001 年、pp. 204-218。
- 玄武岩『コリアン・ネットワーク——メディア・移動の歴史と空間』北海道大学出版会、2013 年。
- 藤沢法暎『韓国との対話——戦争・若者・教科書』大月書店、1998 年。
- 藤本愉「語り研究における『共同性』の検討」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』第 90 号、2003 年、pp. 43-69。
- 藤原帰一『戦争を記憶する——広島・ホロコーストと現在』講談社、2001 年。
- 藤原修「歴史と平和——戦争責任から平和責任へ」内海愛子、山脇啓造編『歴史の壁を超えて——和解と共生の平和学』法律文化社、2004 年、pp. 1-9。
- 古橋綾「日本軍『慰安所』制度とセクシュアリティ——日本軍将兵による『戦争体験記』に着目して」立命館大学コリア研究センター編『コリア研究』第 4 号、2003 年、pp. 61-75。
- 船橋洋一『歴史和解の旅——対立の過去から共生の未来へ』朝日選書、2004 年。
- 福岡良明『「戦争体験」の戦後史——世代・教養・イデオロギー』中公新書、2009 年。
- プラマー、ケン著／原田勝弘、下田平裕身、川合隆男訳『生活記録(ライフドキュメント)の社会学——方法としての生活史研究案内』光生館、1991 年。
- ブラック、キャロル著／梅崎透訳『歴史で考える』岩波書店、2007 年。
- フリック、ウヴェ著／小田博志他訳『新版 質的研究入門——＜人間の科学＞のための方法論』春秋社、2011 年。
- 別府三奈子著、杜多洋一写真『アジアでどんな戦争があったのか——戦跡をたどる旅』めこん、2006 年。
- 保苅実「オーストラリア先住民とジャパニーズ——開かれた『和解』のために——」『オーストラリア研究』第 15 号、2003 年、pp. 65-80。
- 保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2004 年。
- 歩平「インタビュー 歴史認識の共有のために何が求められるか——日中歴史共同研究の意義と課題」『世界』No. 768、岩波書店、2007 年、pp. 206-210。
- 歩平「東アジアにおける未来志向の歴史認識形成の意義」弁納オー・鶴園裕編『東アジア共生の歴史的基礎』御茶の水書房、2008 年、pp. 163-180。
- ホルスタイン、ジェイムズ&グブリアム、ジェイバー著／山田富秋他訳『アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房、2004 年。
- 洪鐘泌の『『満州』（中国東北地方）における朝鮮人農業移民の史的研究——1910～1930 年を中心として——』京都大学農学研究科博士論文、1987 年。
- 満鉄資料課『満鉄調査月報』第 15 巻 2 号、1935 年。
- 満鉄調査部『満洲農業移民概説』（産業調査資料第 52 編）南満洲鉄道株式会社、1939 年。
- 前山隆編著『ハワイの辛抱人——明治福島移民の個人史』御茶の水書房、1986 年。
- マンハイム、カール著／石川康子他訳『マンハイム全集 3 社会学の課題』潮出版社、1976 年。
- 丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1971 年。
- 松村高夫「日本帝国主義下における『満州』への朝鮮人移動について」慶応義塾経済学会

- 編『三田学会雑誌』第63巻6号、1970年、pp. 61-87。
- 松村高夫「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満州史研究会編『日本帝国主義下の満州』御茶の水書房、1972年、pp. 213-314。
- 松本武祝「朝鮮人の満洲『国策』農業移民——政策と実態——」京都大学総合人間学部編（研究代表者：池田浩志）『「満蒙開拓団」の総合的研究——母村と現地』（1995～1997年度文部省科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書）、1998年、pp. 105-119。
- 松田素二、鄭根埴編『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』京都大学学術出版会、2013年。
- 民生部総務司調査科編『在満朝鮮人事情』調査資料第3号、1933年。
- バフチン、ミハイル著／望月哲男、鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫、1995年。
- 宮本常一『忘れられた日本人』岩波文庫、1984年。
- 三谷博「あとがき」劉傑、三谷博、楊大慶編『国境を越える歴史認識——日中対話の試み』東京大学出版会、2006年、pp. 367-372。
- 三谷博「未来のための歴史対話」三谷博、金泰昌編『東アジア歴史対話——国境と世代を越えて』東京大学出版会、2007年、pp. 1-27。
- 南川文里「世代の言葉でエスニシティを語る——日本人移民はいかに日系アメリカ人になったのか」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2008年、pp. 104-121。
- 御厨貴『オーラル・ヒストリー——現代史のための口述記録』中公新書、2002年。
- 水野節夫「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修、宮島喬編『社会学の歴史的展開』サイエンス社、1986年、pp. 147-208。
- 水野直樹「朝鮮人の国外移住と日本帝国」『岩波講座世界歴史 19 移動と移民——地域を結ぶダイナミズム』岩波書店、1999年、pp. 255-275。
- 水野直樹「満洲抗日闘争の転換と金日成」『思想』No. 912、岩波書店、2000年、pp. 133-161。
- 水野直樹編『生活の中の植民地主義』人文書院、2004年。
- 村川治彦「一人称から歩み直す『戦争体験』——体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて——」立命館大学人間科学研究所編『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み 国際セミナー「南京を想い起こす2011」の記録』2012年、pp. 94-105。
- モーリス＝スズキ、テッサ著／大川正彦訳『辺境から眺める』みすず書房、2000年。
- モーリス＝スズキ、テッサ『批判的想像力のために』平凡社、2002年。
- モーリス＝スズキ、テッサ著／田代泰子訳『過去は死なない』岩波書店、2004年。
- 本橋哲也『ポストコロニアズム』岩波書店、2005年。
- 森山茂徳「植民地統治と朝鮮人の対応」日韓歴史共同研究委員会編『日韓歴史共同研究報告書 第3分科篇 上巻』、2005年、pp. 3-30。
- 森本豊富「移民を研究する——移民調査研究の今とこれから——」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房、2011年、pp. 278-289。
- 矢内原忠雄『満洲問題』岩波書店、1934年。
- 矢内原忠雄『帝国主義研究』白日書院、1948年。
- 山口昌男『文化と両義性』岩波書店、1975年。
- 山口淑子、藤原作弥『李香蘭——私の半生』新潮社、1987年。
- 山口修「歌のなかの植民地」『岩波講座近代日本と植民地 7 文化のなかの植民地』岩波書

- 店、1993 年、pp. 137-156。
- 山田昭次編『満州移民』（近代民衆の記録 6）、新人物往来社、1978 年。
- やまだようこ「人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学——」やまだようこ編著『人生を物語る』ミネルヴァ書房、2000 年、pp. 1-38。
- 山本須美子『文化境界とアイデンティティ——ロンドンの中国系第二世代』九州大学出版会、2002 年。
- 山室信一『増補版 キメラ——満洲国の肖像』中公新書、2004 年。
- 山室信一『日露戦争の世紀——連鎖視点から見る日本と世界』岩波新書、2005 年。
- 山本有造「満洲国——ある歴史の終わり、そして新たな始まり——」藤原書店編集部編『満洲とは何だったのか』藤原書店、2004 年、pp. 67-77。
- 山本有造編著『満洲——記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007 年。
- 依田憲家「満洲における朝鮮人移民」満洲移民史研究会編『日本帝国主義下の満洲移民』龍溪書舎、1976年、pp. 491-603。
- 尹健次『異質との共存——戦後日本の教育・思想・民族論』岩波書店、1987 年。
- 尹海東著／藤井たけし訳「植民地認識の『グレーゾーン』——日帝下の『公共性』と規律権力——」『現代思想』青土社、2002年、pp. 132-147。
- 尹明淑『日本の軍隊慰安所制度と朝鮮人軍隊慰安婦』明石書店、2003 年。
- 好井裕明『「あたりまえ」を疑う社会学』光文社新書、2006 年。
- 楊聡「社会的寛容性と歴史認識——中国と日本の関係から——」芦名定道編著『多元的世界における寛容と公共性——東アジアの視点から』晃洋書房、2007 年、pp. 49-57。
- 鷺田清一『「聴く」ことの手——臨床哲学試論』TBSブリタニカ、1999 年。
- 和田春樹『金日成と満洲抗日戦争』平凡社、1992 年。
- 和田春樹「ディアスポラ朝鮮族の新たな可能性」『言語』第 33 巻 5 号、2004 年、pp. 80-87。
- ラングネス, L. L.、フランク, G. 著／米山俊直、小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門——伝記への人類学的アプローチ』ミネルヴァ書房、1993 年。
- 李勲求著、拓務大臣官房文書課訳編『満洲と朝鮮人』拓務大臣官房文書課、1933 年。
- 李恢成『サハリンへの旅』講談社文芸文庫、1989 年。
- 李御寧著／裴康煥訳『韓国人の心（増補 恨の文化論）』学生社、1992 年。
- 李炳律『サハリンに生きた朝鮮人——ディアスポラ・私の回想記』北海道新聞社、2008 年。
- 劉含発「満洲移民の入植による現地中国農民の強制移住」『現代社会文化研究』第 21 号、2001 年、pp. 361-378。
- 李海燕『戦後の「満州」と朝鮮人社会——越境・周縁・アイデンティティ』御茶の水書房、2009 年。

朝鮮語

- 玄奎煥『韓国流移民史 上』語文閣、1967년（玄奎煥『韓国流移民史 上』語文閣、1967年）。
- 許粹烈「日帝下 朝鮮의 失業率과 失業者數推計」『경제사학』제17호、1993년（許粹烈「日帝下朝鮮の失業率と失業者数推計」経済史学会編『経済史学』第17号、1993年、pp. 1-27）。
- 尹輝鐸「〈滿洲國>의 '2等國(公)民', 그實像과虛像」『歷史學報』제169집、2001년（尹輝鐸「『滿洲國』の『2等国（公）民』——その実像と虚像』『歴史学報』第169輯、2001年、pp. 139-171）。

김주용 「만주지역한인 ‘安全農村’ 연구——營口，三源浦 지역을 중심으로」
『한국근현대사연구』Vol. 38、한국독립운동사연구소、2006년（金周溶「滿洲地域韓人『安全農村』研究——營口、三源浦地域を中心として——」『韓国近現代史研究』Vol. 38、韓國獨立運動史研究所、2006年、pp. 108-134）。

서명훈 『할빈시 조선민족 백년사화』 민족출판사、2007년（徐明勳『ハルビンの朝鮮民族100年史話』民族出版社、2007年）。

한득수주편 『상주시조선민족사』 민족출판사、2009년（韓得壽主編（『尚志市朝鮮族歷史』民族出版社、2009年））。

中国語

高乐才『日本「満洲移民」研究』人民出版社、2000年。

孙春日『「満洲国」时期朝鮮人开拓移民研究』延边大学出版社、2003年。

孙春日『中国朝鮮族移民史』中华书局、2009年。

密山朝鮮族百年史编纂委员会編『密山朝鮮族百年史』黑龙江朝鮮族民族出版社、2007年。

方军『我认识的鬼子兵』山东画报出版社、2009年。

曹善玉「试论近代朝鮮人移民中国东北的原因——兼与华人移民东南亚之比较」
『南洋问题研究』第143期、2010年、pp. 62-72。

杜维明『儒家传统与文明对话』河北人民出版社、2010年。

歩平『跨越战后——日本的战争责任认识』社会科学文献出版社、2011年。

归泳涛「开启中日历史认识的对话」『中国图书评论』2007年第4期、pp. 12-17。

ホームページ

朝日新聞デジタル：シンポジウム「歴史和解のために」
<http://www.asahi.com/sympo/080505/> 2015年11月1日最終アクセス

朝鮮族ネット
<http://www.searchnavi.com/~hp/chosenzoku/index.html> 2015年11月1日最終アクセス

NHK戦争証言アーカイブス
<http://www.nhk.or.jp/shogenarchives/> 2015年11月1日最終アクセス

新聞

『京城日報』「南満の同胞安全農村を訪ねて」1935年7月2日～1935年7月13日

『京城日報』「社説——安全農村強化」1936年2月7日

『北海道新聞』「戦争を語り継ぐとはどういうことか」2012年10月6日夕刊

『영남일보』（『嶺南日報』）2004年6月7日～2004年12月27日

『흑룡강신문』（『黒龍江新聞』）2009年8月3日、2009年8月21日

映像資料

小林正樹監督、五味川純平原作『人間の条件』松竹ビデオ事業室、2003年。

原村政樹監督、脚本『海女のリャンさん』桜映画社、2004年。

片山通夫監督、撮影、編集『ドキュメンタリー アリランの流れる島——サハリン残留朝鮮人の記憶』international film service、2005年。

付録

フィールドワークの実施状況一覧表

中国でのフィールドワークの実施状況一覧表

時期	調査地域	目的	調査人数（人）
2006 年 8 月 31 日～ 2006 年 9 月 12 日	ハルビン市、尚志市	資料収集 聞き取り調査	17
2007 年 3 月 7 日～ 2007 年 3 月 25 日	ハルビン市、北京市、延吉市、 東寧県	資料収集 聞き取り調査	13
2007 年 9 月 12 日～ 2007 年 9 月 26 日	ハルビン市、五常市、綏化市、 瀋陽市、撫順市	資料収集 聞き取り調査	27
2008 年 3 月 5 日～ 2007 年 3 月 22 日	ハルビン市、方正県、瀋陽市、 撫順市、延吉市、龍井市	資料収集 聞き取り調査	19
2008 年 8 月 9 日～ 2008 年 9 月 10 日	ハルビン市、尚志市、亜布力 鎮、綏化市、瀋陽市、鉄嶺市、 営口市、三源浦鎮	資料収集 聞き取り調査	24
2009 年 9 月 5 日～ 2009 年 9 月 26 日	ハルビン市、牡丹江市、 密山市、寧安市、梅河口市、 長春市	資料収集 聞き取り調査	17
2010 年 3 月 3 日～ 2010 年 3 月 27 日	ハルビン市、尚志市、方正県、 長春市、梅河口市、瀋陽市、 撫順市、青島市、済南市、 威海市	資料収集 聞き取り調査	10
2010 年 6 月 19 日～ 2010 年 6 月 26 日	撫順市、ハルビン市	資料収集 聞き取り調査	5
2010 年 8 月 18 日～ 2010 年 8 月 25 日	大連市、ハルビン市、延吉市	資料収集 聞き取り調査	2

追跡調査状況一覧表

時期	調査地域	目的	調査人数（人）
2011 年 7 月 17 日～ 2011 年 7 月 18 日	瀋陽市、梅河口市	聞き取り調査	3
2011 年 9 月 17 日～ 2011 年 9 月 18 日	ハルビン市	聞き取り調査	3
2012 年 2 月 18 日～ 2012 年 2 月 19 日	梅河口市	聞き取り調査	2
2012 年 3 月 3 日～ 2012 年 3 月 4 日	ハルビン市	聞き取り調査	2
2012 年 5 月 26 日～ 2012 年 5 月 27 日	梅河口市	聞き取り調査	2
2013 年 3 月 23 日～ 2013 年 3 月 24 日	瀋陽市、梅河口市	聞き取り調査	3
2013 年 4 月 1 日～ 2013 年 4 月 3 日	牡丹江市、寧安市	資料収集 聞き取り調査	1

韓国でのフィールドワークの実施状況一覧表

時期	調査地域	目的	調査人数（人）
2006 年 5 月 24 日～ 2006 年 5 月 28 日	ソウル市、金泉市、安東市、 大邱市	資料収集 聞き取り調査	2
2007 年 2 月 20 日～ 2007 年 2 月 24 日	釜山市、馬山市、鎮海市	資料収集	——
2007 年 6 月 13 日～ 2007 年 6 月 18 日	ソウル市、群山市、木浦市	資料収集	——
2008 年 2 月 16 日～ 2008 年 2 月 23 日	ソウル市、広州市	資料収集 聞き取り調査	1
2008 年 12 月 18 日 2008 年～12 月 23 日	釜山市、安東市、慶州市、 仁川市	資料収集	——
2009 年 8 月 26 日～ 2009 年 8 月 30 日	春川市、麗水市、巨文島	資料収集 聞き取り調査	2